(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第53集

堺市常磐町、松原市天美西所在

大和川今池遺跡（その１・その２）

－大和川高水敷整備事業に伴う発掘調査報告書１－

２０００年５月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

1．大和川今池遺跡周辺航空写真（南から）

2．大和川今池遺跡周辺航空写真（西から）

3．（その２）方形区画溝

4．（その２）147井戸

5．（その２）427井戸遺物検出状況

6．（その１）31土坑遺物検出状況

7．（その２）128井戸出土土器

8．（その２）34土坑出土土器

9.（その２）427井戸出土須恵器

10.（その２）427井戸出土土師器

序　　文

大和川今池遺跡は、堺市常盤・松原市天美西に位置する遺跡です。大和川今池下水処理場の建設に伴って発掘調査され、旧石器時代から現代にいたるまでの長い間、この地に生活が営まれていたことがわかっていました。とくに、古墳時代の集落、記紀に登場する難波大道、観音堂・薬師堂に関連する中世の遺構・遺物が次々に確認されてきています。

今回報告を行う発掘調査は、建設省が進めている大和川整備工事に伴って、高水敷が整備されることになり、1996年度より2年にわたって調査が行われたものです。河川敷に設定された調査区では、古墳時代の井戸や土坑、古代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物やそれを区画する溝など多くの遺構が確認されました。また、これらから古墳時代の須恵器や土師器、中世の瓦器や瓦を中心に豊富な遺物が出土しています。本書がその基礎報告として、この地の歴史の解明の一助となれば幸いであります。

調査にあたりまして、建設省をはじめ、堺市教育委員会、松原市教育委員会、地元関係者各位から多大なご助力とご指導を賜り深く感謝します。今後とも当センターの事業につきまして、ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成12年5月

財団法人　大阪府文化財調査研究センター
理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は堺市常磐町３丁・松原市天美西８丁目に所在する大和川今池遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は大和川低水護岸掘削工事・高水敷整備事業に伴い実施した。

3．調査は建設省近畿地方建設局大和川工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。

4．調査期間は（その１）が平成８年（1996年）９月～平成９年（1997年）３月、（その２）が平成９年（1997年）５月～平成10年（1998年）３月まで、遺物整理期間は平成10年（1998年）５月～平成12年（2000）３月までである。

5．調査は平成８年度を南部調査事務所長藤田憲司、調査第１係長西口陽一指示のもと、調査第１係技師森本徹、技師後川恵太郎、専門調査員田島夕美子が担当した。平成９年度を南部調査事務所長藤田憲司、調査第１係長小林義孝指示のもと、調査第１係技師若林幸子、技師後川恵太郎、専門調査員清水一悦が担当した。整理事業および報告書作成は南部調査事務所長瀬川健、調査第１係長松岡良憲の指示のもと、主査村上富喜子、技師森本徹（北部調査事務所調査第１係）、技師後川恵太郎（平成11年度：南部調査事務所第２係）が担当し、専門調査員松尾実が補佐した。写真は主任技師立花正治が担当した。

6．調査に際し、以下の様な自然科学的分析を実施し、成果の一部を本書に掲載した。

土壌花粉分析	居川信之（㈱川崎地質）、渡辺正巳（文化財コンサルタント㈱）
胎土分析	三辻利一（奈良教育大学）
木材樹種鑑定	伊藤健司（㈶元興寺文化財研究所）
動物遺体同定	安部みき子（大阪市立大学）
植物遺体同定	山口誠治（㈶大阪府文化財調査研究センター）

7．発掘調査および遺物整理作業において、以下の方々はじめ諸氏ならびに諸関係各機関に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）
芝田和也・岡本武司（松原市教育委員会）、森村健一・白神典之（堺市教育委員会）、積山洋・田中清美（㈶大阪市文化財協会）、藤田道子・阪田育功・橋本高明（大阪府教育委員会）、渡辺晃宏・山下信一郎・古尾谷知浩・館野和巳・花谷浩（奈良国立文化財研究所）、大城哲也・福本都治（㈶文化財建造保存技術協会）、上原真人（京都大学）、広瀬和雄（奈良女子大学）、三辻利一（奈良教育大学）

8．発掘調査および遺物整理作業の過程で以下の方々の参加を得た。（五十音順）
秋好洋子、浅木薫、市原香奈、上松敏子、内山信子、江藤豊子、緒方優子、小川佐紀子、乙女さおり、小原睦子、角野孝子、加茂千歳、加茂幸彦、河田尚代、久禮孝志、黒川敦美、後藤佳代、齋藤陽子、斉藤梨佳、迫田信子、佐藤陽子、佐藤洋子、高橋由利子、龍田かほる、立石京子、近沢元、中平三紀子、中山武代、納谷好子、西口桂子、西田久美、二宮サキ子、松井晴美、松井利恵、松村より子、松本昭子、三島けい子、壬生省吾、宮武府、三山法子、八木孝子、山尾温子、山崎頼人、山本晶子、山本順二、若井キヨ子、渡辺恭子、渡邉富彦

9．本書の執筆は担当者で分担し、目次に記した。編集は村上が担当し、森本、後川が補佐した。

10．本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は㈶大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．発掘調査に伴う地区割りは国土座標第Ⅵ系を基に表記している。本書の北は座標北を指し、座標の記載はkmで表した。
2．遺構および断面図の標高は東京湾平均海水面（T.P.）を用いて表示した。
3．調査年度による地区設定は平成８年度を大和川今池遺跡（その１）、平成９年度を大和川今池遺跡（その２）とし、本報告書では単に（その１）、（その２）と略した。
4．本報告書では調査年度ごとに節を分けて記述している。
5．本報告書掲載遺構については、（その１）では新たに１から通し番号を付与し、（その２）については調査時の番号をそのまま踏襲した。そのため（その１）、（その２）において同一遺構番号が存在する。また、各遺構名は遺構番号の後ろに遺構の種類をつけて表示した。
6．本報告書における遺物番号については、（その１）を１から通し番号とし、（その２）についてはその続き番号を用いた。そのため、遺物は年度を越えた通し番号となっている。
7．付図の縮尺は調査年度ごとに1/200とした。
8．遺物実測図の縮尺は原則として1/3であるが、必要に応じて異なる縮尺を用いスケールで明示した。胎土分析試料については胎番号で記した。
9．土層の断面土色には小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
10．引用・参考文献は各章の末尾に記した。
11．本文中の用語、記載方法などについては執筆者の意志を尊重し、統一されていない部分もある。

目　　次

序文

例言

凡例

第１章　位置と環境……（後川）…… 1

第２章　調査に至る経緯と調査の経過……（森本）…… 15
　第１節　調査に至る経緯…… 15
　第２節　調査の経緯…… 16

第３章　調査の方法……（後川）…… 17

第４章　調査結果
　第１節　基本層序……（後川）…… 19
　第２節　検出した遺構・遺物（その１）平成８年度……（森本・村上）…… 25
　第３節　検出した遺構・遺物（その２）平成９年度……（後川・村上）…… 87

第５章　自然科学分析
　第１節　大和川今池遺跡出土硬質土器の粘土の蛍光Ｘ線分析……（三辻利一）…… 281
　第２節　大和川今池遺跡（その１～４）発掘調査に係る微化石分析……（渡辺正巳）…… 295
　第３節　大和川今池遺跡出土動物遺体について……（安部みき子）…… 318
　第４節　大和川今池遺跡出土植物遺体について……（山口誠治）…… 319

第６章　まとめ……（後川）…… 321
　第１節　難波大道基礎分析…… 321
　第２節　大和川今池遺跡密集土坑の事例分析…… 327
　第３節　軒瓦の基礎分析…… 335
　第４節　陶磁器の基礎分析…… 341
　第５節　大和川今池遺跡木製品の基礎分析…… 345
　第６節　1299井戸と１井戸（大和川今池遺跡調査会1978年調査）の比較…… 353
　第７節　427井戸の基礎分析…… 355
　第８節　128井戸の検討…… 359
　第９節　１粘土取り穴の検討…… 365
　第10節　調査成果のまとめ…… 367

挿 図 目 次

図1　大和川今池遺跡周辺地形図…… 1
図2　大和川今池遺跡既往調査及び（その1・2）トレンチ配置図…… 2
図3　大和川今池遺跡（その1・2）の調査区位置図…… 3
図4　明治18年大和川今池遺跡の周辺環境及び字名図…… 4
図5　大和川今池遺跡（その1・2）等高線図…… 5
図6　大和川今池遺跡周辺の遺跡分布図…… 6
図7　国土座標系と地区割…… 17
図8　大和川今池遺跡（その1・2）調査区のトレンチと地区割設定…… 18
図9　（その1）1996年度　南壁断面図…… 22
図10　（その2）1997年度　南壁断面図…… 23・24
図11　（その1）第2面　平面図…… 26
図12　（その1）1土坑　平・断面図、出土遺物…… 27
図13　（その1）第4面　平面図…… 28
図14　（その1）2土坑・4溝　平面図…… 30
図15　（その1）2土坑　断面図…… 31
図16　（その1）4溝　断面図…… 32
図17　（その1）2土坑　出土遺物…… 33
図18　（その1）6土坑　平・断面図…… 34
図19　（その1）6土坑　出土遺物…… 35
図20　（その1）第1～3層　出土遺物…… 36
図21　（その1）第3層　出土遺物…… 37
図22　（その1）第5面　平面図…… 38
図23　（その1）11土坑　平・断面図、遺物出土状況…… 40
図24　（その1）11土坑　出土遺物…… 41
図25　（その1）12土坑　平・断面図…… 42
図26　（その1）12土坑　出土遺物…… 43
図27　（その1）13掘　平・断面図…… 44
図28　（その1）14溝　平・断面図…… 45
図29　（その1）15溝　平・断面図…… 46
図30　（その1）16土坑　平・断面図、遺物出土状況…… 47
図31　（その1）16土坑　出土遺物…… 48
図32　（その1）17土坑　平・断面図、遺物出土状況…… 50
図33　（その1）17土坑　出土遺物（1）…… 51
図34　（その1）17土坑　出土遺物（2）…… 52
図35　（その1）第5面　土坑群（18～86土坑）　全体図…… 53
図36　（その1）20～23土坑　平・断面図、遺物出土状況…… 55
図37　（その1）26・28・30・31土坑　平・断面図、遺物出土状況…… 57
図38　（その1）32・33・35・37・38土坑　平・断面図、遺物出土状況…… 59
図39　（その1）第5面　遺構出土遺物（1）…… 61
図40　（その1）39・40・42～44土坑　平・断面図…… 63
図41　（その1）45～48土坑　平・断面図…… 65
図42　（その1）49・54～56・59土坑　平・断面図…… 66
図43　（その1）66土坑　平面図、遺物出土状況…… 69
図44　（その1）66土坑　出土遺物…… 70
図45　（その1）61～65・67～71土坑　平・断面図…… 71
図46　（その1）72・76・77土坑　平・断面図…… 73

図47　（その１）80土坑　平・断面図、
遺物出土状況…… 74
図48　（その１）80土坑　出土遺物（１）
…… 75
図49　（その１）80土坑　出土遺物（２）
…… 76
図50　（その１）78・81・84土坑　平・断面図
…… 77
図51　（その１）81土坑　出土遺物　…… 78
図52　（その１）第５面　遺構出土遺物（２）
…… 79
図53　（その１）第４層　出土遺物（１）
…… 82
図54　（その１）第４層　出土遺物（２）
…… 83
図55　（その１）第６面　平面図…… 85
図56　（その１）87溝　断面図…… 86
図57　（その２）第３面　平面図…… 89
図58　（その２）１粘土取り穴　平面図…… 90
図59　（その２）１粘土取り穴　断面図…… 91
図60　（その２）15井戸　平・断・立面図
…… 92
図61　（その２）1297井戸　平・断・立面図
…… 93
図62　（その２）第４面　平面図…… 95
図63　（その２）11落ち・２溝　平面図…… 96
図64　（その２）11落ち・２溝　断面図…… 97
図65　（その２）第５面　平面図…… 99
図66　（その２）17～20溝　断面図…… 100
図67　（その２）22溝　断面図…… 100
図68　（その２）第６面西半　平面図…… 105
図69　（その２）第６面東半　平面図…… 106
図70　（その２）第６面拡張区　平面図
…… 107
図71　（その２）東壁柱状図…… 107
図72　（その２）土層平面の基本的見解
…… 108
図73　（その２）整地土範囲　平面図…… 108
図74　（その２）方形区画溝南面平面図
…… 109
図75　（その２）礎石　出土状況…… 109
図76　（その２）424溝　平・断面図 …… 110
図77　（その２）65（東）溝　平・断面図
…… 111
図78　（その２）120・121・123溝　断面図
…… 112
図79　（その２）65・66溝　断面図…… 115
図80　（その２）92・127・140・143・
215・143・458溝　断面図 …… 116
図81　（その２）521・522溝　断面図…… 117
図82　（その２）280溝　断面図 …… 117
図83　（その２）方形区画溝　模式図及び
法量…… 120
図84　（その２）井戸・土坑・完形土器
埋納ピット分布図…… 121
図85　（その２）平面方形プランのピット
分布図…… 121
図86　（その２）溝・ピットの方向…… 121
図87　（その２）溝・ピットの方向…… 122
図88　（その２）228・230・36井戸　平・
断面図…… 123
図89　（その２）170井戸　平・断・立面図
…… 124
図90　（その２）129・90井戸　平・断面図
…… 125
図91　（その２）128井戸　平・断・立面図
…… 126
図92　（その２）147井戸　平・断・立面図
…… 127
図93　（その２）441・504井戸　平・断面図
…… 129
図94　（その２）466井戸　平・断面図 …… 130
図95　（その２）214井戸　平・断・立面図
…… 131
図96　（その２）819井戸　平・断・立面図
…… 133

図97 （その２）465・848井戸 平・断面図 …… 134
図98 （その２）846・508井戸 平・断面図 …… 135
図99 （その２）601（1481・1482）井戸 平・断面図…… 136
図100 （その２）442土坑 平・断・立面図、262土坑 平・断面図 …… 137
図101 （その２）940土坑 平・断・立面図 … 138
図102 （その２）１建物 平・断面図…… 138
図103 1995年調査区（大阪府教育委員会）と（その２）平面図…… 139
図104 （その１・２）軒瓦・道具瓦の分布図 …… 140
図105 （その２）２建物 平・断面図…… 143
図106 （その２）４建物 平・断面図…… 143
図107 （その２）３建物 平・断面図…… 144
図108 （その２）７建物 平・断面図…… 144
図109 （その２）460井戸 平・断面図 …… 146
図110 （その２）778井戸 平・断・立面図 …… 147
図111 （その２）427井戸 平・断・立面図 …… 148
図112 （その２）426井戸 平・断・立面図 …… 149
図113 （その２）1299井戸 平・断面図 …… 150
図114 （その２）37・52土坑 平・断面図 …… 151
図115 （その２）53・172・173土坑 平・断面図 …… 152
図116 （その２）70・197土坑 平・断面図 …… 153
図117 （その２）486土坑 平・断面図 …… 154
図118 （その２）585・858土坑 平・断面図 …… 155
図119 （その２）851土坑 平・断面図 …… 156
図120 （その２）1291土坑 平・断面図 …… 157
図121 （その２）1290土坑 平・断面図 …… 158
図122 （その２）34土坑 平・断面図…… 159
図123 （その２）第１・２・５層、第３面精査時 出土遺物…… 161
図124 （その２）第４層・地山直上・側溝・攪乱・掘削土 出土遺物…… 162
図125 （その２）１粘土取り穴 出土遺物 …… 163
図126 （その２）11落ち 出土遺物…… 164
図127 （その２）２溝 出土遺物…… 164
図128 （その２）151溝 出土遺物 …… 164
図129 （その２）22溝 出土遺物…… 165
図130 （その２）519ピット 出土遺物 …… 166
図131 （その２）549黒褐色シルト 出土遺物 …… 167
図132 （その２）65・65（東）・92・127・143・463溝、504・508井戸 出土遺物 …… 168
図133 （その２）65（東）溝 出土遺物（１） …… 169
図134 （その２）65（東）溝 出土遺物（２） …… 170
図135 （その２）65（東）溝 出土遺物（３） …… 171
図136 （その２）120溝 出土遺物 …… 171
図137 （その２）123溝 出土遺物 …… 172
図138 （その２）66溝 出土遺物…… 173
図139 （その２）92溝 出土遺物…… 174
図140 （その２）143溝 出土遺物（１）…… 175
図141 （その２）143溝 出土遺物（２）…… 176
図142 （その２）458溝 出土遺物（１）…… 177
図143 （その２）458溝 出土遺物（２）…… 178
図144 （その２）65・65（東）・66・127溝出土遺物…… 179
図145 （その２）92・458溝 出土遺物 …… 180
図146 （その２）66溝 出土礎石…… 181

図147 （その２）92溝　出土遺物、459溝
出土礫石…… 182
図148 （その２）65・127溝　出土遺物（１）
…… 184
図149 （その２）65・127溝　出土遺物（２）
…… 185
図150 （その２）57溝　出土遺物…… 186
図151 （その２）440溝　出土遺物 …… 186
図152（その２）463・470・745溝　出土遺物
…… 186
図153 （その２）520・521溝　出土遺物
…… 186
図154 （その２）280溝　出土遺物 …… 187
図155 （その２）424・425溝　出土遺物
…… 187
図156 （その２）878溝　出土遺物 …… 188
図157 （その２）485溝　出土遺物 …… 188
図158 （その２）36井戸　出土遺物…… 189
図159（その２）228・230井戸　出土遺物
…… 190
図160 （その２）129井戸　出土遺物 …… 190
図161 （その２）170井戸　出土遺物（１）
…… 191
図162 （その２）170井戸　出土遺物（２）
…… 192
図163 （その２）170井戸　出土遺物（３）
…… 193
図164 （その２）90井戸　出土遺物…… 193
図165 （その２）128井戸　出土遺物（１）
…… 194
図166 （その２）128井戸　出土遺物（２）
…… 195
図167 （その２）128井戸　出土遺物（３）
…… 196
図168 （その２）147井戸　出土遺物（１）
…… 197
図169 （その２）147井戸　出土遺物（２）
…… 198
図170 （その２）147井戸　出土遺物（３）
…… 199
図171 （その２）147井戸　出土遺物（４）
…… 200
図172 （その２）147井戸　出土遺物（５）
…… 201
図173 （その２）147井戸　出土遺物（６）
…… 202
図174 （その２）147井戸　出土遺物（７）
…… 203
図175 （その２）147井戸　出土遺物（８）
…… 204
図176 （その２）147井戸　出土遺物（９）
…… 205
図177 （その２）465井戸　出土遺物 …… 206
図178 （その２）466井戸　出土遺物 …… 207
図179 （その２）465・848井戸　出土遺物
…… 208
図180 （その２）848井戸　出土遺物 …… 209
図181 （その２）214井戸　出土（１）…… 209
図182 （その２）214井戸　出土遺物（２）
…… 210
図183 （その２）214井戸　出土遺物（３）
…… 211
図184 （その２）819井戸　出土遺物（１）
…… 212
図185 （その２）819井戸　出土遺物（２）
…… 213
図186 （その２）846井戸　出土遺物 …… 214
図187 （その２）601井戸　出土遺物 …… 215
図188 （その２）1481・1482（601内）
井戸出土遺物…… 216
図189 （その２）508井戸　出土遺物 …… 216
図190 （その２）441・504・1483井戸
出土遺物…… 217
図191 （その２）504井戸　出土遺物 …… 218
図192 （その２）1458井戸　出土遺物…… 218
図193 （その２）60土坑　出土遺物…… 219

図194 （その２）58土坑　出土遺物…… 219
図195 （その２）442土坑　出土遺物 …… 219
図196 （その２）715・851（内）ピット、
124・549・614黒褐色シルト　出土遺物
…… 220
図197 （その２）503ピット　出土遺物 …… 220
図198 （その２）198・229・628・940・
1344ピット　出土遺物…… 221
図199 （その２）262ピット　出土遺物 …… 221
図200 （その２）543ピット　出土遺物 …… 221
図201 （その２）ピット、550黒褐色シルト
出土遺物…… 222
図202 （その２）190・1309ピット　出土遺物
…… 223
図203 （その２）460井戸　出土遺物（１）
…… 224
図204 （その２）460井戸　出土遺物（２）
…… 225
図205 （その２）460井戸　出土遺物（３）
…… 226
図206 （その２）460井戸　出土遺物（４）
…… 227
図207 （その２）460井戸　出土遺物（５）
…… 228
図208 （その２）460井戸　出土遺物（６）
…… 229
図209 （その２）778井戸　出土遺物 …… 230
図210 （その２）427井戸　出土遺物（１）
…… 231
図211 （その２）427井戸　出土遺物（２）
…… 232
図212 （その２）427井戸　出土遺物（３）
…… 233
図213 （その２）427井戸　出土遺物（４）
…… 234
図214 （その２）427井戸　出土遺物（５）
…… 235
図215 （その２）427井戸　出土遺物（６）
…… 236
図216 （その２）426井戸　出土遺物 …… 237
図217 （その２）1299井戸　出土遺物（１）
…… 238
図218 （その２）1299井戸　出土遺物（２）
…… 239
図219 （その２）70井戸、197土坑、
124黒褐色シルト　出土遺物 …… 240
図220 （その２）53土坑　出土遺物…… 241
図221 （その２）53・173土坑　出土遺物
…… 242
図222 （その２）12・37土坑　出土遺物
…… 243
図223 （その２）486土坑　出土遺物（１）
…… 244
図224 （その２）486土坑　出土遺物（２）
…… 245
図225 （その２）486土坑　出土遺物（３）
…… 246
図226 （その２）585土坑　出土遺物（１）
…… 247
図227 （その２）585土坑　出土遺物（２）
…… 248
図228 （その２）858土坑　出土遺物 …… 249
図229 （その２）851土坑　出土遺物（１）
…… 250
図230 （その２）851土坑　出土遺物（２）
…… 251
図231 （その２）1039土坑　出土遺物…… 251
図232 （その２）1290土坑　出土遺物…… 252
図233 （その２）34土坑　出土遺物（１）
…… 253
図234 （その２）34土坑　出土遺物（２）
…… 254
図235 （その２）34土坑　出土遺物（３）
…… 255
図236 （その２）34土坑　出土遺物（４）
…… 256

図237 （その２）34土坑　出土遺物（５）…… 257
図238 （その２）1291土坑　出土遺物…… 257
図239 （その２）609・631土坑　出土遺物…… 258
図240 （その２）689・690土坑　出土遺物…… 258
図241 （その２）ピット、614黒褐色シルト出土遺物…… 259
図242 分析試料（粘土）採取位置模式図…… 284
図243 粘土のK因子の変動…… 286
図244 粘土のＣａ因子の変動…… 286
図245 粘土の両分布図…… 286
図246 粘土のＦｅ因子の変動…… 286
図247 粘土のＲｂ因子の変動…… 287
図248 粘土のＳｒ因子の変動…… 287
図249 粘土のＮａ因子の変動…… 287
図250 初期須恵器の両分布図…… 290
図251 大和川今池遺跡出土初期須恵器の産地推定…… 290
図252 須恵器の両分布図…… 291
図253 大和川今池遺跡出土須恵器の産地推定…… 291
図254 瓦の両分布図…… 292
図255 瓦質土器と羽釜の両分布図…… 292
図256 土師器の両分布図…… 292
図257 試料採取地点…… 303
図258 （その１）No.１地点の花粉ダイアグラム…… 304
図259 （その１）No.２地点（87溝）の花粉ダイアグラム…… 305
図260 （その２）No.１地点の花粉ダイアグラム…… 305
図261 （その２）No.５地点の花粉ダイアグラム…… 306
図262 （その２）No.６地点の花粉ダイアグラム…… 307
図263 （その２）458溝（No.２地点）、143溝（No.３地点）、280溝（No.４地点）、128井戸（No.７地点）の花粉ダイアグラム…… 308
図264 （その３）No.１地点の花粉ダイアグラム…… 309
図265 （その３）No.２地点の花粉ダイアグラム…… 310
図266 （その４）溝111の花粉ダイアグラム…… 311
図267 （その４）溝118の花粉ダイアグラム…… 312
図268 （その４）溝119の花粉ダイアグラム…… 312
図269 （その１）No.１地点の珪藻ダイアグラム…… 313
図270 （その１）No.１地点の珪藻総合ダイアグラム…… 313
図271 （その１）No.２地点の珪藻ダイアグラム…… 314
図272 （その１）No.２地点の珪藻総合ダイアグラム…… 314
図273 （その２）458溝（No.２地点）、143溝（No.３地点）、280溝（No.４地点）の珪藻ダイアグラム…… 315
図274 （その２）458溝（No.２地点）、143溝（No.３地点）、280溝（No.４地点）の珪藻総合ダイアグラム…… 315
図275 （その１）No.１地点のプラント・オパールダイアグラム…… 316
図276 （その１）No.２地点のプラント・オパールダイアグラム…… 316
図277 （その２）No.１地点のプラント・オパールダイアグラム…… 316
図278 （その２）No.６地点のプラント・オパールダイアグラム…… 316
図279 （その３）No.１地点のプラント・オパールダイアグラム…… 317

図280 （その３）No. ２地点のプラント・オパールダイアグラム…… 317
図281 （その４）溝118のプラント・オパールダイアグラム…… 317
図282 （その４）溝119のプラント・オパールダイアグラム…… 317
図283 難波大道既往の調査と（その１）調査区…… 321
図284 難波大道両側溝出土遺物…… 322
図285 難波大道両側溝断面図…… 323
図286 （その１）南壁断面模式図…… 324
図287 （その１）土坑　深さ・断面形・埋土分類図…… 329
図288 土坑断面模式図…… 330
図289 Ａ１類土坑断面模式図…… 331
図290 丸・平瓦重量分布図…… 338
図291 大和川今池遺跡出土軒瓦…… 339
図292 密壇供配列図（左：天台宗、右：真言宗）…… 360

表　目　次

表１ 既往調査刊行図書…… 7
表２ （その１）遺物観察表（１）・（２）…… 261・262
表３ （その２）遺物観察表（１）～(16)…… 263～278
表４ （その２）木器観察表（１）・（２）…… 279・280
表５ 大和川今池遺跡出土粘土の分析データ…… 285
表６ 大和川今池遺跡出土遺物の分析データ（１）・（２）…… 288・289
表７ 大和川今池遺跡出土遺物胎土分析試料一覧（１）・（２）…… 293・294
表８ 花粉帯と年代…… 302
表９ 動物遺体一覧表…… 318
表10 植物遺体一覧表…… 320
表11 灰色シルト土坑一覧表…… 328
表12 古墳時代土坑出土遺物一覧表…… 332
表13 （その１・２）軒・道具瓦一覧表…… 336
表14 1995年調査（その１・２）軒瓦点数…… 337

巻頭図版目次

１．大和川今池遺跡周辺航空写真（南から）
２．大和川今池遺跡周辺航空写真（西から）
３．（その２）方形区画溝
４．（その２）147井戸
５．（その２）427井戸遺物検出状況
６．（その１）31土坑遺物検出状況
７．（その２）128井戸出土土器
８．（その２）34土坑出土土器
９．（その２）427井戸出土須恵器
10．（その２）427井戸出土土師器

写真図版目次

図版１（その１）全景航空写真（第５面　西半）
全景航空写真（第５面　東半）
図版２（その１）第２面　全景（南西から）
第２面　全景（北東から）
図版３（その１）第２面　東側（南東から）
第２面　拡張区（南から）
図版４（その１）第４面　全景（南西から）
第４面　全景（北東から）
図版５（その１）第４面　東側（南から）
第４面　拡張区（南東から）
図版６（その１）２土坑・４溝（東から）
２土坑断面（南西から）
図版７（その１）６土坑（東から）
６土坑　遺物出土状況
図版８（その１）第５面　全景（南西から）
第５面　全景（北東から）
図版９（その１）第５面　全景（北東から）
第５面　拡張区土坑群（南東から）
図版10（その１）11土坑（北から）
12土坑（北西から）
図版11（その１）15溝（南東から）
14溝（南東から）
図版12（その１）16土坑（北西から）
図版13（その１）17土坑断面（北西から）
17土坑遺物出土状況
図版14（その１）21土坑（南から）
31土坑（南から）
図版15（その１）81土坑（北西から）
80土坑（南東から）
図版16（その１）第６面　西側（南東から）
第６面　全景（北東から）
図版17（その１）第６面　87溝（南東から）
第６面　拡張区（北東から）
図版18（その１）２土坑、第３層出土陶磁器
図版19（その１）６・11土坑、第３層出土土器
図版20（その１）16土坑出土土器
図版21（その１）17土坑出土土器
図版22（その１）17・21・23・26・33土坑出土遺物
図版23（その１）66土坑出土土器
図版24（その１）80土坑出土土器
図版25（その１）43・72・76・78・80・81土坑出土
土器
図版26（その１）初期須恵器
図版27（その１）初期須恵器
図版28（その１）軒丸瓦、軒平瓦
図版29（その１）石器、金属器
図版30（その２）全景航空写真（西半）
全景航空写真（東半）
図版31（その２）１粘土取り穴完掘状況（南より）
１粘土取り穴断面（南より）
１粘土取り穴断面（東より）
15井戸断面（南より）
15井戸枠検出状況（南より）
図版32（その２）２溝・11落ち（西より）
11落ち断面（東より）
２溝断面（西より）
２溝断面（東より）
図版33（その２）第５面西半全景（南東より）
第５面東半全景（南東より）
22溝断面（東より）
22溝遺物出土状況（東より）
図版34（その２）第６面西半全景（南より）
第６面東半全景（南より）
第６面西半全景（南東より）
第６面東半全景（南東より）
図版35（その２）65（東）溝下層遺物出土状況
（南より）
65（東）溝断面（東より）
127溝断面（西より）

図版36（その２）92溝断面　（西より）
120溝断面（南より）
120溝断面（北より）
65溝断面　（西より）
66溝断面　（東より）
67溝断面　（南より）
280溝断面（東より）
280溝遺物出土状況（北より）
図版37（その２）147井戸最上層遺物出土状況
（西より）
147井戸上層遺物出土状況（東より）
147井戸検出状況（西より）
170井戸断面（東より）
170井戸遺物出土状況（東より）
128井戸断面（西より）
128井戸遺物出土状況（西より）
図版38（その２）940土坑遺物出土状況（東より）
442土坑遺物出土状況（南より）
601井戸断面（西より）
1481（601内）井戸遺物出土状況
（北より）
129井戸遺物出土状況（南より）
819井戸遺物出土状況（南より）
819井戸断面（西より）
819井戸検出状況（西より）
図版39（その２）427井戸上層遺物出土状況（西より）
427井戸中層遺物出土状況（西より）
427井戸下層遺物出土状況（北より）
427井戸最下層遺物出土状況
（北より）
585土坑中層遺物出土状況（北より）
585土坑下層遺物出土状況（東より）
図版40（その２）1290土坑断面・遺物出土状況
（西より）
778井戸下層遺物出土状況（東より）
779井戸最下層遺物出土状況
（東より）
53土坑断面・遺物出土状況
（西より）
34土坑断面（西より）
34土坑遺物出土状況（西より）
197土坑遺物出土状況（北より）
851土坑遺物出土状況（南より）
図版41（その２）460井戸遺物出土状況（西より）
460井戸下層遺物出土状況
（西より）
1299井戸遺物出土状況（西より）
1299井戸下層遺物出土状況
（北より）
図版42（その２）65・65（東）溝出土土器
図版43（その２）66・92・143・280・458・470溝、
90・214井戸出土土器
図版44（その２）170井戸出土土器
図版45（その２）128井戸出土土器
図版46（その２）147井戸出土土器
図版47（その２）129・465井戸、442土坑出土土器
図版48（その２）92・127溝、519・715ピット、508・
1483井戸、124・549黒褐色シルト、
第１・５層出土土器
図版49（その２）57・151溝、229・543・811ピット、
441・504・601・819井戸、58土坑
出土土器
図版50（その２）940・1155・1344ピット、147・
846・848井戸、60土坑出土土器
図版51（その２）22・123・143溝、262ピット、466・
504井戸出土土器
図版52（その２）65・66溝、36・819井戸、464黒褐
色シルト出土陶磁器（外面）
同上　（内面）
図版53（その２）123・463溝、147井戸出土陶磁器
65溝、第４層出土陶磁器
図版54（その２）66溝、147・848井戸、60土坑出土
陶磁器（外面）
同上　（内面）
図版55（その２）成形・調整痕他
図版56（その２）460井戸出土土器

図版57（その２）460井戸出土土器
図版58（その２）778井戸出土土器
図版59（その２）427井戸出土土器
図版60（その２）427井戸出土土器
図版61（その２）427井戸出土土器
図版62（その２）1299井戸出土土器
図版63（その２）1299井戸出土土器
図版64（その２）53土坑出土土器
図版65（その２）426井戸、486・1039土坑出土土器
図版66（その２）216ピット、70・426井戸、197土坑、
124黒褐色シルト出土土器
図版67（その２）228・1481(601内)井戸、486土坑、
614黒褐色シルト出土土器
図版68（その２）585土坑出土土器
図版69（その２）858土坑出土土器
図版70（その２）517ピット、851・1290土坑出土土器
図版71（その２）34土坑出土土器
図版72（その２）34土坑出土土器
図版73（その２）34土坑出土土器
図版74（その２）韓式系土器
把手各種
図版75（その２）竈
図版76（その２）初期須恵器
図版77（その２）初期須恵器蓋
初期須恵器壺・甕
図版78（その２）初期須恵器甕
初期須恵器器台
図版79（その２）製塩土器（外面）
同上　（内面）
図版80（その２）須恵器溶着痕
土錘
図版81（その２）軒丸瓦
図版82（その２）軒丸瓦、軒平瓦
図版83（その２）軒平瓦
図版84（その２）鬼瓦、礎石
図版85（その２）石器
図版86（その２）鉄器、硯
図版87（その２）鋳造関連？土製品（外面）
同上　（内面）
図版88（その２）147井戸出土木器
図版89（その２）147井戸出土木器
図版90（その２）147井戸出土木器
図版91（その２）147井戸出土木器
図版92（その２）147井戸出土木器
図版93（その２）147井戸出土木器
図版94（その２）466井戸出土木器
図版95（その２）465井戸出土木器
図版96（その２）214・819井戸出土木器
図版97（その２）214井戸出土木器
図版98（その２）214井戸出土木器
図版99（その２）214・460・601・848井戸出土木器
図版100（その２）34土坑、1299井戸出土木器
図版101（その２）1299井戸出土木器

付　図　目　次

付図１　大和川今池遺跡（その１）
遺構全体図
付図２　大和川今池遺跡（その２）
遺構全体図

第１章　位置と環境

大和川今池遺跡は堺市常磐町から松原市天美西を中心とした南北約１㎞、東西約1.45㎞の範囲に広がり、1977年の「大和川下流西部流域下水道今池処理場」建設に伴う試掘調査で認知された遺跡である。1978年から1980年にかけて大和川今池遺跡調査会により調査が行われ、その後、今池処理場内施設増設や府営天美住宅の建替に先立って大阪府教育委員会により調査が重ねられてきた。大阪府文化財調査研究センターでは1996年より調査を行っている。

なお、『記紀』にあらわれる依羅池に比定される範囲は大阪府教育委員会作成の分布図によれば本遺跡の北西にあり、両遺跡の境界は行政界と一致する。調査を行った（その１・２）は現在の行政区で堺市常磐３丁・松原市天美西８丁目にあたる。

地形的環境（図１・３・４）

大和川今池遺跡の立地する地形的環境は日下雅義氏の分類[1]によれば中位段丘と西除川氾濫原にあたる。この分類によれば（その１・２）調査区は氾濫原に位置する。

河川としては、遺跡の東側を流れた西除川がある。西除川は、古天野川の開析による谷底平野をせき

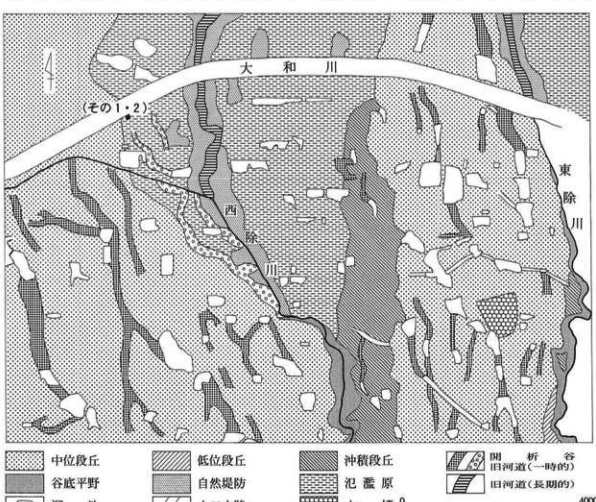


図１　大和川今池遺跡周辺地形図（1/80000）

止めて狭山池が築造され、上流にある天野川と二分されて本遺跡の北辺を流れ周辺を潤した。この西除川により形成された自然堤防の地形が本遺跡東側で確認できる。

昭和36年作成の地図に示される等高線によれば、（その２）で区画溝を検出した場所は堤防内でT.P.＋10m等高線がやや張り出した場所に当たる。また、現地表面標高は（その１）西端でT.P.＋9.56m、（その２）東端でT.P.＋9.94mであり、東側が高い。

調査最終面での地山の標高を全体として概観した場合、（その２）で区画溝を検出した場所が最も高まって東西に低くなり、（その２）東端で検出した緩傾斜でその傾向は顕著である。遺構が稀薄になるのもこの等高線に沿った現象である。また、（その１）を耕作域として評価することは後世の削平によりその根拠は薄く、生活域として蓋然性を示す土器の量は（その２）の方が圧倒的に多い。（その１）東端で検出した土坑・溝からの出土遺物は（その２）調査区あるいは1704年以前にあった遺跡北側から流入したと解釈すれば、それを除外した（その１）の資料数はさらに僅かな量となる。

（その１）調査区では（その２）から中央部に向かって緩やかに低くなった後、調査区東端で再び高まりをみせる。（その１）調査区の平均高をT.P.＋8.3mとした場合、比高は0.3mである。この場所では踏み込みの集中が見られた以外に３基のピットがあったほか、その等高線に直交して柵列を検出した。また、14・15溝を検出した範囲がやや低くなる現象がみられるが、調査区全体はT.P.＋8.2～8.4mの高低差であり谷・隆起部はない。古墳時代の土坑群を検出した場所は、北側がT.P.＋8.4mでやや高くなるが、おおむねT.P.＋8.3mで平坦面に検出した遺構ということができ、16・17土坑を検出した

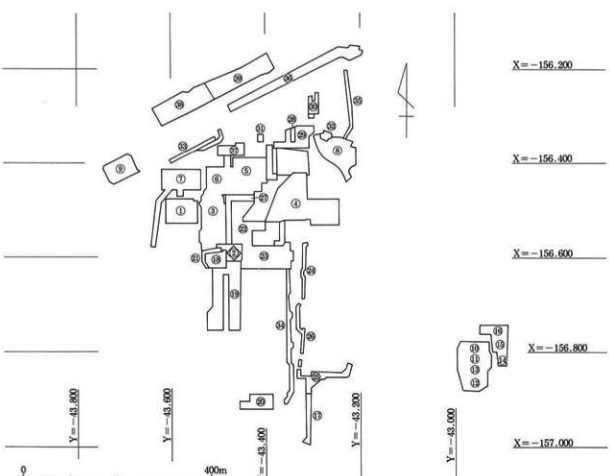


図２　大和川今池遺跡既往調査及び（その１・２）トレンチ配置図 (1/8000)

場所まで高さは変わることがない。

（その2）調査区では区画溝とピット集中部がT.P.＋8.7～8.9mであり、周辺に比べ高い場所に遺構を検出したことがわかる。（その1）と連続して古墳時代の土坑を検出した南西部との比高は0.3mを測り、これは22溝東西ラインより南側が削平を受けたことにより、平均して0.2m低いことと同時に南西部での削平が容易に看取できる現象である。拡張区とした東側35m部分についても比高が0.2～0.3m低くなっており、地形的に低くなっていくことを前提としつつ、標高の境界が極端であることから同様に削平の影響を指摘できる。また、1粘土取り穴を検出した場所でも周辺がやや低くなるもののT.P.＋8.7mであり、削平を受けなければ東半と同じT.P.＋8.9mはあったことが区画溝内南東部の標高から推測できる。南北における調査地内での標高差は削平を受けていないところでは顕著ではなく、ピットなどの遺構もこの範囲に集中する現象があることから、大阪市側に遺構が連続する可能性を標高の点で指摘できる。ただし、北西と南西部にかけては徐々に低くなるようであり、遺構の検出も少なくなることからT.P.＋8.6～8.9mの範囲に（その2）で検出した遺構が集中することがわかる。ちなみに、1995年の大阪府教育委員会の調査で検出された瓦溜りの検出高はT.P.＋8.35mであり、（その2）調査区との比高は0.3～0.6mあることになる。

なお、大和川は1704年（宝永元年）に幕府により付け替えが行われ、このあと本遺跡の下流、通称「浅香の七曲り」で蛇行した後、大阪湾にそそぐ。

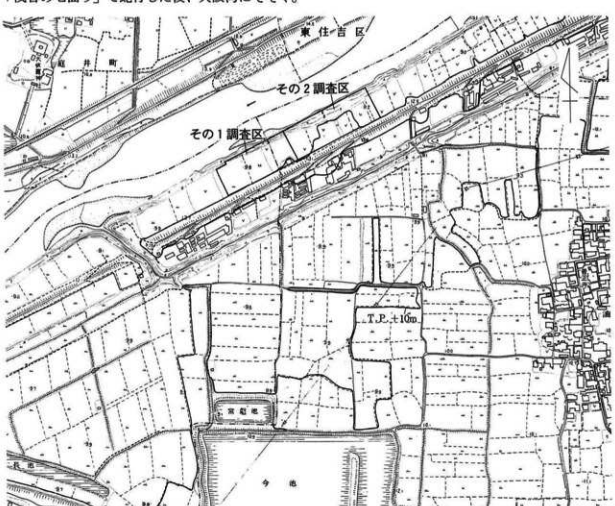


図3　大和川今池遺跡（その1・2）の調査区位置図

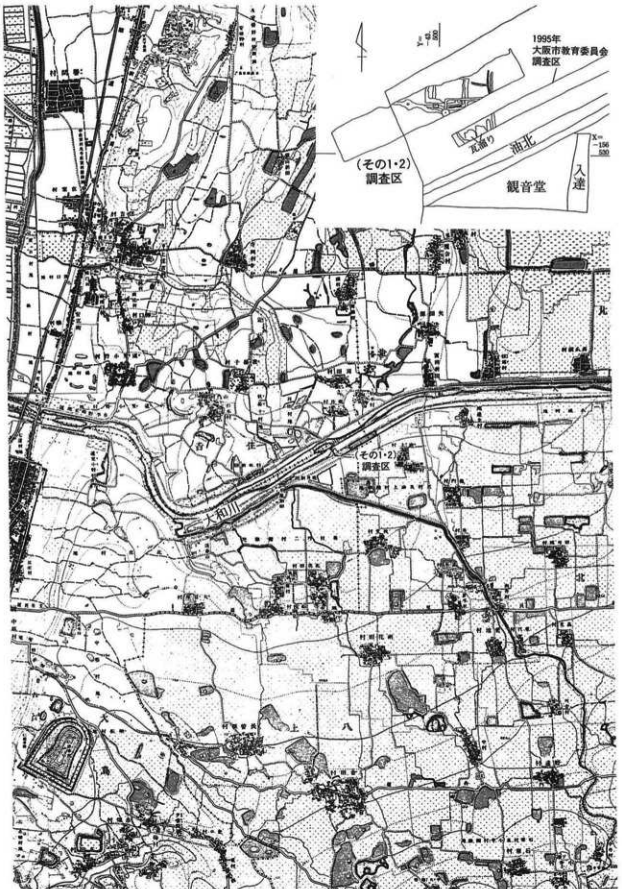


図4　明治18年大和川今池遺跡の周辺環境及び字名図

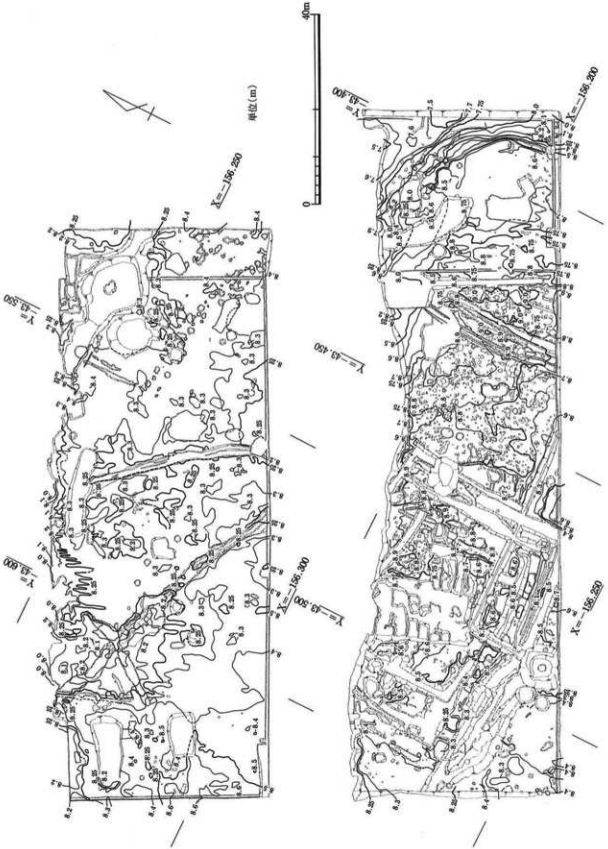
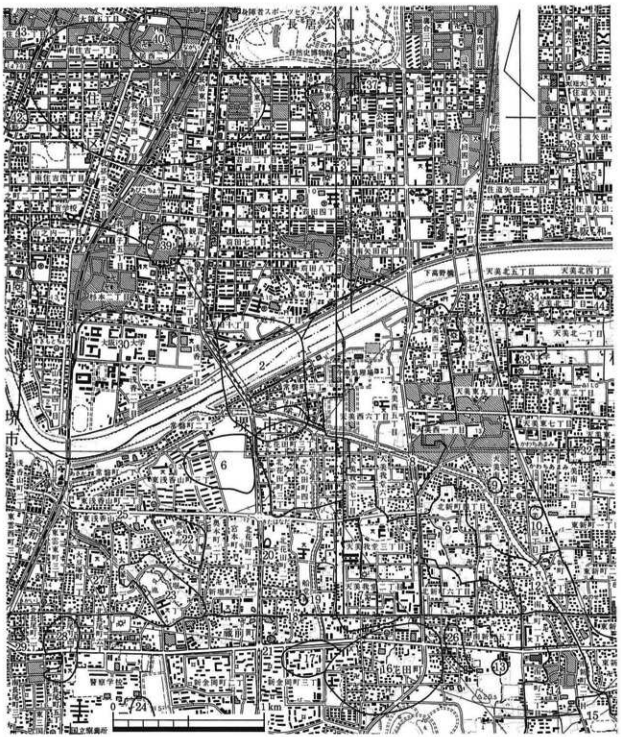


図5　大和川今池遺跡（その1・2）等高線図（1/800）



1．大和川今池遺跡　2．依羅池遺跡　3．難波大道遺跡（大阪市側）　4．難波大道遺跡
5．北花田遺跡　6．東浅香遺跡　7．我堂南遺跡　8．狐塚古墳跡
9．高木遺跡　10．堀遺跡　11．清水遺跡　12．布忍遺跡
13．鍵田遺跡　14．南新町遺跡　15．河合遺跡　16．清堂遺跡
17．新金岡３丁遺跡　18．長尾街道（大津道）　19．船堂遺跡　20．五箇荘東遺跡
21．蔵前町遺跡　22．奥本町遺跡　23．今池遺跡　24．金岡公園遺跡
25．東浅香山西遺跡　26．東花田遺跡　27．大豆塚遺跡　28．長尾遺跡
29．山之内遺跡　30．南田出井遺跡　31．遠里小野遺跡　32．天美南遺跡
33．池内遺跡　34．城連寺遺跡　35．住道寺遺跡　36．中臣須牟知神社境内遺跡
37．矢田部遺跡　38．新堀城跡伝承地　39．我孫子城跡伝承地　40．寺岡畳遺跡
41．南住吉遺跡　42．津守廃寺跡　43．荘厳浄土寺境内遺跡　44．城連寺東遺跡

図６　大和川今池遺跡周辺の遺跡分布図（大阪府教育委員会　1996　大阪府文化財分布図）

表1　既往調査刊行図書

著者名	出版年	収録書	番号
森村健一	1978	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その1－	①
森村健一他	1979	『大和川・今池遺跡－第1地区発掘調査報告－』	
森村健一	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その2－	
森村健一	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その3－	
森村健一	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その4－	
森村健一編	1980	『大和川・今池遺跡Ⅱ－第3・4・5発掘調査報告』	3－③、4－④、5－⑤
森村健一	1980	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その5－	
森村健一	1980	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その6－	
森村健一編	1981	『大和川・今池遺跡Ⅲ－第6地区・「古道」発掘調査報告書』	⑦
岩瀬透・倉谷保裕編	1983	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』	A－⑧、B－①、C－⑧、D－⑧
松原市教育委員会	1984	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和59年度	
宮野淳一　編	1985	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅱ	1－⑧、2－⑧、3－⑧
松岡良憲・黒田彰	1986	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅲ	⑪
松原市教育委員会	1986	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和60年度	
松原市教育委員会	1987	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和61年度	
岩瀬透	1988	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅳ	⑭
岩瀬透・中途隆一	1988	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅴ	A－⑧、B－⑧
松原市教育委員会	1988	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和62年度	
松原市教育委員会	1989	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和63年度	
岩瀬透	1990	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅵ	A・B・C－⑧、D・E・F・G－⑧、・－1～4－⑧
岩瀬透	1990	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅶ	89－1－⑧、89－2－⑧、89－3－⑧
横田明	1991	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅷ	⑱
林田佐子	1992	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅸ	Ⅰ－⑧、Ⅱ－⑧、Ⅲ－⑧
狭本哲	1992	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅹ・『南花田遺跡』Ⅵ	
坂田寿弥・森屋直樹	1993	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅺ・『清堂遺跡発掘調査概要』Ⅰ	⑲
藤田道子	1995	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅻ	⑳
西口陽一	1996	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』XIII	Ⅰ－⑧、Ⅱ－⑧、Ⅲ－⑧
岩瀬透	1997	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』XIV	㉑
地村邦男	1998	『大和川・今池遺跡』	㉒
財大阪府文化財調査研究センター	1998	『大和川今池遺跡現地説明会資料』	

歴史的環境

本遺跡の北西には『記紀』所載の依網池がある。依網屯倉と合わせて、記述に従えば造営の実年代は古墳時代に遡る。また、（その1）調査区に関わって、古道としては難波大道・大津道に比定される長尾街道が一帯を縦貫している。また、本遺跡内には円墳と推測されている狐塚古墳があり、その周濠が確認された。近在する遺跡として大阪市側では遠里小野遺跡（弥生・古墳）・南住吉遺跡（弥生～平安）、大和川以南で高木遺跡（中世）・北花田遺跡（飛鳥～鎌倉）、東浅香山遺跡（弥生・古墳・中世）などが確認されている。

既往調査　（図2、表1）

ここでは本遺跡のこれまでの調査と（その1・2）調査の関係を中心として既往調査についてまとめる。長年、発掘調査された場所は、現在までで計40箇所を越える。

調査成果については主として、岩瀬透氏による1990年に行われた考察、1995年に難波大道を主題とし6～8世紀を重点とした藤田道子氏による考察[4]、1999年に狭山池を中心として大和川今池遺跡を含めた中世村落について鋤柄俊夫氏[5]による考察があり、これらの秀逸な考察を調査成果まとめの参考とさせていただいた。

既往調査をまとめるにあたり、各調査区毎に通し番号を付した（図2）。この通し番号と各調査報告書の対応を表1に示し、遺構に関して具体的な記述が必要な場合は調査区の番号を明示して各報告書の遺構番号を使用した。同じ調査年度に複数の調査区がある場合は報告書の記載順に番号を付した。なお、⑧（その1）以西は大阪府教育委員会の試掘調査により攪乱が確認されており遺跡の範囲外とされてい

る。

採用した時期設定は細分すべき点も多く、出土量・出土範囲の設定には各報告を利用したため、各調査に画一的な評価を下した場合もあるが、遺跡の大要を示すことを主眼として記述を行った。

旧石器時代～縄紋時代

旧石器～縄紋時代にかけての石器が９箇所で出土した。石器は遺構に伴わず、包含層から出土した遺物がほとんどである。㉞・㊴では地山直上からの出土であり、原位置に比較的近いものか。⑩を除いて、遺跡内、北西から北東にかけて分布する。出土した石器はすべてサヌカイト製である。量的には限られた遺物が確認されている。

㊴では翼状剝片石核１点が出土した。また、調査区東側から縄紋時代草創期から早期にかけてサヌカイト剝片・刃器・チップが地山直上から出土し、「小規模な石器製作址」の存在が指摘される。①では有舌尖頭器３点、国府型ナイフ形石器１点が出土した。㊴では、504井戸と拡張区地山礫層直上から縄文時代草創期に位置づけられる有舌尖頭器２点が出土した。また、③・④・⑤・⑰・⑲・㉚で縄文時代の凹基式石鏃が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺物・遺構が決して多くはないが見いだされている。土器資料が当該期の遺構に伴った事例として㉓の297・284土坑、㉜の１土坑があり、その他の資料は地山直上あるいは包含層資料である。分布の傾向として遺跡北東部を中心として前期と後期の土器が出土する傾向があった。いずれも量的には少ない。

遺構として認識されたものも少ない。集落が連続した可能性は薄い。遺物も量的には少ないが、㉚・㉜・㉟を中心とした地域に断続して集落のあった可能性が指摘できる。

①では磨製太型蛤刃石斧、サヌカイト製不定形刃器・剝片が出土した。④では弥生時代以前と位置づけておられる溝と後期の壺の口縁部が６世紀の溝から出土した。⑤では前期の壺底部２点が出土した。⑲では④と連続する溝と石鏃が一点出土した。この弥生時代以前の溝は具体的な検討資料がないため比較はできないが、ここから北側に320m離れた㊳（その１）で検出した14溝との関係を指摘しておきたい。㉓では297土坑から後期の甕底部、284土坑から弥生式土器が出土した。ただし、遺構の時期が下る可能性がある。包含層から石鏃３点が出土している。

㉘では弥生時代から古墳時代とされる自然流路から弥生時代前期の甕と壺が出土した。㉙では６世紀代の18土坑から後期の壺２個体が出土した。また同じ調査で、㉚の６世紀の溝から弥生土器１点が出土した。㉜では前期の壺体部と底部が出土した土坑がある。㉟では包含層資料に前期の壺・後期の壺があった。㊲では弥生時代後期以前とされる溝が検出されている。この溝から遺物は出土していない。㊳では15溝底から弥生時代後期の甕底部が、包含層から石鏃がそれぞれ出土した。㊴では427井戸から口縁部を欠いた後期の壺、包含層からも後期の土器が出土した。

旧石器～弥生時代にかけては遺構・遺物は稀少ながら見いだされており、本地を生活の場とした活動の痕跡が確認できる。しかし、集団としての人間活動が活発化するのは、次の古墳時代である。この時こそ、生産・祭祀行為などの諸活動が明瞭に認識できる段階であるといえよう。

古墳時代

古墳時代の遺物・遺構が最初にまとまって確認できるのは布留（古）段階である。この段階では㉙でまとまって遺構が検出された。㉙においても遺物は散見され、この段階の生活域は北部の範囲に限定できるであろう。庄内併行期の遺構・遺物について積極的な評価ができない現状にあり、今後、調査が進展して㉙を遡る段階の遺物・遺構が確認される可能性があるものの、布留（古）段階が一つの画期といえる。布留（新）段階で②・⑱・⑲・㉒・㉓、⑤・⑥、㉞・㉟・㊱の3単位の抽出が可能である。ただし、㉟・㊱で検出した土坑は粘土取り穴の可能性が高く、集落の存在は井戸を目安として②・⑱・⑲・㉒・㉓、⑤・⑦が中心となるように考える。5世紀代の遺構・遺物は㉞・㊴を中心としており、㉟に同時期の掘立柱建物があるとされる。須恵器流入による環境変化の影響は、井戸祭祀における量的・質的シフトに容易に見て取れるだろう。⑰の包含層資料を除けば㊲・㊳が拠点となる。6世紀前半になると⑤・⑦、②・⑲、㉞・㊴の3単位になり、中葉～後半にかけて㉕・㉖、②・⑱・⑲・㉒・㉓、㉟、㊲・㊴の4単位となる。大和川今池遺跡の古墳時代を通じて定点として変化するのは㊲・㊳・㊴の場所である。また、竪穴住居1棟が⑤で検出された以外は構造物として認知できるのは掘立柱建物である。削平による消失と調査範囲の限定などの要因により積極的には評価できないが、集落構造として把握できるのは掘立柱建物の柱穴である点も特徴である。また、埴輪片を①・⑰・㊴・㊳で確認しており、転用棺・井戸筒としての使用と古墳の近在の可能性を指摘できる。須恵器の供給に関しては、㊳で実施した胎土分析において縄席文土器と一部の土器を除いて陶邑産との結果を得ている。㊲・㊼・㊳から出土する溶着した須恵器資料は過去に生産窯の存在の可能性が指摘されてきたが、今後陶邑の生産集落から各地の消費地の間に介在する、須恵器供給の中継基地であった可能性も検討しなければならないだろう。

①では6世紀中葉～後半にかけての溝10条・井戸5基・ピットを含む土坑189基・掘立柱建物が確認された。また、不明落ち込みとされる土坑は4世紀後半～6世紀にかけて形成された。この中には井戸が含まれる。3井戸より朝顔形埴輪、地山直上から金銅製鈴が出土した。鈴は6世紀前半と位置づけられる。包含層からも同時期の遺物が出土した。また、黒褐色粘質土から鉄滓、小鉄塊、鉄片が出土した。この鉄滓は大沢雅巳氏により分析がなされ、鉄滓は「鍛冶滓」に、小鉄塊・鉄片は「鋳鉄」とされ、銑鉄の脱炭処理と鍛造技術の存在を指摘されている。これまでの調査で鍛冶遺構は確認されていないためどの程度の規模で鍛冶が行われたか不明である。㊴でも鞴羽口が出土しており本遺跡内での「鍛冶工房」[6]の意義は今後の資料増加に委ねられる点が多い。②では布留式土器を出土した井戸、6世紀前半～中葉にかけての溝が検出された。③では6世紀後半の溝・土坑・井戸が検出された。また、9土坑から鉄滓が、包含層からは滑石製勾玉が出土した。④では6世紀代を中心とした土坑200基が検出された。水田跡とされる。この土坑からは後世の遺物とともに須恵器が出土している。包含層から滑石製管玉が出土した。⑤では布留（新）段階の竪穴住居、布留（新）の井戸・土坑を検出した。⑤で検出した土坑は㊳・㉙調査区の同時期の段階の土坑に類似することを指摘しておく。ほかに、6世紀前半の井戸、6世紀後半の土坑がある。⑦では布留（新）段階の井戸・土坑、5世紀後半の掘立柱建物、6世紀前半の土坑、6世紀中の溝が検出された。⑰では包含層、8世紀以降の遺構から5～6世紀にかけての須恵器・土師器・円筒埴輪片が出土した。⑱では布留（新）段階の井戸、6世紀代の溝・土坑が検出された。⑲では布留（新）段階の井戸・土坑、6世紀代の溝・井戸・土坑が検出された。⑳では布留（新）段階の井戸・土坑、6世紀後半の井戸・土坑が検出された。㉒では布留（新）段階の井戸・土坑、6世紀後半の井戸・土坑・溝・ピットが検出された。㉓では6世紀中葉～後半にかけての井戸・土坑が検出された。㉔では

6世紀代の井戸1基と溝1条が検出された。㉕では6世紀後半の建物6棟と溝5条が検出された。また、7世紀初頭に位置づけられる掘立柱建物から碧玉製勾玉が出土した。②－9土坑から出土した勾玉と類似する。㊴・㊵でも滑石製紡錘車・片岩製勾玉・加工痕跡のある滑石材などの石製品が出土しており、遺跡内で石製品を製作していた可能性が高い。㉙では6世紀後半の溝1条が検出された。㉘では弥生時代から古墳時代にかけての自然流路が検出された。黒色粘質土層から6世紀中～後半にかけての須恵器・土師器が出土した。㉘では布留（古）段階の井戸3基が検出された。6世紀中～後半では井戸1基・溝6条が検出された。㉚では6世紀代の溝1条が検出された。㉜では5世紀中～後半にかけての土坑2基、6世紀前半の土坑が確認された。㉝では6世紀前半から中頃とされる銅製鈴が1点出土した。㉞では4世紀代のピット群が検出され、包含層からも完形の甕1点が出土した。また、6世紀代の溝6条・土坑2基が検出された。包含層から同時期の土器が大量に出土している。㊲では5世紀代の掘立柱建物3棟・土坑5基、6世紀代では溝2条・掘立柱建物1棟が確認された。㊳では布留（新）段階の完形の甕が一点地山直上から出土した。5世紀では溝1条、6世紀では井戸2基が確認された。遺物包含層からは5～6世紀にかけての土器が多量に出土し、中には縄席文と沈線文を施した須恵器・円筒埴輪・蛸壺・土錘・製塩土器・結晶片岩が出土した。㊴とは堤防を挟んだ南北の関係にあり、遺物・遺構の内容は㊴と連続して捉えねばならない範囲である。

飛鳥時代（7世紀）

飛鳥時代で問題になるのは難波大道である。現在までのところ、大和川今池遺跡では⑦・㊸の調査区で確認され、㊽では確認できなかった。出土した須恵器により7世紀以降の年代が与えられることが報告されている。最近では難波宮の調査において、「戊申年」（648年）の紀年銘木簡が同時期の土器に伴って出土した[7]。これは、難波大道設置時期を7世紀とする説と8世紀とする説に対して、難波大道と難波宮との関係を考える上で考古学的な再検討の課題となる。

難波大道両側溝以外に、㉒では掘立柱建物4棟と土坑1基が検出された。㉓では掘立柱建物1棟、㉞では井戸1基、㊽では土坑1基が検出された。㊽では平行2条の溝・ピットを確認している。また、包含層資料として②・③・⑤・㉒で同時期の遺物が出土した。これらの遺構・遺物は7世紀前半～中葉の時期を主体とする。遺構・遺物の分布の傾向として㉔・㊽・㊾に偏することが指摘できる。また、7世紀代の瓦として㊽では重弧文軒平瓦1点、㊽・㊽・㊽で格子目タタキ平瓦が出土している。

奈良時代（8世紀）

既述のとおり古墳・飛鳥時代にも溝は検出されるが、本遺跡内において溝による区画性・用水維持管理が重視されるのはこの時期である。8世紀中ごろを一つの画期として集落は変遷するように考える。

⑤ではピット1基、⑪では水田遺構、⑰では溝・土坑・ピット、⑱では土坑3基、⑲では溝8条・井戸2基・土坑2基・掘立柱建物、㉒では掘立柱建物1棟、㉕では井戸2基・土坑3基・溝5条、㉙では溝2条・井戸1基・土坑4基、㉛では溝1条、㉟では溝・ピット、㊱では土坑1基、㊽では溝2条・ピットが確認された。包含層資料として①・③・⑧・⑭・㉘・㊽・㊾から同時期の土器が出土した。遺構・遺物の時期はおおむね8世紀中葉から後半にかけてである。このうち瓦は⑲で検出された奈良時代とされる掘立柱建物の柱穴から平瓦が根固めに使用されて出土した。また、㉙で検出された奈良時代井戸から瓦が出土している。

平安時代前期（9世紀）

⑱では9～10世紀とされる道路状遺構・溝2条・建物2棟、⑲では井戸1基、㉓では平安時代とされる土坑1基、㉞でピット、㊱で平安時代以降の轍痕跡が確認された。㉙でも包含層資料に当該期の遺物を見いだしており集落存在を裏付けるが、全体的に遺構が稀薄となる時期と言えよう。⑱・⑲・㉓・㉞を単位と、⑲から㉞の間の単位が抽出できる。

平安時代中期（10世紀）

⑩では溝12条・土坑6基・掘立柱建物2棟、⑪では溝7条・建物2棟、⑭では土坑2基、⑮では溝・土坑、⑯では溝・井戸・土坑・ピット、⑰では古墳時代とされる土坑の混入資料として黒色土器1点、⑱では8～10世紀とされる道路状遺構・土坑1基、⑲では溝・土坑、㉓では土坑、㉘では土坑・溝、㉞では井戸、㊴ではピットが検出された。①、④、⑦で包含層から土器の出土があった。遺構・遺物の分布は⑩～⑯、⑱・⑲・㉓・㉘・㉞、㊴の3単位を抽出できる。⑩～⑯では⑮・⑭と南へ向かうほど遺構は稀薄となり、⑫では遺構が全くないことを根拠に「湿地」とし、村落の南限だったことが岩瀬氏により指摘される。⑱・⑲・㉓・㉘・㉞では⑲・㉘・㉞を中心に井戸・土坑が検出されており、前の段階より集落の中心は南下している。

平安時代後期（11世紀）

⑩では溝・土坑、⑮では井戸・溝、⑯では溝・土坑・掘立柱建物1棟、㉘では井戸・ピットが検出された。包含層では⑦・㉙から同時期の土器が出土した。㉙では出土遺物における量比が徐々に増加傾向に向かう段階にあたる。抽出の偏差にもよるが、⑩～⑯・㉙の単位がある。

平安時代後・末期～鎌倉時代前期（12世紀）

⑩では溝、⑪では井戸・ピット、⑬では土坑、⑯では井戸・土坑、㉒で溝、㉔で溝、㉖で井戸・土坑・ピット、㉘では柵列、㉙では井戸・土坑が検出された。包含層では①、③、⑤、⑦、⑰、㉗で同時期の土器が出土した。

⑩・⑪・⑬・⑯、㉖・㉙の2つの単位が認められる。また、包含層資料の分布密度により単位設定をもう一つ増やすことが可能かもしれない。㉙では147・128井戸など祭祀性の重要な井戸が確認できる段階であり、13世紀段階に掘削される溝設定とこれらの井戸の位置に相関関係を認めるならば、㉙では観音堂廃寺立ち上げに伴う一大画期を迎える。

岩瀬氏は⑩・⑪・⑬・⑯の現象をまとめて、掘立柱建物の建替移動はあるものの平安中期～後期にかけて村落景観に基本的な変化はなく、⑫～⑯のエリアでは12世紀末には村落の「解体」が進んだことを指摘された。

これに対して、鋤柄氏は各調査区毎の検討を通じて⑩・⑭・⑮の8～10世紀の遺構・遺物が12世紀に北の⑪・⑯に分かれると考えられた。

集落の動態が処理場を中心とした範囲とは異なるが、12～13世紀にかけて㉖・㉘・㉙では観音堂廃寺造立と遺構・遺物の通増が量的に把握できる時期であり、両者の同時性が注目される。ちなみに、⑩～⑯の調査区は㉘・㉙から南東へ1.4㎞離れた場所である。

鎌倉時代中期（13世紀）

⑩では井戸、⑬で掘立柱建物、⑲では溝、㉒では溝１条、㉕では溝、㉗では13～14世紀とされる土坑１基、㉟では13～14世紀とされる段落ち及び包含層資料、㊱では溝・土坑・掘立柱建物、㊳では土坑及び包含層資料、㊴では溝・井戸・土坑・ピットが検出された。包含層では①、③、④、⑤、⑦、⑮、⑰、㉗で同時期の遺物が出土した。包含層資料が前の段階の単位に対応して出土していることが指摘でき、⑩～⑯、㉞・㊴の２つの大きな単位が抽出できよう。㊴では区画溝設置と土器資料が増加する時期で、遺構の視覚的な実体把握が明瞭となる段階である。

鎌倉時代後・末期～南北朝時代～室町時代（14世紀）

⑰では土坑、⑱では井戸・土坑、⑲では溝・土坑、㉒では溝、㉓では溝・井戸・瓦溜まり、㉙では方形区画溝・溝・井戸・土坑・ピットが検出された。ちなみに、㉙で報告した緩傾斜は㉝・㉞で検出された「段落ち」に対応しており、傾斜変換線は北西から南東の弧を描いて北東に低くなる。これより北東は遺構が希薄な地帯であり、緩傾斜土層の検討と遺構分布の理解から耕作域として位置づけができるかもしれない。包含層から同時期の遺物が①、③、⑤、⑮、⑳、㉘で出土した。

この段階は⑱を中心とした⑲・㉒、㉞・㊱の単位があり、包含層資料は２つの単位の間の分布となる。⑲ではピットの分布がある。14世紀後半となると遺構・遺物の評価は遺跡全体で積極的ではなくなり、㉙区画溝廃絶期に合わせて、この地での土地利用・収奪システムが変革したためであろう。㉜－65溝が完全に埋没するのは15世紀であり、条里ラインに沿っていたため機能重視されて、区画溝埋没にヒアタスが生じたのかもしれない。その後は、㉜－22溝は象徴的にこの周辺環境の変化を示している。

ここで、瓦の出土状況について概観する。㉔では溝・自然河川・今池東肩、㉖では溝・井戸、㉙では溝・井戸から軒丸・平・丸瓦が出土した。14世紀以前の遺構に伴う軒瓦は㉔・㉙のみであり、平・丸瓦についても㉔・㉙に集中する傾向にある。㉘では15世紀以降の土坑・溝から出土した。㉔と㉘のユニットは前者が薬師堂廃寺、後者が観音堂廃寺に比定されている。㉙の包含層から軒丸瓦（梵字文瓦当部）が１点、丸・平瓦が出土している。㉙では中世とされる井戸から瓦が出土した。包含層では①・②・㊲から中世丸・平瓦が出土している。また、段顎のタイプとして㉘で検出された近世井戸２基からそれぞれ近世唐草文軒平瓦１点ずつが出土している。少し時期は遡って⑬で10世紀代とされる溝から瓦が出土しているが、連続性という点で同地は13世紀以降は遺構が稀薄になっていく段階であり、㉞・㊴とは変遷を分けて考えたほうがよい。㉜の軒瓦は胎土分析を行っており、胎土成分が近似値を示すことから単一の窯で焼成した可能性が高いという結果となった。窯壁片が㉜・㉝・㉞から出土したことから過去に窯跡の存在が推測されており、今後他の地域の同笵関係の軒瓦の胎土比較とともに瓦を生産した窯の所在が問題として残る。

室町時代～江戸時代前期（15～18世紀初頭）

㉜では溝２条・井戸が検出された。㉝では６土坑が検出されており、最終堆積に近い土層から16世紀前半の土師質擂鉢が出土した。㉞では17～20溝、22溝が検出された。22溝は15～16世紀に溝機能を重視する。㉟－６土坑には「鎌倉」の遺物が含まれており、貯水・取水機能の時期については検討要素もあるが、㊴で検出した溝とほぼ同時期に機能したと考える。この溝廃絶後、㊲・㊳では溝と土坑（落ち）が掘削され、灌漑装置の転換が行われる。その次の段階は、㊴では現在の堺市と松原市の市境に該当す

る箇所で南北方向の坪境溝、２土坑・溝を検出した。坪境溝は数次の掘り直しを断面で確認しており、時期が古く遡る可能性の高い溝である。また、この２土坑・溝と連続する２溝・11落ちを㊴で確認した。㊴区画溝廃絶後の同地にあっては、㊴－22溝の段階を経て、㊳の２土坑・溝、㊴の２溝・11落ちの段階には遺物出土量の傾向・土層堆積等から周辺一帯の耕地化による田圃という平板な光景がさらに拡がった可能性が高い。次の段階1704年の大和川付け替え後、㊳・㊴の溝と土坑（落ち）は埋め戻しされず、大和川流水砂で埋まり廃絶する。

近世以降（18世紀～）

近世以降の此地の大きな変革は、鎌倉期以降とされる今池の設置・灌漑用水路の施設改善など水利システムの効率化による耕作域の汎化と1704年の大和川設置による大阪市側との地理的分断であろう。日下雅義氏による17世紀中ごろに描かれた「狭山池流域図」により西除川左岸に２条の水系ルートが復元されており、油上の集落と周辺耕作域という明治の景観とほとんど変わることがない集落－耕作域の原風景がこの時完成されたと考える。これに合わせて、（その１・２）調査区では大和川の増水による河川敷水没と耕作の繰り返しのあったことを確認した。

字名・条里

大和川今池遺跡は摂津と河内の国境に位置する場所にあり、これは現在の行政区堺市と松原市の市境にほぼ対応する。周辺の古道としては八尾街道、長尾街道、竹内街道がある。又、一帯の条里地割は難波大道との関連から比較的検討がなされてきた場所である。条里は昭和36年作成になる地図上での復元が可能で、その２で検出した92・127溝は条里東西線に合致する。

大和川今池遺跡を中心とした条里に関して岸俊男[8]氏を始めとして、足利健亮[9]氏及び金田章裕[10]氏による研究などがある。岸俊男氏は古道の比定・道の設定規格について検討を行い、地名等を勘案しながら「難波」から竹内街道まで南にはしる道を設定されるなどその後の古道・条里研究に大きな影響を与えられた。一方、足利氏は古道の間隔を検討し距離単位により時期を比定し、大津道・丹比道の斜行道路の痕跡を復元したうえで、条里の検討を行った。また、金田氏は古道と条里地割の関係について、古道を中心とした条里地割の不規則な規格を古道設定→条里地割設定→道路耕地化のプロセスでとらえて検討を行った。

また、大和川今池調査会により難波大道が検出されたことで、古代史・地理学の既往の研究成果を踏まえて、森村健一[11]氏や藤田道子[12]氏により条里及び難波大道について考古学的な検討がおこなわれた。森村氏は難波大道東西両側溝について、難波宮・条里制との関連の中で把握し、次に大道立地の地形的環境について詳細し、難波大道の設営時期について検討した。この森村氏の調査から100m北に離れて調査を行った藤田氏は難波大道について考古学的検討と古代史の研究成果を比較したうえで、大和川今池遺跡では７世紀以降から８世紀前半まで「空白の時期」が見られるとして、難波大道は「道の一つの通過点」として今後の課題をまとめた。

難波大道の設定時期と相俟って、条里地割の導入時期という２つの問題に焦点は絞られ、集落と土地利用の構造的把握が重要な検討課題となる。

次に、大和川今池遺跡（その１・２）を中心とした地域の字名について述べる。

1995年の調査で検出された瓦溜まりは観音堂字名の北側で検出されており、そこから出土した瓦によ

り観音堂廃寺の存在が確認された。（その２）で検出した区画溝はこの瓦溜まりから北へ約40mに位置する。観音堂の字名は大和川今池遺跡調査会が調査した頃から注目されていた字名であった。付近には観音堂の字名以外に、油北、入達があり、やや東側には嶋田の字名が見いだせる。一方、畚市側には繁木田、大阿世、フシワの字名が残る。観音堂廃寺は12世紀から15世紀までの存続期間が軒瓦・出土遺物により推測され、22溝の機能を重視すれば、16世紀まで時期は下る可能性がある。「薬師堂」の字名に該当する場所では自然河川・溜池から瓦がまとまって出土しており、「具体的には不明」とされながらも12世紀末～15世紀代にかけて薬師堂廃寺の存在が推測されている。付近には薬師堂・堂の西・堂の前・堂の北といった字名と条里の位置表示に序数詞を用いた五の坪があり、これのやや北東側には油上の集落がある。

註

1）足利健亮・桑原公徳1985「２　松原市の地形」『松原市史』図１は「２　松原市の地形」を一部改変して作図、日下雅義1980『歴史時代の地形環境』古今書院、日下雅義1980「大和川付近今池遺跡付近の地理的環境」『大和川今池遺跡II』

2）字名図は出水睦己1980「松原市域における条里」『大和川今池遺跡II』をもとに作図

3）大阪府教育委員会1997『大阪府文化財地名表』を一部改変して作図

4）鋤柄俊夫1999「狭山池と中世村落」『狭山池』

5）藤田道子1995「第２面　94－２．３．４地区（難波大道検出地区）の調査」『大和川今池遺跡・XII』

6）花田勝広1989「倭政権と鍛冶工房－畿内の専業集落を中心に－」『考古学研究』第36巻第３号

7）㈱大阪府文化財調査研究センター1999　『大阪府警察本部棟新築工事に伴う大坂城跡の発掘調査』

8）岸俊男1970「古道の歴史」『古代の日本　５近畿』

9）足利健亮1982「大阪平野南部の古道について」『人文』京都大学教養部28　『日本古代地理研究』に所載

10）金田章裕1988「長尾街道・竹内街道の測設と条里プラン」『長尾街道・竹内街道　歴史の道調査報告書第３集』大阪府教育委員会

11）森村健一1981「第５章「難波大道」の復元」『大和川今池遺跡III』、森村健一「堺市発掘の難波大道と竹内街道」『季刊考古学』第46号

12）註５）と同じ

第２章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

古来、大和川は奈良盆地の水を集め、亀の瀬を経て河内平野へと流れだした後、石川と合流し、現在の平野川、長瀬川、玉串川といった河川に分岐して北流していた。この河川群が形成した肥沃な平野は、広大な農業生産域を生じさせ、歴史的にも多大な影響を与えてきた。しかし一方で、中世以降に進行したと考えられる流路の固定による天井川化は、それまでも繰り返されてきた洪水以上に一旦破堤した際の洪水被害を深刻なものとし、結果、大和川の洪水対策が求められたことは当然の成り行きであった。この具体的な解決策が、宝永元年（1704）に実施された「大和川の付け替え事業」であり、結果、大和川の流路は石川との合流地点から現在の堺市方面へと変更され、現在に至っている。

大和川の付け替えは河内平野の旧流域の洪水被害を減少させることには効果があったものの、逆に狭山池を水源とする西除川や東除川などの流れを寸断、流域の水系を大きく変化させ、現在の両河川は現大和川へ流れ込んでいる。しかし現大和川は基盤そのものが台地上を横断しているため、必ずしも排水能力が十分ではなく、集中豪雨などによる異常増水に際しては、堤防の破堤は当然の懸念ながら、大和川から各河川への逆流現象を起こし、周辺地域への深刻な洪水被害が懸念されることとなった。

これに対し建設省や大阪府は大和川高規格堤防事業などによる堤防の強化事業を計画し、現在部分的に整備が進められているところである。一方堤防内においては流路の掘り下げによる流量の増加や、河川敷部分の高さを下げることによる、増水時の排水能力向上などが計画されることとなった。大和川今池遺跡部分においても現況でT.P.＋９ｍ前後の標高を測る大和川左岸部の河川敷を、T.P.＋７ｍ前後まで掘削する「天美西低水護岸掘削工事」が建設省により計画されることとなった。

江戸時代の大和川付け替え事業は基本的に旧地表面上に堤防を構築することにより流路を固定しており、流路部分は旧地表面以下が削平を受けているものの、現在の河川敷下には江戸時代以前の地表面が保存されている。従って埋蔵文化財包蔵地内においては河川敷部分の調査が必要となる。これは上流に位置する船橋遺跡や瓜破遺跡などにおいても同様で、現大和川による浸食が両遺跡を学史的に著名なものとする契機となったことはよく知られている。

大和川今池遺跡は昭和52年、大阪府今池処理場の建設に先立ち発見された遺跡で、大阪府の遺跡地図によれば大和川北岸までを遺跡範囲としている。したがって工事範囲となる大和川河川敷部分は埋蔵文化財の存在が予想され、建設省近畿地方建設局大和川工事事務所より大阪府教育委員会に対して通知が行われ、両者間で協議が行われた。この結果、試掘調査による遺跡の遺存状況の確認が必要とする結論に達し、平成７年度、河川敷部分を対象とした試掘調査が大阪府教育委員会により実施された。試掘調査の結果、遺構・遺物包含層の存在が確認された範囲においては本調査の必要があるとの判断がなされ、㈶大阪府文化財調査研究センターが調査を担当することとなった。

調査は平成８年度以降、調査が必要と判断された範囲の下流側から上流側へと順次実施することとなり、平成８年度に（その１）として約5,400㎡、平成９年度には（その２）として約7,000㎡の調査を実施することとなった。またこれ以降、平成10年度には（その３）、（その４）、平成11年度には（その５）とした調査が順次実施、予定されている。

第２節　調査の経緯

（その１）調査は平成８年９月に開始し、翌平成９年３月に終了した。また、（その２）調査は平成９年９月に開始し、翌平成10年３月に終了した。以下に２か年の調査経過を抜粋して記す。

（その１）

平成８年（1996）９月13日、機械掘削に着手するも、豪雨により中断。以後もしばしば天候不順による進行の遅れが生じ、機械掘削は結果的に１ヵ月の期間を要した。

９月24日、人力掘削に着手。現代の土地利用痕跡を確認しつつ、第１層の掘削を行う。

10月24日、西半分第２面の全景写真撮影を行う。大和川付け替え後の土地利用痕跡を確認。西半分の写真撮影は11月５日に実施する。

12月４日、西半分第４面の全景写真撮影を行う。この間も降雨による作業の中止が多く、進捗は大幅に遅れる。また東半分の第４面全景写真撮影は12月20日に実施する。中世の条里区画が明らかとなるが、坪境の大土坑を除くと顕著な遺構はみられない。

12月26日、東半分第５面において航空測量（空撮）を実施する。これをもって年内の作業を終え、西半分第５面の空撮は翌平成９年（1997）１月17日に実施する。古墳時代の土坑を多数検出するが、この精査にはこの後、２月中頃までの期間を必要とした。

１月31日、東半分第６面の全景写真撮影を行う。この面が最終の遺構面となり、調査終了後、本体工事である機械掘削が始まる。また西半分第６面の全景写真撮影は２月18日に実施する。

２月11日、上流側への拡張部分の機械掘削を開始する。拡張部分も同様の順序で調査を進め、第５面の空撮を２月27日に実施し、第６面の全景写真撮影を３月５日に行う。またこの間、並行して調査終了部分の機械掘削を続け、最終的には３月19日をもって現地での作業を終了した。

（その２）

平成９年（1997）９月12日、西半分の人力掘削に着手。９月19日に西半分第２面の写真撮影を行う。東半分の写真撮影は10月２日に実施した。

10月８日、西半分第３面の写真撮影を実施。

10月23日、東半分第４面の写真撮影を実施。11月４日には西半分第４面の写真撮影を実施する。

11月17日から拡張区の掘削に着手する。

12月26日には西半分第６面の航空測量（空撮）を実施し、年内の作業を終了する。

平成10年（1998）１月６日に作業再開。この頃より第６面の方形区画の調査をすすめる。１月末頃から東半分さらには拡張区においても同様に方形区画に係わる遺構の調査を並行して行う。

２月19日、東半分及び拡張区第６面の航空測量（空撮）を実施し、現地説明会の準備にかかる。

２月22日、第６面方形区画を中心とした現地説明会を開催する。約300名の参加があった。

この後、調査終了部分の２次機械掘削と並行し、井戸などの遺構深部の調査を進める。

３月18日、遺構の調査などを終了し、現地での作業をすべて終える。

両調査とも現地での作業を終えたのち、引き続き南部調査事務所において、出土遺物や記録類の基礎整理作業を実施した。

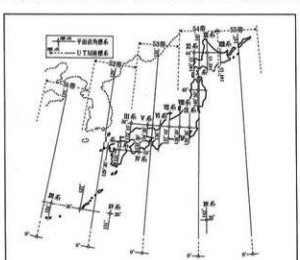
第3章　調査の方法

大和川今池遺跡の発掘調査は、大阪文化財センター（旧センター）が規定した「遺跡調査基本マニュアル[1]」に則って実施した。

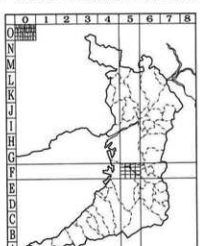
地区割については、国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準線とし、大阪全域を共通の方式で区割りできるように、大小6段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は、1／10,000地形図をそのまま利用したもので、縦6㎞、横8㎞が1区画となる。南西端を基準とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。

第Ⅱ区画は、1／2,500地形図の地区割をそのまま利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5㎞、横2.0㎞に16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を縦a～j、横1～10となる。

第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を5m単位で4分割するものである。遺物の取り上げ・実測記録等の際に、第Ⅳ区画を面として細分する必要性がある場合使用した。北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳと



国土座標系図



第Ⅰ・Ⅱ区画

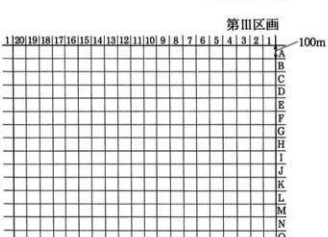


図7　国土座標系と地区割

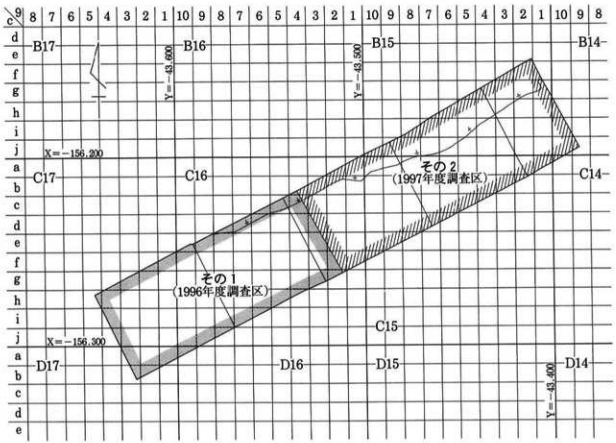


図８　大和川今池遺跡（その１・２）調査区のトレンチと地区割設定 (1/2000)

呼称する。第Ⅵ区画は、第Ⅳ区画を５ｍ単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。

今回報告する1996年から1997年にわたる２年間の調査は、（その１）を1996年度、（その２）を1997年度に分けて調査した。また、実際の発掘調査は（その１）・（その２）でそれぞれの調査区を西半・東半・拡張区を呼称として便宜的に分けて調査を行った。整理段階でこれらの各調査区を別な呼称に改めるより、各調査区の記述が現場記録と一貫性を持つことを重視し、呼称は改めない。また、各調査区は、遺構精査・写真撮影の最小単位として調査区の記録を行った。

方位は、座標北を使用している。これは、地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。因みに他の方位からの関係は、真北が東へ０°15′39″、磁北が西へ６°30′振る。

各調査区の位置と地区については、図８において1/2000の平面図に記した。

遺構番号は、各調査区毎に、通し番号を付けた。

96年度と97年度に跨がって調査を行った遺構は、文中に記述を行った。また（その１）調査区は、報告するにあたり新たに番号を付け直した。（その２）の報告は基本的に調査時の名称を使用した。なお、（その２）の調査では、調査時に番号を分けて掘削を行った遺構や複数の遺構番号を付した遺構については、数字の小さい番号を優先とした。

なお、（その２）の調査については、1998年２月22日に方形区画溝を対象に現地説明会を開催して、一般公開を行った。

註

１）㈶大阪文化財センター1988『遺跡調査基本マニュアル』

第４章　調査結果

第１節　基本層序

大和川今池遺跡の発掘調査は、1996年の調査より大和川河川敷を上流側に向かい、東西に細長い調査区を設定して行っている。

層序の認識は、堤防に沿って設けた側溝及び大和川に直交する断面観察用の側溝によって得られた知見が基本となる。調査は、機械掘削を終了後、堤防及び大和川直交方向に側溝を掘削し土層観察を行い、人力掘削の作業に移った。断面の記録は図面作成と写真記録により行った。

側溝は大和川に対し堤防側の側溝を南側溝と呼称し、各調査区に対し西・東側を西・東側溝と呼称した。土色については、土色注記の際、土色帳を使用し客観資料としたが、土色帳に基づいて調査時に標準的に呼称した土色については土層認識での一貫性を保つ目安として有効であったため、今回の土層記述の際にも使用する。

層序は調査時の名称に従って、まず、全体的な評価を述べた後、各土層について記述する。なお、個別に層序を扱う必要のある場合は、本文中で基本層序との対応関係を示す。

層序及び地山の概観

（その１）と（その２）の調査を通じて７層を基本として、各土層の相対的な評価を行った。

略記すれば、盛土、近現代作土層、大和川流水砂層、中世～近世耕作土層、中世茶褐色シルト層、古墳茶褐色シルト層、灰白シルト層、黒色シルト層である。ただし、これらの土層は調査区全体に普遍的に存在するわけではなく、地形に規制されたり上層が下層を削平する場合はこの限りではない。よって、土層の記述としての具体性は各場所毎に個別に論じなければならない。

また、調査最終面である地山は、粘質シルト・砂礫質シルト・砂礫の３タイプがある。

（その１）調査区は基本的に粘質シルトに遺構が掘り込まれる。ただし、調査区の西側は砂礫質シルトがベースとなる。（その２）調査区も基本的には粘質シルトが地山であるが、調査区の南西側は砂礫質シルト、調査区東側は砂礫層を地山とする。

（その１）

盛土及び流水砂

地表面を覆う盛土・攪乱層及び大和川流水砂である。機械掘削による掘削と遺物回収を行った。調査区に点在する攪乱は方形を呈するもので、調査時に土層断面の観察を適宜行った。盛土及び流水砂の除去で、大阪府教育委員会による試掘坑も確認できる。

第１層

灰黄色粗砂～中砂を主体とする。近現代作土と考える。大和川の流水砂が土壌化した土層である。この層を掘削した面で、大和川と直交あるいは平行に畝溝が検出できる。この土層は細分が可能であり、下層には土壌化が進行していない粗砂～細砂層がある。

昭和25年米軍撮影による航空写真には、同地区での畑地が撮影されており、最近までの土地利用の参

考となる。また、大和川上流部では畑作が今も行われており、時間的に現在に近い景観を復元したことになる。

第２層

褐色細砂を主体とする。大和川の流水作用を成因と考える。（堤防内での大和川増水であれば、必ずしも洪水ではない。調査時の土色注記には洪水砂の名称を使用した。洪水に意味を限定せずここでは流水の名称を使用する。）褐色細砂は細分が可能で、単一時期に形成した土層ではない。

ラミナが明瞭に観察できる自然堆積層である。粗砂～細礫が混入する箇所があり、その部分ではラミナが観察されないが、耕作による攪拌を原因として考える。（その１）の第３面に相当する北半分の一部で検出した畝溝が根拠である。遺物の出土は少ない。大和川を付け替えた1704年以降に形成された土層である。２土坑・溝の最終堆積土層がこの褐色細砂である。第２層は、（その１）では、調査区の北半分を中心に全体に堆積し、北半分攪乱の一因となる。

第３層

灰色砂礫混シルトが主体で、鉄分沈着による赤褐色化したシルト層との互層である。（その１）では第３層として、（その２）では第３・４層として掘削を行った土層。鉄分沈着したシルト層と砂礫混シルトは層理面として明瞭に把握できる面が間層中にある。２土坑・溝の掘り込みが行われた面はこの間層中の層理面からである。ただし、断面でこの面の把握は容易であるが、平面では土色・土質による分離が困難である。しかし、限定付きながら、鉄分沈着し変色した土層は土粒が小さくなる傾向にあり、これを観察点として面を確認していく方法を取った。

また、地山直上にみられる踏み込み（地山と不整合をなす土層）の中には、砂礫混灰色シルトと一見連続しているものもある。断面の知見では、一般的に灰色砂礫混シルトは踏み込みを形成する土層の上に水平堆積する。（その２）で検出した方形区画溝廃絶～大和川付け替え前の土地利用に関係する土層である。

第４層

暗褐色シルトを主体とする。土粒は均一であり、夾雑物を含まない。調査区中央を中心に確認できる（その１）に特徴的な土層である。（その２）では、該当する土層を確認していない。

時期は、分布範囲が限定される上、踏み込みによる遺物混入のため不確定要素が多いが主観的に６～８世紀のいずれかの時期に形成された土層と考える。

第５層

灰色シルト。土粒は均一であり、夾雑物を含まない。遺物の出土は皆無である。（その１）調査区中央及び（その２）東端傾斜で確認した土層である。この土層を掘削すると（その１）調査区では黒色シルトが埋土の87溝が検出された。遺物の出土がなく不明な点が多い。

（その１）で確認した基本的な土層は、以上の５層で、人力掘削の対象となった。遺構面は第２層上面が第２面となり、遺構精査を行った面は部分的な面を含めて計５面である。

（その２）

盛土及び流水砂

（その１）の盛土及び流水砂の見解と基本的に同じである。調査区東半の一部では、機械掘削終了時に第５層が露出する。また、拡張区では機械掘削終了後、第１層が露出し、以下第１層－地山の層順と

なり、削平が著しい場所である。また、（その1）から続く調査区北半分の撹乱は上流部に向かうほど大きくなる。

第1層

（その1）-1層と同じである。灰黄色粗砂～中砂を主体とする。調査区東側の拡張区でこの土層による地山の削平が顕著である。

第2層

（その1）-2層と同じである。褐色細砂を主体とする。（その2）の調査では調査区東側から30mを除いたほぼ全域で確認した。（その1）の褐色細砂と同じく調査区中央では、土壌化が進んだ土層が存在し、その一部を第3層である砂礫混灰色シルトと事実を誤認して掘削を行った。調査中、土層観察所見が進展した結果、この事実を認めた。

第3層

（その1）-3層の上層に対応する。砂礫混灰色シルトを主体とする。（その1）の調査成果である2溝の遺構が（その2）調査区に連続することを予想して、南側溝の断面精査を行ったところ（その2）-11落ち・2溝の存在を確認した。（その1）の調査時に東壁断面で2土坑・溝の検出面を認識しており、（その2）の調査では砂礫混灰色シルト中の該当する検出面まで掘削を行った。これは、11落ちや2溝の最終堆積は褐色細砂（第2層）であるにもかかわらず、遺構の掘り込みが灰色砂礫混シルトの間層からであり、褐色細砂の除去による遺構輪郭の検出が困難なためである。（その1）-3層上層相当する灰色砂礫混シルト－鉄分沈着層が第3層とする。

第4層

（その1）-3層の下層に対応する。砂礫混灰色シルト。第4層の掘削により、第5面を検出した。（その2）-第5面は（その1）-第4面に対応する。

第5層

砂礫混茶褐色シルトを主体とする。砂礫混入と土師器・須恵器を主体とした土器破片の出土が顕著な土層である。調査区の東半を中心に分布する。方形区画溝の最終堆積もしくは遺構面の凹凸を埋めた土層が砂礫混茶褐色シルトに類似する。方形区画溝廃絶～砂礫混灰色シルト形成前までの時期幅を考える。

第6層

淡黄～灰色シルト（地山）と褐灰色シルトブロック土及び褐灰色シルトを主体とする。2つ土層の層境は不明瞭である。2つの土層は地山と不整合な面をなす。調査区の東半を中心に堆積する。ピットその他の遺構のベースとなる土層である。この上面は遺構輪郭が不明瞭であった。地山ブロック土はブロックの単位が明瞭であり、整地土として認識したが、褐灰色シルトをブロック構造が明瞭である箇所とそうでない箇所があり、一律に整地土とする根拠は希薄である。第5層の下降及び浸潤や土中成分の変化等により、地山の一部を整地土として掘削した可能性がある。出土遺物が少なく、また、出土した遺物の中には包含層・遺構の遺物が含まれており時期を特定するには至っていない。

（その2）で確認した基本的な土層は、以上の6層で、6層は人力掘削の対象となった。遺構精査を行った面は計6面である。なお、拡張区で検出した傾斜を構成する土層は本文中で記述する。

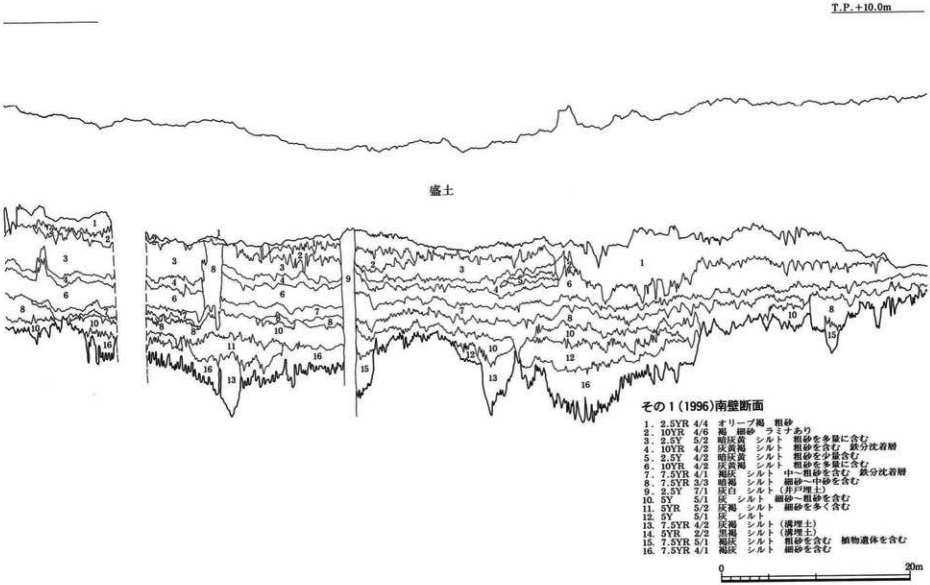


図９　（その１）-1996年度　南壁断面図（縦1/20・横1/400）

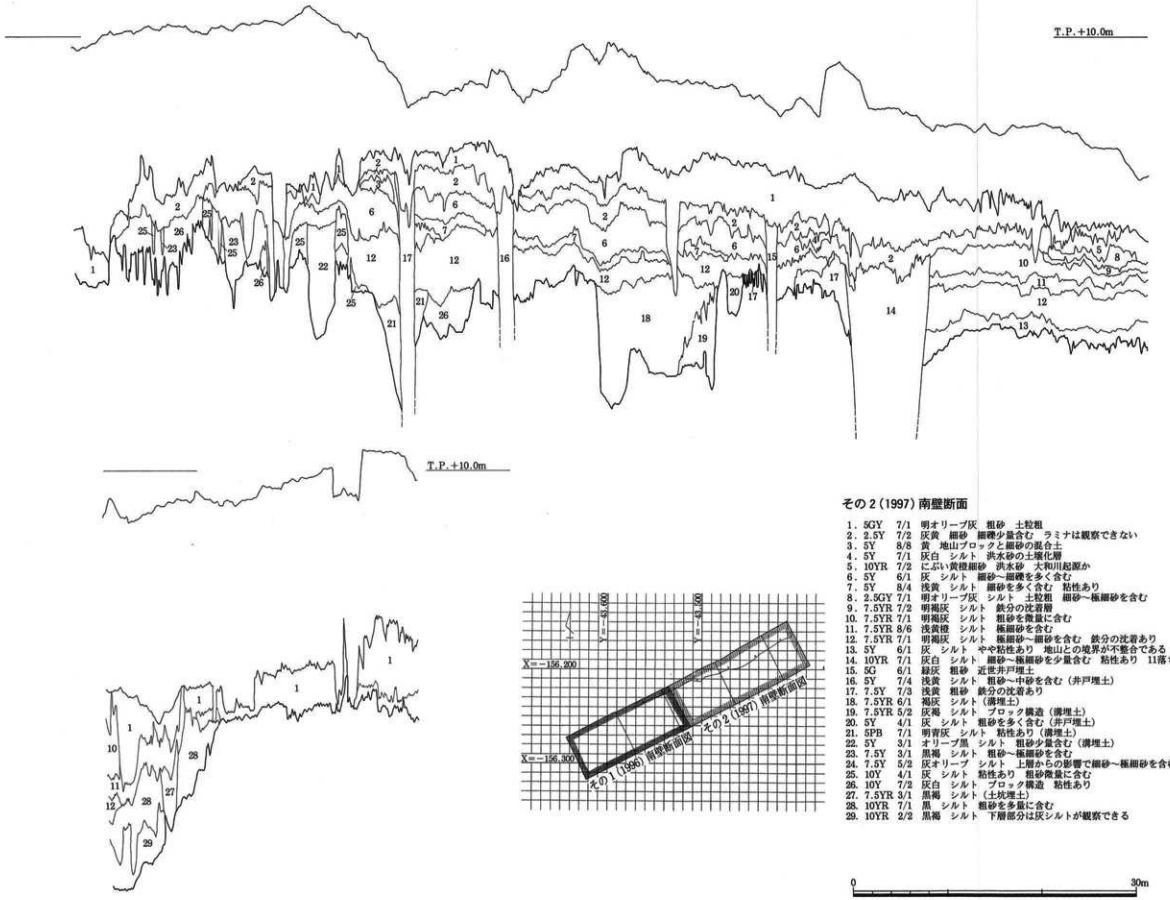


図10　（その2）1997年度　南壁断面図（縦1/20・横1/400）

第２節　検出した遺構・遺物（その１）平成８年度

大和川今池遺跡における基本層序は前節で詳述したが、（その１）調査区においては第１層から第５層を調査対象として認識し、このうち第２層上面（第２面）、第４層上面（第４面）、第５層上面（第５面）、最終遺構面（第６面）の４面について面的な調査を行った。また、機械掘削終了面である第１層上面（第１面）と連続する耕作土層として認識した第３層上面（第３面）については土層断面においては確認したが、面的な調査対象から除外した。

以下、各面ごとに検出した遺構と出土遺物について記述していく。

第１面

機械掘削終了面である第１面は調査対象からは除外したが、全域で大和川にほぼ直交する畝溝の痕跡を確認した。これは昭和30年代の航空写真に写る、河川敷における畑の畝と方向が一致し、その痕跡と判断された。

第２面（図11、写真図版２・３）

耕作土と考えられる第１層を除去することで検出される。ベースは大和川寄りでは第２層洪水砂であるが、堤防側では第３層が露出する。また西端部分で一部第５面が露出する箇所もみられるが、この部分については遺構の埋土を検討し、各遺構の帰属面を判断した。地形はおおむね平坦で、調査区中央から東、堤防付近部分が高く、標高約8.7ｍを測る。北西方向への緩い傾斜を示し、第２層遺存部分では最も低い所で標高8.3ｍを測る。

第２面に帰属する遺構は図11に示したとおりであるが、主体となるものは現堤防から大和川方向へ延びる溝群である。全域にみられるものではなく、調査範囲の中央部分に集中する。またこの溝に切られる形で直交する溝もわずかにみられる。溝は埋土を第１層と同じくするものがほとんどであり、基本的には芯々で１ｍという一定の間隔を持ちながら平行してることから、第１層を作土とする耕作面の下面に残された、一時期の畝溝の痕跡と考えられる。第２面のベースとなる第２層はラミナの顕著な細砂を中心とする洪水堆積物であり、調査区大和川寄りの第３層を浸食しつつ堆積している。この洪水堆積物の起源は現大和川と考えられ、第２層の堆積時期は近世以降となる。遺物から積極的に評価することは困難であるが、第２面に残された畝溝は近世以降の河川敷の耕地利用の痕跡と理解できる。また畝溝の方向は厳密には大和川に直交するものではないが、この方向は第１面で認められた現代の畝溝の方向と一致し、第２面の土地利用がその後も踏襲されたことを示している。

その他に第２面では土師器甕を埋納したと考えられる土坑を１基検出した（１土坑、図12）。調査区北東寄りの第２層が遺存する部分で検出したが、この部分における第２層の遺存状況は比較的不良で、また検出時に遺構の輪郭の把握が遅れたこともあり、土坑の切り込み面が第２層上面であるかどうかについては明確にすることができなかった。検出状態での土坑は直径約25㎝を測る円形で、深さ約５㎝が残るが、土器の遺存状況からして本来は10㎝以上の深さを有していたものと考えられる。土師器甕は底部のみが遺存するのみであるが、正位置で置かれていることや土坑の規模が土器の規模に合致していることから土器埋納土坑と考えられる。上部が第１層の攪拌で削平された可能性も高く、本来どの部位までが埋納されたものかは不明である。土器そのものは球形の体部に内外面ともハケによる調整がみられ

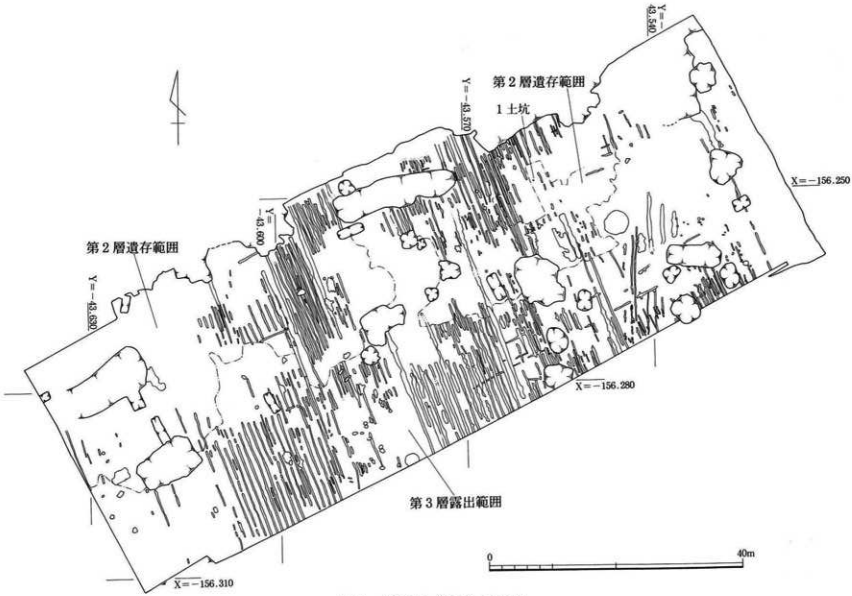


図11　（その１）第２面　平面図

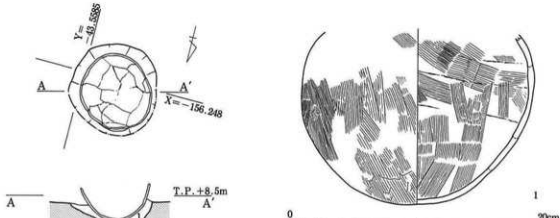


図12　（その1）1土坑　平・断面図　出土遺物

る、布留式土器の新しい特徴を示すものと考えられ、遺構の年代も古墳時代ということになるが、層位的な年代観とは齟齬をきたすものである。

第2面の年代については、第1層の出土遺物が古代以降のものを含んでいることから遺物から検討することは困難である。検出された遺構からは大和川の付け替え以降の土地利用が想定されるところであり、1704年（宝永元年）以降の年代を与えることができるが、近代以降の遺物は認められないことから近世の間に納まるものと考えられる。なお第1層出土遺物として図示したもの（図20−27）は7世紀代の須恵器であり、下層からの掻き上げによるものであろう。

第3面（写真図版26・28）

第2面で検出したベース層のうち、大和川に近い部分に遺存する第2層を除去した面を第3面とした。第2面段階で既に露出していた第3層上面と連続する。調査区西寄り、あるいは大和川側の攪乱部分ではすでに第5面が露出する部分がみられたが、その範囲は第2面段階より若干拡大している。第3面は、調査区側溝における土層断面の検討において、第3層が上面が削平された作土層と判断されたことと時間的な制約から面的な調査対象からは除外したが、第2面段階で既に検出したものなどについては一部、調査の対象とした。

第3面に帰属する遺構は畝溝、土坑、素掘り井戸、坪境等である。畝溝は第2面に属するものと同規模・同方向のもので、大和川付け替え以降の耕地利用に伴うもので、第2層等の大和川起源の洪水堆積物で埋没している。

土坑には点在する小規模なものと、坪境の交点にみられた大規模なものの2者が存在するが、後者を2土坑として報告する（図14・15）。2土坑は当初、第4面段階で掘削されたものであるが、最終的には第2層洪水堆積物によって完全に埋没するものであり、第3面段階においても当初の規模は失われているものの、大型の土坑として機能している。当初は2.6m程度であった深さは第3面段階では1m程度となっている。またこの土坑に連続する東西坪境の溝も当初の掘削は第4面段階に遡るが、数回以上の埋没と掘削を繰り返しており、2土坑の埋没過程との対応は明確ではないものの、やはり最終的な埋没は第3面段階以降となる可能性が高い。

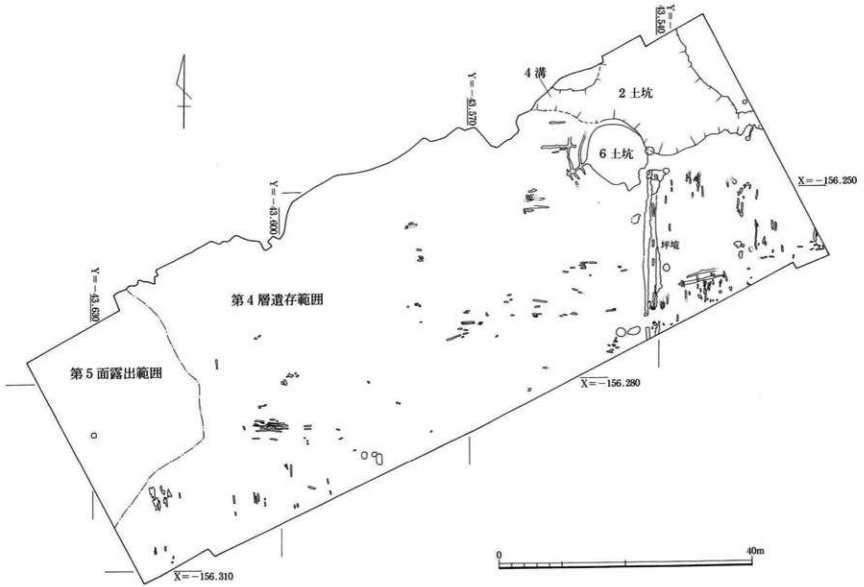


図13　（その1）第4面　平面図

畝溝は第2面検出段階ですでに確認されていたものであるが、第2面で検出された畝溝に方向が一致し、一連の耕地利用の痕跡と考えられる。基本的に第2層洪水砂を埋土とするものであり、第2層の堆積前にすでに溝が掘削されていた状況が想定されるが、埋土となっている第2層には若干の土壌化の痕跡が認められるものがあることから、第2層堆積後の畝立ての結果、下層に残された痕跡である可能性もある。坪境付近の状況から第3層が大和川付け替え以前の条里水田の作土層と考えられる点からは、後者の可能性が高いと思われるが、層位的な検証は十分に成しえなかった。いずれにせよ大和川の付け替え以降の土地利用が第3面に及んでいる状況を認めることができた。また5溝もこのような農地利用にかかわる溝であるが、写真図版28に示した軒瓦1点（173）が出土している。唐草文軒平瓦B4型式である。

第3面では断面形態がすり鉢状を呈する大型の土坑が認められ、これを素掘りの井戸として認識している。平面規模は直径が約2mの大型のものと、1m未満の小型のものに分類できるがいずれも2m前後の深さを有しており、現状では内部から湧水がみられる状況ではないが、上述したような大和川付け替え後の耕地利用に対応する可能性の高い遺構として認識される。分布には規則性は認められず、いずれもブロック土を主体とした埋土によって人為的に埋めもどされた状況が認められた。

第3面は上述したように大和川付け替え以前の条里水田の作土層上面と考えられるが、洪水、あるいはさらに上層の攪拌に伴う削平により本来の遺構面は遺存しておらず、坪境付近の状況を除くと、検出された遺構はおおむね上層の土地利用の痕跡とすることができる。

第3面検出時の遺物、すなわち第2層からは瓦や土器片を中心とする遺物が出土しており、一部を図示した（図20−28〜34）。28は初期須恵器の可能性があり、29は16世紀中頃の龍泉窯系青磁碗である。外面にヘラ状のもので施文された彫りがみられる。30〜32は巴文軒丸瓦（C6型式）である。3点とも外区の圏線が巡っておらず、新しい特徴を示す。中世末から近世にかけてのものか。33は連珠文軒平瓦（C型式）、34は唐草文軒平瓦である。33は中世、34は中央部の菱形文様と退化した唐草文様の点で、近世のものか。軒平瓦は2点とも段顎である。なお軒瓦は地村氏による分類（地村1998）に従う。また写真図版26には下層の遺物がまきあげられたと考えられる須恵器片を示した。162は縄席文のみられる体部の破片である。写真では実物より少し大きく写っているが、湾曲の具合から、体部最大径に近い部分と思われる。

第4面（図13、写真図版4・5）

第3層を除去する事で検出される。調査範囲のほとんどの部分で第4層上面をベースとするが、大和川際の部分と調査区西側の部分では第5面が露出する。地形的には平坦で、南西方向から北東方向への傾斜を示し、標高は最も高いところで8.6m、低いところでは8.3mを測る。

第4面に帰属する遺構には先述の2土坑のほか、2土坑に接する大型の土坑である6土坑、また小規模な土坑や鋤溝、素掘り井戸などがみられ、坪境に関してもこの面でみられるものが初源である。以下、各遺構ごとに記述したい。

2土坑（図14・15・17、写真図版6・18・26〜28）

東西・南北の坪境の交点に位置する大型の土坑で、先述のように第3面段階まで機能している。当初の規模は東西14.5m、南北12mのいびつな円形を呈し、深さは約2.5mを測る。断面形はすり鉢状を呈し、底付近の平坦面は狭小である。層位的な関係を良好に認識することはできなかったが、東西方向の

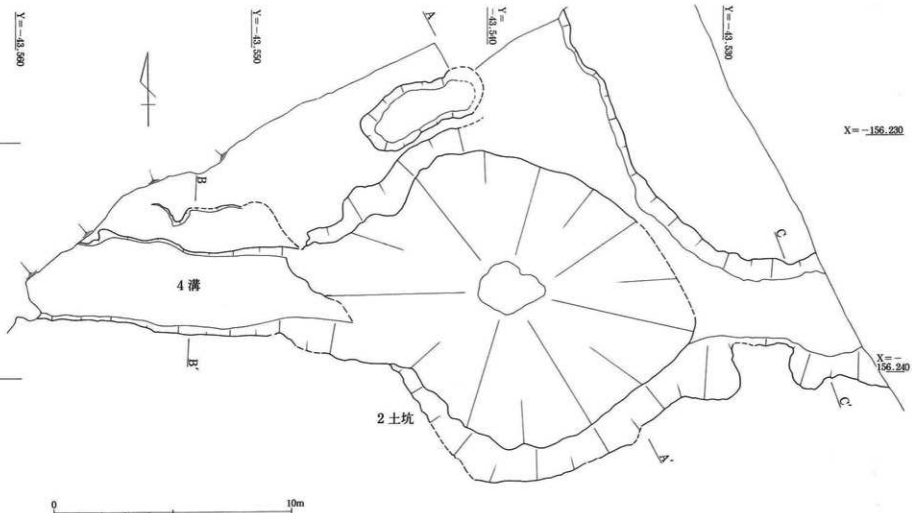
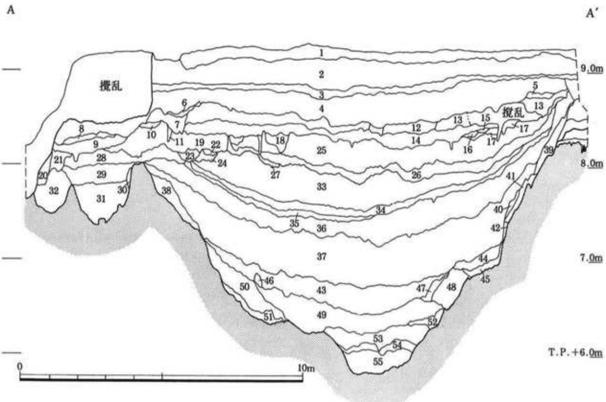
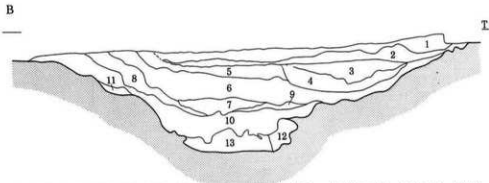


図14　（その1）2土坑・4溝　平面図

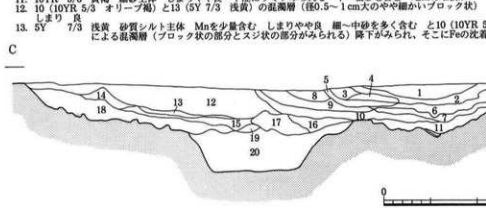


1. 表土 2.5Y 4/6 オリーブ褐 極細砂主体 植物遺体を含む 中砂～径0.5～2cm大の小礫を含む 現代の農具・植物による攪乱を受ける
2. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 極細砂主体（粘りあり） しまりよし Feを含む 細砂を含む 植物遺体あり 雲母・炭化物を含む
3. 2.5Y 3/2 黒オリーブ褐 極細砂と10YR 2/2 黒褐 極細砂によるブロック状の混層（ブロックの径は0.3～0.5cm大） しまりよし 中～粗砂を含む 上層からの降下あり（これに伴う植物遺体あり）
4. 洪水砂 2.5Y 4/6 オリーブ褐 極細砂主体 炭化物を含む 土器片を含む しまりよし Feを少し含む 中砂～径2cm以下の小礫を多く含む 植物遺体あり 下面に径5cm大の礫を数個含む
5. 洪水砂 10YR 5/6 黄褐 細砂主体 粗砂～径1cm大の小礫を多く含むが、特に極粗砂が多い しまりはやや良 13の土層のとよく似る
6. 2.5Y 4/4 オリーブ褐 極細砂主体 中砂～径0.3cm以下の小礫を含む Feを少し含む Mnを微量含む しまりは良 植物遺体を含む
7. 2.5Y 4/3 オリーブ褐 極細砂主体 2.5Y 5/1 黄灰 砂質シルトのブロックが部分的に層状になり堆積する 粗砂～径0.3cm大の小礫を含む 炭化物を含む Mnを微量含む しまりは良 植物遺体を含む
8. 2.5Y 4/4 黄褐 細砂主体 中砂を多く含むと2.5Y 6/8 明黄褐 砂質シルトによるブロック状の混層 7.5YR 6/1 褐灰 砂質シルトブロック（径0.5cm以下）を含む しまり良 部分的に砂質シルト主体に上層からの降下に伴う砂礫がはいるところや、細砂主体で砂質シルトがブロック状で混入しているところがある
9. 2.5Y 4/4 オリーブ褐 極細砂主体 極細砂～径1cm大の小礫を多く含む 2.5Y 7/8 黄 砂質シルトのブロックを含む 径5cm大の礫を数個含む しまりはやや良 炭化物を少し含む 上層からの降下に伴う植物遺体がみられる
10. 2.5Y 6/6 黄褐 細砂主体 径2～4cm大の小礫を多く含む 中～極粗砂を多く含む Feを少量含む しまりは良 炭化物を少し含む 植物遺体を含む
11. 8に同じ
12. 洪水砂 2.5Y 4/6 オリーブ褐 細砂主体 しまりは良 中砂～径0.5cm大の小礫をかなり多く含む 特に粗砂は上のものは中位から下方に多くみられる 植物遺体がみられる部分的に炭化物にみられる
13. 洪水砂 2.5Y 4/6 オリーブ褐 極細砂主体 しまりはやや悪い 極粗砂から径0.5cm大の小礫を多く含む 雲母を少し含む
14. 2.5Y 4/6 オリーブ褐（7より明るい） 極細砂主体 しまりは良 細砂～中砂を多く含む 粗砂～径0.3～0.5cm大の小礫を少し含む 上層からの降下に伴う植物遺体がみられる 5Y 6/4 オリーブ黄 細砂のブロック（径2～3cm大）がみられる 雲母を少し含む
15. 10YR 5/6 黄褐 極細砂主体 しまり良 中・細砂を多く含む 上面に2.5Y 5/2 暗灰黄 砂質シルト（Fe含む）のブロックを含む
16. 10YR 5/4 にぶい黄褐 細砂主体 しまりは良 炭化物を含む 粗砂～径0.5cm大の小石を極めて多く含む 降下による植物遺体あり
17. 10YR 5/8 黄褐 極細砂 雲母を含む 中～粗砂・径2cm大の礫を含む Fe少し含む しまりは良
18. 2.5Y 4/6 オリーブ褐 細砂主体 中～粗砂を多く含む 径0.3～0.5cm大の小礫を含む しまりは悪い
19. 2.5Y 5/4 黄褐 細砂主体 Feを含む Mnを微量含む 中砂～径0.3cm以下の小礫を多く含む しまりは良 雲母を含む 植物遺体あり
20. 2.5Y 4/6 オリーブ褐 極細砂主体 粗砂～径0.5cm大の小石を多く含む 炭化物を含む 降下に伴う植物遺体がみられる
21. 10YR 4/6 褐 極細砂主体 粗砂から径1cm大の小礫を含む Feを少し含む しまりは悪い Mnを微量含む 上層からの降下に伴う植物遺体がみられる
22. 10YR 6/3 にぶい黄褐 細砂主体 炭化物を含む 粗砂を少量含む 雲母を含む しまりは良
23. 2.5Y 5/3 黄褐 極細砂主体 2.5Y 6/3 にぶい黄 砂質シルトブロック（径0.5cm以下）を少量含む FeとMnを少量含む しまりはやや良
24. 2.5Y 5/4 黄褐 細砂主体 炭化物を多く含む 粗～極粗砂を含む Feを少量含む しまりは良 雲母を含む
25. 10YR 5/8 黄褐 極細砂 しまりは悪い 中～粗砂・径1cm大の小礫を含む Feを含む 雲母を含む
26. 5Y 6/3 オリーブ黄 極細砂 Mnを少し含む Feを多く含む 雲母片を含む植物遺体あり 部分的に炭化物を含む
27. 2.5Y 6/3 にぶい黄 極細砂主体 Feを多く含む 雲母を含む 炭化物を少し含む しまりは悪い 上面からの降下に伴う植物遺体がみられる
28. 2.5Y 4/6 オリーブ褐 細砂 粗～極粗砂を含む Feを少し含む植物遺体を含む しまりは良 下面で2.5Y 4/6 オリーブ褐 極細砂の堆積がみられる部分がある 北よりでしまりが悪くなる
29. 10YR 5/2 灰黄褐 砂質シルト・5Y 5/3 灰オリーブ 砂質シルト・5Y 6/3 オリーブ黄 極細砂からなる混層（径0.3～7cm大までのブロック状） 粗砂～径1cm大までの小礫を含む 炭化物を含む Mnを少し含む Feを含む
30. 31の砂質シルト部分
31. 2.5Y 5/3 黄褐 細砂～中砂主体 粗砂を含む しまりはやや悪く部分的に極めて悪くなる 炭化物を含む（特に下面） 上層からの降下がみられこれに伴う植物遺体あり 10YR 3/3 暗褐シルト・7.5YR 2/2 黒褐砂質シルト（Mnを含む）・5Y 8/3 淡黄シルト（Feを少し含む Mnを含む）・10YR 5/2 灰黄褐 砂質シルト（Feを含む）・地山のブロック（径0.5～5cm程度まで）を多く含む
32. 10YR 5/6 黄褐 極細砂（Feを含む・中～粗砂を含む）・5YR 3/1 黒褐 砂質シルト（Mnを含む）・10YR 6/1 褐灰砂質シルト（Feを含む）による混層（ブロック状） 上層からの降下がみられる 径0.5～5cm大の礫を含む 炭化物含む
33. 2.5Y 6/3 にぶい黄 細砂 雲母を多く含む しまりは悪い 植物遺体がみられる Feを多く含む Mnを少し含む 上位が細砂主体、下位が極細砂主体
34. 5Y 6/3 オリーブ黄 砂質シルトと極細砂による土壌 Feを多く含む しまりは悪い 雲母を少し含む 主体は砂質シルトであるが部分的に極細砂が主体となったり帯状のブロックで入ったりする
35. 5Y 8/3 灰オリーブ 極細砂主体 しまりは悪い Feを含む 砂部分に雲母を多く含む ラミナともとらえることのできる5Y 6/3 オリーブ黄 シルトが帯状に入り、砂と互層になる
36. 7.5YR 6/1 褐灰 砂質シルト Mnを含む 粗～極粗砂を含む しまりは良 上面は砂質シルトと7.5YR 8/1 灰白 極細砂との細かいブロック状の混層 下位は砂質シルト主体となる
37. 7.5YR 5/2 灰褐 砂質シルト Feを含む しまりは良 上位は砂質シルトが主体だが、中位で7.5YR 7/1 明褐灰 極細砂ブロック（径0.3cm以下）を多く混層となる 下位は粗～極粗砂を多く含む
38. 2.5Y 6/2 灰黄 砂質シルト主体 Feを含む 中～極粗砂を多く含む 径1cm以下の地山ブロックを少量含む しまりは良 降下がみられこれにFeが集中する 植物遺体あり
39. 10YR 6/2 灰黄褐 細砂主体 中～極粗砂を多く含む Feを含む しまりは良 5Y 8/3 淡黄 シルトブロック・2.5Y 7/2 灰黄 砂質シルト（しまり良）を含む
40. 2.5Y 5/3 黄褐 砂質シルト（極細砂に限りなく近い） しまりは良 Feを含む 中～極粗砂を含む 炭化物を少し含む 上層からの降下に伴う植物遺体あり
41. 7.5YR 6/1 褐灰 砂質シルト主体 部分的にFeを含む しまりは良 粗～極粗砂を含む（上位に特に多い） 炭化物を少し含む
42. 5YR 5/1 褐灰 砂質シルト主体 Feを含む 上層からの降下がみられる しまりは良
43. 2.5Y 5/1 黄灰 シルトと2.5Y 8/1 灰白 砂質シルトとの混層 中位でラミナ状の砂質シルトの堆積がみられる Feを含む Mnを含む 粗砂を少し含む しまりはやや良 上層からの降下がみられる
44. 2.5Y 5/1 黄灰 シルトと2.5Y 7/1 灰白 砂質シルトによる混層 上位に砂質シルト、下位にシルトが多く堆積する 上層からの降下がみられる Feを含む 粗～極粗砂を含む 降下に伴う植物遺体あり
45. 10YR 5/2 灰黄褐 砂質シルト主体 Feを含む 粗砂～径0.3cm大の小礫を多く含む しまりは良 下位に植物遺体を多く含む 地山（7.5Y 8/1 灰白 極細砂）のブロック（径0.3～0.5cm前後）を含む 上層からの降下がみられる
46. 7.5Y 6/2 灰オリーブ 砂質シルト主体（極細砂に限りなく近い） Feを多く含む しまりは良 部分的に上層の土がすじ状に混入する 地山に類似する
47. 2.5Y 5/2 暗灰黄 砂質シルトと7.5Y 6/2 灰白 極細砂とのブロック状の混層（ブロックは径0.5cm以下） Feを含む 上層からの降下あり しまりはやや悪い 粗～極粗砂・径0.5cm大の小礫を多く含む
48. 44と地山との混層
49. 2.5Y 5/2 暗灰黄 砂質シルト主体（粘性がかなりある） しまりはやや悪い Feを多く含む 上層からの伴う植物遺体あり 上位と下位に粗砂～径0.3cm大の小礫を多く含む
50. 10YR 4/3 にぶい黄褐 砂質シルトと10YR 6/2 灰黄褐 極細砂との混層 Mnを含む Feを含む しまりは良 上層からの降下がみられる 下位に細～粗砂を多く含む また5Y 6/3 オリーブ黄 シルトブロック（径0.5cm以下）を含む 部分的に下位がすじ状に混層する
51. 10YR 5/2 灰黄褐 極細砂主体 Feを少し含む Mnを少し含む 粗～極粗砂を含む しまりは良 下位に砂質シルトが主体となる 地山ブロック（径0.3cm以下）をやや多く含む
52. 7.5Y 5/1 灰 砂質シルトと7.5Y 5/1 灰 極細砂との混層 中砂～径1cm大の小礫を多く含む ただしこの層の南から北に75cm以後になると中～粗砂以外の混入物はほとんど無い Feを少し含む 下位に小礫を多く含む 上層からの降下がみられる
53. 10YR 4/2 灰黄褐 砂質シルト（粘りはあるがサラサラする） Feを含む 径7cm大の石を一つ含む 上層からの降下がみられる 下位ほど粘りが強くなり混入物も少なくしまりが悪くなる 上位ほどしまりは良く、粗?極粗砂を含むようになる
54. 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルトと10YR 4/4 褐 細砂（地山に似る）による混層 径0.5cm以下の小礫・砂を多く含む しまりは悪い Feを含む 降下による～炭化物を少し含む 上層からの降下がみられる 南端付近は小礫・砂が極めて多く集中し、10YR 4/3 にぶい黄褐 シルトブロックが多く混入する 北になるほど上位に砂、下位にシルトが多くみられる
55. 7.5GY 4/1 暗緑灰 シルト Feを多く含む しまりは良 上層からの降下がみられる 54との境に粗～極粗砂をやや多く含む

図15　（その１）２土坑　断面図（天地1/40、左右1/133）



1. 2.5Y 5/3 黄褐 極細砂主体 中砂を多く含む 極粗砂～径0.5cm大の小礫を含む Mnを含む 土器片・植物遺体がみられる やや しまり悪い
2. 2.5Y 4/2 暗灰黄 砂質シルト 降下に伴うFeを含む 細～中砂をかなり多く、粗～極粗砂を含む しまりは良 地山ブロックを含む また地山土がスジ状にはいるところあり 炭化物を含む
3. 10YR 3/3 灰黄褐 砂質シルト 細～粗砂を多く含む 地山ブロックを肩の部分に含む（径0.5～5cm大） 降下に伴うFeがみられる しまり良 径0.5cm大の小礫を少し含む 細かいMnを含む
4. 5YR 3/1 黒褐 砂質シルト主体 細～粗砂をかなり多く含む Mnを含む 径0.5cm大の小礫を含む 土器片を多く含む Feを少し含む 層の肩になるほど混入物が少なくなりシルト性が強くなる 下位に2.5Y 7/4 浅黄 極細砂ブロック（径0.5～1cm大）を含む
5. 5YR 3/2 暗赤褐 砂質シルト 細～中砂をかなり多く含む しまりは良 Fe・Mnを含む 粗～極粗砂を少量含む 土器片を多く含む
6. 7.5YR 4/2 灰褐 シルト主体 Feが多くみられる しまりは良 中～上位にかけて細～極粗砂をかなり多く含む また砂粒ブロック（径5cm前後）を一部分含む Mnが少しみられる 地山土がスジ状にみられる部分あり
7. 主体は6に同じ 7.5YR 7/2 明褐灰 シルトが細かいブロック（径3cm以下）で部分的に混濁する 地山ブロック（径3cm以下）を含む Feを含む 細～極粗砂を多く含む
8. 10とさわめて類似する 10より細～中砂の量が多く、砂質が強い また色調もやや淡い
9. 7.5YR 4/4 褐 細砂主体 地山のブロックを含む 中～極粗砂粒を極めて多く含む しまりは良 10のブロック（10YR 3/4）を含む
10. 10YR 5/3 にぶい黄褐 砂質シルト主体 中～粗砂を多く含む 径0.5～1cm大の小礫を含む Feを少量含む
11. 10YR 5/6 黄褐 細砂主体 しまりやや良 下位にラミナみられる 中～粗砂を含む 地山の堆積か
12. 10（10YR 5/3 オリーブ褐）と13（5Y 7/3 浅黄）の混濁層（径0.5～1cm大のやや細かいブロック状） Mn・Feがみられる しまり良
13. 5Y 7/3 浅黄 砂質シルト主体 Mnを少量含む しまりやや良 細～中砂を多く含む と10（10YR 5/3 オリーブ褐）・地山による混濁層（ブロック状の部分とスジ状の部分がみられる）降下がみられ、そこにFeの沈着がみられる



1. 5Y 6/1 灰 極細粒シルト 細砂（角）を少量含む 土粒構造緻密 粘性あり
2. 7.5Y 6/1 灰 極細粒シルト 細砂～極細砂少量含む 細礫を少量含む （1・2灰色シルトベース）
3. 10Y 7/2 灰白 細砂 細礫～中礫少量含む 粗砂～極粗砂多く含む
4. 7.5Y 7/3 浅黄 細砂 細礫を少量含む 5Y 8/3 浅黄極細粒シルトブロック（径1cm）を少量含む
5. 10YR 7/6 明黄褐 細砂 極細砂少量 （3～5層砂ベース）
6. 7.5Y 7/2 灰白 極細粒シルト～粘土 全体Feで赤みがかかる 土粒緻密
7. 10Y 6/1 灰 粗粒シルト 極細砂を多く含む 細礫微量 灰白色のラミナあり（0.3mm幅）
8. 7.5YR 7/1 明褐灰 極粗砂 細～中礫を多量に含む 中～極細砂を多く含む
9. 10YR 7/1 灰白 細粒シルト 細～極細砂多く含む 粘性あり 土粒構造密
10. 5Y 7/1 灰白 極細砂 細砂～中砂多く含む 中粒シルトを含み、土粒が小さい固まりを成す部分あり 細礫を少量含む
11. 10YR 5/1 褐灰 極礫 中礫を含む部分あり Feもある
12. 5YR 6/1 褐灰 細粒シルト 粗砂が2～3mmの単位で水平に入る互層 細礫を多く含む 5Y 7/1 灰白 径8～10cmの地山ブロックを多く含む
13. 5YR 6/1 褐灰 極細粒シルト 極細砂が少量入る 土粒構造密 径2～3mmの斑Feあり
14. 7.5YR 7/1 明褐灰 細粒シルト 灰白シルト（地山）が全体に入る混濁層 細砂微量
15. 2.5YR 6/1 赤灰 極細粒シルト 極細砂が全体に混ざる点で13と異なる
16. 7.5Y 7/2 灰白 細砂ベース 極細粒～粗粒シルトを多く含む 細礫を少量含む
17. 10YR 7/1 灰白 細粒シルト 粗～極粗砂を多く含む 細礫微量 黄褐・灰白地山ブロックが1cm未満で少量入る 12と連続する可能性あり
18. 19に同じ 極細粒シルト 細砂～中砂少量 細礫微量
19. 10YR 7/1 明赤灰 極細粒シルト 細砂～中砂少量 細礫微量
20. 2.5YR 6/1 赤灰 極細粒シルト 極細砂少量と細礫少量を上位3～5cmの幅でのみ検出 ラミナ顕著 灰白シルトブロックを少量含む 下位は地山との層境が不明瞭な混濁層 赤灰シルトは上位幅8～10cmのみ 粘性あり 土粒構造密

図16 （その1）4溝 断面図

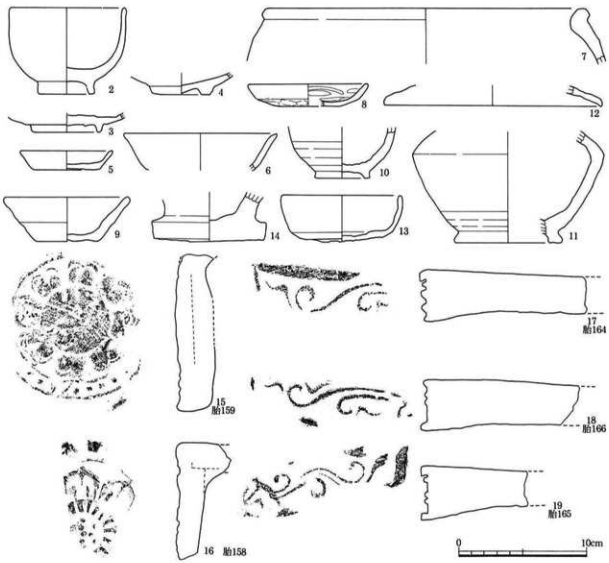
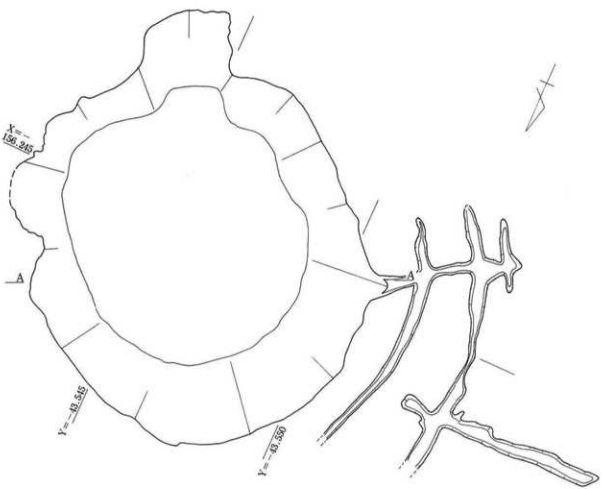
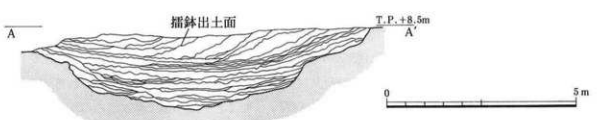


図17　（その1）2土坑　出土遺物

坪境である4溝が連続し、土坑の南側では一時期坪境の溝が取りついていた状況が認められた。また北側の状況については溝が取りつく可能性も認められるが、大和川による攪乱で状況は不明である。2土坑、並びに4溝については坪境の施設であると同時に、その形状から幹線水路などの水利施設として機能していた可能性が高い。調査範囲外の状況が不明ではあるが、坪境を利用して東西方向の配水を行っていたものと考えられる。土坑については溜井としての機能を有していた可能性が考えられる。調査時には当然4溝に達する水位が認められたわけではないが、少なくとも最下部で湧水がみられたことは事実であり、規模や形状からも溜井、あるいは水溜以外の機能を想定する事は困難である。ただし、南北坪境が旧国の摂津、河内両国境となる坪境であり、その両者にまたがるこれらの施設を一連のものとして認めることには課題は残される。国境に接する耕地における水利上の管理については考察の根拠を知らないが、2土坑や4溝を一連の水利施設とするならば、共通の水利管理システムに属していなければならないこととなる。なお土坑、溝には堰、あるいは杭列などの施設は認められなかった。2土坑の埋没は下半分がシルトを中心とする土壌で埋没しており、比較的沈滞した水溜かりの環境であったと考えられる。土坑出土遺物の多くもこのシルト層から出土しており、図化しえたものを図17に示した。近世から古墳時代までの遺物が出土している。2は18世紀の肥前系碗、3は染付碗である。4は16世紀末か





6土坑では調査中に土層断面の崩落が発生し、十分な埋没過程の検討を行うことができなかった。実測図に示したように、埋土は非常に細かい単位での分層が可能であるが、大きくは中央下層部分の水平堆積と、上層にみられる西から東への斜堆積に分けることができ、さらに土坑の壁に沿った斜堆積が部分的に認められる。中央の最下層部分は若干のブロックを含むシルトや砂の堆積がみられ、土坑内に溜まった水による水成堆積と考えられる。またこののち壁に沿った堆積がみられたのち、再び水平堆積がみられることから、土坑は若干その規模を減じながらも水に満かる環境にあったと考えられる。この水平堆積部分はシルトを中心としており、比較的よどんだ環境のなかで堆積したものと考えられる。またこれらの堆積は土坑を浅く、また径を縮小させながら進んでいくが、最終的には西から東方向へ傾斜する、ブロックを多く含む土の意なりによって埋没している。ブロック土の起源については確証はないが、この段階にいたって人為的に埋められた可能性が高いものと考える。遺物として図示した鏃妹は、層位的にはこのブロック土の堆積が一旦停止した段階に置かれたものと考えられ、さらに最終的には極細砂やシルトで土坑は完全に埋没している。この間の時間幅については考察の根拠に乏しく十分説明できるものではないが、第3層が大和川付け替え前の耕作土として認められるならば、それに覆われる6土坑の埋没も大和川付け替え前の耕地利用の一貫として把握できることとなる。

図18　（その1）6土坑　平・断面図

ら17世紀初頭の朝鮮王朝の粉青沙器皿である。見込みに３ヶ所砂目痕が残る。５は土師器皿である。底部が平坦で、斜め上方にのびる口縁部から、近世のものと考えられる。６は口禿白磁皿（Ⅸ－１Ｃ類）である。７は土師質羽釜、８は瓦器皿である。９は中世須恵器椀、10・11は平安時代の須恵器壺である。12は奈良時代の須恵器蓋、13は飛鳥時代の須恵器坏、14は古墳時代須恵器擂鉢底部である。

軒瓦は複弁蓮華文軒丸瓦と、唐草文軒平瓦がみられる。15の軒丸瓦は中房の径が大きい複弁八弁蓮華文である。16の軒丸瓦は弁の先の尖った複弁蓮華文（Ａ型式）であり、当遺跡出土の軒丸瓦では16のタイプと巴文軒丸瓦が一般的にみられる。軒平瓦はＢ３型式（19）・Ｂ４型式（18）・Ｂ５型式（17）がみられる。いずれも直線顎である。また写真図版26・27には本来下層に属する遺物がまきあげられたと考えられる初期須恵器２点（163・171）を示した。163は高坏形器台鉢部の破片で、凹線状の窪みの上から鋸歯紋を線刻したものである。171は土師器二重口縁壺を真似た須恵器の、壺口縁から頸部にかけての破片とおもわれる。頸部と口縁部の境に断面台形状の突帯が、その直上はナデによるものか２条の凹線状の窪みがめぐる。口縁端部は欠損しており、不明である。

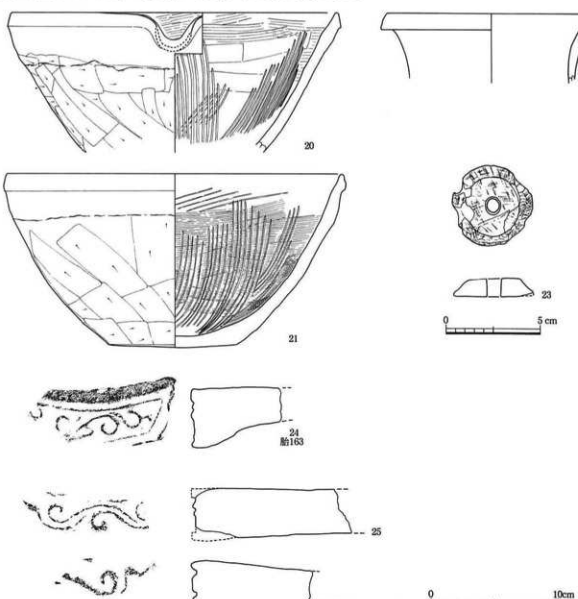


図19　（その１）６土坑　出土遺物

以上の遺物の様相と層位的な検討から、中世段階で下半の埋没が進み、その後、近世まで規模を減じながら存続したものと考えられる。人為的な埋め戻しは最終段階に行われるが、それまでは水に漬かる環境のなかでの自然埋没が進んだものと理解できる。

2土坑に取りつく東西坪境の溝を4溝と称するが、土坑の東側、西側とも幅約3.5mと同様の規模を示す。検出面からの深度も共に約1mを測る。断面の観察では両者とも最低2～3回の掘削と埋没を繰り返したことが確認できた（図16）。

坪境

当調査区は東西南北の坪境が交差する部分を含むが、この内東西坪境については4溝が相当し、交点に2土坑が位置する。また2土坑から北側の坪境の状況は溝である可能性が高いが詳細は不明である。2土坑から南側の南北坪境には溝が設置されているが、東西坪境である4溝と比較すると非常に小規模なものである。この溝は当初第4面に掘削されたものであるが、その後埋没と再掘削が繰り返されたようで、第4面ではやや複雑な溝の重なりとして検出された。また坪境部分を含んだ耕地の攪拌がみられた可能性が高く、第3面に至る間に、面としては追求できない作土の重なりの部分から切り込まれているものも認められ、第4面で検出した溝に関しても部分的に途切れる箇所は本来的なものであるというよりも削平の結果である可能性が高い。この南北坪境は既応の今池処理場内の調査では「難波大道」が位置する箇所として知られたものであるが、少なくとも第4面では想定される「難波大道」にかかわる側溝などはみられず、その中心部分に溝の切り合いが確認されたこととなり、坪境溝以上の評価は困難である。

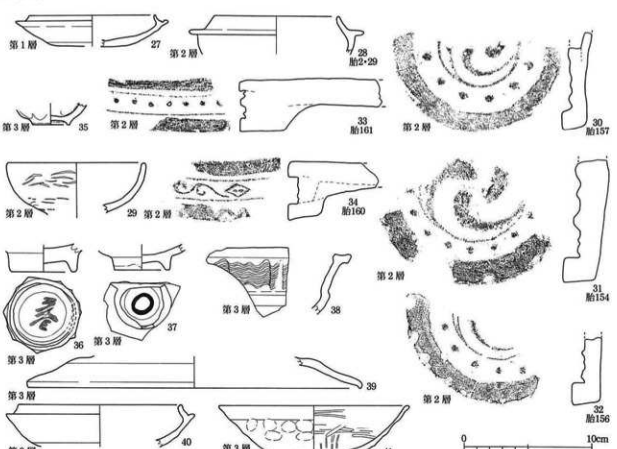


図20　（その1）第1～3層　出土遺物

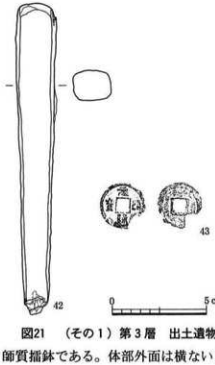


図21　（その１）第３層　出土遺物

６土坑（図18・19、写真図版７・19・28・29）

６土坑は２土坑、すなわち坪境交点の南西に位置する大型の土坑である。長径10m、短径8.5mの楕円形を呈し、南側に方形の張出し部分がみられる。また、西側には非常に小規模なものではあるが放射線状、あるいは同心円状に溝が連結する。深さは約２mを測り、断面形状はすり鉢状を呈している。第４面段階で掘削された水溜の土坑と考えるが、図18に記したように下半部が滞水性の水成堆積で埋没したのち上半部は人為的に埋め戻されたものと考えられる。調査中の土層断面の崩落などにより良好に検討を加えることができたわけではないが、第４面段階で水溜めとして掘削されたのち、第３面時には埋め戻され、平坦化していた可能性が高い。水溜の機能としては２土坑と共通するものが想定されるが、６土坑においては水路との接続は認められず、井戸として使用されたものと考えられる。内部からは中世・古墳時代の遺物が出土している。20・21は中世の土師質擂鉢である。体部外面は横ないし斜め方向のケズリ、内面はハケメ調整を施している。22は須恵器の甕である。

23は滑石製の紡錘車（紡輪）である。周縁は一部欠損しており、表面には成形時の研磨痕を留める。直径4.3㎝、厚さ1.0㎝、孔径0.7㎝、重さ23.1ｇを測る。

軒平瓦はＢ２型式（24）・Ｂ３型式（25）・Ｂ５型式（26）がみられる。24は曲線顎、25・26は直線顎である。

擂鉢（20・21）は上層のブロック土の層理面上に並んでおり、必ずしも人為的な埋納行為を示すものではないが、埋没の時期を知ることができる。また、須恵器の甕や滑石製紡輪は土坑掘削以前の遺物が埋没時に混入したものと考えられる。

第４面に帰属する遺構には他に小規模な鋤溝や第３面でみられたような素掘り井戸がみられる。畝溝は南北坪境の西側では東西方向のものが、東側では南北方向のものが顕著であり、第３面では畦畔などは残されていなかったが、耕作の方向、さらには条里坪内での地割りの方向を示唆している。

さらに本来第４面に帰属すると考えられる遺構に、瓦器椀埋納遺構である11土坑があげられるが、第５面検出時に調査しており、後述したい。

第３層出土遺物は図20－35～41、写真図版18・19に示した。35は13世紀龍泉窯系水注、36は13世紀代の中国白磁碗Ⅷ－３類で、高台内面に墨書が認められるが判読不可能である。また37は17世紀後半の波佐見窯系白磁碗で、高台内面にコバルト染付釉で円が描かれている。38は近代陶器と思われるもので、39は須恵器蓋、40は須恵器坏である。41は瓦器椀で、見込みには平行の暗文が施されている。古墳時代から近世のものを含んでおり、下層の捲き上げや作土中に混入した遺物と考えられる。従って時期的な根拠とは成りえないが、染め付けが含まれることから第３層の年代は大和川付け替えに近い段階の近世とすることができる。また、金属製品では馬鍬の歯（図21－42、写真図版29）や1086年に初鋳されたとされる北宋銭「元祐通宝」（図21－43、写真図版29）が出土しており、特に馬鍬の歯がみられた点については第３層が水田作土層と考えられることと符合する。

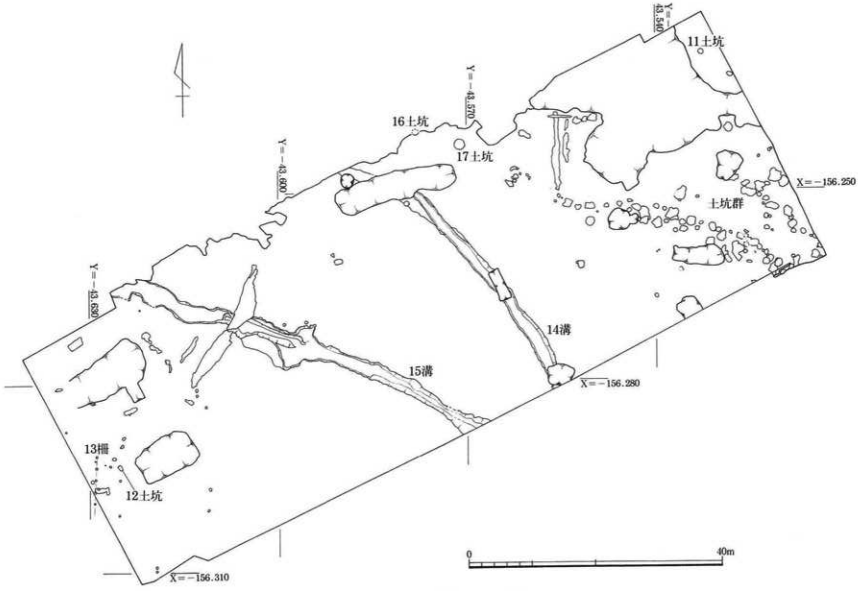


図22　（その１）第５面　平面図

第５面（図22、写真図版８・９）

第４面段階で既に第５面が露出していた調査区西寄りの部分と大和川に面した部分を除き、ほぼ全域で第４層を除去することにより第５面を検出した。第４層は遺物を多く含んでおり、第５面に対する遺物包含層ということになるが、耕作に伴う攪拌が行われた可能性が高く、下面に非常に顕著な踏み込み痕跡を残していた。これにより第４層の降下が著しく、第５面検出時にはその全てを除去していない。また、第５面のベースはほとんどの部分で黄褐色シルトであるが、部分的に第５層灰白色シルトが堆積した部分がみられた。したがって第５層を除去して現れた遺構については第６面の帰属と判断したが、それ以外の遺構については第５面に帰属するものとした。

第５面の地形はおおむね平坦で、詳細にみれば部分的な凹凸を拾うことが可能であるが、大きくは東方向から西方向への傾斜を示している。遺跡の立地としては現大和川による改変により、現地においても旧地形を知ることは困難であるが、地理学による検討からはおおむね大阪市内へ延びる上町台地の東斜面に立地するとして良いものとおもわれる。前述のように第４層が攪拌を伴う水田作土の可能性が高く、本来の地表面は削平を受けているものと考えられるが、検出した地形から判断するならば、必ずしも南西から北東への単純な傾斜を示すものではなく、西除川の段丘地形との関連も含めて台地上の微地形を呈しているものと思われる。標高は最も高い部分で8.4m、低い部分で8.0mを測る。

調査範囲内での遺構の分布には偏りが認められ、調査区のほぼ中央に位置する２条の溝（14・15溝）周辺は遺構分布は希薄である。また西寄りでは13掃周辺に散漫ながら遺構が分布し、調査区東寄りでは土坑を中心とした遺構がまとまって分布する。また調査区北端、２土坑による攪乱の北側では２基の土坑がみられるが、うち１基（11土坑）は本来第４面に帰属する可能性の高い遺構である。この部分では第４層が遺存しておらず、面的な調査は第５面調査時に実施したため第５面の遺構として報告する。

11土坑（図23・24、写真図版10・19）

２土坑および４溝の北東、すなわち坪境交点の北東部分に接して位置する土坑である。標高8.2m付近に位置するが、上部はいくらかの削平をうけていると思われる。土坑が位置する部分、すなわち坪境の交点から北東部分は特にその北寄りで第４面検出段階ですでに第５面が露出している状態であり、埋土などの条件からは帰属面の判別が困難であった。このためこの部分の遺構については最終的に第５面検出段階に一括して調査を実施した。結果的に中世の遺構であることが確実となったことから、本来は第４面段階に帰属する遺構であるが、第４層が失われてしまったことにより第５面で検出したものとした。層位関係の十分な検討は実施できなかったが、この付近に第４層がみられない原因については、その上層に当たる第３層が中世段階の水田作土である可能性があることから、第３層の攪拌による削平を受けた可能性がまずあげられる。あるいはこの部分と坪境交点の北西の一角については調査範囲内で検出した部分が極めて狭く、南側の坪との層位関係を十分確認することができなかった。したがってこの両坪については坪境を挟んでそれぞれ異なる層位関係があり、南側の坪と必ずしも対応していなかった可能性も考えられる。

11土坑の平面形態は直径80㎝程度の非常に整った円形を呈しているが、断面でみる壁面の形状は部分的にオーバーハングがみられるなど、整っているとはいいがたい。土坑の埋土は複数の単位に細分が可能なものではあるが、最上層の埋土においても地山ブロックを含んでいるなど、各層は類似する層相をみせており、掘削ののち比較的短期間で埋め戻された可能性が高い。

埋土中からは図示したように瓦器椀・皿を中心とする多くの土器が出土した。比較的遺存状態が良好

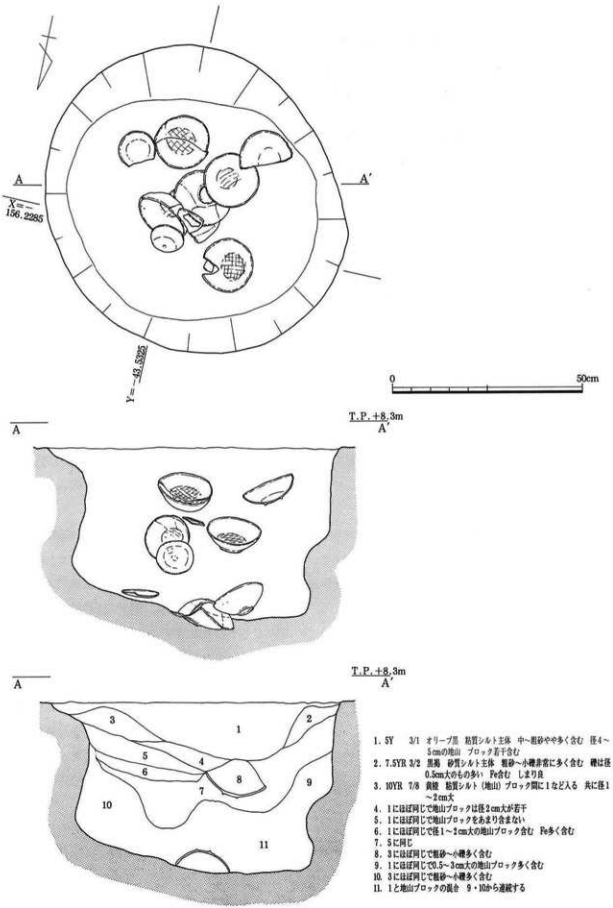


図23 （その1）11土坑 平・断面図、遺物出土状況

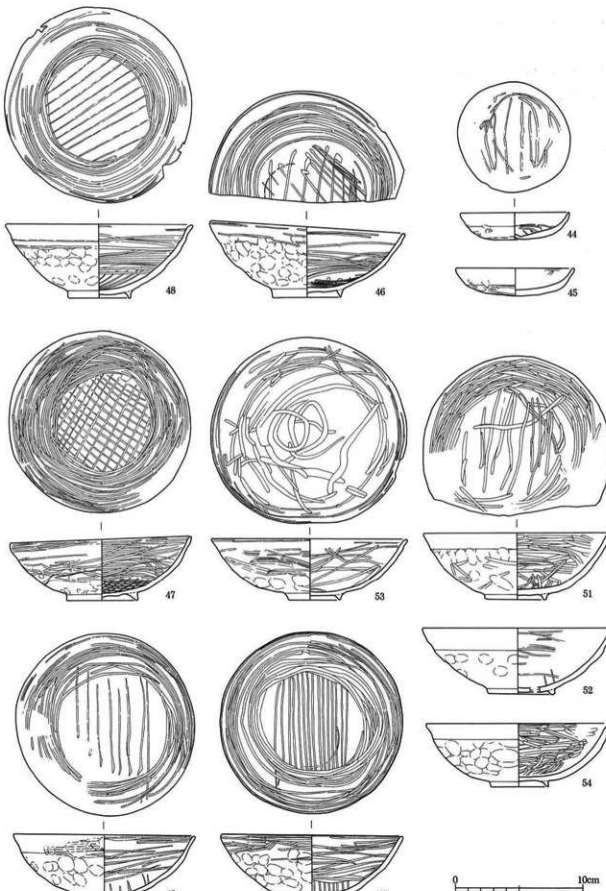


図24　（その1）11土坑　出土遺物

であり、図24に瓦器椀９個体、皿２個体を図示したが、破片の出土もみられ、全体の個体数はさらに多いものとなる。割合としては破損品が多いが完形品も含んでおり、単純な土器廃棄土坑ではないと考えられる。埋め戻しの状況も踏まえて人為的な埋納が考えられるが、口縁が打ち欠かれた等の特徴を持つものはみられない。

44、45は外面にわずかにミガキをとどめる。瓦器椀は見込みの暗文が、46は斜格子、47は格子、48～52は平行、53はラセン状、54は不特定方向に施されている。各瓦器椀は法量的にほぼ近い数字を示している点が特徴であり、和泉型のⅡ－2～Ⅲ－1期にあたるとおもわれる。

土坑の時期は出土した瓦器椀の特徴から12世紀中頃のものと考えられる。遺構の性格については、埋納行為を伴う埋め戻しが行われた可能性が高いこと以外に考察の根拠は少なく、その深さからは井戸とすることも困難と考える。調査時の見解としては、耕作域である可能性が高い条里地割りの中に位置することと、調査範囲内には建物などの集落遺構はみられない点から、耕地開発に伴う地鎮などの可能性も想定された。しかし97年度の調査において、同じ坪内が方形区画による集落あるいは寺院として利用されていた可能性が高いことから、集落にかかわる遺構である可能性が高い。

12土坑（図25・26、写真図版10）

12土坑は第５面検出遺構では西寄りに分布する遺構群に属するものである、周辺には類似する埋土を有する遺構が散見される。標高8.4m付近に位置する。

平面形は南東から北西方向に軸を持つ長方形を呈し、南側は10cm程度の深さであるのに対し、北側は

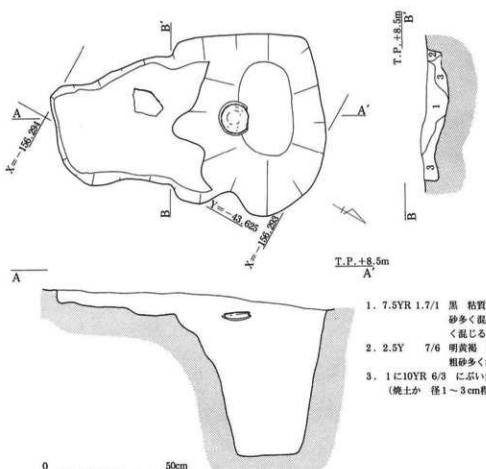


図25　（その１）12土坑　平・断面図

60㎝を越える深さを有している。埋土は黒褐色の粘質シルトで、この周辺に分布する遺構に特徴的なものである。12土坑においては地山ブロックの混入はそれほど顕著ではないが、黒褐色粘質シルトと地山ブロックの混合となる埋土を有するものもある。このことは遺構の検出面は地山とする黄色シルト層の上面であるが、本来地山に伴う土壌化層の上面、すなわち当時の地表面から遺構が掘削されたのち、その土を含んだ形で埋め戻されたことを良く示している。さらにこのような埋土を有する遺構の輪郭は第4層上面すなわち第4面では検出できないことから、当時の土壌化層は第4層の攪拌によって失われてしまった可能性が高い。

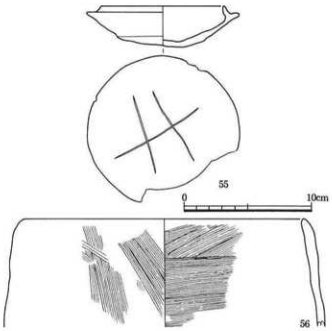


図26　（その1）12土坑　出土遺物

埋土中から出土した遺物のうち2点を図示した。図26－55は土坑北寄り上層部分からほぼ正位置で出土した須恵器の坏である。掘削時にはこの部分の十分な層位の確認はできず、意図的に置かれたものであるか、土坑に投棄された際、偶然正位置を保ったものであるかの判断はつけかねたが、掘削時の印象としては土器の上下で土の違いが意識されたことから、前者の可能性が高いものと考えられる。土器は口縁から受部の一部を欠くものの、口径10㎝を測り、短く内傾する立ち上がりなど、飛鳥Ⅱ型式段階の特徴を良く示している。底部外面にヘラ記号が認められる。また図26－56は土坑の南寄りで底に接して出土した土師器の破片である。口縁の一部分しか残されていないが、器形は移動式竈の部分であるとおもわれる。内面には煤の付着が認められ、胎土は生駒西麓産の特徴を呈している。この他には古墳時代のものと考えられる土師器の破片などが出土している。

土坑の時期は須恵器の年代から導かれるものと考えるが、上記の土器型式の年代から一応7世紀中頃としておきたい。また土坑の性格については不明である。

13柵（図27）

13柵は調査区の西端で検出されたもので、調査範囲からさらに南に延びる可能性の高い遺構である。当初、調査区西側溝において断面を確認したピットを1基認識していたが、第5面において範囲内では5基の柱穴を確認した。さらに柱間隔から存在が推定された箇所を掘り下げた結果、調査範囲外で1基を確認し、6基以上の柱穴からなる柵と考えられる。北から順に1から6の枝番号を付したが、13－1から北については検出面が削平を受けている可能性は高いものの、連続する柱穴は認められず、これを北端とすると判断した。また調査範囲から西側の状況は不明であるが、周辺の遺構の分布からは柱列は1条のみであり、掘立柱建物となる可能性は極めて低いと判断した。各柱穴は直径30㎝前後の円形を呈するものが多く、13－4、13－6についてはやや規模が大きい方形を呈している。検出面からの深さは北側が上面の削平により浅くなってはいるが、おおむね20㎝を越える程度のものとなっている。また底のレベルは様々で、必ずしもそろえたものではないようである。柱根の遺存はみられなかったが、明確に柱痕跡を残すものが多く、柱が抜きとられた痕跡は認められない。各柱間の距離は芯々で約1.8mを

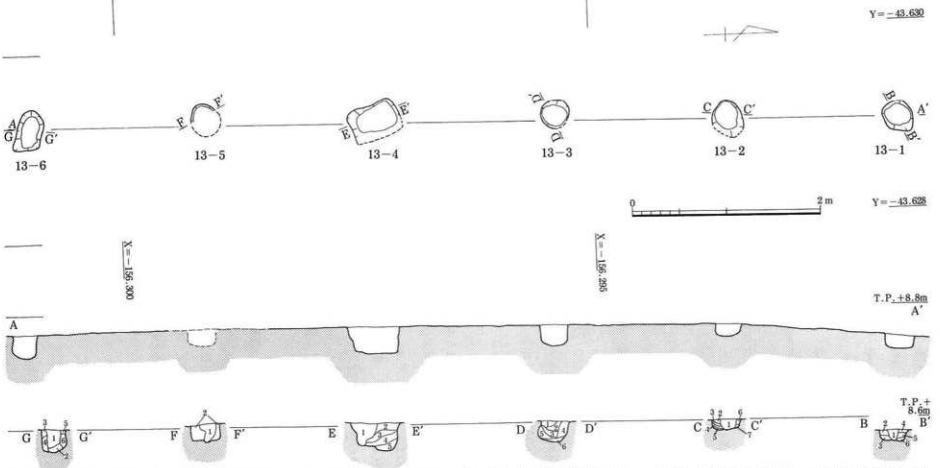


図27　（その1）13構　平・断面図

測り、軸の方位は座標北から東に1～2度ふれている。埋土からの遺物の出土は顕著ではなく、須恵器、土師器の細片が出土したにすぎないが、堀方埋土が地山ブロック間に土壌化層が入るという状況を示すことからは、地山に伴う土壌化層上面から掘削された可能性が高く、また南北方向を示すことから条里地割りに伴う遺構であると判断される。調査地における条里地割り施行の時期については重要な検討課題であるが、少なくとも中世以降には確実に存在し、既応の調査成果からは古代に遡る可能性も指摘されている。従って13棚の時期についてもこの時間幅のなかに納まることは確実と考えてよいとおもわれるが、12土坑との埋土の類似からは古代に遡る遺構である可能性は想定されるものの、各柱穴からは細片でありながらも時期の下る土師器片なども出土しており、中世の遺構である可能性がやや高いとしておきたい。ちなみに、第4面で検出した南北の条里坪境からの距離は90m弱であり、1町に満たないものである。また棚の機能については、棚から東側の部分が遺構の分布が希薄な空閑地として認められることから、この空閑地と棚以西の部分の境界と考えられる。ただし、棚以西の状況については調査範囲内においては遺構は全くみられず、調査範囲から西の状況については調査が行われておらず状況は不明であり、積極的に棚の意義を評価することは困難である。

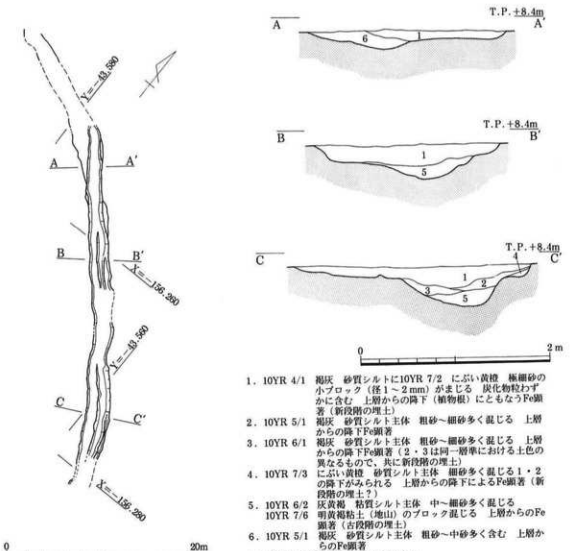


図28　（その1）14溝　平・断面図

14溝（図28、写真図版11）

調査範囲の中央やや東寄りの部分で南東から北西の方向へ流走する溝で、後述する15溝とは調査範囲の南で合流する可能性のある遺構である。南から北へ規模をやや減じているが、南側で幅約2.5m、深さ40cmを測り、北寄りでは幅約2.1m、深さ20cmを測る。中央付近から北寄りでは掘り直された可能性が高く、断面の検討でも一旦埋没したのち、幅を広げ、かつ浅く掘りなおしている状況が認められ、結果、完掘状況ではテラスを有する形状となった。このような状況からは自然の流路ではなく、当初より人工的に掘削された遺構であると考えられる。

遺物の出土はわずかであり、時期を限定することは困難である。ただ溝の方向は必ずしも地形に制約されたものではないと考えられるが、少なくとも同一の遺構面で検出された13溝のように、条里地割り

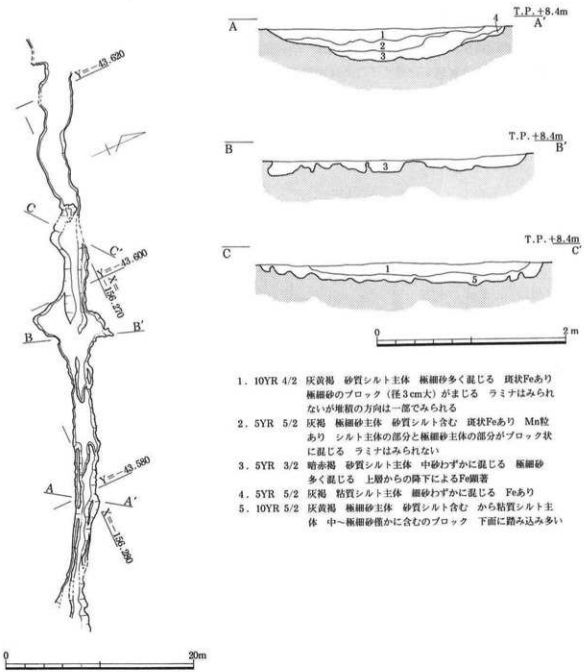


図29 （その1）15溝 平・断面図

あるいは南北地割りに規制されていない点は、地割りが施行前の遺構と考える根拠となる。さらに15溝と同時期の遺構であることは確実とおもわれる。

15溝（図29・39、写真図版11・29）

調査範囲の西寄りの部分に南東から北西の方向へ流走する溝で、先述した14溝と調査範囲の南外で交差あるいは合流する可能性がある。14溝と比較して、平面形あるいは内部の形状などが非常に不整形である点が特徴である。調査範囲では約60mを検出したが、中央部分でやや広がりを持ち、またこの部分では底の形状も細かな凹凸の集合といった形状をなしており、その東西での断面形状が溝状を呈している点とは対照的である。また方向的には直交する形で新しい溝に切られている状況が確認されたが、この両者が関連を有するものであるかは不明である。14溝では埋土の状況や平面的にも溝の掘り直しが想定されたが、15溝では断面の観察において再掘削の可能性が認められた。ただしこれも検出した部分の中央付近では明確でなく、実際に溝として機能する目的での再掘削に限定できない。

出土遺物としては図39－83に示した土師器あるいは弥生土器の平底の底部が最下層から1点出土している。底部中央がわずかに窪んでいる。調整は底部外面に僅かに縦方向のハケメが残るが、磨滅が著し

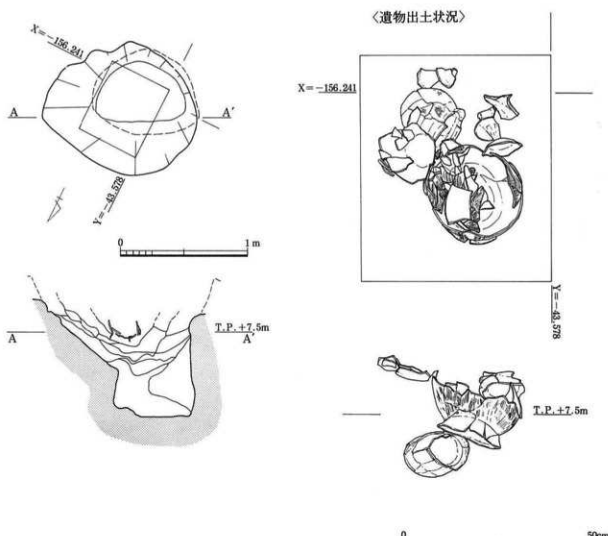


図30　（その1）16土坑　平・断面図　遺物出土状況

く、詳細は不明である。ほかに写真のみの掲載であるが、石皿（174）が出土している。直径23.1㎝、厚さ7.3㎝の砂岩礫約半分が欠損したものである。周縁および裏面は剝がれたような痕跡があるが、一部、打ち欠いている可能性がある。表面全体に磨った形跡があり、浅く擦り鉢状に窪む。時期を限定するに至っていない。

16土坑（図30・31、写真図版12・20・29）

16土坑および17土坑の２基は調査区の大和川に近い場所に位置しており、調査時は比較的早い段階から認識できていた遺構である。特に、16土坑は大和川の護岸にかかわると考えられる近代以降の攪乱によって北半分の上部が削平を受けており、この点においては必ずしも遺存状況が良好とは言えないが、遺構そのものが比較的深いものであったため、攪乱から免れた部分も多い。（図30に示した断面図では断面として確認できた部分については実線で示しているが、それより上方の削平を受けた部分については一部を点線で示すにとどめている。実際の遺構の深さを厳密には示していない。）２基の土坑は検出

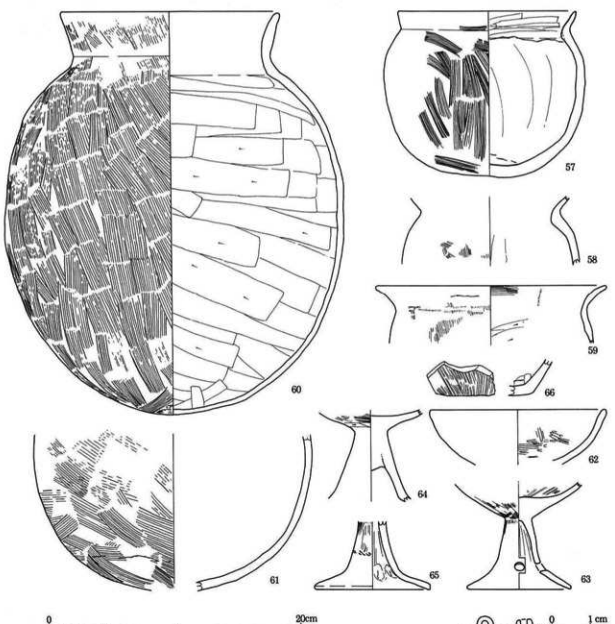


図31　（その１）16土坑　出土遺物

地点が近いことと、検出時の埋土の状況が酷似していたため、関連ある遺構のまとまりとして調査を進めた。しかし第5面全体でみると、若干の空閑地を挟んでいるものの、後述する土坑群の列状配置の延長線上に位置している可能性もある。

上述のように検出時に既に部分的な削平を受けていたが、遺存部分から推測すると径約1.2m程度の円形もしくは楕円形を呈していたと考えられ、検出面からの深さは最大で1.2mを測る。断面形状は上半分がすり鉢状を呈しているが、下半部は垂直あるいはオーバーハングがみられる形状となっており、底は平坦である。

埋土の状況から検討すると、土坑は一旦掘削されたのち、地山ブロックを含む黒褐色シルトで下半部が埋没している。さらにすり鉢状の上部では粒度の細かい黒褐色シルトの斜堆積がみられ、さらに後述する土器埋納部分は粗いシルトで埋められている。土器は埋土の中央上半部を中心に多く出土したが、この内土坑中央部分で土師器甕（図31－59）が口縁を下にした状態で出土した。検出段階では土器の下半部、すなわち検出状態では上部が破損し、土器内部に落ち込んでいたが、本来は完形品であった可能性がある。またこの周囲から土師器甕、高坏などの破片もまとまって出土した。この土器の出土状況は倒立した土器の周辺部分が異なる土であることや土器が集中することから判断して、人為的な埋納かあるいは一括の投棄が想定される。土坑埋土全体にみられる黒褐色のシルトは炭化物、あるいは灰などの土壌化したものである可能性が高く、炭化物粒も多く含まれている。この点を踏まえるならば、土坑は掘削後それほどの時間を経ることなく、周辺で火を用いた行為が行われ、これにかかわる炭や灰を含んだ土で埋め戻された事が想定される。そしてその行為に使用されたものかどうかは判断できないが、土器の埋納、あるいは投棄が行われたものと考えられる。このように考えると土坑の掘削が何らかの行為の前提として行われた状況が想定されるが、最下層が掘削時には湧水層に達していた可能性もあり、井戸として把握することも可能ではある。しかし井戸とした場合、前提となる住居などの集落遺構が近接してみられないという点は否定的な条件となる。

出土遺物は上述の土師器甕のほか、甕、鉢、壺、高坏、製塩土器などが出土している。57は鉢、58は壺？の頸部、59～61は甕とおもわれる器形のものである。59の甕は、体部は丸く、やや長胴化の傾向がうかがえる。また62～65は高坏で、坏部はなだらかに内湾して上方に口縁部がのび、脚柱部から裾部にかけての屈曲がゆるやかである。66は韓式系の土師器の可能性の高いもので、器形は平底鉢と考えられる。これら土器の時期は、布留式土器の新しい時期のものと考えられる。

また埋土の掘削中には確認できなかったが、埋土を水洗した結果、滑石製の臼玉1点を検出した（図31－67）。径4㎜、厚さ3㎜を測るもので、表面は円滑に仕上げられている。16土坑から検出した玉は1点であるが、埋土の全てを水洗していないため、17土坑のように本来複数の玉が含まれていた可能性もある。

17土坑（図32～34、写真図版13・21・22・27・29）

16土坑の東、約6mの距離を置いて位置する土坑である。やはり調査の比較的はやい段階で認識した遺構であるが、16土坑ほどの攪乱や削平は受けていない。平面形は長径1.8m、短径1.5mを測る楕円形を呈し、検出面からの深さは1.6mを測る。断面形状は上部約40㎝程度までがすり鉢状を呈し、それ以下は急斜面となり、底に近いところではやはりオーバーハングがみられる。このオーバーハングについては当初この形状で掘削されたのではなく、掘削後の湧水あるいは崩落の結果形成されたものと考えられる。

埋土の状況は16土坑とは若干異なり、最下層はブロックを含まないシルト層で、炭化物などを若干含むものの水成堆積の可能性を有している。その上部は黒褐色シルトや地山シルトで埋められており、16土坑と類似の傾向を示す。後述する土器の多くは最下層のシルト層の上に乗るような形でブロック土によって埋められている。土坑の中位以上ではやはり黒褐色シルトの斜堆積などがみられる点も16土坑に類似するが、その後上部90cm付近までは一旦埋没したのち再掘削が行われたようで、この部分は細かい地山ブロックを含むシルトで再び埋められている。

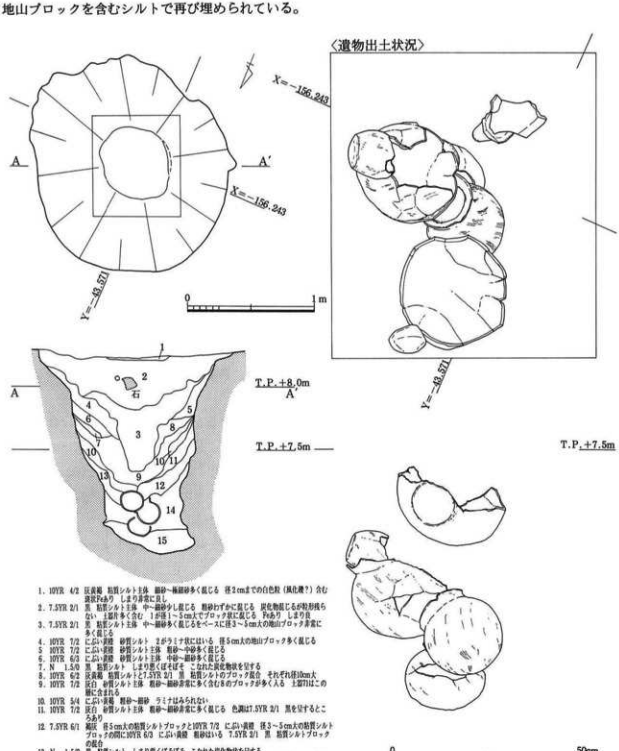


図32 （その1）17土坑 平・断面図 遺物出土状況

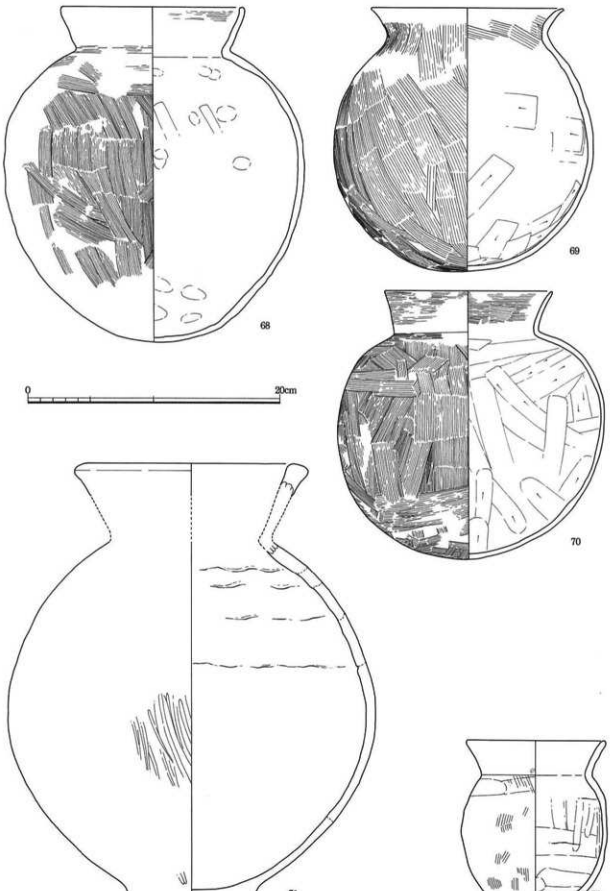


図33　（その1）17土坑　出土遺物（1）

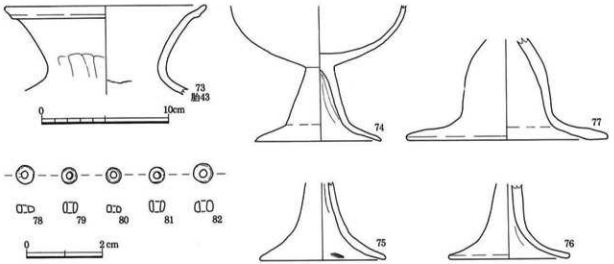


図34　（その１）17土坑　出土遺物（２）

土坑内出土の土器は土師器甕・壺・高坏を中心とするものであるが、比較的破損のみられるものが多く、出土状況からも埋納というよりは投棄に近い形がみうけられる。最下層のシルト層の上面に土器が乗っていることから、シルト層堆積後、おそらくは土坑の埋め戻しに際して土器を投棄したものと考えられる。埋土に特徴的な黒褐色シルトはやはり炭化物や灰の土壌化したものと考えられ、さらに焼土塊、炭化物粒も多く出土することから埋め戻しに際しては何らかの焼成行為によって生じた炭・灰を掘削時に生じた地山ブロックと共に埋め戻していることが考えられる。従って掘削から埋没までの時間幅を大きく見積もることは適当ではないと考える。井戸としての機能を全く否定することはできないが、16土坑と同様、集落での一般的な井戸ではないと考えられる。一概に祭祀行為とするにはあまりに漠然とした根拠しかないが、土器と火を用いた行為に係わる井戸と認識することが適当と考えられる。

内部からは土師器の甕、壺、平底鉢、高坏、須恵器甕、滑石製臼玉などが出土している。68は布留式の甕で、口縁端部内面の肥厚はほとんどみられない。69は甕で、口縁部が外反する器形である。内面調整は口縁部が横方向のハケメ、体部がケズリである。70は頸の短い壺であろうか。71は平底を有し、短く直線的に少し外反してのびる口縁部をもつ壺である。口縁部は断片的な資料からの復元であるが、体部内面上半には顕著な接合痕を残し、外面には部分的な残存であるが、縦方向のミガキが認められる。胎土の特徴からも搬入土器である可能性が高いとおもわれるが、管見では関東地方にに類例があるようである。72は平底に外反して開く口縁部を持つ鉢である。韓式系土器と考えられる。73は初期須恵器の甕口縁部で、他にも内面を擦り消した体部の破片が多く出土しており、その観察からは複数個体の存在が想定される。74～77は土師器高坏であり、他に製塩土器なども出土している。写真図版に示した168～170はいずれも初期須恵器と考えられる破片である。168は無蓋高坏坏部である。坏部が境形を呈しており、形態が土師器的である。外面は口縁寄りまで回転ヘラケズリ、内面は不特定方向のナデである。169は甑の可能性のある把手である。外面に一部格子タタキ、内面に青海波の当て具痕を残す。170は甕破片である。口縁端部は薄く、丸くおさめる。口縁端部寄りに突帯が１条巡り、突帯の直上は回転ナデの具合で沈線２条のようにみえる。頸部破片とは同一個体と思われる。

また、16土坑同様埋土の水洗を実施した結果、滑石製の臼玉を５点（78～82）検出した。厚み及び直径には若干のばらつきがみられるが、ほぼ同種のものとしてよい。重さは0.12～0.21ｇである。上下面に研磨痕が残り、78は孔の周辺に赤色顔料の付着が認められる。土坑内での出土層位を限定できないが、

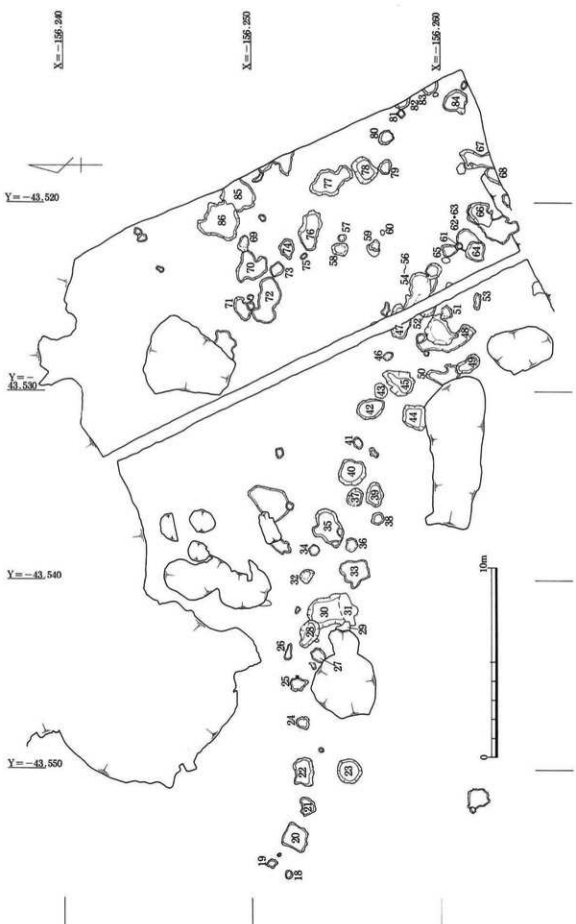


図35　（その1）第5面　土坑群（18~86土坑）全体図

土器とともに土坑内に投棄された可能性が高い。

16・17土坑は形態や埋土の様相が類似するのみならず、遺物の傾向も共通しており、同一個体の土器片が両土坑から出土している可能性も指摘できることから、同時性の強い遺構であると考えられる。

土坑群（図35）

第5面の調査区東寄りで検出した土坑群で、列状にまとまった配置を示すことから相互に関連を有する土坑群として認識する。個々の遺構名としては18土坑から86土坑までの遺構番号を付したが、土坑の群としての認識はおもに分布を根拠とした主観によるものである。また土坑群周辺は現代の攪乱による影響が著しく、これによって消失した遺構も若干は存在したものとおもわれる。

各土坑の配置は一見不規則であるが、全体的にみるならば大きく2つのまとまりを読み取ることができる。ひとつは18・19土坑を西端とし、67・68土坑に至る列状の配置を示すもので、もう一つは配置の規則性は不鮮明であるが、71・72土坑から83・84土坑に至るまとまりである。前者は検出長さ約40mを測り、後者は約17mを測る。いずれも調査区の南東方向へさらに延びる可能性があるが、該当する部分は未調査範囲となっており、状況は不明である。なお先述した16土坑、17土坑については規模および埋土の様相からはここに挙げる土坑群とは異なる性格を想定すべき遺構であると考えるが、土坑群の列状配置の延長線上に位置している状況を読み取ることも可能ではある。この場合、18土坑から17土坑までの間、約18mの部分にみられる不定形なピット等に関連をもたす必要が生じるが、現時点では積極的に評価するものではない。

各土坑はおおむね土坑列の方向に軸を持つものが主体となるが、若干方向を違えるものも存在する。西側の土坑群（土坑列）においては、各土坑は切り合い関係を持つものが少なく、掘削に際しては周囲の土坑の存在が比較的明瞭に認識できていたものと考えられるが、土坑の間隔は東寄りでやや密集するようである。また両土坑群を通じて、平面形態が極端に不整形なものを含んでいることも特徴的である。また断面形状に極端なオーバーハングがみられるものも少なからず存在する。これらの土坑については図36以降の平面図の図示において、上面からみて隠れる部分の線表現に点線を用いた。また断面の確認のためなどの目的で、掘削が先行し、平面形状を正確に記録できなかった場合には、推定線を一点破線で表現することとした。

以下、遺構番号を付した各土坑について列記していく。

18土坑（図35）

19土坑と共に土坑群の西端に位置する。平面形は楕円形を呈し、土坑群のなかでは小規模なものである。遺物の出土はみられなかった。

19土坑（図35・39）

18土坑と共に土坑群の西端に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、土坑群のなかでは小規模なものである。出土遺物には土師器高坏などがみられるが、図39－84に土師器口縁を示した。器形は須恵器の甕を模した土器とおもわれる。表面の残りは悪いが、口縁の一部に横方向のナデが認められる。

20土坑（図36）

18、19土坑の東に位置する比較的大型の土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸長約1.4m、短軸長約1.2mを測る。東西方向の短軸は18土坑と21土坑を結ぶ線に平行になることが指摘できることから、位置、方向とも両土坑との規則的な関係のなかで規定された可能性がある。一方、壁および底の形状はいずれも不整形であり、対照的である。埋土の層位は大きくは上下に2分されるが、下半は主に

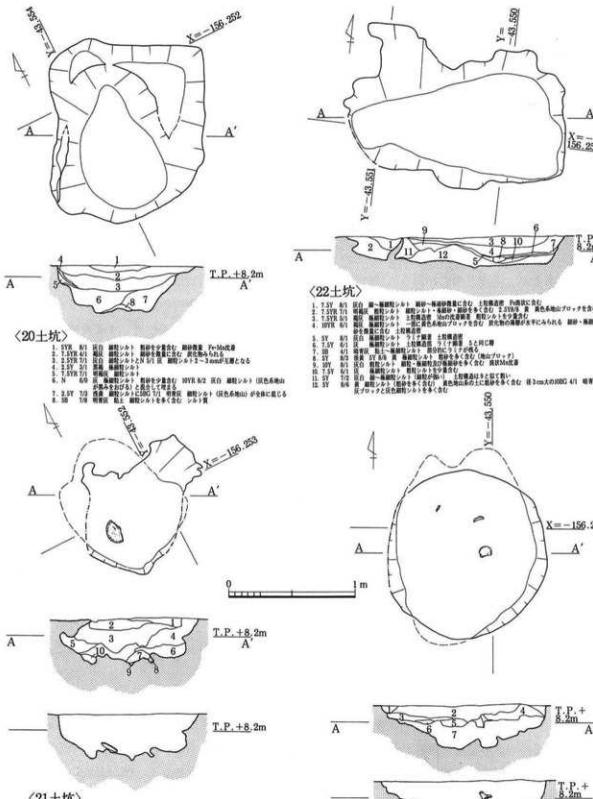


図36　（その1）20～23土坑　平・断面図、遺物出土状況

地山ブロックを含むシルトで埋まり、上半は灰白色のシルトで密に埋まっている。下半が掘削に近い時期の人為的な埋め戻しによるもので、上半はその後の水成堆積の可能性がある。出土遺物には土師器甕や高坏の破片がみられる。

21土坑（図36・39、写真図版14・22）

20土坑の東に位置する中型の土坑である。先述のようにこの位置は18土坑と20土坑との関係で規定されている可能性がある。ほぼ東西、南北に軸を置く土坑と考えられ、底部付近の平面形状は比較的整っているといえるが、検出面での平面形状は著しくいびつである。また断面形状も整ったものとはいいがたく、特に北側ではオーバーハングが顕著である。埋土は最下層に非常に細かいシルトの堆積がみられ、その上に地山ブロックを顕著に含む層がみられる。底には生痕と思われる小規模な窪みがみられた。最下層のシルトを水成堆積とするならば、その堆積後、地山のブロックを含む土で人為的に埋め戻された可能性がある。遺物としては底付近から円盤状の土器（図39－87）が１点のみ出土した。器形そのものは不明であるが、上面とおもわれる周縁に二重口縁状の粘土帯が剝がれた痕跡と、中央部に外径約９㎝、内径約６㎝の管状の粘土が剝がれた痕跡を留める。下面とおもわれる面の中央には直径約５㎝の、脚接合部から剝がれたような痕跡がみられる。いずれの剝落痕跡にも粘土の接着を良くするための刻み目が認められる。一見、埴輪のようでもあるがどのような器形になるものか不明である。時期も不明であるが、胎土は古墳時代土師器のものに類似している。

22土坑（図36）

21土坑の東に位置し、ほぼ土坑列方向に軸を持つ比較的大型の土坑である。またその軸方向は21土坑と同じものである可能性がある。平面形状は基本的に長軸が約1.8m、短軸が１m程度の方形を示すものであるが、北西部分に突出部がみられ、全体的にはいびつな形状を示している。底部形状も基本的には平坦であるが、一部で衝立状の地山の高まりがみられるが、単一の土坑と考えられる。埋土の状況は下半部が地山のブロックを多く含む土で埋められており、その上部に薄くシルトが堆積し、さらに地山ブロックを一部に含むシルトで埋没している。シルトの薄層以上が水成堆積の可能性があり、掘削後の人為的埋め戻しとその後の自然埋没が推定される。最上層のシルト層においても地山ブロックが含まれる状況は、土坑単独で考えた場合は掘削から埋没までの期間が、掘削時に発生したブロック土の分解・土壌化に至らないまでのものであることを示すものと考えられるが、周辺で同様の土坑が掘削されている環境のなかでは必ずしもその土坑の掘削時にのみ発生したブロック土には限定できないこととなる。出土遺物には土師器甕の体部片などがみられるが、細片である。

23土坑（図36・39、写真図版22）

22土坑のほぼ南に位置する比較的大型の土坑である。位置は22土坑との関係で規定された可能性がある。検出面での平面形は東西南北とも径1.3mを測る円形であったが、北壁、及び南壁に若干のオーバーハングがみられ、それらを含めると南北方向に長軸を持つ楕円形の形状となる。壁から底にかけての形状はやや凹凸を持つものとなっている。埋土は壁にみられるオーバーハングのピーク部分から下半が地山ブロックを顕著に含む土であり、その上部に細かいシルトが密に堆積している。基本的には下半が人為的な埋め戻しによるもので、上半がその後の自然埋没と考えられる。23土坑に限らず土坑群にはオーバーハングを持つものが少なからずみられ、またそれが埋土の状況とも密接に係わっているものも含まれる。この状況の理解については後述することとしたい。出土遺物としては出土状況を示した土師器高坏（図39－85）を挙げることができる。脚部のみが出土したが、埋土下半の地山ブロック混じり土の上

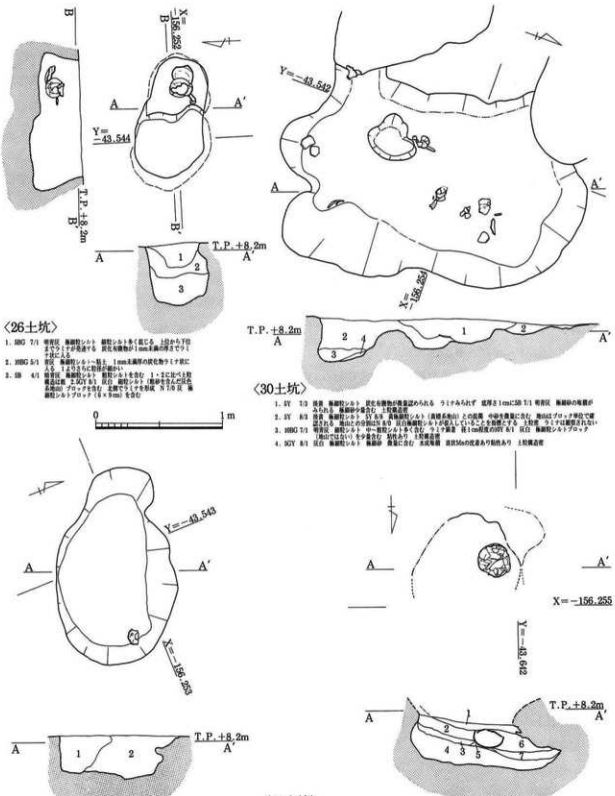


図37　（その１）26・28・30・31土坑　平・断面図、遺物出土状況

に乗るような状況で上層シルトに埋没している。上記の埋没過程を前提にすると、一旦ブロック土を用いた埋め戻しが行われたのち、高坏脚部を正位置を意識して置いた状況を想定することができる。またこれ以外にも地山ブロック混じり土中にみられる土器片もあり、下半の埋め戻しに際して土器がいれられたと考えられる。出土土器はいずれも土師器である。85の高坏はゆるやかに屈曲して開く裾の端部がわずかに内傾し、脚柱部内面には絞り目を残す。布留式土器の新しい段階のものとおもわれる。他には土師器高坏や壺などの破片が出土している。

24土坑（図35）

22土坑と25土坑の中間に位置する土坑で、南北方向に軸を持つ不整形を呈する。比較的小型の類型に属する。遺物の出土はなかった。

25土坑（図35）

24土坑と26土坑のほぼ中間に位置する土坑で、南北方向に軸を持つ不整形を呈する。比較的小型の類型に属する。遺物の出土はなかった。なお25土坑の南は上層の遺構である土坑によって大きく攪乱をを受けている。23土坑及び29土坑を結ぶ線上に位置する事もあり、本来この部分に土坑が存在した可能性を指摘しておきたい。

26土坑（図37・39、写真図版22）

25土坑の東、27土坑の北に位置する土坑である。東西方向に軸を持つ長楕円形の平面形を呈し、東西96㎝、南北55㎝の規模を有する。断面形状はゆるやかなオーバーハングを持ち、底はほぼ平坦で西側が一段深くなる。埋土は下半が大型の地山ブロックを含む土で、その上部にラミナのみられるシルト層が堆積している。シルト層には炭化物や有機物がラミナ状にみられる部分もあり、水成堆積によるものと考えられる。土坑下半がブロック土で埋められたのち、細かなシルトで全体が埋没したものとおもわれる。遺物としては図示したように、下半のブロック土に乗る状況で土師器直口壺（図39－86）と甕底部が出土した。23土坑同様ブロック土による埋め戻し時に土坑内にいれられたものと考えられるが、土器の出土状況からは正位置を意識した状況を看取する事ができ、土坑の埋め戻し時の意図的な据え置きが想定される。86はやや偏平な球胴状の外面にハケメ調整を施し、内面には指頭圧痕をとどめる。布留式土器の新しい段階のものであろうか。ほかには土師器の細片が出土しているにとどまる。

27土坑（図35・39）

26土坑の南に位置し、一部が上層の土坑により切られている。26土坑との関係で、位置が規定された可能性がある。北東から南西方向に軸を持つ楕円形の平面形状を呈し、残存部分では長さ60㎝、幅45㎝を測る。深さは15㎝程度の浅い土坑で、内部から土師器片が出土した。図39－88に示した土師器直口壺は26土坑出土の86と類似した器形であろうと推察される。時期に関しても86と同じく、布留式土器の新しい段階のものかと考えられる。

28土坑（図37）

27土坑の東に位置し、長軸を土坑列の方向に同じくする土坑である。平面形は長楕円形を呈し、長軸長1.6m、幅1.0mを測る。深さは約30㎝であるが、断面形状はやや凹凸を持つものである。埋土は大きく上下２層に分けられるが、北寄りに地山ブロックを多く含む土がみられ、その上に乗るように南側には同様に地山ブロックを含むもののやや粗いシルトがみられ、いずれの埋土も土坑の底面に接している。埋土から判断するかぎりでは掘削後に土坑上部まで順次埋め戻された状況が想定される。また底に接して土師器の破片が出土している。

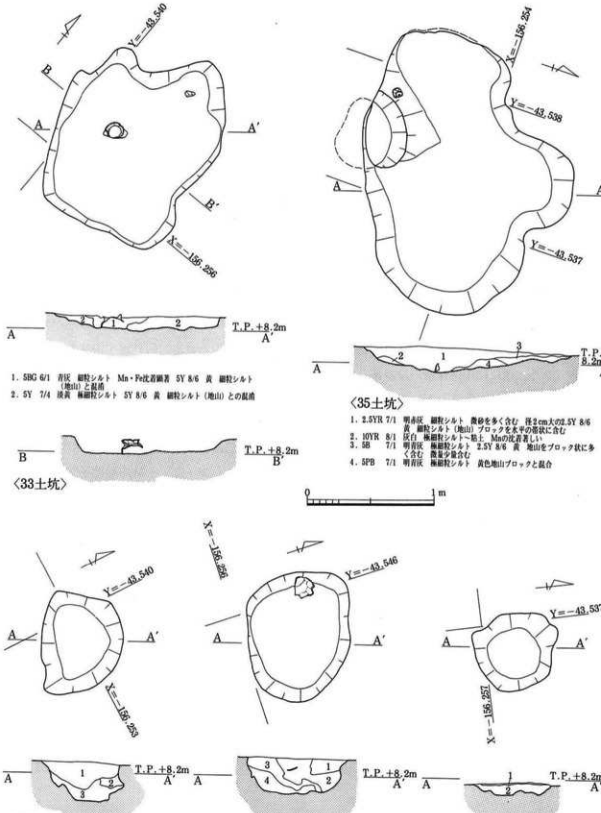


図38　（その1）32・33・35・37・38土坑　平・断面図、遺物出土状況

29土坑（図35）

28土坑の南に位置し、上層の土坑によって西側の一部が切られている。平面形状は長さ約80㎝、幅約70㎝の三角形を呈する形で遺存している。深さは24㎝を測るが、断面形状はオーバーハングがみられる壁を有している。埋土には最下層に地山ブロックを含む土がみられ、その上部には水成堆積と考えられるシルトがみられる。土坑内からは土師器高坏の坏部の破片などが出土している。

30土坑（図37・39）

28土坑、29土坑の東に、両土坑に切られる関係で位置する大型の土坑である。南側で31土坑と切り合う可能性があるが、明確に確認することはできなかった。平面形は南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、長さ2.4m、幅1.5mを測る。北側が浅く南に深い断面形状を呈しており、底部南寄りに径30㎝規模の落ち込みがみられる。埋土には最下層に若干の水成堆積と考えられるシルト層がみられ、その上部には非常に混合が進行した地山とシルトの混濁層がみられる。さらにその上部にシルト層が堆積するが、ラミナはみられないものの水成堆積の可能性がある。底に接する状況で土師器片が比較的多く出土した。そのうち高坏と平底の底部を図39－89～91に示した。89は坏部に段を有し、90は脚部の裾へむけての屈曲が緩やかである。2点ともに布留式土器の新しい段階のものか。91の平底は表面の残存状態が悪く詳細は不明であるが、おそらく外面にタタキが施されていたものとおもわれる。時期は庄内式と考えられるが不明である。他には土師器壺の口縁部と考えられる破片が出土しているほか、瓦器椀がみられたが、上層からの踏み込みに含まれていた遺物を誤認したものであろう。

31土坑（図37・39、写真図版14）

30土坑の南に接する土坑で、本来切り合い関係があるものと思われるが、調査段階では31土坑の平面形態を良好に認識することができず、両者の関係は不明となってしまった。土坑の形態を記録できた部分はごく一部であるが、調査時の印象では整ったものとはいいがたく、不整形を呈していたものと思われる。断面形状は西側から南側の壁面においてオーバーハングが著しいものであるが、底面は比較的平滑である。埋土は、土坑の底から後述する土師器甕の底が置かれる部分までが地山のブロックを多く含む土で埋められ、その上部にラミナの顕著なシルトが堆積している。また断面図でも明らかなように、ブロック混じりの土とラミナのみられるシルトの境が壁面のオーバーハングのピークとなっている。ラミナのみられるシルトを水成堆積とするならば、土坑は掘削後一旦埋め戻されたのち水に漬かる環境にあったことになる。遺物としては出土状況を示した土師器甕（図39－93）などが挙げられるが、出土状況から判断すると、これは土坑が地山ブロックを多く含む土で埋められた後、正位置でおかれた可能性の高いものといえる。図39－92は土師器甕で、口縁端部内面の肥厚がほとんどみられず、端面が平坦で内傾する。93は球胴状の甕体部である。外面にはハケメ調整がみられる。また94は挿入式の把手部分と考えられるが、詳細は不明である。上面には2本の平行する沈線が刻まれている。ほかには土師器甕、高坏、壺の破片が出土しており、いずれも布留式土器の新しい段階のもので、須恵器を共伴する時期にみられる土師器とおもわれる。

32土坑（図38）

30土坑の東北に位置する土坑である。位置的には33土坑との関連が想起されるが、規模の点では大きく異なるものである。ややいびつな円形を呈し、長径80㎝、短径65㎝を測る比較的小型の土坑である。深さは30㎝を測るが、断面形状は凹凸が著しい。埋土は下半のシルト層に地山ブロックを顕著にふくみ、上部はラミナの顕著なシルトとなる。下半が人為的な埋め戻しによるもので、上半はその後の水成堆積

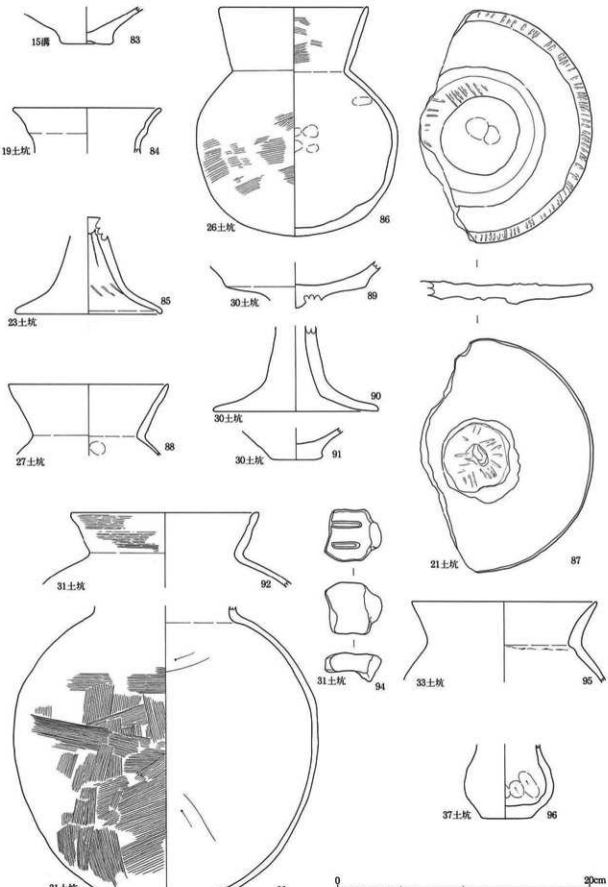


図39　（その１）第５面　遺構出土遺物（１）

によるものであると考えられる。遺物には土師器壺、甕などの体部破片がみられるが、いずれも細片である。

33土坑（図38・39、写真図版22）

32土坑の南に位置し、ほぼ南北方向に軸を持つ比較的大型の土坑である。規模の点では大きく異なるが、位置的には32土坑との関連が想起されるものである。基本的には方形を指向する平面形を呈するとおもわれるが、北側で不整形である。長さ約1.5m、幅1.2mを測り、深さは10cm程度と浅い。埋土は上下2層に分けられるが、いずれも地山起源と考えられるシルトを含んでおり、埋め戻しによるものとおもわれる。遺物としては出土状況を示した土師器甕口縁（図39－95）が、正位置を意識したとおもわれる状況で出土した。口縁部は外反し、端部で薄く丸くおさめる。残存状態が悪く、表面の調整は不明である。頸部内面に粘土接合痕をとどめる。時期は布留式土器の新しい段階のものかとおもわれる。ほかには土師器甕、壺などの破片がみられ、須恵器の坏蓋片も1点出土しているが土師器の時期よりは遅れるもので、上層からの踏み込みに含まれていた遺物を、遺構掘削時に誤認し、土坑出土遺物として取り上げた可能性が高い。

34土坑（図35）

32土坑の東に位置する土坑である。間に35土坑を挟むものの、規模の点や南北の位置関係からは36土坑との関連で位置が規定されている可能性がある。平面形状は一辺55cmの隅丸方形を呈し、深さは10cm未満と浅い。比較的小型の類に属する。埋土は単一で、こなれた地山ブロックを含む土で埋め戻されているようである。遺物は出土していない。

35土坑（図38）

34土坑、36土坑に挟まれる形で東に位置する大型の土坑である。平面形は長さ2.2m、幅1.2mの長楕円形を呈するが、北側に40cm程度突出する部分があるほか、南側には一段深くなり、地中で広がる部分がみられ、この部分の壁はオーバーハングをもつものとなる。断面形態は比較的整ったもので、深さは20cmを測り、なだらかな傾斜を持つ壁となっている。埋土は下層に若干の地山ブロックを含む層がみられ、その上部は水成堆積の可能性のあるシルトで埋没している。このシルト層においても地山起源と考えられる土がブロック状、あるいは帯状に含まれており、35土坑の掘削による発生土であるならば、土坑の掘削からそれほどの期間を経たものではないと考えられる。土坑からの出土遺物としては土師器の甕や、壺の頸部とみられる破片が出土している。

36土坑（図35）

34土坑の南に位置する土坑で、34土坑と同様に比較的小型の部類に属する。位置的にも34土坑との関連により規定された可能性がある。遺物には土師器の甕や壺と考えられる破片が出土しているが、いずれも細片である。

37土坑（図38・39）

35土坑の南東に39土坑と並ぶ形で位置する。長さ1.0m、幅80cmを測る円形を呈し、深さは28cmを測る。埋土は南から北へ順次埋められたように地山のブロックを含む土がみられ、北寄りの最上層にはラミナの顕著な細かいシルトが堆積している。土坑の中軸線北端に土師器甕の破片がみられたほか、図39－96に示した土師器かとおもわれる平底の壺体部を図示している。口縁部を欠損しており、体部内面には指によるナデの痕跡を留め、外面調整は不明である。他には土師器高坏の坏部と考えられる破片などが出土している。

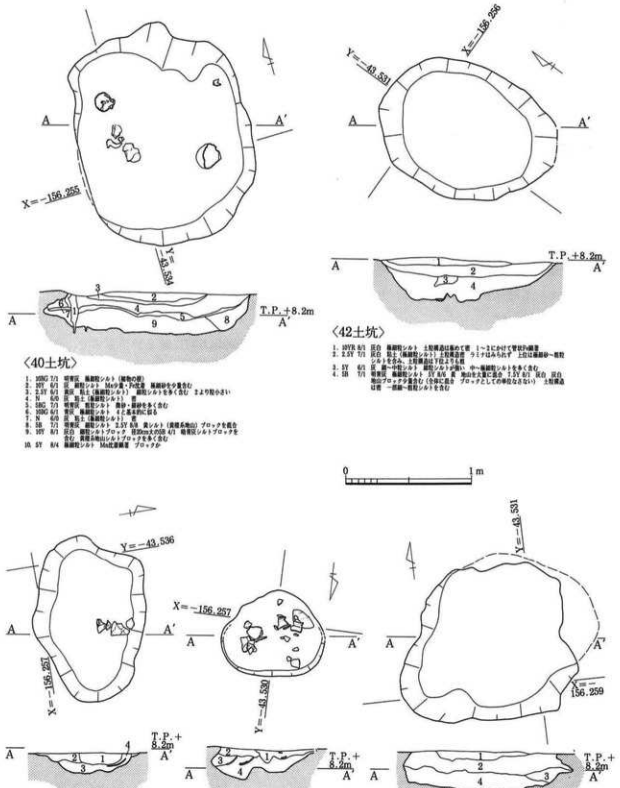


図40　（その1）39・40・42～44土坑　平・断面図

38土坑（図38）

39土坑の西に位置する小型の土坑である。直径60cmのいびつな円形を呈し、深さは10cm程度と浅い。埋土のほとんどは地山のブロックを含む土で満たされるが、最上層に薄くシルトの堆積がみられる。遺物には須恵器甕の体部片や中世土師器皿の破片などがみられたが、上層からの踏み込みに含まれていた遺物であると考えられ、本来遺構に含まれるものとしては、土師器の高坏か壺の破片などが出土しているにすぎない。

39土坑（図40）

37土坑の南に並列して位置する土坑である。両土坑は規模的にも近しいが、長軸の方向をほぼ同じくしており、両者は関連して位置する可能性が高い。平面形状は長さ1.3m、幅0.9mのいびつな隅丸方形を呈する。深さは16cmで、断面形状は比較的整っている。埋土は下半に地山のブロック土を含む土がみられ、一部は検出面にまで達している。その上層にはシルト層の堆積がみられ、いずれにも遺物を含んでいる。遺物は比較的多く出土しているが、図化しうるものはない。破片では土師器の高坏や小型丸底壺と考えられる細片が出土しているほか、上層からの遺物の混入が若干認められる。

40土坑（図40・52）

37土坑の東に接して位置する比較的大型の土坑である。ほぼ南北方向に軸を持つもので、長さ約1.7mを測り、幅は約1.5mを測る。東の壁に顕著なオーバーハングがみられるが、底は平坦である。埋土は基本的に下層が地山ブロックを多く含むシルト、上層がシルト層となるが、下層のブロック土は西側では土坑の肩から東側ではオーバーハングのピークにかけてみられる。この上部に堆積するシルトにはラミナはみられないが水成堆積の可能性が高い。遺物は比較的まとまって出土しており、出土状況を示した土師器甕や壺などが挙げられる。いずれも破損したものであり、特に据え置かれた状況はみうけられない。出土遺物のうち土師器壺３点を図示した（図52－119～121）。いずれも土器表面の遺存状態が不良であり、調整などは不明である。

41土坑（図35）

40土坑の東に位置する比較的小型の土坑である。遺物には土師器壺口縁部の細片が出土している。なお、41土坑の南に非常に小型の土坑が１基みられ、遺構番号は付していないが、配置からみて土坑群を構成する可能性があり、その際は41土坑との積極的な関係が想起される。

42土坑（図40）

41土坑の東に位置する比較的大型の土坑で、土坑列の軸に近い軸を持つ。南に位置する44土坑との関連において位置が規定されている可能性がある。長さ1.6m、幅1.1mの長楕円形を呈し、深さは35cmを測る。断面形状は逆台形で、下半に地山ブロックを多く含むシルト、上半部にラミナはみられないものの細かなシルトや粘土が堆積している。遺物には土師器の甕、あるいは壺と考えられる体部の細片が出土している。

43土坑（図40・52、写真図版25）

42土坑の東に位置する比較的小型の土坑である。平面形状は長さ80cm、幅70cmを測る円形を呈し、深さ25cmを測る。埋土は下層にブロックを多く含むシルトがみられ、上層にはシルトの堆積がみられるが、この間にラミナが顕著にみられるシルトがあり、この層以上が水成堆積の可能性が高い。小規模な土坑ながら遺物はまとまってみられ、土師器のみならず須恵器片を含んでいることも特徴的である。出土遺物のなかで土師器直口壺（図52－122）を図示した。土器表面の遺存状態が悪く、調整などは不明であ

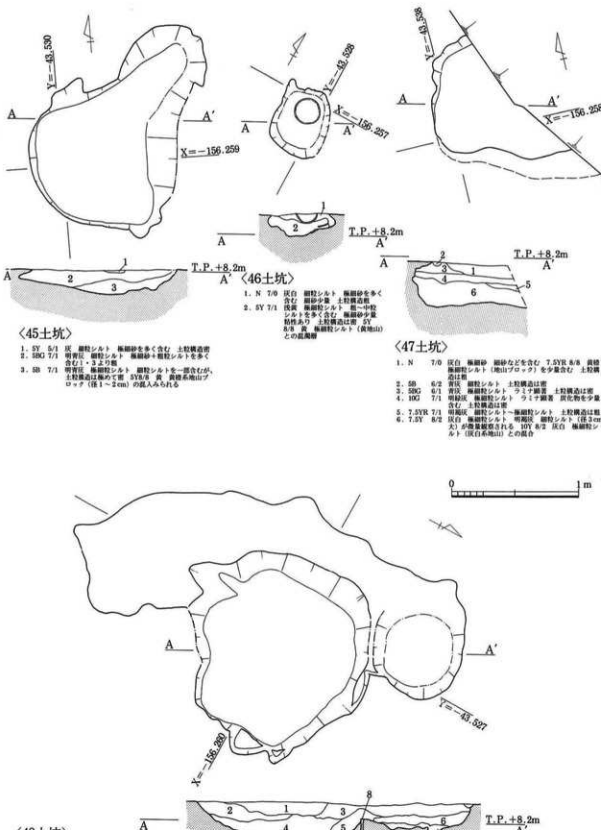


図41　（その1）45～48土坑　平・断面図

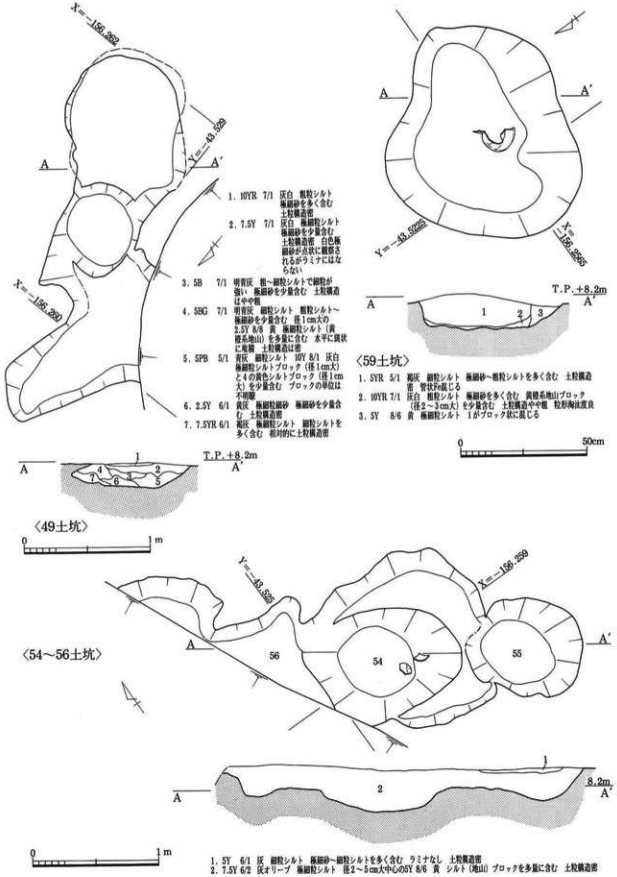


図42 （その1）49・54～56・59土坑 平・断面図

る。須恵器は壺の体部片と考えられるが、細片であり詳細は不明である。また土師器は他に高坏や小型丸底壺などの細片が出土している。

44土坑（図40）

42土坑の南に位置する土坑である。ほぼ東西方向に軸を持ち、平面形は東西1.4m、南北1.2mの隅丸方形を呈する。深さは30cmであるが、東壁から北壁にかけてオーバーハングが顕著である。埋土はこのオーバーハングの先端を境に上下に大きく分けることができるが、下半が地山のブロックを多く含むシルトであり、上半は2種類のシルト層が堆積している。それぞれのシルト層はその下位にラミナの顕著な部分があり、水成堆積であると考えられる。遺物には土師器の壺、甕、高坏等の破片が出土しているが、いずれも細片であり、図示していない。

45土坑（図41）

42土坑、44土坑の東に位置する比較的大型の土坑である。不整形な円形を呈し、長さ1.8m、幅1.3mを測る。深さは20cmであるが西側の壁にオーバーハングがみられる。埋土は最上層にわずかにシルト層の堆積がみられるが、ほとんどが地山ブロックを含む土で満たされている。遺物としては土師器の高坏、甕、壺などの破片が出土している。

46土坑（図41）

45土坑の東に位置する小型の土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、長さ55cm、幅45cmを測る。深さ17cmの小型の土坑ではあるが、壁にはオーバーハングがみられる。埋土は2つに分けることができ、下半が地山のシルトが混ざったシルトであり、上半には灰白色のシルトがみられる。ただ土層断面からみるかぎりでは壁面のオーバーハングと埋土の上下には直接的な関連は無いようである。下半の地山混じりシルトの上面に乗る形で土師器の底部がほぼ正位置でみられ、意図的に置かれたものと考えられる。また下層を中心に土師器甕の細片などが出土している。

47土坑（図41）

46土坑の東に位置し、当初調査予定範囲の側溝掘削により一部が失われた。側溝を挟んで位置する54～56土坑と一連のものである可能性もあるが、調査時にその連続を確認することはできなかった。残存部分からは東西方向に軸を持つものと推測できるが、幅は約1mを測る。残存する西側の壁でオーバーハングがみられ、その頂点を境に埋土は上下に分けられる。下層は地山シルトを多く含むシルト層で、上層にはラミナが顕著にみられるシルト層と地山ブロックを若干含むシルト層がみられる。基本的には掘削土の埋め戻しと水成堆積による埋没が推測される。遺物には土師器甕の細片のほか、上層からの混入と考えられる中世の土師器脚台付皿が出土している。

48土坑（図41）

47土坑の南に位置する土坑で、比較的大型である。検出時には弧状の土坑を円形の土坑が切る形で埋土の違いがみられた。詳細を記録することはできなかったが、結果的には両者は同一の土坑における埋土の違いであると認識した。南北方向の長さでは3mを越えるもので、東西方向も約2mの規模を測る。断面形状は北側でわずかにオーバーハングがみられる可能性があるが顕著ではなく、埋土の状況も比較的複雑であるが、基本的には下半に地山ブロックを含む土がみられ、上半にラミナが顕著に観察されるシルトが堆積している。遺物には土師器甕あるいは壺の体部と考えられる細片が出土している。

49土坑（図42）

45土坑の南に位置し、検出段階では2基の土坑の切り合いとして異なる遺構番号（49・50）を付した

ものであるが、結果的に一連の土坑の可能性が高くなったため、ここでは50土坑を含む49土坑として記述する。北西側が一部、現代の攪乱によって破壊されているが、本来不整形な土坑であったとおもわれる。おおむね長さ3m、幅1mの規模を呈する。南寄りの部分では東壁から南壁の一部にオーバーハングがみられる形状である。埋土のあり方は複雑で、地山のブロックを含むシルト層は底に接する下層部分にもみられるが、シルト層を介した上層にもみられる。遺物には土師器壺と考えられる底部や、有段鉢の可能性のある破片などが出土している。

51土坑（図35）

48土坑の東に接する比較的小型の土坑である。48土坑に切られている可能性があるが、明確には確認できていない。遺物は土師器の細片が出土しているにとどまる。

52土坑（図35）

51土坑の北にあり、当初調査範囲の側溝によって一部が失われた土坑である。側溝の東に位置する54～56土坑との関連も推測されるが確認するには至っていない。残存部分から判断するならば円形の平面形を呈するものとおもわれる。遺物は出土していない。

53土坑（図35、写真図版26）

51土坑の南に位置する比較的小型の土坑で、東西方向に軸を持つ長楕円形を呈する。遺物には土師器の破片がみられるが、退化した布留式甕の特徴を有する口縁部が1点、含まれる。また写真のみの掲載であるが、161は須恵器の塊で、口縁部に突帯2条、その直下に波状文1帯を施文している。体部から底部にかけては静止ヘラケズリであり、内面には灰を被る。

54～56土坑（図42）

47土坑、52土坑の東に位置する土坑で、側溝によって一部が失われている。検出段階では3基の土坑の切り合い関係が推定されたため、検出時の認識に従い個別に遺構番号を付したが、調査の結果一連の土坑である可能性が高くなった。北西側の失われた部分を介して47土坑と一連のものである可能性は残されるが、調査段階では確認するにいたっていない。残存部分の全長は約3.5mを測るが、円形の土坑が連結した形態をとっており、54土坑部分は長さ1.5m、幅1.3m、深さ30cmを測る。また55土坑部分は長さ90cm、幅75cm、深さ25cmを測り、56土坑部分は深さ20cm程度で最も浅い。上述のように土坑の切り合い関係を想定して調査を進めたが、結果的には土層断面においても切り合い関係を認めることはできず、基本的に地山シルトブロックを多量に含むシルト層で埋められている状況であった。55土坑部分の最上層にはわずかにシルトの薄い層がみとめられるが、ラミナは観察されず、他の土坑共々削平を受けているようである。54土坑、55土坑部分からは遺物が出土しており、土師器の高坏あるいは甕の細片がみられる。

57土坑（図35）

57～60土坑はこれまで記述してきた各土坑が構成する土坑列からはやや北に離れ、東側の土坑列との間に位置する土坑群である。検出時の配置では中型の土坑と小型の土坑が2基一対を呈する状況をみてとることができる。

57土坑は小型の土坑で、58土坑の東に位置している。平面形は円形を呈し、遺物としては土師器甕の体部片などが出土している。

58土坑（図35）

57土坑の西に位置し、中型規模の土坑である。平面形は円形を呈し、内部から土師器壺と考えられる

細片が出土している。

59土坑（図42）

58土坑の南に位置する中型規模の土坑である。北西から南東方向に軸を持ち、長さ80㎝、幅75㎝を測る。埋土は底付近にわずかに地山ブロックを含む層が薄くみられ、その上にシルトが堆積し、深さは15㎝を測る。埋土からは土師器甕の比較的大型の破片が出土しているほか、土師器の細片が出土しているが、非常に遺存状況の悪いものであった。

60土坑（図35）

59土坑の南東に位置し、軸を同じくする可能性がある小型の土坑である。玉子形の平面形を呈し、長径35㎝、短径26㎝を測る。内部から土師器の細片が出土している。

61～65土坑（図45・52）

54～56土坑の南東に位置する土坑で、検出段階では複数の土坑が切り合い関係にある状況を想定し、遺構番号を付したものである。調査の結果、各土坑は複雑に連繋することになり、各々の詳細な関係については明確に把握できなかった。検出時には中央に61土坑があり、その周囲に62～65の土坑が位置する状況であったが、それぞれが顕著なオーバーハングを呈する壁を有しながら連結しており、図45においてもそれを良好に表現できていない。土層断面については64土坑とした部分を掲載した。ここでは両壁ともオーバーハングがみられ、他の土坑でもみられたように、そのピークとなる部分から下位が地山ブロックを多く含む土で満たされ、上位には顕著なラミナを観察することができるシルト層の堆積が認められる。遺物は62土坑を除くそれぞれの土坑部分から出土しており、土師器高坏の脚部片や甕体部の細片がみられる。その中から64土坑部分で出土した土師器壺口縁部（図52－123）を図示した。土器表

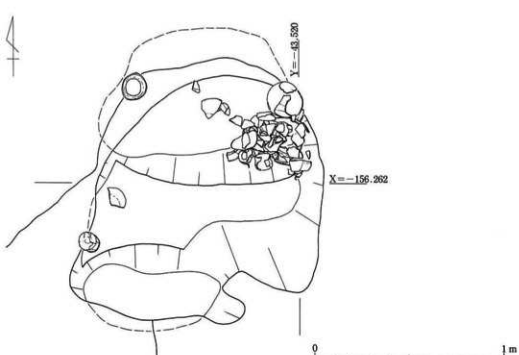


図43　（その1）66土坑　平面図、遺物出土状況

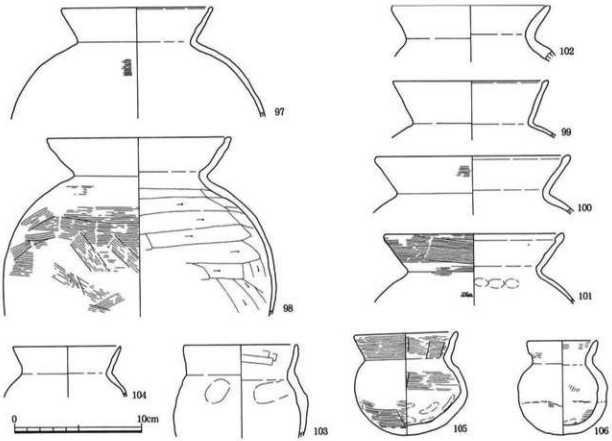


図44　（その１）66土坑　出土遺物

面の遺存状態が悪く、調整などの詳細は不明である。

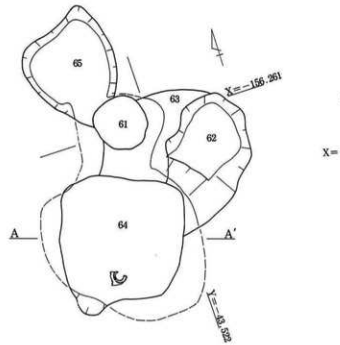
66土坑（図43・44、写真図版23）

61～65土坑の東に位置する土坑で、大型の弧状の土坑を切っている可能性があるが明確には追求できなかった。土坑規模を確定した部分では東西、南北とも長さ1.2mを測る平面規模であるが、北、南両壁にオーバーハングが顕著に認められ、実際には南北1.6mを測ることとなる。埋土の状況はやや複雑であるが、基本的には最下層に地山のシルトブロックを含む土があり、その上に南から北へ傾斜するラミナを顕著に確認することのできるシルト層が堆積している。またその上部にラミナのみられないシルトがあり、土坑が埋没している。遺物は比較的まとまって出土しており、図44に示しえたものでも土師器甕や小型壺９個体が挙げられる。その多くは土坑の北東部分にまとまっており、離れて、北西部分、南西部分にそれぞれ１個体ずつが出土した。破片の状態で出土したものがほとんどであり、投棄された土器群という印象が強い。

遺物番号97～101は布留式甕であり、97～100は口縁端部の肥厚が退化している。102の甕は外反する口縁端部を薄く、丸くおさめている。103～106は小型丸底壺とおもわれるもので、103は口縁部が緩く内湾ぎみに立ち上がる。いずれも布留式土器の新しい段階のものと考えられる。

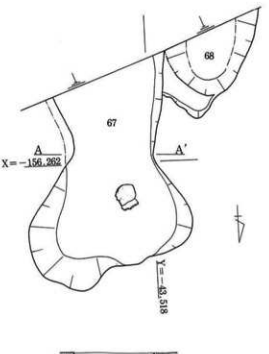
67土坑（図45・52）

66土坑の東、調査範囲の南端において検出した土坑で、南側については調査範囲外となり検出できなかった。明確には確認できなかったが68土坑を切っている可能性がある。検出部分では長さ約1.5m、幅1.3mを測り、ほぼ南北方向に軸を持つとおもわれる。断面形状は袋状を呈し、オーバーハングが顕著である。埋土は上下２層に分けられるが、いずれもシルトブロックを含む構造であり、人為的な埋め



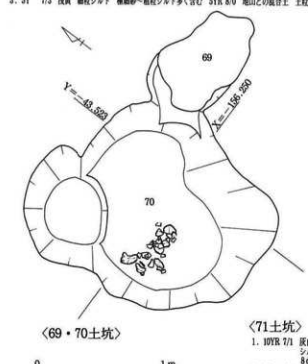
〈61～65土坑〉

1. 5YR 6/1 褐灰　細粒シルト　粗粒シルトを多く含む　管状Feあり　粒径はより少し粗い
　土粒構造密
2. 10YR 6/1 褐灰　極細粒～細粒シルト　ラミナ顕著　粘性あり　土粒構造密
3. 5Y　7/3　浅黄　細粒シルト　極細砂～粗粒シルト多く含む　5YR 8/0　地山との混合土　土粒構造密

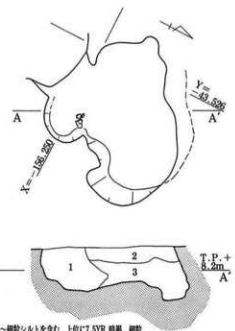


〈67・68土坑〉

1. 7.5Y 6/1 灰　細粒シルト　極細砂～粗粒シルトを多く含む　管状Fe　径小粒の
　Mnを含む　土粒構造密　灰白粗粒シルト（径2～3mm大）が東西両
　端にはいる
2. 5Y　8/6　黄　1と地山，N 5/0 灰　細粒シルトブロックの混合土　土粒構造密



〈69・70土坑〉



〈71土坑〉

1. 10YR 7/1 灰白　細粒シルト　極細砂～細粒シルトを含む　上位にT.5YR 暗褐　細粒
　シルトブロックが大きくはいる　10YR 8/2 灰白　地山ブロック（径1～
　8cm大）はいる
2. 5B　7/1　明青灰　細粒シルト　極細砂～粗粒シルトを多く含む　ラミナはみられない
3. 5Y　8/8　黄　地山と2の明青灰シルトの混合　1の暗褐シルトのブロック（径10×20
　cm）が大きくはいる

図45　（その1）61～65・67～71土坑　平・断面図

戻しが考えられる。遺物には土師器高坏や壺の破片がみられたが、その内から土師器甕ないし壺の底部を図52－124に示した。表面の残存状況が非常に悪く、底部外面は剝落し、調整などについての詳細を知ることができない

68土坑（図45）

67土坑の西に位置し、切り合い関係を有する可能性がある。調査範囲の南端にあるため南側は検出していないが、南北方向に軸を持つ長楕円形の平面形を呈するものと考えられる。遺物には土師器の細片がみられる。

69土坑（図45）

69土坑から86土坑は調査範囲の東寄りにまとまる一群であり、列を成して分布する可能性がある。

69土坑は土坑群の北寄りに位置し、70土坑を切りこんでいる他、東に85土坑、86土坑が近接して位置する。東西に軸を持つ比較的小型の土坑であり、長さ90cm、幅50cmを測る。遺物は初期須恵器の可能性のある甕体部の破片や、土師器片が出土している。

70土坑（図45・52）

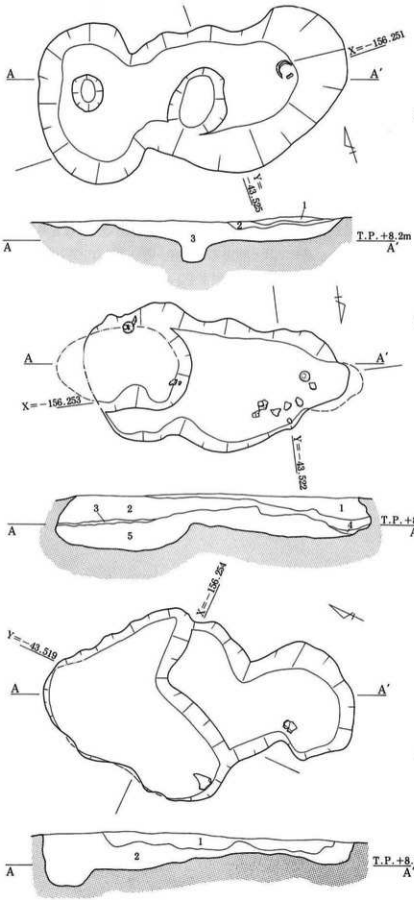
69土坑の西に位置し、69土坑に切られる関係にある土坑である。長さ2.0m、幅1.5mを測り、北西側の部分が一段深くなっている。西寄りの部分で土師器片がまとまって出土している。その中で図化しえたものを図52－125・126に示した。125は口縁部分の遺存であるが、土師器壺とおもわれる。土器表面の遺存状態は悪い。また126は土師器甕の口縁部分であるが、やはり土器表面の遺存状況が悪く、調整などの詳細などは不明である。口縁部の外面には横方向のナデによるものとおもわれる段が認められるようであるが、器形の特徴として認識できるものであるかは定かではない。ほかには土師器壺や甕の細片が出土している。

71土坑（図45・52）

70土坑の西に位置する土坑で、南側が72土坑に切られている可能性が高い。検出状況ではさらに小型の土坑に切られている状況が想定されたが、埋土の違いを認識したものであったことが土層の検討で明らかとなった。隅丸方形に円形の突出部が付いた平面形を呈し、長さ1.3m、幅1.0mを測る。断面形状は北側にオーバーハングがみられるもので、この部分の下半には地山シルトを多く含んだ土がみられ、南側にもシルトブロックを含む土がみられる。その上部をシルト層が覆っているがラミナは観察されなかった。遺物は地山ブロック土を中心に出土したが、土師器甕や有段高坏のほか、破片が数点みられる。そのうち土師器甕口縁部を図52－127に示した。必ずしも遺存状態はよいものではないが、口縁端部が内面に肥厚する布留式甕の特徴を残す土器である。肥厚は顕著ではなく、退化傾向を示すものであろうかとおもわれる。

72土坑（図46・52、写真図版25）

北西角部分をわずかに71土坑に切られる形で位置する土坑である。ほぼ東西方向に長軸を置くが、長楕円形が連結した平面形態をとるものである。長さ2.5m、幅1.3mを測り、深さは20cm程度であるが、中央の深い部分では30cmを越える。土坑内部はほとんどが地山ブロックを多く含む土で埋められているが、東側の最上層にのみラミナのみられるシルト層の堆積が認められた。検出面の削平を考慮すると、ブロック土で埋め戻された後、くぼんだ部分を中心に水成堆積がみられたものと考えられる。遺物には土師器壺、甕、高坏などと考えられる破片がみられる。そのうち土師器２点を図52－128・129に示した。128は平底の底部で、器形については定かではないが、小型の壺の可能性がある。また129は甕の頸部か



〈72土坑〉

1．7.5Y 8/1　灰白　細粒シルト　細砂少量　極細砂多く含む　土粒構造密　斑状Fe・Mnを多く含む

2．5Y　7/1　灰白　極細粒シルト　極細砂・細砂を少量含む　ラミナ顕著　粘性あり　土粒構造密　水成堆積

3．N　7/0　灰白　極細粒シルト 5Y 8/8 黄　極細粒シルトブロック（径３cm大）を多く含む　細砂～粗粒シルトを多く含む　2.5Y 4/1　黄灰　細粒シルトブロック（径10～20cm大・５×８cm大）を多く含む　土粒構造密

〈76土坑〉

1．7.5Y 7/1　灰白　細粒シルト　極細砂～粗粒シルトを多く含む　ラミナ顕著　10Y 8/1　灰白　細粒シルトブロック（径１～1.5 cm大）を少量含む

2．2.5Y 3/1　黒褐　細粒シルト　極細砂～粗粒シルトを少量含む　ラミナ顕著　土粒構造密　5GY 8/1　灰白地山ブロック（径２～30cm大まで）を多く含む

3．10YR 7/1　灰白　極細粒シルト　ラミナ顕著　土粒構造密　粘性あり

4．2.5Y 7/1　灰白　極細粒シルト　黒色土（炭化物？）のラミナあり　ラミナ顕著　灰白シルトブロック（径１cm未満）を少量含む　粘性あり　土粒構造密

5．5Y　6/1　灰　細粒シルトと2.5Y 7/8黄　極細粒シルトブロック（径３～５cm大）の混合土　極細砂～粗粒シルトを多く含む　地山ブロックの隙間に灰シルトがはいる

0　1 m

〈77土坑〉

1．5YR 3/1　黒褐　極細粒シルト　極細砂微量に含む　粗～中粒シルトを多く含む　サラサラ感あり　土粒構造密

2．2.5Y 7/1　灰白　細粒シルトブロック　細礫微量　粗砂～中砂微量　2.5Y 8/8　黄　地山ブロックと灰白シルトの混合土　灰色系の毛管状のブロックが２では顕著にみられる

図46　（その１）72・76・77土坑　平・断面図

ら口縁部にかけての破片である。口縁端部の肥厚はみられず、端面がほぼ水平で、平坦になっている。

73土坑（図35）

70土坑の南、72土坑の東に位置する比較的小型の土坑である。長さ85㎝、幅60㎝を測る隅丸方形の平面形を呈し、深さは30㎝を測る。断面形状は東壁にオーバーハングが顕著に認められ、そのピークの部分から下位において、地山ブロックを多く含む土の堆積がみられる。ブロック土の上部にはやはりブロックを含むシルトが堆積しているが、下層との境に水平に堆積した箇所が認められることから水成堆積と考えられる。遺物には土師器高坏脚部片のほか、壺口縁部などが出土している。

74土坑（図35・52）

73土坑の南東に位置する土坑で、長さ1.1m、幅0.8m、深さ30㎝の数値を測る、いびつな円形の平面形状を呈する。埋土は上下２層に分けられるが、いずれもシルトブロックを含む層で、下層上半には部分的にシルトがラミナ状を呈するところがある。遺物では土師器高坏や壺、甕の破片などが出土している。そのうち土師器壺を図52－130に示した。表面の残存状態が不良であり、調整などの詳細は不明であるが、体部内面にはわずかに指おさえの痕跡を残すものである。また、ほかには内面を擦り消した須恵器甕の破片が出土しており、初期須恵器の範疇に属するものと考えられる。

75土坑（図35）

74土坑の南に位置する小型の土坑である。長楕円形の平面形を呈し、遺物としてはわずかに土師器甕の細片が出土しているにとどまる。

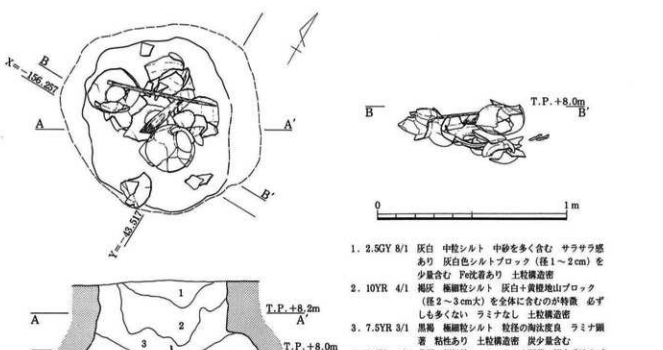


図47 （その１）80土坑 平・断面図 遺物出土状況

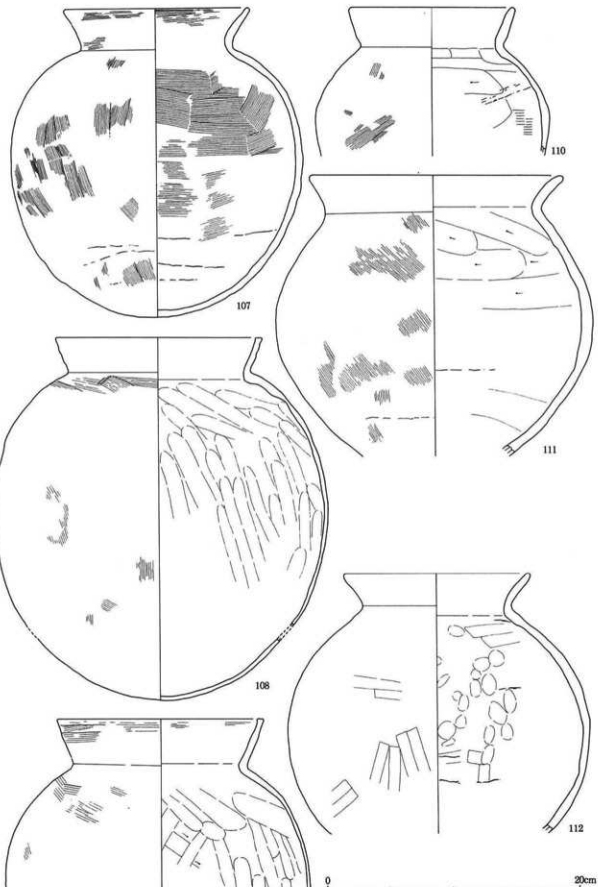


図48　（その1）80土坑　出土遺物（1）

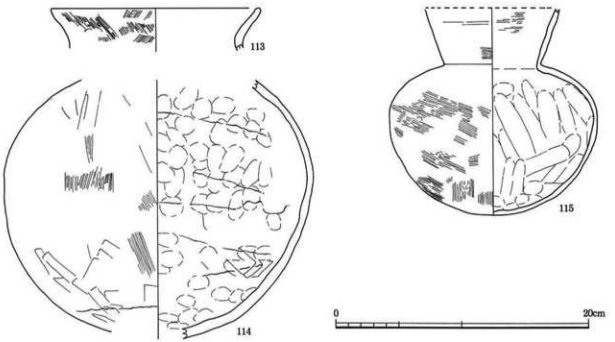


図49　（その１）80土坑　出土遺物（２）

76土坑（図46・52、写真図版25）

75土坑の東に位置する比較的大型の土坑で、ほぼ東西方向に長軸を置く。検出状態では長さ2.2m、幅1.0mであるが、壁面にオーバーハングがみられ、その部分を含めると長さは2.5mに達する。東寄りの部分が一段深くなっており、この部分で深さ40cmを測る。埋土はほぼ壁のオーバーハングの頂点部分から下層が地山土を多く含む土で埋められており、その上部にはラミナが顕著にみられるシルト層が堆積している。遺物としては須恵器壺あるいは甕の体部と考えられる破片が出土しており、初期須恵器の可能性があるほか、土師器甕、高坏、壺の破片が出土しており、図52－131には土師器壺底部、図52－132には小型の壺を示した。131は底部のみの遺存で、全体の器形などは不明である。また132は口縁部を欠く壺であり、遺存状況は必ずしも良いものではないが、外面には黒斑と考えられる黒色を呈する部分がみとめられる。

77土坑（図46）

76土坑の南東に位置する大型の土坑で、いびつな平面形状を呈する。長さ2.5m、幅1.5mを測る。深さは20cm程度であるが、北寄りの部分が一段深くなっており、最も深いところでは深さ40cmを越える。埋土は上下２層に分けることができ、下層は地山のブロックを多く含む土であり、上層にはシルト層の堆積がみられる。遺物には初期須恵器と考えられる甕体部の破片や、土師器の細片が出土している。また、時期の下る須恵器甕の体部と考えられる破片もみられるが、これについては上層からの踏み込みに含まれていた可能性を考慮する必要があろう。

78土坑（図50・52、写真図版25）

77土坑の南に接する土坑で、比較的整った隅丸台形状の平面形を呈する。長さ1.4m、幅1.1mを測り、深さは約30cmを測る。断面形状も比較的整った逆台形状を呈するものであるが、埋土は下半に地山ブロックを多く含む土がみられ、上部にはシルト層の堆積がみられる。土坑の南寄りを中心に遺物が比較的まとまってみられたが、完形の土器はみられなかった。図52－133に示したものは土師器の壺で、頸部から上が欠損している。頸は細く、体部外面に指頭圧痕、頸部から肩部にかけての内面に粘土接合痕をと

どめる。他には土師器壺や甕の破片が出土しているがいずれも細片である。

79土坑（図35）

78土坑の南に接して位置する比較的小型の土坑である。内部より土師器壺の頸部と考えられる破片が出土しているほか、わずかながら土師器細片が出土している。

80土坑（図47～49、写真図版15・24・25）

79土坑の東に位置する比較的小型の土坑であるが、多くの土器がまとまって出土した特徴的な土坑である。平面形はややいびつな円形を呈するもので、検出面での法量は長径90cm、短径80cmを測る。壁にオーバーハングがみられることからこの部分を含めると、それぞれ１ｍを越える数値となる。深さは70cm程度で、一連の土坑のなかでは比較的深いものといえる。断面形状は壁にオーバーハングがみられるものの上半は垂直な壁となり、フラスコ状となっている。埋土は最下層に地山との分別が困難なシルト

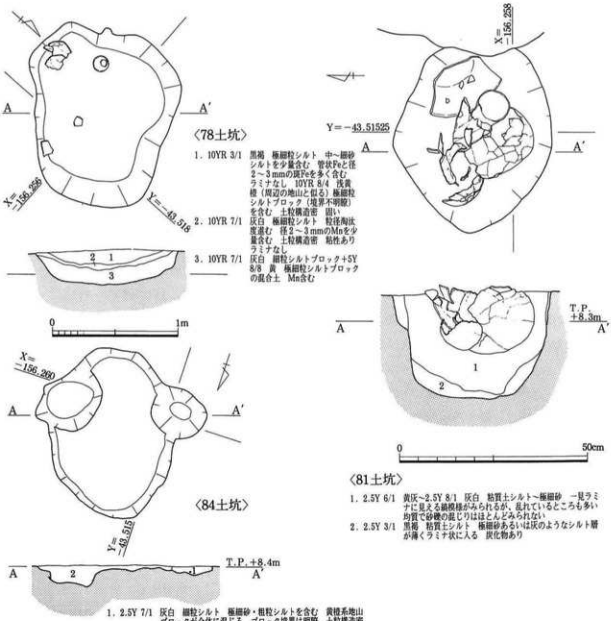


図50　（その１）78・81・84土坑　平・断面図

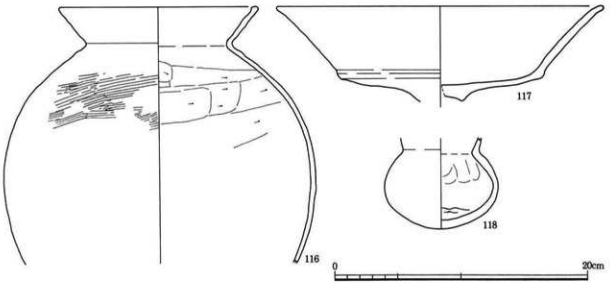


図51　（その１）81土坑　出土遺物

層があり、土器の多くはこの層上半から上面に乗る形で出土している。土坑の中位には地山ブロックを多く含むシルト層があり、さらに上層にはシルト層の堆積が認められる。遺物は土器や木片が土坑の中央部分下半に集中しており、器形のわかるものでは甕が多く、丸底の直口壺も含まれる。出土状態から判断するかぎり、土器群は土圧によって上下に潰されたような状況を呈しており、本来の状況は推測でしかないが、必ずしも完形の土器の割合は多いものではなく、土器の方向にも統一性は見いだせないことから、埋納というよりは投棄に近い印象を受ける。このように考えると埋土中位のブロック混じり土に先行するか、同時に投棄された土器群ということになる。

出土遺物のうち、土師器甕、壺を図48・49に図示した。107～109・113は布留式甕の最も退化した口縁部の特徴を備えたものである。調整は体部外面にハケメがみられ、内面は107がハケメ、108・109が指ナデにより施している。109の体部内面にはケズリの痕跡も認められる。114の体部外面にはハケメ、内面には指おさえの痕跡が残る。110は壺、115は直口壺で、２点ともに体部外面にハケメがみられる。111・112は外反する口縁の端部を丸くおさめる甕とおもわれる器形である。いずれも布留式土器の新しい段階のものと考えられる。

81土坑（図50・51、写真図版15・25）

80土坑の南東に位置する小型の土坑であり、82土坑に切られる関係になる。長さ約50㎝、幅40㎝の玉子形の平面形を呈し、深さは約30㎝を測る。埋土にはブロック土は含まず、下層では炭化物や灰がラミナ状に入る黒褐色のシルト層が薄く堆積し、その上部にも均質なシルトや極細砂が堆積している。検出時にすでに露出していたように土坑の上半部分には土器がまとまってみられ、上部は上層の攪拌により一部は削平を受けているものとおもわれる。少なくとも４個体の土器が認められ、土師器甕はほぼ１個体分が含まれていた。また高坏の坏部は当初より一部のみが土坑内に残されたものとおもわれる。いずれも重なり合って出土しており、明確な埋納の意図をみいだすことは困難であるが、他の多くの土坑における土器の出土状態とはいささか異なる様相を呈しているとすることができる。出土した土器のうち図51には図化しえた３点を示した。116は口縁端部がわずかに肥厚した布留式甕である。117は坏部に段を有する高坏で、口縁部は直線的に外反し、端部でさらに緩く反る。118は小型丸底壺である。布留式土器の須恵器共伴直前位の時期のものか。またこれ以外に、赤茶色を呈する須恵器の蓋片などもみられ

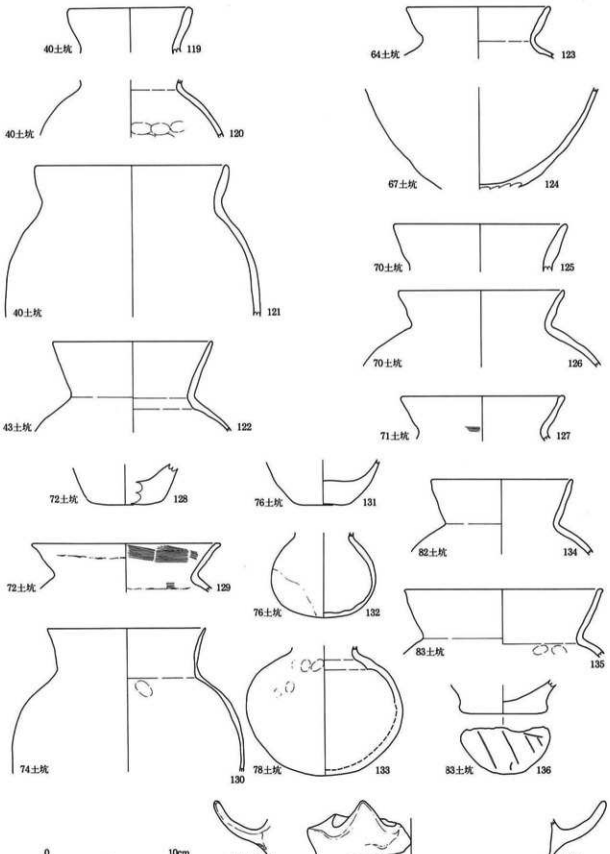


図52　（その1）第5面　遺構出土遺物（2）

るが、時期的には6世紀代のものと考えられ、混入などの状況が想定される。

82土坑（図35）

81土坑の東に位置し、わずかに81土坑を切る関係にある。また調査範囲の東端に位置しており、部分的に検出したのみである。検出範囲では長さ約1mを図る土坑である。遺物は土師器の甕や壺などの破片が出土しており、図52－134には土師器壺口縁を示した。土器表面の遺存状態は不良で、調整は不明である。

83土坑（図35）

82土坑同様、調査範囲の東端に位置し、部分的に検出した土坑である。82土坑の南東に位置する。検出部分では長さ90㎝、幅45㎝を測り、深さは45㎝を測る。北側にわずかにオーバーハングがみられるものの、ほぼ垂直な壁を有しており、底は平坦である。埋土は大きく上下2層に分けられるが、下半がブロックを多く含む土を主体にし、上半は若干のブロックは観察されるものの、水成堆積の可能性が考えられるシルト層で埋没している。遺物には土師器の壺や甕、有段鉢と考えられる破片がみられ、その中から土師器甕の口縁部と弥生土器もしくは土師器壺の底部を図示した（図52－135、136）。135は土器表面の残存状態が不良なため、調整などの詳細は不明であるが、内面のわずかに指おさえの痕跡をとどめる。また136は時期を決しがたい土器であるが、底部外面には木の葉の圧痕がみとめられる。

84土坑（図50）

83土坑の南に位置する土坑である。長さ1.4m、幅1.0mの楕円形の土坑の東西に、2か所小土坑が連結した形状を呈している。西側の突出部が最も深くなっているが、それでも深さ16㎝程度であり、上層の攪拌による削平の影響は大きいものと考えられる。埋土は全体が地山ブロックを多く含むシルト層で埋没している。遺物は土師器細片が出土しているにとどまる。

85土坑（図35・52）

東側の土坑群の北端に86土坑と並んで位置する土坑で、86土坑が85土坑を切る関係にある。東側の一部が調査範囲外となるが、検出部分で長さ1.6m、幅1.8を測る隅丸方形状を呈する。深さはおおむね20㎝程度である。土坑からは土師器の把手部分（図52－137）が出土している。甕の把手部分かとおもわれるもので、把手の平面形は三角形状で、少し内湾して上方へのびる。表面の残存状態が不良のため、調整は不明である。把手の形状からは6～7世紀代に属するものかとおもわれる。またこれ以外に、土師器高坏や壺の部分と考えられる破片や須恵器の坏蓋と考えられる破片などが出土している。

86土坑（図35）

85土坑の西に位置し、85土坑を一部切っている。85土坑を一回り大きくした形状を呈し、長さ、幅とも1.8mを測る。深さは10㎝程度で比較的浅い。遺物には土師器の細片や須恵器の坏蓋の破片のほか、内面に同心円圧痕（青海波）を残す甕の体部片などが出土している。85土坑、86土坑とも、土坑の形状や出土遺物の様相からは、他の土坑とは異なり、6世紀代以降に属する遺構である可能性が高い。

以上、土坑群を構成する各土坑について個別に記述してきた。次に、これらの土坑群について若干の検討を加えたい。

まず土坑群の配置についての問題であるが、再三ふれてきたように検出した一連の土坑群は調査範囲内では大きく二つのまとまりとして認識することができる。ここで仮にそれらを西群・東群という呼称を用いて表現するならば、西群では各土坑が列状に配置されている状況をみることができ、東群では相対的に不鮮明ながら、列状の配置をもつ可能性があるものとして認識される。この両者の違いはおもに

各土坑の配置が視覚的に与える印象によるものであるが、各土坑間における切り合い関係の有無もまた影響を与えている。西群においては各土坑間の切り合い関係を示す例が少なく、ある程度の間隔をおいて位置している印象が強いが、逆に東群では切り合い関係を持つものが相対的に多い。原則論的には個々の土坑が切り合い関係を有する為には、土坑の掘削に先後関係があり、先行して掘削された土坑は後続する土坑の掘削までに埋め戻されている必要がある。また、後続する土坑の掘削の段階では先行した土坑の位置が認識されていない場合、切り合い関係が生じる可能性があるが、逆に当初から切り合い関係を意図して後続する土坑の掘削が行われた場合には、先行する土坑の位置がある程度認識されている必要がある。したがって西群においては各土坑の切り合い関係が顕著ではないため、各土坑の掘削に先後関係が存在した場合にはそれぞれの土坑の位置は認識されていた可能性があり、またほぼ同時に掘削された可能性もある。さらには列状に位置するなかで、各土坑の間隔がそれほど混乱したものではなく、整った印象を受けることは事実で、列形成の当初から土坑の位置に関する規定が存在した可能性は高い。これには当初からすべての土坑の配置を示すものであったものか、あるいは後続する土坑の掘削に際して、方向と間隔が規定されていた等、いくつかの可能性が想定される。西群に限定しても土坑列の形成に要した時間、すなわち各土坑の掘削にどれだけの時間幅を認めるかという問題には明確な回答を用意する事ができていない。切り合いがほとんどみられないという点からは、時間幅を認めたとしても、少なくとも先行する土坑の位置については認識できる期間の中で後続する土坑が掘削されたということが許されるであろう。東群においては土坑間に切り合い関係を有するものがあり、各土坑が計画的に配置されたという評価は困難であろう。しかし無秩序な切り合い関係があるのではなく、列を形成するかどうかはともかく、少なくとも一定の範囲の中で掘削が繰り返された結果であるといえる。西群が明確に列状の配置を有するという評価が可能であることから、総体的な土坑群の配置についても、明瞭な規定に則って、土坑の掘削が行われたものと評価しておきたい。

また各土坑の配置に関連して注意されることは、2基が並列する状況を示すものが含まれることである。18・19土坑や22・23土坑、28・29土坑、34・36土坑、37・39土坑などがこの状況を示しており、偶然とすることは適当ではない。さらに58土坑と57土坑、59土坑と60土坑の関係のように大小の関係を有しながら、それぞれが近接して位置する例もある。

各土坑はすでに述べたように平面形態や規模の点でそれぞれ異なる状況を示しているが、特に規模の点に注目すれば、いくつかの規模類型に納まる可能性が高い。個々の記述においても若干示したが、3段階の規模類型を想定することが可能であろう。大型の土坑類型は長さが2m前後を越えるもので、30・35・72・77・86土坑などが属し、48・49土坑のように長さが3mに達するものもみられる。中型は長さが1.2～1.8m、幅が0.9～1.3mの範囲に集中するもので、20・23・28・39・42土坑などが含まれる。小型の類型は長さが1m未満となるもので、中でも長さ0.8～1.1m、幅0.5～0.8mの幅に集中するものが多い。最も小さい土坑は60土坑で、長さ35㎝、幅26㎝の規模である。このように土坑の規模が一定程度の範囲のなかにまとまることは、土坑の規模が無秩序に掘削されたのではなく、特定の範形を意識していたことを示すものとおもわれる。また先述したような2基がそれぞれを規制した位置関係を有する可能性のある土坑同士が、それぞれ近しい規模や形態を示す例も、18・19土坑、34・36土坑、42・44土坑などを挙げることができる。これが直接何を示しているのかについてはよくわからないが、結果的にこのような関係が土坑群が整然とした印象を与えることに貢献している。

次に断面形状と埋土の問題について触れておきたい。断面形状にはさまざまな例が挙げられるが、少

なからず壁にオーバーハングを有するものが含まれている。典型的な例として23土坑や31土坑を挙げることができるが、緩やかな例を除くと人為的な掘削によっては形成が困難なものであると考えられる。水流など自然作用によって形成されたことが推測されるが、この場合もどのような形で流水がみられ、土坑壁を浸食したかについては合理的な説明は困難である。またオーバーハングの上半が、土坑埋没後に土圧などで内傾した可能性も比定はできない。この壁にみられるオーバーハングは埋土の堆積状況とも関連する可能性が高い。土坑群全体をみた場合、一部の例外を除くと埋土の様相は、下位に地山ブロックを含むシルト、上位に水成堆積と考えられるシルト層という状況が一般的なものである。このことは土坑は掘削されたのち、その時に発生した土で一旦埋め戻され、その後，水に満かる環境のなかで上部まで埋没したという過程を示すものと考えるが、さらにこの上下の埋土の違いが，壁のオーバーハングと関連している。これは31土坑などが典型的であるが、オーバーハングの頂点、すなわち壁を最も浸食している部分から下半が地山ブロックを多く含む、埋め戻し土で満たされており、その上部にラミナのみられるシルトが堆積している。この埋土における上下の違いとオーバーハングとの関わりが何に起因するかについて、明確な理解は用意できていない。土坑内の遺物の出土状況も土坑の埋没過程と無関係ではない。遺物の出土した土坑は多いものの、土器、特に土師器の破片を含むだけのものが多く、出土状況に積極的な意味を認められる例は少ない。しかし完形の土器では無いにしろ、正位置を意識して置かれたと思われる土器はブロック土の上に位置し、シルト層に埋没するものが多い。また破片の出土はブロック土中からのものが多い。これはブロック土による埋め戻し時に土器片が混ざったことと、それを終えたのち意図的に土器を置いた例があることを示すと考えられる。ただ土器が集中して出土した66土坑や80土坑、あるいは当初より土器の大きさが土坑の規模を規定した可能性のある81土坑などは性格が異なる可能性もあり、一様ではない。ただ、いずれにしても各土坑が単なる廃棄土坑でないことは遺

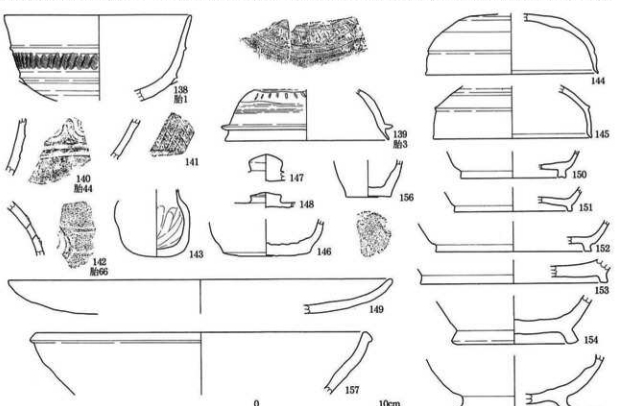


図53　（その１）第４層　出土遺物（１）

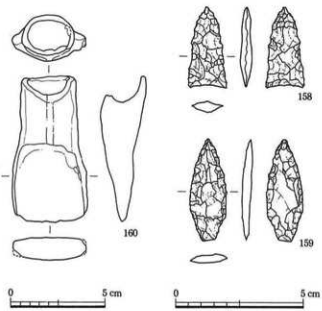


図54　（その1）第4層　出土遺物（2）

物の出土状況が示している。

土坑から出土する遺物については、土師器がほとんどを占め、また完形品の割合が低い点を指摘できよう。また器種では高坏や壺も含まれるが、甕が多い傾向が指摘できる。しかしいずれの土器もその遺存状況からみて、本来の容器としての機能は失われており、土坑に埋められる以前に容器としての使用が終了していたようである。土器の特徴としては甕に布留式の特徴を有するものがあり、またその退化傾向を示すものが主体となることからおおむね布留式土器でもその末葉の時期に属するものと考えられる。すでに須恵器が出現しているかどうかの判断根拠は希薄であるが、16・17土坑との関連を認めるならば両土坑から初期須恵器が出土していることや、包含層出土土器に初期須恵器が認められることからもこれらの須恵器の年代に近いものと考えられる。

土坑群および個々の土坑の性格については以上の状況を鑑みて考察されるべきではあるが、現時点では合理的な説明は困難である。まとまってみられる土坑群については従来からの研究成果として群集土壙墓と考える意見や、粘土採取などの土坑と考える意見などがある。今回の調査で検出した土坑群については列状の配置を示す点や掘削後に埋め戻されている点、さらに一部の遺物が正位置を意識して置かれている点など、土壙墓としての評価に有利な部分もあるが、土坑の規模や水漬かりの環境など、土壙墓と考えるに際して必ずしも適当ではない状況もある。いずれにしても今回は行わなかった自然科学的な分析も含んだ事例の増加が今後、考察の材料を増すことを期待したい。

その他の遺構

これまでに記述してきた各遺構以外には、第5面では溝やピット、土坑などを検出した。いずれも性格は不明であり、顕著な遺物の出土もみられない。土坑群の西端付近から北へ延びる溝は条里地割りに乗ったもので、第5面で検出された遺構としては13柵などとともに後出するものであろう。

最後に包含層（第4層）出土遺物について触れておきたい。第4層は先述したように下面に顕著な踏み込みを有する層であり、水田作土の可能性のある土壌である。仮に水田作土であれば、攪拌を伴うものであり、出土遺物は細片化したものが主体であることと呼応する。おそらくは第5面に伴う旧表土を巻き込む形で攪拌が行われ、結果的に第5面に伴う遺物を包含することになったものとおもわれる。第4層には明らかに古代以降の遺物を含んでいることから、水田として利用された段階はそれ以降と考えられる。また第5面において、少数ではあるが南北方向の遺構がみられることからそれは条里地割りが施行されて以降のことと考えられる。

また、後述する第6面の検出に当たっては第5層を掘削したが、純粋な第5層からは遺物は出土しておらず、この第5層掘削時の出土遺物は、第4層の踏み込みなどによる降下が、第5層に達しており、そこに含まれている遺物であると考えられる。したがってそれらの遺物についても第4層出土遺物と同様に扱うこととした。

第4層出土遺物は図53、写真図版26・27に示したが、古墳時代から中世までの遺物を含んでいる。

古墳時代の遺物としては初期須恵器、土師器壺、須恵器坏を図示した。138～142の5点が初期須恵器である。138は無蓋高坏の坏部と考えられるもので、口径に対して器高が高い印象があるが、外面に2条の突帯をめぐらし、その間に波状文を施している。139は蓋で、外面上部に刺突文を巡らせている。器台としては全形のわかる資料はみられないが、その可能性の高いものとして、140・141の2点を図示した。いずれも非常に細かい破片であるが、140においては外面に非常に低い突帯2条がみられ、その上部にコンパス文をめぐらしている。コンパス文の部分は非常に深く刻まれており、シャープである。コンパス文の施された土器として著名な一須賀2号窯出土資料と比較してもより明瞭に施しているようである。また141では突帯の存在はよくわからないが、外面に斜格子文が刻まれている。142は脚体部の破片で、孔が一部残っている。以上の初期須恵器はいずれも細片化しており、他に接合する破片はまったくみられない。したがって本来調査地部分に残されていた土器である可能性は低いものと思われるが、周辺に初期須恵器を有する集落等の存在が想定される。これら初期須恵器の年代を明示することは難しいが、土坑群あるいは16土坑、17土坑の時期に並行する可能性があると考えられる。143は土師器の小型壺で、口縁部は欠損している。類似する形態のものに37土坑出土土器がある。内面に強い指おさえの痕跡を残すものである。144・145はともに須恵器蓋で、Ⅰ型式の4～5段階にあたるとおもわれる。この時期の遺構は確認できていない。

古代以降の遺物としては須恵器類を図示した。146は7世紀代の坏身、147・148は宝珠つまみである。150～155は高台の付く坏、壺の底部で、奈良時代のものを中心とすると考えられる。また156は底部糸切の瓶と考えられ、157は13世紀前半と考えられる東播系のこね鉢である。奈良時代については遺構としては確認していないが、何らかの形での土地利用は行われたものと考えられ、おそらくは条里地割りが施行されてのちのこととおもわれる。

土器以外の遺物としては図54、写真図版29に示した鉄斧、石鏃2点をあげることができる。鉄斧については時期は定かではないが、石鏃は弥生時代のものと考えられ、この時期の狩猟などの活動が推測されるところであろう。

実測図を掲載せず、写真図版26・27にのみ掲載した遺物には165～167があるが、165は須恵器壺口縁部、166は須恵器壺頸部と考えられる破片である。いずれも外面に突帯と波状文を巡らしている。また167は須恵器無蓋高坏坏部で、体部と口縁部の境が稜を成す。いずれも初期須恵器と考えられる。

以上の各遺構の様相や、包含層出土遺物の状況を踏まえ、第5面の存続時期を考察すると、確実なものでは古墳時代中期から7世紀代の年代を与えることができる。遺構のなかで後出する南北方向の柵や溝はいうまでもなく条里地割りの施行以後のものと考えることができ、上記の年代のなかで考えるならば7世紀代に条里地割りの施行がみられたことになる。しかし第4層は古代以降の水田作土の可能性があり、その攪拌により当時の地表面が失われたことを考慮すると、古代以降の遺構が含まれる可能性も高い。その後の条里水田の時期については漠然とではあるが中世以降と考えることができることから、第5面の遺構のなかにはその前段階までの遺構を含む可能性も高い。また上限については遺構として検出したものでは古墳時代中期のものが最も古いものとなるが、包含層出土の石鏃が時期的にはさらに遡るものである。石鏃の時期の遺構や他の遺物がみられないことから、狩猟等により残された遺物と考えられるが、これが第4層以前の地表面に残されていたものであろう。このように考えると石鏃の段階で、第5面はすでに地表面となっていたこととなり、第5面の時期は弥生時代以降となる。

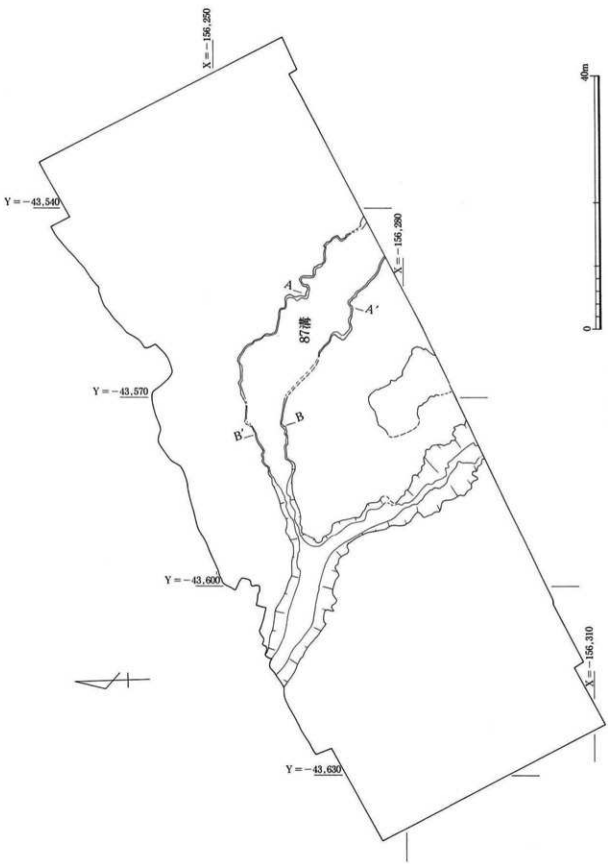


図55　（その1）第6面　平面図

第６面（図55、写真図版16・17）

第５面は当初から最終遺構面として認識されるものであったが、調査が進むにつれ、調査範囲の中央部分では黄褐色シルト層の上部に灰白色のシルト層の堆積がみられることがあきらかとなった。側溝等の断面観察ではこの灰白色シルト層の下面に遺構状の断面が確認されたことから、灰白色シルト層を除去した面も遺構面として認識された。この灰白色シルト層を除去することで検出できる黄褐色シルト層上面は、灰白色シルト層がみられない範囲で第５面とした面と連続するものである。しかし、灰白色シルト層の上面において、第５面とした一連の遺構が検出されたことにより、この灰白色シルト層は部分的に堆積した第５層として認識し、これを掘削して検出した面を第６面とした。したがって全体景観としては、灰白色シルト層が存在しない部分では第６面段階でも第５面段階と変化はなく、結果、地形的には第５面の中央部分が浅い谷状に窪んだ状況となっている。第５層の厚さ、すなわち谷状の地形の深さは20～30㎝程度であった。

第６面で検出した遺構は中央部分にみられた溝状の落ち込みと、同じ埋土を有する浅い落ち込みのみであり、他に遺構はみられなかった。また第５層中からは遺物は出土していない。

87溝（図55・56、写真図版17）

調査区中央で検出した溝状の落ち込みを87溝とした。２条の溝が合流して１条となり、全体では逆Ｙ字状を呈する。流れの方向は第５面の15溝と共通するものであり、地形的な要因によるものと考えられる。溝の幅は５～10m程度であり、深さは場所によってやや異なるが、20～30㎝程度を測る。埋土は黒褐色を呈する細かいシルトが主体となり、各層の下位に植物遺体を起源とすると考えられる炭化物の薄いラミナが確認されることから、水成堆積であると考えられる。また人為的に掘削された痕跡は認められず、自然の流路であると考えられる。遺物は出土していないため、溝の時期は不明である。また第６面から第５面への推移も、第５面の土地利用以前とするにとどまる。

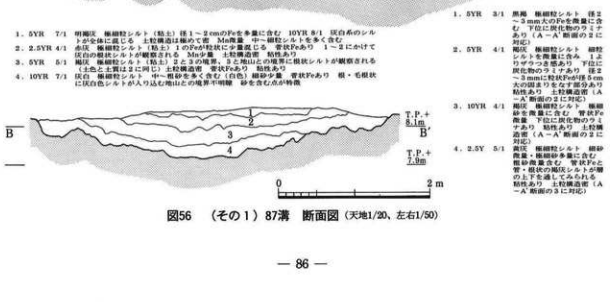


図56 （その１）87溝 断面図（天地1/20、左右1/50）

第３節　検出した遺構・遺物（その２）平成９年度

（その２）は河川敷内7000㎡を対象として調査を行った。調査区は（その１）の東側と連続し、東西に細長い長方形の調査区である。調査の方法で既述したとおり、当初、東西50mを中央で分けて西半・東半と呼称し、途中、東側に広げた調査区を拡張区とした。

（その２）の基本層序は本章第１節で詳述した。調査は盛土を機械掘削後、６層を人力掘削した。第２層上面（第２面）、第３層上面（第３面）、第４層上面（第４面）、第５層上面（第５面）、第６層上面（第６面）の計６面について面的な調査を行った。

以下、各面毎に検出した遺構と出土遺物について記述する。

第１面

機械掘削終了面である第１面は調査対象から除外した。攪乱部の除去と第２面で検出した１粘土取り穴はこの面では凹みとして認識できる。調査区東半では第５層がこの段階で露出していた。また、（その１）から連続する攪乱が調査区の北半分に拡がっていた。

第２面

灰黄色粗砂（第１層）を掘削した面が第２面である。この面では大和川に直交あるいは平行する方向の溝を検出した。溝は灰黄色粗砂が埋土である。幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.08mである。遺物の出土は少なく、染付が数点出土した。堤防内の河川敷にある空閑地は、大和川付け替え後に畑作が開始しており、現在まで河川敷は畑作に利用されることが多く、検出した畝溝はその耕地利用の痕跡である。上流部では畝畑の土地利用が今でも確認できる。

基本的な調査所見は、（その１）と変わることがない。また、第３面で検出した１粘土取り穴は上層の埋土を灰黄色粗砂としており、土のしまりが悪いことと、現代攪乱が顕著なために、この面で不明瞭ながら認識できる。

面的には、１粘土取り穴は中層の褐色細砂で埋まることがなく、灰黄色粗砂の堆積により完全に埋没する。調査過程では、褐色細砂（第２層）を掘削したことにより、次の第３面で明瞭に認知した遺構である。

第３面（図57）

褐色細砂（第２層）を掘削した面が第３面である。基本層序で述べたように、この褐色細砂はラミナが明瞭な自然堆積層である。大和川の流水作用を起因とする。褐色細砂は複数回の堆積が確認できる。層位的に細分が可能であるが、第２層として一度に掘削を行った。第２層の掘削途中で、第２面で検出した畝溝と同規模の溝が確認できる場合もある。

（その１）の調査で確認した北半分の削平は（その２）では検出できず、灰黄色粗砂による削平、もしくは、褐色細砂の土壌化が進んだ状態があった。

この面で検出した遺構は１粘土取り穴・南北方向溝・井戸・土坑・ピットである。

南北方向溝は第２面で検出した畝溝と方位・規模が同じで大和川の流れの方向と直交する。法量も第２面で検出した畝溝とほぼ等しく、幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.08m。埋土は褐色細砂、砂礫を含んだ

褐色細砂である。

ピットは、褐色細砂もしくは灰色シルトを埋土とし、円形～不整形で深さ2～13cmと浅い。灰色シルトの埋土のピットは1粘土取り穴南側で検出した。埋土の状況から、井戸・溝と異なり下面所属のピットと考える。また、断面形は地山と不整合な面をなしたり不規則であり、耕作等の痕跡を考える。

調査区中央北よりで検出した土坑についてもピットの見解とほぼ同じで、異なるのは規模の大小である。

第3面では、最終堆積が褐色細砂・褐色細砂土壌化層（第2層）である11落ちと2溝が認識できる。輪郭はこの段階では不明瞭であり土層の範囲として全体を認識したに過ぎない。遺構面としては、南側断面及び設定した畦断面の所見から、その掘削は第3層を細分した間層から行う。つまり、褐色細砂はレベル的に低い部分（凹部）に堆積した土層として11落ち・2溝を埋めたと理解している。褐色細砂が堆積した段階では、この溝の機能は積極的には評価できないうえ、溝埋土としての連続性についても断面観察から導き出す所見は否定的である。

1粘土取り穴（図58・59、写真図版31）

1粘土取り穴は、調査区西半を中心に検出した。第6面で検出された区画溝の内部にあたり、区画内部の全体を攪乱する。全体的に長方形の形状を指向しており、長方形の小さい単位が集積して、最終的な形状となる。

法量は、南北22.4m、東西16.5mである。東側が長方形に突出する。北東部に存在する15井戸周辺は掘削を行った形跡はない。

埋土は、大きく3層に分層が可能。下層から黒褐～灰オリーブ色シルト（第5層）を主とするブロック土、中層は褐色細砂もしくは粗砂～中砂で、上層は土壌化した粗砂である。最上層には現代の土層が薄く堆積する。下層のブロック土は砂礫混茶褐色シルト（第5層）を中心とする土層である。おそらく、地山シルトを覆っていた土層で、粘土採取に目的があったため、掘削後に遺構内に投棄したと考える。ブロックの単位が明瞭な土層であり、ブロックの間隙を粗砂が埋める。中層の褐色細砂はラミナが明瞭な土層である。大和川の流水砂として認識した第2層と考える。上層の粗砂は基本層序の第1層と性格は同じである。土層堆積から導き出せる埋没過程は、粘土取り後、まず不要となる土層の廃棄を行い、完全に埋めきらないで掘削状態で放置した凹部に大和川の流水砂が流れ込んだものと考える。それより上部は、基本層序の見解と同じである。

1粘土取り穴の埋土掘削した後、底面には長方形を単位とした地山隆起がみられた。この隆起は法量に規格性があり、長方形を単位として粘土取りが行われたことを示す。長方形の規模は大小があり、隣合う長方形の規模はほぼ等しく、規則正しく掘削する。長方形を単位とすることで、不整形や円形の土量換算の曖昧さとは異なり、数量として明確に認識する必要性と土取りの効率性に目的があったためである。

粘土取りの対象となる粘土層は、地山として考える土層である。粘土取りの掘削深度分の地山は、下層から灰色シルト、灰白色粘質シルト、黄褐色粘質シルトの層順である。一部埋め戻しのブロック土の中に確認できるが、量は少ない。掘削した土の徹底的な利用がなされたためである。古墳時代から中世の遺物とともに19世紀の陶磁器（瀬戸焼皿、同壺、同碗）が出土している。

同様の粘土取り穴は堺市小阪遺跡[1]・東大阪市西ノ辻遺跡[2]で検出されている。小阪遺跡の粘土は使用用

図57　（その2）第3面　平面図（1/600）

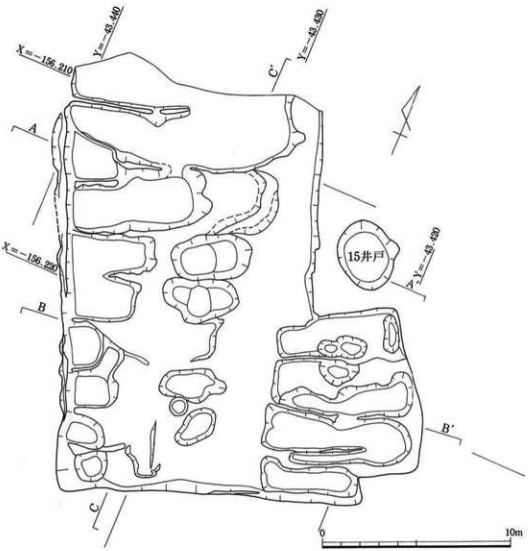
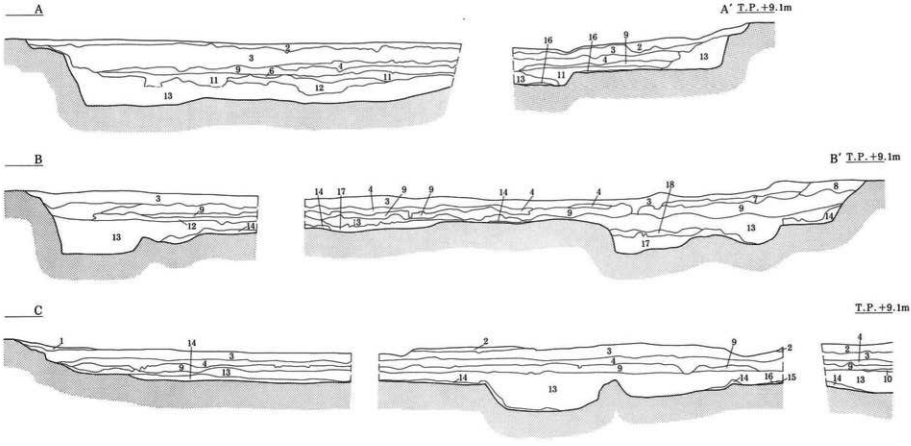


図58　（その２）１粘土取り穴　平面図 (1/200)

途が水田造成とされており、調査区で近世河川埋め戻しにブロック土を使用し、地山砂礫層への水分浸透を防ぎ、上半分を耕土として利用されたことが推測されている。また、京都・平安京内でも左京二条二坊[3]・左京三条二坊[4]等で多数検出されており、「黄色の粘質土」[5]の採取が行われていたことが判明している。大和川今池遺跡の事例は、付近に地山層を積極的に使用した遺構が現在まで確認されていない。１粘土取り穴の事例は長方形のを単位として掘削されており、土取りが規則正しく行われたことがわかり、土取り「採取量」が生産管理されていたことは先に述べた。

大和川今池遺跡の粘土の具体的な使用用途については具体的根拠に乏しいが以下の３つの可能性を考える。１）近世段階の土層に地山ブロック土で形成されるものがあり耕作に関連し整地土として使用した。２）大和川堤防の盛土補修に使用した。土の運搬に際し、堤防内の地山層は労力を省略する。また、堤防外を掘削するより地権等に関して問題が少ない。３）粘土を商品として流通させた。この場合、瓦原料等使用用途は多岐にわたる。１）に関しては広範囲に確認できる現象ではなく、局所的な現象であり、粘土取り穴から換算される土量からはふさわしくない。１）の作業は行われたとしても小規模であり、２）か３）が妥当な使用用途であろう。



1．10GY　4/1　暗緑灰　砂質シルト
2．5GY　5/1　オリーブ灰　細砂
3．7.5GY 3/2　オリーブ黒　粗砂
4．10Y　3/2　オリーブ黒　細砂
5．2.5Y　5/4　黄褐　細砂　ラミナあり
6．2.5Y　4/6　オリーブ褐　細砂
7．2.5Y　5/2　暗灰黄　細砂　ラミナあり
8．10YR　5/3　黄褐　細砂
9．2.5GY 6/6　明黄褐　粗砂
10．2.5Y　4/4　オリーブ褐　粗砂
11．10YR　4/4　褐　粗砂　ラミナあり
12．10YR　2/3　黒褐　粗砂
13．5Y　3/2　オリーブ黒　粗砂
14．5B　7/1　明青灰　シルト
15．2.5Y　3/2　黒褐　粗砂
16．10YR　6/8　明黄褐　粗砂　ラミナあり
17．10YR　2/2　黒褐　シルト
18．7.5GY 5/1　緑灰　粗砂

図59　（その2）1粘土取り穴　断面図 (1/80)

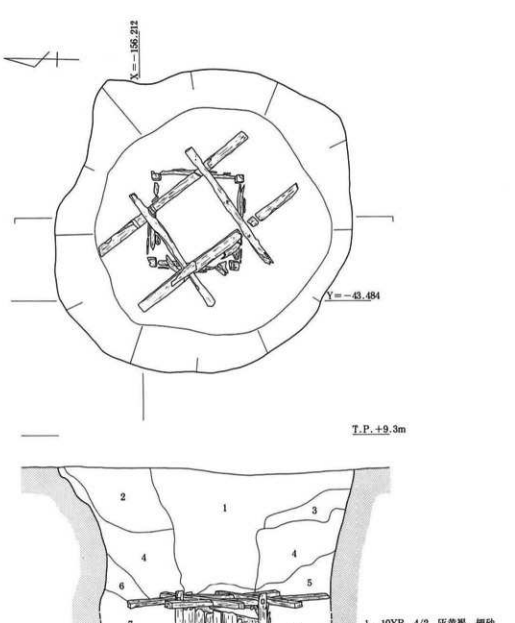


図60 （その２）15井戸 平・断・立面図 (1/40)

15井戸（図60、写真図版31）

15は、粘土取り穴の北東部で検出された円形の井戸である。直径3.2m、掘削深度2.4mまで掘削を行い、完掘していない。井側は遺構検出面から1.4mのところで検出した。南北方位に沿って設置されており、それに斜め45°角度を振って、井桁に編まれた桟を設置する。隅柱上端には、長方形の枘穴がある。枠板はおそらく長方形の板材を隅柱間に縦に並べる。埋土は井戸枠内で粘質シルト、裏込めは地山ブロック土である。出土遺物に近世平瓦があった。粘土取り穴の平面輪郭を規制するようにして15井戸は存在しており、同時期もしくは時期差のない段階に存在した可能性がある。

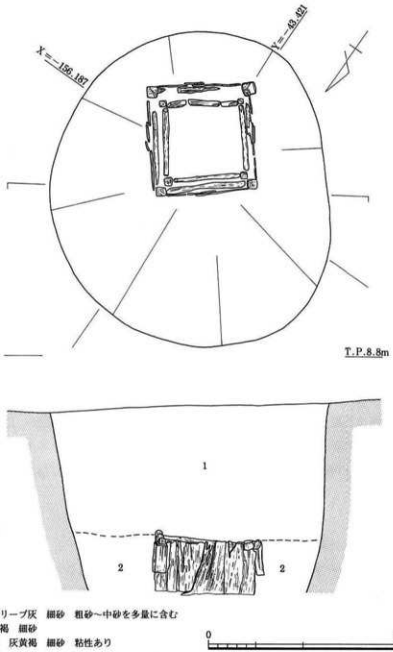


図61　（その2）1297井戸　平・断・立面図 (1/40)

1297井戸（図61）

1297は拡張区中央西寄りで確認した木枠をもつ井戸である。1297井戸を検出した周辺は灰黄色粗砂（第1層）を埋土とする畝溝を南北方向に検出しており削平度が高い。やや楕円形の平面形を呈し、最大径3.3mである。深さ2mまで掘削を行い完掘を行っていない。褐色細砂（第2層）で全体の輪郭を確認し、北半部に断ち割りを入れて掘削を行った。断面図に示す通り、井側内と井側外の埋土の違いを木枠検出時まで分別していない。木枠内埋土は粘性をもった灰黄褐色細砂で人為的な埋め戻しではなく、止水堆積によって埋まったものと考える。木枠裏込めの土は灰黄褐色細砂であり、ブロック構造である。井側は井戸内の南東側に設置する。上部構造は、ロの字に組んだ井戸枠を二重にした構造で、隅柱を四隅に布置し、枠板は縦に配している。下部構造は完掘を行っていないため不明である。1297井戸からは18世紀の波佐見碗が一点出土した。

第４面（図62）

粗砂混灰褐色シルト層（第３層）を掘削した面を第４面とした。第３層は鉄分沈着の顕著な赤褐色シルト層と灰褐色シルト層の互層であり、土質による細分が可能である。掘削中に部分的に検出した、間層にある面では東西もしくは南北の正方位の溝（幅0.10～0.15m、深さ0.03～0.07m）を確認した。この段階で検出する溝は大和川に規制されず、方向は正方位を指向する。

第４面は11落ち・２溝の検出を目的として調査を行った面である。（その１）調査では２溝の掘り込みが行われた面を認識し、（その２）の調査区に南東側に延長できる溝の続きを想定できた。そして、南壁断面で遺構の存在が確実であると分かったため、粗砂混灰褐色シルト土層中で遺構確認に有効と判断した面の検出を行った。11落ちの埋土であるシルト層上層は第３層上層と連続し、かつ、第３層下層の鉄分沈着層上面での遺構検出はこれまでの調査で遺構検出が困難なことが多かったため、灰褐色粗砂混シルトと鉄分沈着シルト層を第３層の１セットとして掘削を行った。

なお、再記述すると、第３層は（その１）調査の第３層の上層である。（その２）では11落ち・２溝の検出のため、（その１）調査の第３層を２層に分けたことで、調査面数は（その２）の方が１面多く、（その２）-第４面に対応する面は（その１）では調査を行っていない。

第４面では11落ち、２溝、東西方向の溝・井戸を検出した。

東西方向の小溝は、幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.08mで第３層に類似する灰褐色砂礫混シルトである。座標方位に合致し、大和川の方向に規制されないことは先に述べた。調査区中央部でこの溝が検出できないのは、現代の攪乱が第５層上面まで及んでいるためで、第３・４層がこの場所に稀薄な事実による。埋土は、第３層連続もしくは第３層類似の土層であり、耕作に関連する溝群と考える。次に記述を行う第５面で検出した溝と法量・埋土とも相似の関係にあり、耕地利用に関する行為の痕跡に変化は見られない。

11落ち・２溝（図63・64、図版32）

11落ちと２溝は、連続する一つの遺構である。掘削の分別のため、遺構番号を便宜的に付した。切り合い関係はない。第３面の項で述べた通り、上層埋土が褐色細砂であるため、輪郭不明瞭な遺構として第３面で認識した。

（その１）の２溝に連続する遺構である。（その１）の２溝と11落ちの距離は35mである。溝は掘形平面形が不規則に歪曲したラインで、やや蛇行しながら二つの遺構を繋ぐ。

11落ちの平面形は円形、断面は漏斗形である。直径約10mで、深さ4.24mまで掘削を行い、完掘は行っていない。断ち割りを行った断面の状況から漏斗型の下端は、湧水層までの掘削が行われたと考える。

断面の設定は、Y＝－43.490ラインに、１粘土取り穴から連続する畦を設定して掘削を行った。断面の南側は堤防内であり記録できなかったが、遺構の本体はほぼ調査区内に収まっている。

基本埋土は３層である。下層の灰色粘質シルト、中層の褐色細砂、上層の砂礫混褐色細砂である。下層の粘質シルトは、土性・砂礫の混入・粘性の違いなどから細分できる。層中にラミナがみられる土層もあり、止水堆積による土層である。中層の褐色細砂は第２層に対応し、流水性の堆積層である。上層は、褐色細砂が土壌化して形成された土層で、ラミナが観察できる褐色細砂も存在することから地形的に低くなった箇所が大和川の流水作用で埋没したと考える。ブロック形成や堆積物の中に人為的な作用による埋土は存在しない。取水と貯水を目的とした遺構と考える。

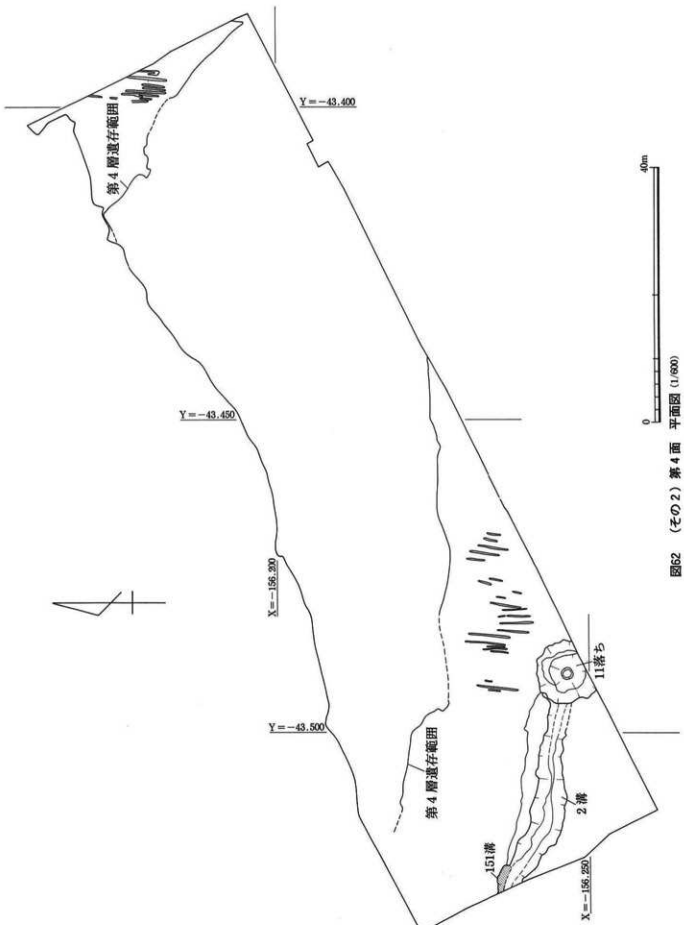


図62　（その2）第4面　平面図（1/800）

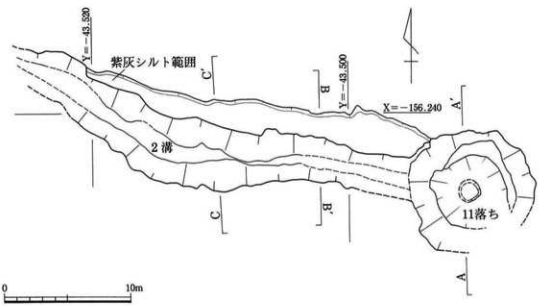


図63　（その２）11落ち・２溝　平面図 (1/300)

なお、11落ちの東の掘形斜面では128井戸や12土坑を検出しており、出土遺物には中世・古墳時代の遺物が多く含まれる。２溝に沿った南側が古墳時代遺構の西限となっており、これらの遺物は周囲の遺構・包含層の流入物と考える。

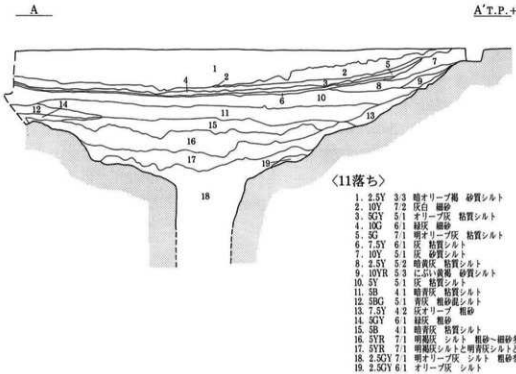
２溝は11落ちから連続する北西方向の溝である。溝の幅は３～５m、深さは0.75～0.92mである。断面観察用畦を２箇所設定して掘削を行った。土層断面の特徴的な面を選択したため、両面の分層解釈を行ったが、西向きと東向きの断面記録について報告する。なお、この土層観察用畦の記録は、第５面調査段階で行った。平面的な溝掘形の形状は凹凸があり、やや蛇行する。溝底面の高さは、南東側が低くなる。蛇行については下層の埋土が基本的には止水堆積で、最終堆積段階の流水作用を積極的に評価できないことから水流の微細な調節の機能があったのかもしれない。

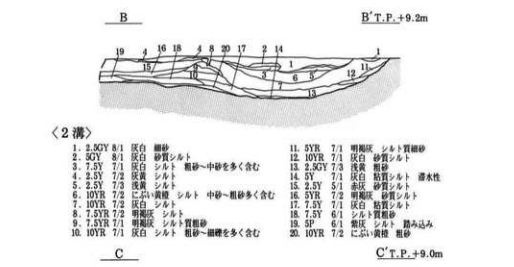
埋土は２層を基本とする。下層灰色粘質シルト、上層褐色細砂である。11落ちにみられた土壌化した細砂は認められず、11落ちの下層と中層が対応する。断面の観察所見から、下層灰色粘質シルトには数次の堆積があったことが推測でき、上層埋土が下層埋土と切り合う部分もあることから、掘り直し等によって溝機能の保全を計っていたことが分かる。

また、溝断面には溝の南北に畦状の高まりが観察できる段階がある。土質・土色ともに異質な高まりで溝両サイドに畦畔が造作されていた可能性が高い。溝の下層堆積に対応する段階の畦畔の有無については不明。この畦畔状の高まりに関しては、断面での確認のみであることを指摘しておく。

２溝の北側には幅２～３mにわたり厚さ0.06～0.10m未満で、紫灰色シルトの土層の広がりを確認した。紫灰色シルトは地山と不整合な面をなし、現場記録では踏み込みとして処理した。これより以北は稀薄になるため不明である。紫灰色シルトには砂礫が混入し、２溝南側で顕著な踏み込みの様相と変わることがない。２つの断面観察から２溝埋土に切られる土層である。特定範囲にしか検出できない土層であり、２溝との関連で記述を行った。なお、２溝の1995年に行われた大阪府教育委員会の調査区との関係は、現状の調査で溝の連続に関して特定作業をするに至っていない。

11落ちと２溝からは古墳～中世に至る遺物と16～18世紀初頭までの陶磁器類、18世紀以降の近世陶磁器類が出土した。





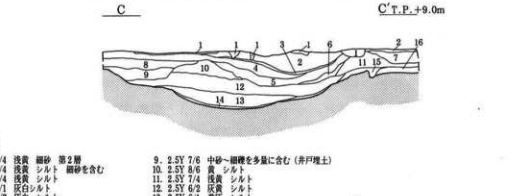


図64　（その2）11落ち・2溝　断面図 (1/80)

第５面（図65、写真図版33）

粗砂混灰褐色シルト層（第４層）を掘削した面は第５面である。第４層は、粗砂混灰褐色シルトと鉄分沈着シルトの互層であり、基本的な性格は第３層と変わることはない。第５面は（その１）-第４面と対応する。

第５面では、東西方向から南北に屈曲する溝、東西・南北方向の溝、土坑・ピットを検出した。

土坑・ピットは調査区の西側と東側に数基ずつ確認した。埋土は灰褐色シルトが基本であり、第４層とくらべ、砂礫が少ない。西半の土坑は、地山と不整合な面をなし、耕地関連の範疇で捉えた。これに対して東半で検出した土坑は形状が安定しており、埋土は第４層からの連続ではない。西半で検出したピットの中には焼土を含む埋土をもつピット１基が確実に存在し、建物としてのグルーピングは不可能なものの、柱穴であった可能性がある。しかし、溝を除けば全体として遺構は稀薄といえる。

17～20溝（図66）

17～20は東西及び南北にそれぞれ平行する２本の溝である。幅0.5～1.0m、深さは0.1～0.5mである。溝の底レベルは東西で東側が低く、南北で北側が低い。溝の埋土は粘性をもった灰白色シルトを主体としている。上部ほど粗砂を含有する率が多くなる。流水作用を積極的に評価できる埋土ではない。また、一部に埋土間で切り合い関係があり、掘り直しが行われた可能性がある。南北方向の溝が北側で、東西方向の溝が西側で中断するのは、削平によるものである。18溝と19溝の南西側で検出したピットとの関係はピットからの遺物の出土がなかったため不明である。第４層に類似する埋土を持つ17～20溝は、第４層の性格から耕作に関連して掘削した溝と考える。景徳鎮窯系青花皿、漳州窯系青花碗、志野皿、美濃鉄釉天目碗等が出土した。

22溝（図67、写真図版33）

22溝は調査区の西側で東西から南西に曲折する。幅2.0～2.6m、深さ0.4～0.6mである。掘形は、第４面の２溝と違い直線的であり、溝肩は明確なラインをなす。溝の掘り込み面は第４層の下層部分である間層からで、上層埋土は第４層下層と連続する。Y＝－43.490に設定した断面観察用の畦により、11落ちとの切り合い関係は22溝→11落ちで、11落ちが新しい。この東西方向の、北側溝肩のライン、つまり、22溝北肩を一本の線にしたX＝－156.226より南側は、第４層の下層相当部分の遺存範囲である。このラインにより以北と以南は５～10㎝弱の段をなす。以南が低い。言い換えると、このX＝－156.226より南側は第４層により削平度が高い。22溝の埋土は、流水作用による砂礫層は見られず、粘性が高く、粒径の細かいシルトの堆積である。上層は、周辺土地利用の積極的な影響を受けて埋没したと考えており、第４層下層との土質区分はできない。また、土層断面での切り合い関係はなく、再掘削の痕跡はない。出土遺物には瓦質擂鉢、瓦質甕、陶磁器類、丸・平瓦がある。22溝は第６面で検出した区画溝、65・127溝の埋没後に掘削したことと、出土遺物を根拠として15～17世紀初頭までの時期と考える。埋没はもう少し早い段階からあったかもしれない。この区画内は、調査区内の面積で450㎡で、東西・南北方向にそれぞれ大小の溝を検出した。小さい方の溝は幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.08mである。大きい方の溝は幅4.0m、深さ0.05～0.08mである。溝埋土は灰褐色砂礫混シルトを基本とする。第４下層から連続する埋土として捉えられる範疇にあり、耕作関連の溝と考える。

図65　（その2）第5面　平面図（1/600）

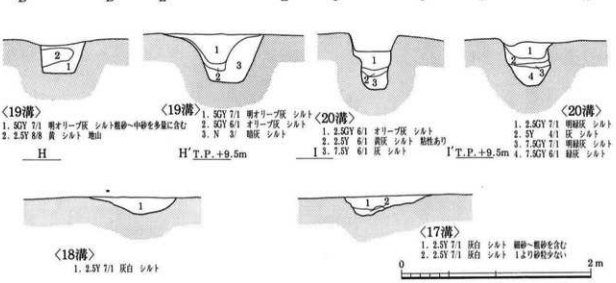


図66 （その２）17～20溝 断面図 (1/40)

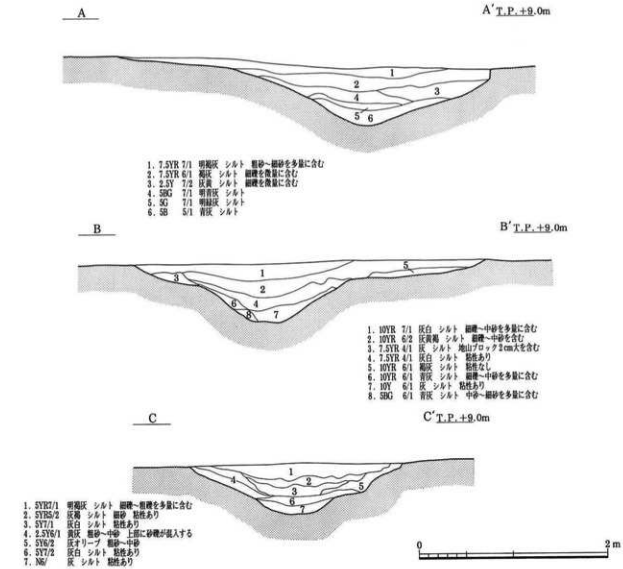


図67 （その２）22溝 断面図 (1/40)

第6面（図68～70、写真図版34）

茶褐色砂礫混シルト（第5層）を掘削した面が第6面である。茶褐色砂礫混シルトは、調査区の東半分を中心に分布する。茶褐色砂礫混シルトの上面では第5面精査を行った。第5面で検出した既述の遺構以外に第5層上面では遺構検出は困難であり、第6面で検出したピットがこの面で確認されることはない。第6面の調査は、先に述べたように、便宜的に区別した東半・西半・拡張区という3つの単位がある。この調査区の区別は、区画溝内と区画溝外が西半・東半にほぼ対応し、東端を限る521・522南北溝の東側が拡張区に対応する。報告はまず、西半・東半・拡張区の遺構の概要を述べる。次に、個別の遺構記述を行うことにする。

西半（図68、写真図版34）

西半は第5面の項で記述した第3・4層による攪乱が22溝北肩の東西方向のラインに沿って及ぶ。（その1）の調査区で検出した2土坑・溝が連続する11落ちと2溝があり、1粘土取り穴もあることで遺構の分布は限定される。また、区画溝を中心とした溝が深く掘り込まれているため、井戸を例外として土坑・ピットはさらに狭小な面積での分布となる。

調査区南西部は削平の顕著な場所である。（その1）で検出した土坑群との関連で古墳時代の土坑を検出した。これは（その1）の調査成果の延長上に捉えることが可能であり、古墳時代の土坑は北西から南東にかけて分布している。2溝の北側、西部では中世の井戸・ピットを検出した。これに接する（その1）の調査では13世紀後半の土坑2基・溝1条を確認しており、河川敷内で中世の遺構のまとまりをみた場合、これらの遺構が西限となる。

区画溝内の遺構は1粘土取り穴により完全に消去された。1粘土取り穴底の地山でも遺構検出は皆無である。この場所で断定できるのは、井戸がなかったことである。ピットの集中があったことは北東側の状況から推測できる。1粘土取り穴の下層埋土には、第5層に対応する土層のブロック土を確認しており、そこから出土した遺物により遺構の存在が推測できる。

北東部では溝・ピットなどを集中して検出した。この部分は第3・4層の攪拌を受けていない場所であり、整地土が分布する範囲と対応する。次に述べる東半の遺構密度と同じである。

東半（図69、写真図版34）

東半は、茶褐色砂礫混シルトの掘削後、遺構検出を行った。この段階では、遺構の輪郭は不明瞭で形状の認定は困難である。茶褐色砂礫混・黒褐色シルト層（464・614・549・550）が一定の範囲で堆積する箇所もあった。このシルト層は範囲認定後、削り込み及び断面設定後の掘削作業を行った。次に、下面で精査を行ったものの、整地土とした地山ブロック土及び褐灰色シルト上面での遺構検出がなおも困難であったため、最終的には整地土の除去を行って精査を行った。これにより、面としての認識は、東半第6面は整地土とした土層の範囲に対応して、西半の第6面より低い結果となった。ただし、第5層掘削後に検出した遺構は、整地土層を掘削した面で検出した遺構と基本的に変わることがなく、粘質シルトが地山となる東半では、地山ブロック土及び褐灰色シルトを掘り下げた結果、遺構輪郭は明確となり遺構検出の判断において主観的な要素が排除できた。

整地土掘削と削り込みによる遺構面レベルの差異は0.00～0.24mである。

東半分の整地土掘削及び地山削り込みによる成果は、1）整地土内で完結したピットの認識、2）整

地土と地山を形成する土層の差異の認識、3）各遺構の輪郭の明瞭化、である。これは、西半分北東部の整地土遺存範囲についても変わることではない。

東半では区画溝以東を中心に古墳時代から中世までの溝・井戸・土坑・ピットを検出した。

なお、22溝以南については、西半と同じく削平が顕著な場所であった。ここでは488溝1条、井戸3基、ピットを確認している。

拡張区（図70・71）

拡張区とした東端から35mの場所では灰黄色粗砂（第1層）により削平が地山砂礫に及ぶ。灰黄褐色粗砂を掘削した面は、高低差がほとんどなく平坦である。この面では調査区の東端から4.0～20.5mの範囲で、東側が低くなる緩傾斜を確認した。この傾斜変換線より以東は、土層の堆積環境も西側と違って削平を受けておらず、土層の遺存も良好となる。この緩傾斜土層は、（その1・2）の標準的な土層堆積で、（その1）調査区の中央の土層と類似する。

灰黄色粗砂を掘削した面では、大和川に直交方向の畝溝を検出した。拡張区の地山は砂礫ベースであり、畝溝はこれを掘り込んで形成される。

東端で検出した緩傾斜は調査時点で1）原地形を形成した中位段丘を開析する埋没谷、2）旧河川、3）農業活動に伴う土地改変等の考えがあった。最下層の黒色シルトは人為ではなく自然堆積層と考える土層であり、3）の耕作による改変とは必ずしもいえない。昭和36年作成の地図によると南東から北西にかけて条里地割りが乱れるラインがあり、傾斜変換線はその延長上にあたる。ただし、2）とした場合傾斜に堆積する土層は流水性を示す根拠となる要素は見いだせない。緩傾斜は1995年大阪府教育委員会の調査で検出された段落ちに対応すると考えられ、この段落ちは古墳時代以前に遡ることが判明した。

緩傾斜の土層層順は、盛土・明緑灰色細砂（第2層に対応）・にぶい黄橙～明黄褐色シルト（第3・4層に対応）・にぶい黄橙色粘質シルト・褐色砂礫混シルト・黒褐色砂礫混シルト・黒褐色粘質シルト・にぶい黄褐色シルト〔（その1）-灰白色シルトに対応）〕・黒灰黄色シルトである。灰黄色粗砂（第1層）は柱状図作成ポイントにはないが、明緑灰色細砂と同じく拡張区で普遍的に堆積した土層である。2つの土層を除去した面では大和川に直交方向の畝溝を検出した。第3・4層に対応するにぶい黄橙～明黄褐色シルトを掘削下面では、座標方位と同じ南北方向の溝を検出した。にぶい黄橙色シルトは東端から約4mに分布範囲が限られており、土層の性格を明らかにしていない。褐色砂礫混シルトは同じく約4～7mの範囲に堆積した層厚約0.1m未満の土層である。土師器、須恵器破片を多く含んだ土層で古墳時代の土器を主体とするが、8～9世紀代の土器も含まれており、形成時期が下る可能性もある。また、この土層上面では424溝を検出しており、相対的な土層の評価には検討を要する。一方、黒褐色砂礫混シルトはほぼ緩傾斜の範囲に堆積した土層である。褐色砂礫混シルトと同じく、土師器、須恵器破片を多く含んだ土層である。古墳時代後期の遺物を主体的に出土した。この土層を掘削した面で427・426井戸、34・1290土坑及び、北側に分布する土坑・ピットを検出した。ピット・土坑埋土は黒褐色砂礫混シルトに近似する。ピットの一部は東西に並んでおり、建物・柵列を構成した可能性がある。ただし、埋土は0.01～0.08mしか遺存せず、精査をしたものの柱痕跡・抜取り痕跡は確認していない。褐色砂礫混シルトと黒褐色砂礫混シルトは、土層下面での遺構が少なく根拠に乏しいが、土層の堆積が限定されることを根拠として調査区東半等で行われた整地行為が土層形成に影響したかもしれない。黒褐色

粘質シルトは、427・460井戸埋土上層に類似した土層である。土層の相対的な評価は、5世紀以降の時期を考える。灰白色シルトは（その1）中央で検出した第5層に対応すると考えた土層である。出土遺物はない。東西の傾斜変換線に沿って北側に堆積する。黒灰黄色シルトは（その1）で検出した87溝埋土に対応する土層である。出土遺物はなく、緩傾斜の最深部である南北7ｍ×東西5ｍの範囲にのみ堆積した。この土層は、ラミナ状の構造であり、人為的ではなく、自然堆積と考える。

拡張区では傾斜変換線に沿って古墳時代の井戸・土坑を検出した。この傾斜変換線が解釈の点でどのような機能を持つのか検討すべき点も多いが、調査区の東端であったということもあり、周縁として境界性の意味に言及しておきたい。

遺構・遺物

第6面では古墳から中世にかけて、溝・井戸・土坑・ピットの遺構を検出した。なお、ピットはその大半を掘立柱建物を構成した柱穴と考えている。

土坑と井戸の認定は基本的に断ち割り時に湧水層と考える砂礫層に達しているか否かの判断による。砂礫層に達しているにもかかわらずに土坑とした遺構は、掘削深度や埋土の状況から井戸であると断定できなかったためであり、井戸である可能性を否定するものではない。土坑・ピットについては法量の判断から主観的な区別を行った。これは古墳時代の遺構についても同様である。

また、遺物包含層として範囲を記録し、掘削を行った部分もある。平面的な輪郭が不整合であり、埋土である土層は部分的な小異はあるにせよ、全体としては1層である。古墳時代に相当する土層として認識し、掘り下げを行った土層の中には、中世遺物を包含する土層や中世ピットを下面で検出した例があり、切り合い関係を遺構検出面で把握しきれていない包含層もある。包含層ではなく、広義の土坑など遺構であった可能性も高い。124・464・549・550・614が該当する。

なお、ピットについては、切り合い関係が明瞭に判断できるピットには平・断面に線を引いた。切り合い不明瞭なピットについては断ち割りによって先後関係を検討した。

遺物は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶器・輸入陶磁器（青・白磁器）・木製品・石製品・炉壁・焼土塊が出土した。

遺構埋土

各遺構を形成する埋土は第5面の遺構が灰色シルトとするのと違い大半は黒褐色シルトを基本とする。

調査の過程で検出したピットの埋土は、1）黒褐色シルト、2）灰褐色シルトの2種である。この埋土に混入する粗砂、地山ブロック土の割合で分け、さらに地山ブロック土は大きさ・混ざり方・量の違いで現場記録を行った。これを井戸・土坑などその他の遺構に適応させた。しかし、相対的な判断材料としてあるいは現場記録の観察点として使用したが、これらの先見的な判断は必ずしも分類の視点として有効ではなかった事例が多い。なお、遺構埋土の記述は、複文で煩瑣になることを承知しつつ、各土層について調査所見の説明を行った。その際、上・中・下層として特徴的な土層を捨象して、特に埋没過程に焦点を合わせて本文の記述を行った。

また、砂礫混灰色シルトを主体とする踏み込みは、第3・4層の範囲に対応して分布する。この第4層は層位的に細分が可能な土層であり、数次にわたって形成されたものである。遺構掘削時、ノイズとなる踏み込みは除去した。ただし、除去が完全でない遺構については、現場記録を行った。

地山

砂礫混茶褐色シルト及び整地土を掘削することによって、調査区内ではほぼ全体で遺構のベースとなる地山が露出する。

遺構のベースとなる土層は、整地土及び灰褐色地山シルト・黄色地山粘質シルト、拡張区で砂礫質シルトである。西半は第4層により南半分が削平され、また、粘土取り穴が全体を大きく攪乱している。一部120溝と1粘土取り穴の間に整地土を認識したにすぎない。視覚的にピットを中心とした遺構が少ないこともこれに起因しており、遺構の稀薄地帯として断定することはできない。東半は整地土及び灰褐色地山シルトが面を形成する。東側と南側に一部削平がみられるものの、ピットが確認できるのはこの範囲である。拡張区は砂礫質シルトが面を形成し、南側を中心にピットを検出した。

土塁

土塁の痕跡は確認していない。西半は削平が著しく、不明。東半は南北溝に沿って、ピットの密集は少ないが、土塁として認識できる盛土はない。ただし、溝埋土として地山ブロック土の混入の割合がどの断面を比較しても際立っており、区画溝内の施設廃棄後に土塁を形成した土が埋土となった可能性はある。溝埋土の地山ブロック土は、溝掘削などの土木工事以外に周辺でブロック土の供給源となる要素はない。つまり、区画溝のほとんどが例外なく地山ブロック土で埋まる段階があり、埋没段階には新たに地面の掘削を行わない限り、埋土である地山ブロック土は供給されないはずで、溝の掘削以外に土塁が取り壊されてその埋土となった可能性もある。溝・井戸の多くに堆積物として地山ブロック土がみられるのは、平地利用を前提とした廃絶後の土地利用の効率的運用のためと考えるが、地山ブロック土の供給源として最適なのは新規に井戸・溝を掘削することである。それ以外に整地行為並びに人為的な埋め戻しに使用した地山ブロック土の供給源としての土木工事は考えにくい。

また、区画溝の内側に遺構がないことを土塁の根拠にすることは、溝内部に粘土取り穴などの制約があることから積極的には評価できない。溝周辺部が第4・5面の項で述べたように削平ラインとなっていることも、遺構の稀薄を直接の根拠とできないからである。また、これに関連して、柵列等の内部施設の検討を行ったが、該当する遺構は想定していない。

整地土（図72・73）

整地土は第4層の範囲及び東端から35mの範囲以外で確認した。基本層序と一部記述が重なるが、基本的な見解を整理する。層厚0.00～0.24m。整地土は地山ブロック・褐灰色シルトブロックの混濁土と褐灰色シルトの2種類がある。地山ブロック土・褐灰色シルトは東半を中心に分布する。地山ブロック土と褐灰色シルトの層境は不明瞭である。整地土から出土したとして把握できる確実な資料がなく、時期を特定しえなかった。また、この整地土内で完結する柱穴があり、柱の自立を考慮すれば、広範囲に削平があったと考える。この整地土と地山と区別が不明瞭な箇所が東半中央南よりにあった。

整地土の範囲は、西半では第3・4層の範囲外に対応する。第3・4層に削平されなかった部分が整地土の範囲となる。東半は第1層の削平が徐々に地山に近づき、拡張区では第1層が地山上面を削り込んで存在しており、整地土と考える土層は522溝以東ではほとんど観察されなくなる。

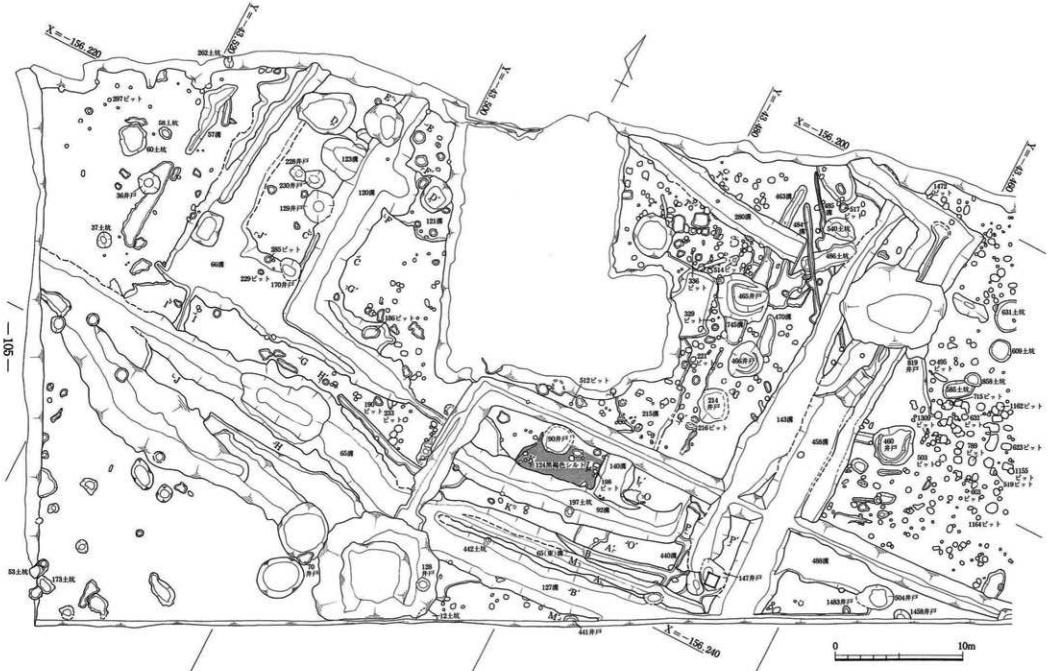


図68　（その２）第６面西半　平面図（1/300）

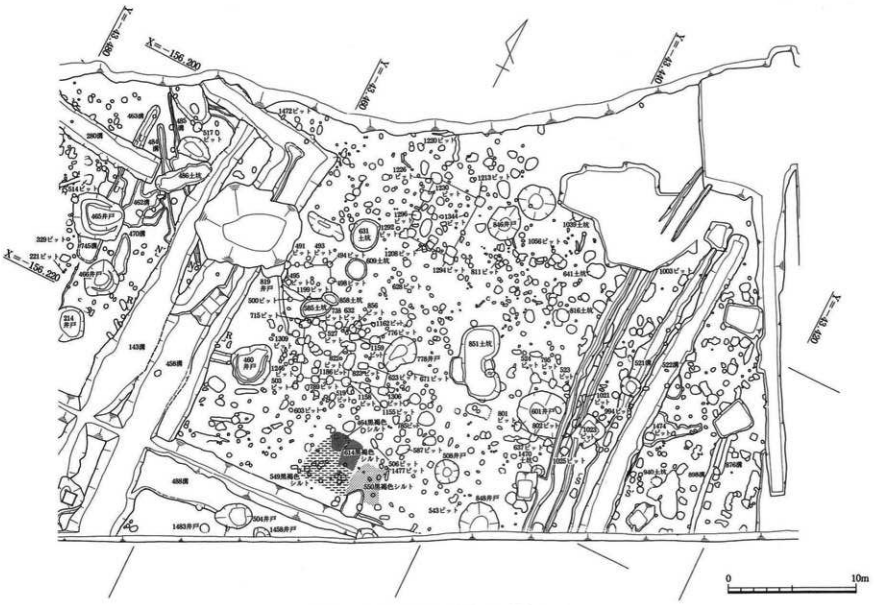


図69　（その２）第６面東半　平面図（1/300）

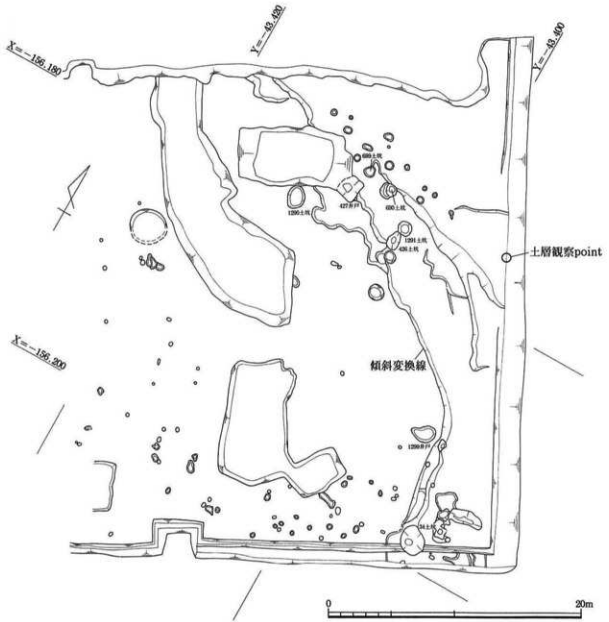
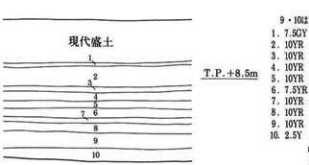


図70　（その2）第6面拡張区　平面図（1/300）



9・10は深度の浅いところのみに堆積する。
1. 7.5GY 7/1　明緑灰　細砂　ラミナあり
2. 10YR 7/4　にぶい黄橙　シルト　粗砂を多く含む
3. 10YR 6/6　明黄褐　シルト　粗砂を含む　2より粗砂の量は少ない
4. 10YR 7/3　にぶい黄橙　シルト
5. 10YR 6/3　にぶい黄橙　シルト　粒径きわめて細かい
6. 7.5YR 4/4　褐　シルト　粗砂～細礫を多く含む
7. 10YR 2/3　黒褐　粗砂～細礫を多く含む
8. 10YR 3/3　黒褐　シルト　しまりよし
9. 10YR 5/4　にぶい黄褐　シルト　管状の構造を持つ部分あり
10. 2.5Y　4/2　黒灰黄　シルト　地山面との境界は不整合

図71　（その2）東壁柱状図（1/40）

図72　（その２）土層平面の基本的見解（1/1000）

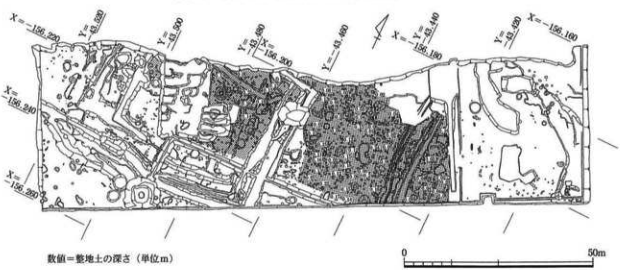


図73　（その２）整地土範囲　平面図（1/1000）

出入口（図74）

方形区画で溝の規模が縮小する場所は２箇所存在し、１箇所は66溝と92溝の間である区画溝南側正面、１箇所は92溝の東端と458溝の間である。それぞれ幅狭く、底浅い溝によって接続する。

南側正面の66溝と92溝は、区画南側を限る東西方向の溝である。66溝が北側に、92溝が南側にあり、直線的には接続せず、幅0.6m、深さ0.09mの溝で接続していたと考える。２本の溝の接続部分は22溝を検出した場所にあたり、構造的には両者の関係を連続して把握していない。区画溝の南側正面にあたる場所である。この66溝と458溝をつないだ溝埋土は茶褐色砂礫混シルトであり、66溝と92溝の上層で観察した埋土に類似する。66溝と92溝の水面レベルを調節した機能も否定できないが、66溝と92溝の埋土は、下層部分にわずかに止水堆積層を認めただけである。ゆえに、溝埋土に湛水の様相が積極的に評価できないため、水面レベル調節機能があったことは証明できない。なお、66・92溝中央の北側は特に削平の顕著な場所にあたり、区画内の施設の状況は不明である。しかし、やや離れた北東部のピットの状況を検討すれば、東半のようにピットが密集した可能性が高いと考える。66溝と92溝の間では、南北方向に並ぶピットを検出した。ピットは直径0.5～0.6mと直径0.20～0.25mの２つの規模がある。南北方向の柱穴列は２列である。切り合い関係のあるピットは南側が新しい。また、直径の小さいピットが

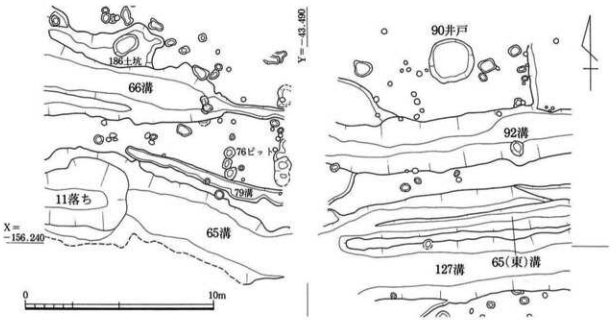


図74　（その2）方形区画溝南面　平面図（1/200）

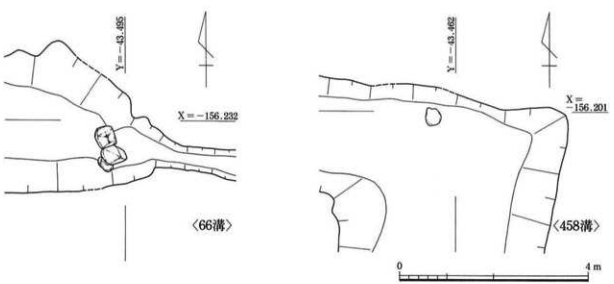


図75　（その2）礎石　出土状況（1/80）

北側に、直径の大きいピットが南側に並ぶ。橋脚・門柱など出入に関わる施設を構成したと考える。これらのピットの中には柱根をもつ76ピットがある。柱根が遺存していたピットとしては、今回の調査では唯一のピットであった。この66溝と92溝の南側には、65・127溝があり、その間で65（東）溝を検出した。65・127溝は規模は縮小させずに接続していたのであろう。65溝は中央よりやや西側に貯水・取水として機能したと考える土坑に連続する、やや蛇行した東西方向の溝である。また、65溝南側は11落ちを検出した場所で、出入に関係した構造はここでは不明である。

区画南東部の92溝と458溝は連続せず、約4m程度離れる。両溝の空間地に幅0.4〜0.6m、深さ0.1mの溝を検出した。143溝や147井戸がこの間にはあり、遺構検出面で92溝と458溝の関係は厳密には連続して確定していない。この溝の周辺でピット等は検出しておらず、溝の東側でも、南側中央で検出したような柱穴のまとまりは存在しない。南側正面の状況から類推して小規模な溝（440溝）によって92溝と458溝は接続していたと考える。440溝は埋土は茶褐色砂礫混シルトで、66・92溝の間で検出した溝と

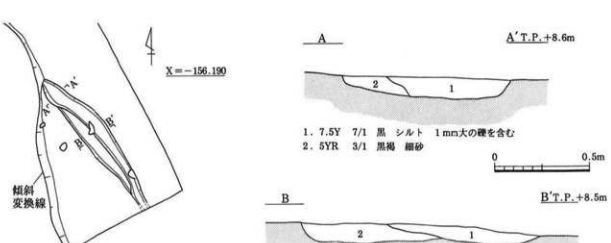


図76 （その２）424溝 平・断面図（平面図：1/200、断面図：1/20）

類似する。22溝を挟んだ北側でも同規模の溝を確認しており区画溝南東隅に小区画の溝を巡らせていた可能性がある。この溝周辺で架構施設を見つけていないが、板材等を渡して機能したと考える。区画溝内、南西部には66溝と65溝を結ぶ南北方向の溝があり、この段階には幅0.4～0.6mの小規模な溝により、溝と溝の接続や内と外の境界、敷地内の小区画を行ったのであろう。土地利用の細分化をこの場所で行わなければならなかったのは機能的に出入施設として重視されたからか。

礎石の出土状況（図75）

礎石は66溝と458溝から出土した。

礎石２点（図146－481・図147－482）は66溝から出土した。和泉砂岩製。66溝が幅0.6mに狭まる部分の西側で、礎石は平らに加工した面を下側に向け重なった状態であった。礎石の所属する溝埋土は地山ブロック土である。礎石は溝底面、東肩に接しており、廃棄は東側から行った可能性が高い。内１点は、円材柱痕跡として直径13㎝の被熱痕跡として認められる。周辺では瓦が集中して出土する様相はなかった。また、焼土層も確認していない。

もう一点の礎石は458溝の北東隅から溝底面には接せず、溝埋土の中位で出土した。礎石周囲の埋土は地山ブロック土である。溝埋土観察用の畦の北側で礎石は出土しており、礎石周囲の埋土はこの溝の埋土に関する基本的な見解と変わることはない。この礎石は平らに加工した部分が明瞭ではなく、加工段階の礎石であった可能性もある。

424溝（図76）

424は拡張区東端、緩傾斜のにぶい黄橙色粘質シルトを掘削した面で検出した南北方向の溝である。当初、切り合い関係のある２本の溝と判断したが、断面観察の結果、土層断面を切り合いとせず、最終的には一本の溝と判断した。断面の形状は屈曲が方形に近いU字形である。溝底面は南が低い。幅0.5～0.8m、深さ0.3mである。埋土は、下層は黒褐色細砂で、上層は黒褐色シルトで砂質である。この溝の周辺ではピットを４基確認した。埋土は上層の黒褐色シルトに類似し、切り合い関係から溝より新しいピットである。西・東半の第６面に相当する面で検出した遺構と考える。出土した瓦器椀により、時

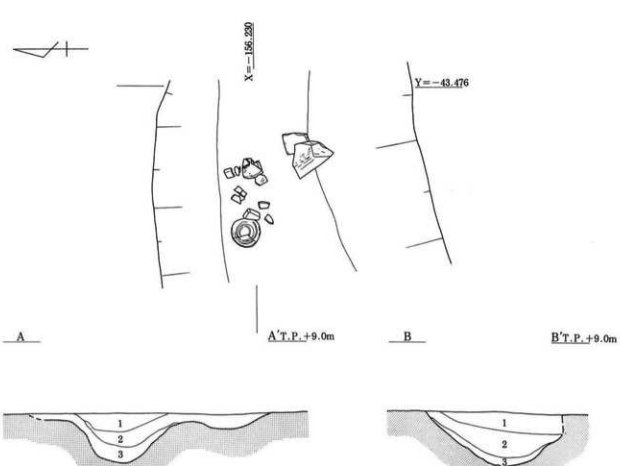


図77　（その2）65（東）溝　平・断面図 (1/20)

期は13世紀後半から14世紀前半の溝と考える。

65（東）溝（図77、写真図版35）

65（東）は92溝・65溝の間で検出した幅2.18m、深さ0.46mの東西方向の溝で、東側で2条に分岐する。当初、22溝を挟んで65溝の延長上と連続する遺構と考えて西側から掘削を行ったため、65（東）溝と呼称した。北側は幅0.65m、深さ0.09m、南側は幅1.00m、深さ0.58mある。溝方位は座標方位と同じ東西方向で、分岐した北側がやや北に角度を振る。この65（東）溝は調査時東側の分岐に関して溝埋土の堆積層順とするか、2条の溝として時期の違う別の溝とするかという2つの考えがあった。溝断面Aの方は、1条の溝として機能した際の分層であり、溝断面Bの方は2条の溝として機能した際の分層である。断面Aは2の埋土を2条の溝埋土の連続として把握した場合の分層を示す。断面Bの方は1埋土を北側の溝埋土として考え、2・3の埋土を切る埋土とする。検討の結果、断面Aの2以下の埋土は粘性のある暗灰黄色シルトを主体とし、他の溝の埋土と違っており、下層から出土した遺物の時期は上層より古い事実から、堆積環境の上下ではなく、切り合い関係の新旧と考える。65（東）溝の東側は茶褐色砂礫混シルトが一定程度堆積しており、これを除去した段階で、65（東）溝と458溝の構造的な関

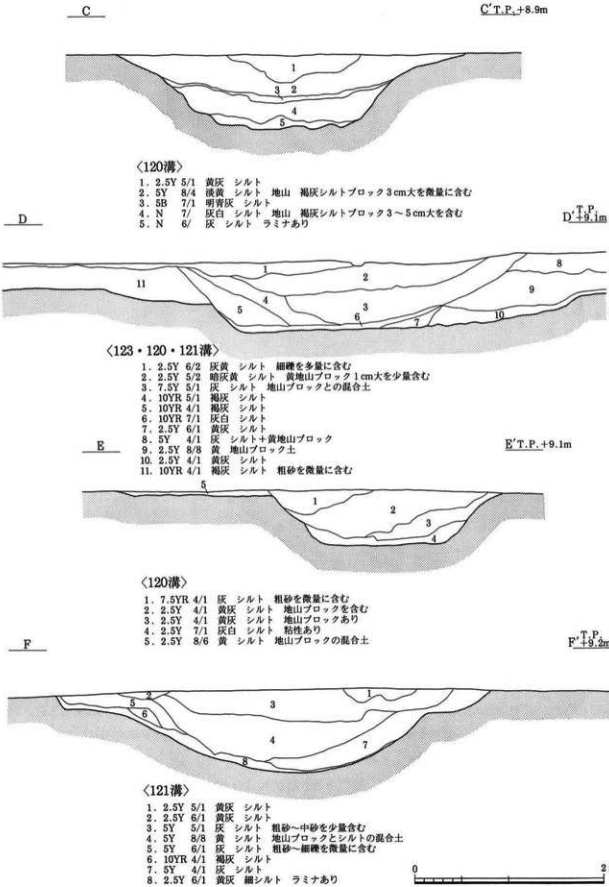


図78 （その2）120・121・123溝 断面図 (1/40)

係は不明である。埋土は、下層は灰白色シルトは止水堆積層、中層は地山ブロックを含んだ暗灰黄色シルト、上層は黄灰色シルトを基本とする。流水性の堆積物はみられない。遺物の所属層は、中層以下の暗灰黄色シルトである。出土遺物には土師器小皿、土師質羽釜、東播系こね鉢、瓦器椀・小皿がある。上層と下層で明瞭に分離しえた西側部分下層から出土した瓦器椀はⅡ－3～Ⅲ－3期に所属しており、それ以外は既述の通り遺物の評価を溝の継続時期とするか、切り換え・掘り直しの時期とするかによって、評価が分かれる後出の遺物と混在する。

121・123溝（図78）

121・123は区画内で検出した溝である。遺構検出時には東西方向の溝と考えたが、120溝に切られた状態で楕円形の形状を最終的に示した。楕円形に完結した形状を示しており、溝と呼称するが、土坑として捉えられなくもなく、他の溝と同等には扱えない。東側には幅4.5m、深さ0.49mで、楕円形部分の埋土が連続し、1粘土取り穴に接する。この部分を掘削した面でピットを検出した。123溝は120溝と切り合い関係を持ち、121・123溝→120溝で120溝の方が新しい。埋土は地山ブロックを少量含むシルトであり、地山ブロック土を主体とする120溝との対比は明瞭である。123溝は、土師器小皿、瓦器椀、瓦器小皿、土師質羽釜、石製硯が出土した。

120溝（図78、写真図版36）

120は区画内66溝に接して検出した南北方向の溝である。幅3.23～4.09m、深さ0.73～0.88mである。遺構検出時、埋土上層が地山ブロック土で埋まっており、遺構検出時、形状の認定が不明瞭な遺構であった。66溝の形状を確定し、120溝の形状を認識した。埋土は、下層と中層に止水堆積の灰色シルトが入るほか、地山ブロック土で埋まる。中層の灰色シルトは埋没の一小間期かもしれないが、ほぼ一時に埋め戻した可能性が高い。120溝は13世紀代の遺物が多く、土師器小皿、土師質羽釜、東播系こね鉢、瓦器椀、白磁碗である。遺物量は相対的に少ない。

66溝（図79、写真図版36）

66は調査区の西半で検出した区画の南北と東西方向の溝である。南北方向の溝部分は、幅3.90～4.15m、深さ0.53～0.74mである。東西方向の溝は幅4.70～5.35m、深さ0.48～0.61mである。埋土は、下層はラミナが観察できる褐灰色シルトで、止水堆積層と考える。中層は地山ブロックと褐灰色シルトブロック土でブロック構造が顕著である。上層は褐灰色砂礫混シルトで、第5層と同じである。埋没過程は他の溝と画一的な現象を示しており、区画溝の標準的な堆積層順である。主として13～14世紀中葉を主体とした遺物が出土し、土師器小皿、瓦器小皿、瓦器椀、青・白磁碗、東播系こね鉢、土師質羽釜、平・丸瓦、礎石があった。123溝と接続するかと考えたが、調査の結果、連続性は否定された。458溝に対応して南北方向の北側部分は二段掘りになる機能の同一性が指摘できる。

65・127溝（図79・80、写真図版35・36）

65・127は区画南側で検出した東西方向の溝である。22溝があるため中央部が途切れるが、連続する2つの遺構と考える。座標X＝－156.240ライン上の溝であり、区画南側中央でやや南側に膨らむ。2溝に西側を切られるため、西方向の展開は不明である。幅3.20～5.16m、深さ0.46mである。埋土は下

層は灰色シルトで止水堆積層と考える。中層は地山ブロック土の混じる黄～灰色シルトブロック土で、ブロック構造が顕著である。上層は褐灰色粗砂混シルトで、第5層と類似する。

65溝は22溝から約4mの場所を掘り込んで、水溜施設を設置する。この水溜施設は、取水と貯水の両方を目的としたと考える。幅5.16m、深さ2.15mである。埋土は、下層はラミナが顕著で粘性のある青灰～灰色シルトで、止水堆積層である。中層は地山ブロックの混じる褐灰～灰白色シルトで、ブロック構造が明瞭である。上層は黄灰色シルトで、第5層に類似する。ここから土師器小皿、土師質羽釜、東播系こね鉢、瓦器小皿、瓦器椀、瓦質鍋、瓦質甕、瓦質仏花器、常滑壺、常滑甕、青・白磁、平・丸瓦、石製硯が出土した。溝の継続時期としては15世紀の遺物が含まれており区画溝との関係で比較すれば長期にわたる。

66溝・65溝（図79、写真図版36）

66溝と65溝は幅0.7m、深さ0.16mの溝で接続する。この場所に断面観察用の畦を設定して掘削を行った。埋土は褐灰色シルトを基本とする。この溝埋土の掘削を行うと、地山直上でブロック構造が明瞭な柱穴を3基確認した。上層を覆うのは茶褐色砂礫混シルトである。

66溝と65溝は、基本的な堆積層順は同じであり、両者の埋没過程に特に相違点はない。上層には第5層として掘削した土層が堆積していた。

92・140・215溝（図80、写真図版36）

92は方形区画南面に位置する東西方向の溝である。幅2.52～2.72m、深さ0.3～0.4mである。埋土は、下層は黒褐～褐灰色シルト、中層は砂礫を多く含む暗褐色シルト、上層は地山ブロック土を多量に含む黒褐色シルトである。他の溝のように最下層に止水堆積層がない。土師器小皿、土師質羽釜、東播系こね鉢、瓦器椀、青磁碗、常滑甕、石製硯が出土した。

140溝は92溝に南北方向に接続する。幅2.9m、深さ0.33mである。埋土は下層黒褐色シルト、上層は粗砂を含む灰褐色シルトである。92溝と基本的に切り合い関係はなく同時期の溝である。

22溝以北で140溝の北側に相当するのは215溝である。幅3.1m、深さ0.45mである。215は溝としたが、溝掘形としての立ち上がりは不明瞭である。掘削は皿掘りに近い状態で掘り下げを行ったものの、溝掘形の形状を明確に示すのは東肩のみである。埋土は第5層である土層の堆積と類似する粗砂混シルトを基本としており、地山ブロック土を多く含むところがある。下層に66・92溝の下層の止水堆積層に対応するかと考えるシルトが部分的に堆積していた。平面を検出した際は、140溝掘形の延長上に215溝肩を想定したが、断面での立ち上がりはこれに対応していない。溝埋土を除去した底面では複数のピットを検出しており、他の溝ではこの状況はなく、他の溝と同質ではない。

143・458溝（図80）

143・458は方形区画溝の南北方向の溝で、東側を画する。143・458溝は切り合い関係を持ち143溝→458溝で458溝が新しい。2つの溝の最上層は第5層に相当する赤灰色砂礫混シルトが覆っており、2つの溝の切り合い関係・立ち上がりはこのシルト層上面では観察できない。

143溝は幅1.50～3.35m、深さ0.40～0.82mである。埋土は、下層は灰白～明青灰色シルトであり、止水堆積層である。中層は黄灰色シルトで、場所によって地山ブロック土が入りブロック構造が顕著で

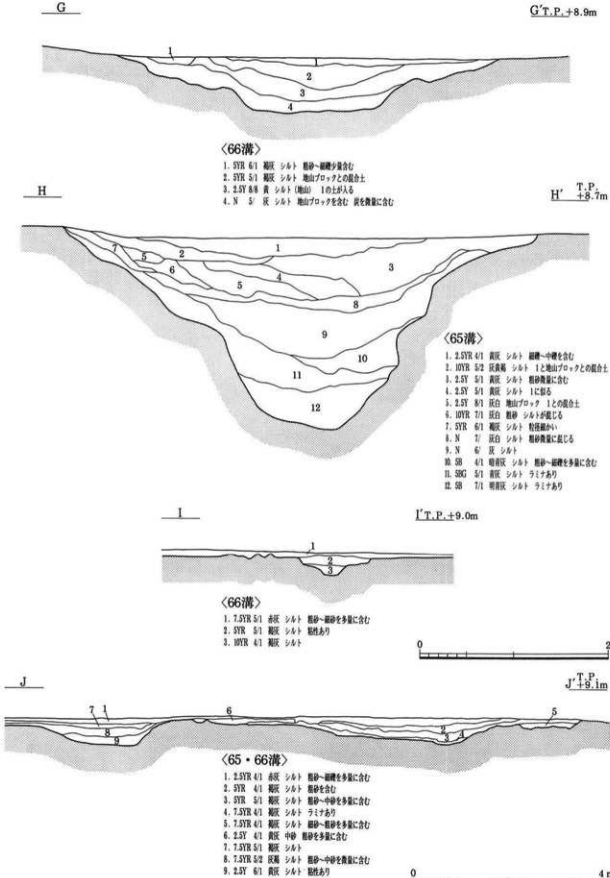


図79　（その2）65・66溝　断面図 (1/40・1/80)

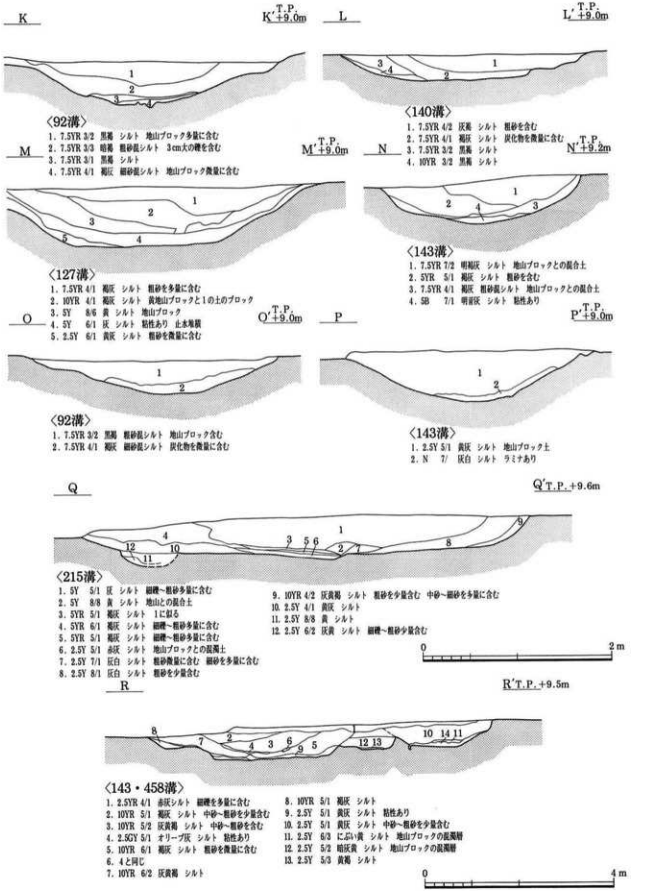


図80 （その2）92・127・140・143・215・143・458溝 断面図 (1/40・1/80)

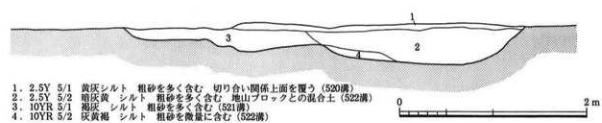


図81　（その2）521・522溝　断面図（1/40）

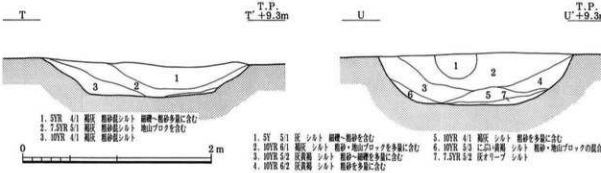


図82　（その2）280溝　断面図（1/40）

ある。断面Rは143・458溝の切り合い関係を確認するために設定した断面の記録である。この断面Rでは切り合い関係の有無が不明瞭な遺構を確認した。平面的には143・458溝があるため、その形状を確認していない。溝埋土掘削後の地山の形状から土坑かもしれない。土師器小皿、土師質羽釜、東播系こね鉢、東播系甕、瓦器椀、瓦質甕が出土した。12～13世紀の遺物及び14世紀代の遺物があり量比など検討課題がある。

458溝は幅4.4～4.7m、深さ0.67～0.70mである。埋土は、下層は止水堆積の黄灰色シルト、中層は地山ブロックを多量に含んだ褐灰色砂礫混シルト、上層は褐灰色砂礫混シルトである。東西方向の北側部分で中央をやや掘り窪めて、溝の形状を2段にする。溝の幅は、65・127溝ではなく、66・92溝とほぼ同じであり、区画溝は東西方向がやや狭く掘削されたということができる。区画溝の各隅は機能的にそれぞれ違った意味を持ち、おそらく欠失した北西隅が北東隅に対応したと考える。458溝は調査区北側で東西方向の溝となり、ここでも143溝と切り合う。西側部分は攪乱のため不明である。なお、堤防に近接した場所で127溝と接続しており、南壁断面の土層観察した結果は両者に切り合い関係は認められない。土師器小皿、土師質羽釜、東播系こね鉢、東播系甕、瓦器小皿、瓦器椀、瓦質火舎が出土した。

521・522溝（図81）

521・522は458溝から31.7m東側で検出した南北方向の溝である。なお、溝検出当初、1条の溝として認識しており、2つの溝埋土を覆う黄灰色シルトを520溝として掘削を行い、一段掘り下げた段階で2条の溝として認識した。切り合い関係があり、521溝→522溝で522溝の方が新しい。黄灰色シルト上面では2条の溝の検出はできなかった。北部分は攪乱により不明。地山の標高が極端に下がることから削平されたのであろう。521・522溝底面の標高は南側が低い。1995年大阪府教育委員会の調査区との連続性は把握するに至っていない。

521溝は幅1.15～1.59m、深さ0.07～0.21mである。埋土は褐灰色砂礫混シルトである。瓦器椀・常

滑焼甕が出土した。

522溝は幅1.6～1.9m、深さ0.27～0.34mである。埋土は暗灰黄色砂礫混シルトと地山ブロック土で、ブロック構造が明瞭である。2条の溝の上層は第5層に相当する黄灰色砂礫混シルトが覆っており、その上面では切り合い関係は摑めない。出土遺物には瓦器椀、土師質羽釜がある。

280溝（図82、写真図版36）

280は区画内北東部で検出した東西方向の溝である。280溝は幅2.1m、深さ0.10～0.64mである。埋土は最下層は粘性のあるシルトで、止水堆積層と考える。下層から上層は、褐灰～灰黄褐色砂礫混シルト、もしくは、ブロックの単位が明瞭な、地山・褐灰色シルトブロック土である。143溝埋土の堆積と類似する。溝底面では体部を欠いた瓦質甕が、口縁部の接合関係を保ったままの状態で出土した。出土遺物には土師器小皿、東播系甕、瓦器椀、瓦質甕・火舎、石鍋があり、458溝に対応する時期を考えている。なお、溝埋土上面でピットを1基検出した。

57溝

57溝は66溝の西側で検出された。残存長3.3m、深さ0.6mである。方位は、66溝に平行する。断面の形状は隅丸の台形状であり、下半が地山ブロックとシルトの混濁層で上層が粒径の細かいシルトである。溝として認識できる遺構では西限にあたる。土師器小皿、土師質羽釜、瓦器小皿、瓦器椀、瓦質羽釜、軒平瓦が出土した。120溝等と対応する時期を考えた。

463・745溝

463は461溝に接して検出した溝である。切り合い関係は463溝→461溝で、461溝が新しい。幅1.2m、深さ0.2mである。また、南側の465井戸を挟んで745溝を検出した。463溝と連続した溝かもしれない。465井戸との切り合い関係は不明瞭であり、465井戸埋土上面では2つの溝は検出できなかった。745溝は幅1.30m、深さ0.19mである。なお、214井戸を挟んで南側は茶褐色砂礫混シルトの堆積範囲であり、この土層の掘削を行った面で残りは悪いが南北方向の溝を検出した。

470溝

470は466井戸の北側、463・745溝の東側で検出した溝である。幅1.0m、深さ0.15mである。遺構として連続はしていないが470溝の北側でも南北方向の溝を検出しており、2つの溝を関連づけて考えてもよいかもしれない。また、方位が同じということで470溝は463・745溝と同時期かと考えていたが、出土した土師器小皿、瓦器椀によって、後出の可能性が高い。また、462溝と連続して把握はできなかった。

また、中世以前の溝として878・898溝、484・485溝を検出した。復元した建物と方形プランのピット分布、包含層・近世溝・11落ちから出土した土師器、須恵器の土器資料との関係が指摘できる。

878・898溝

878・898は調査区東半、522溝より東に5.7m離れて検出した南北方向で平行する2条の溝である。878溝は幅0.5m、深さ0.2mである。埋土は黒褐色シルトである。底面は南側が低い。898溝は幅0.50m、

深さ0.16mである。878溝から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に比定できる須恵器蓋・鉢・甕が出土した。

484・485溝

484・485は調査区東半、458溝区画内で検出した北西から南東方向で平行する2条の溝である。484溝は幅0.5m、深さ0.13mである。埋土は褐灰色シルト（7.5YR5/1）である。下層に地山ブロックを含む。485溝は幅0.3m、深さ0.13mである。埋土は484溝と同じである。485溝から8世紀前半の須恵器坏蓋が出土した。

区画溝の変遷（図83）

検出した溝は、長期間の持続的な使用・掘り直し等が行われたことを前提として以下の変遷モデルを提示しておく。

区画溝の最終景観は66溝、92・140溝、65・143溝、230・458溝、488溝が機能する段階で、66溝と458溝間46.4m・458溝と92溝間30.7m・458溝と143溝間36.7mの最大のモデルとなる。66溝と140溝間34.0mは140溝の機能を重視した場合のモデルである。区画内に付加した280溝と92溝間24.7mもこれに含まれる。この際、522溝が東限を画すると考えており、66溝と522溝間は81.1mである。143溝と521溝間35.5mと458溝と522溝間31.7mは、143→458溝への変換と連動させて考えたモデルである。東西方向では120溝と143溝間が区画内の面積が最小モデル120溝と143溝間34.2mとなる。ただし、同時期に併存した可能性はあるものの、それぞれ外側に溝の掘り直しを行った段階に土器資料と埋土の見解から時期差が存在すると考れば、120溝と458溝間37.6mと66溝と143溝間34.0mのモデルが導き出される。しかし、後者はその可能性が低い。120溝と521溝間72.7mは120溝→66溝（143溝→458溝と同時期ではない）を前提としたモデルである。

ピット（図84・85）

ピットは東半を中心に総数1000基以上確認した。柱根遺存のピット・柱痕の明瞭なピット・抜取り・完形土器出土ピットがある。大半は掘立柱建物を構成する柱穴と考える。しかし、柱痕等の痕跡は不明瞭なピットが多い。柱根が遺存したピットは76のみである。検出したピットは互いに切り合い関係を持つものがあり、形成時期は一様ではない。ピットの分析は、ピットの形状・法量・埋土の状態・出土遺物の分析・遺物の出土状態・グルーピングの有無等を観察点として行った。

ピットの平面形は方形（隅丸方形を含む）・長方形、円形、楕円形、不整形に分類できる。方形プランのピットは調査区東半、東よりで多く分布する傾向にあった。断面形は方・長方形、半円形、皿形、不整形に分類できる。埋土の分類視点は、既述を含めて1）地山ブロックの大きさ・混入度、2）粗砂の混入度、3）粘性、4）土色（主として黒褐・灰褐色）である。これにより、中世ピットは砂礫の混入が顕著で、古墳時代の遺構は黒褐色粘質シルトの傾向があった。平面と断面の対応関係は、平面方形・長方形が断面長方形・方形に対応するが、全体の傾向に規則性はない。出土遺物は古墳時代～中世の遺物が出土しており、同一遺構面で複数時期のピットを確認した。ピットを掘削したベースとなる土層は、整地土及び地山シルト・砂礫層である。ピットを検出した範囲は、既述のとおり、66溝から522溝の範囲に集中する。深さに関しては、削平度の高い場所のピットが浅くなるという通有の現象以外に、分布の検討をおこなったものの特徴は見いだせない。掘立柱建物として報告を行った建物は、計5棟である。

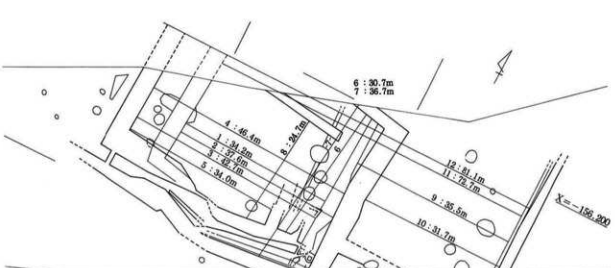


図83　（その２）方形区画溝　横式図及び法量（1/800）

復元案としては、現場作業及び整理作業において複数存在した。が、多くは時期・構造に問題のある掘立柱建物であり、報告にあたって抽出を行った。検出したピットの総数と掘立柱建物のグルーピングに使用したピットは全体の５％にも満たない。平面形が方形のピットは、調査区の東半に集中する傾向があり、この内、２・３・４・７掘立柱建物を復元した。

ピット・溝の方向（図86・87）

今回調査を行ったピットは、既述のとおり、掘立柱建物を構成する柱穴が大半であったと考える。掘立柱建物として報告を行った建物は計５棟であり、ピットの総数対建物数では、建物を構成するピット数を差し引けば復元案は少ない。調査では、グルーピングの仕方によって、恣意的であることを免れなかった。区画溝の性格を構造的に把握するには、それに関係する掘立柱建物の構造と密接に関係しており、不可欠の作業であったが、その妥当性はともかくとして掘立柱建物の復元としては５棟のみの報告となった。

掘立柱建物の属性の検討には、柱穴を個別に評価する方法とグルーピングした際に生じる属性を検討する方法がある。後者には建物規模、方位等がある。今回の調査では掘立柱建物としては復元できないものの、柵列を含めて直線的に関係したと考えられる柱穴列があり、ここでは方位の検討を行った。

単に柵列としてではなく、構造物として掘立柱建物であった蓋然性の高い遺構と思う。実際の作業は溝方位との比較を中心にした検討作業となる。方向性がある程度その時期の土地利用を反映して時期性を示すという前提としている。ピットでは、出土遺物がない、または細片を出土したピットが多く、切り合い関係を持つことによる遺物混入の顕著なピットが主観的にも、相当数あった。

まず、検出した溝の方向は、中世区画溝は東西・南北方向ともに座標方位とほぼ同じ方向である。

ピットの方向性は、座標方位とほぼ同じ方向を示すピットと、そうではなく溝方位との関連で把握できるピットがある。この結果は既述の通り、柵列としての評価だけではなく、掘立柱建物としての確度の高いまとまりを含んでいる。

図84　（その2）井戸・土坑・完形土器埋納ピット分布図 (1/1000)

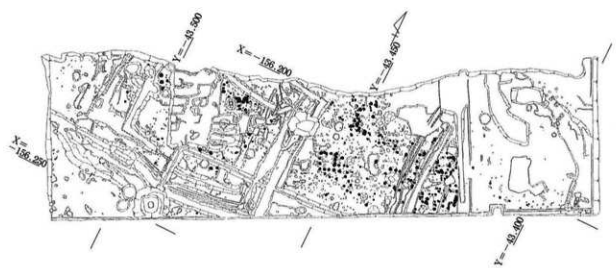


図85　（その2）平面方形プランのピット分布図 (1/1000)

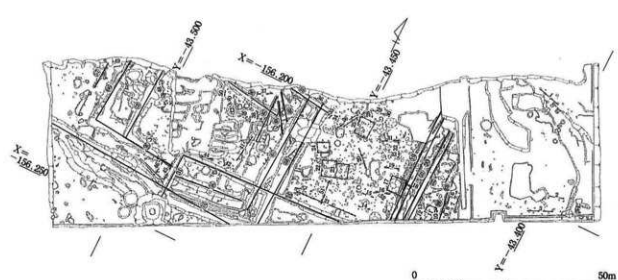


図86　（その2）溝・ピットの方向 (1/1000)

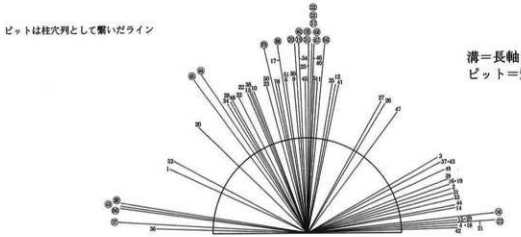


図87　（その２）溝・ピットの方向

井戸について

井戸は総数19基確認した。これらの井戸は規模・本体構造によって４分類できる。なお、上部構造を井戸枠、本体構造を井側・桶側として記述する。井戸枠（上屋構造）が明らかな井戸は検出していない。

井側を本体構造にもつタイプ　147・819

桶側を本体構造にもつタイプ　466

素掘り大　90・129・214・465・504・848・601・846

素掘り小　36・128・170・230・441・508・1458・1483

228・230井戸（図88）

228と230は66溝と120溝の間で検出された円形の井戸である。129井戸が近接する。周辺での関連ピットは検出していない。切り合い関係は平面及び断面で検討した結果、228井戸→230井戸で230井戸の方が新しい。228井戸は直径2.48m、深さ7.34mである。断面形は、ほぼ垂直に立ち上がり上部で広がる。須恵器大甕が土層中位から出土した。埋土は、下層は地山ブロック土でブロック構造が顕著である。上層は黄色地山ブロック１～３cm大を少量含んだ褐灰色シルトである。230井戸は直径1.61m、深さ7.07mである。埋土は、下層は地山ブロック土で、ブロック構造が顕著である。上層は単位が３～５㎝の地山ブロックを含んだ灰褐色シルトである。東播系こね鉢、瓦器椀が出土した。

36井戸（図88）

36は66溝の西側で検出された円形の井戸である。（その２）の調査区内では、西端で検出した井戸で、削平が遺構面直上まで及ぶ場所にあたる。直径0.85m、深さ2.54mである。36井戸に接して検出した南北方向の溝状遺構は、断面の検討結果、踏み込み集中部として認識した。切り合い関係は踏み込みが新しい。36井戸は第５面検出時、灰色砂礫混シルトを埋土とするピットが上部で切り合っていたことにより認識した。土層断面の１の埋土がピット埋土に該当する。埋土は、下層は灰褐色シルトブロック土で、ブロック構造が顕著である。中層は粘性のある黒褐色シルトである。上層は２～３㎝大の地山ブロックを少量含んだ褐灰色粘質シルトである。井戸Q掘削は青灰色シルト～極細砂まで行っていた。土師器小皿、土師質羽釜、瓦器小皿、瓦器椀、青・白磁碗が出土した。また、下層下位から刀子柄、曲物底板、建築部材？等の木製品が出土した。

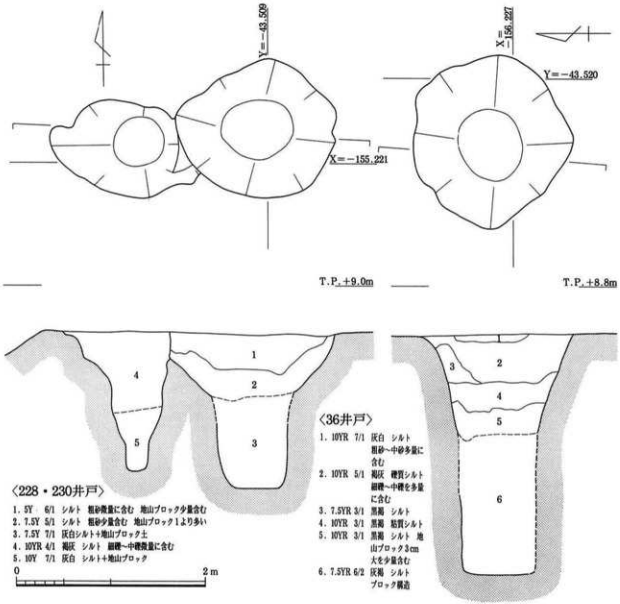


図88　（その2）228・230・36井戸　平・断面図（1/40）

170井戸（図89、写真図版37）

170は、86溝と120溝の西側接点で検出した円形の井戸である。長軸1.87m、短軸1.62m、深さ2.4mである。南北方向の断面を検討した結果、66溝が新しい。溝の交差する場所に存在した井戸として、溝設定の際の規制要因となった可能性がある。埋土は、下層は灰褐色ブロック土でブロック構造が顕著である。中層は粘性を帯びた灰色シルトである。中層と上層の間には、灰白色シルトのラミナが入る。上層は地山ブロック1cm大を少量含む灰色シルトである。井戸上部には地山ブロック土を主体とした溝埋土が明瞭である。土器の一括資料はすべて上層に所属する。上層の瓦器椀は上向きと下向きの2つに分かれ、南寄りに重ねた状態で出土した。ここに遺物が集中するが、井戸掘形がやや曲線的になる部分であり、土器埋納に際し整形を行ったかもしれない。土師器小皿、土師質羽釜、瓦器小皿、瓦器椀、唐草文軒平瓦、丸・平瓦が出土した。

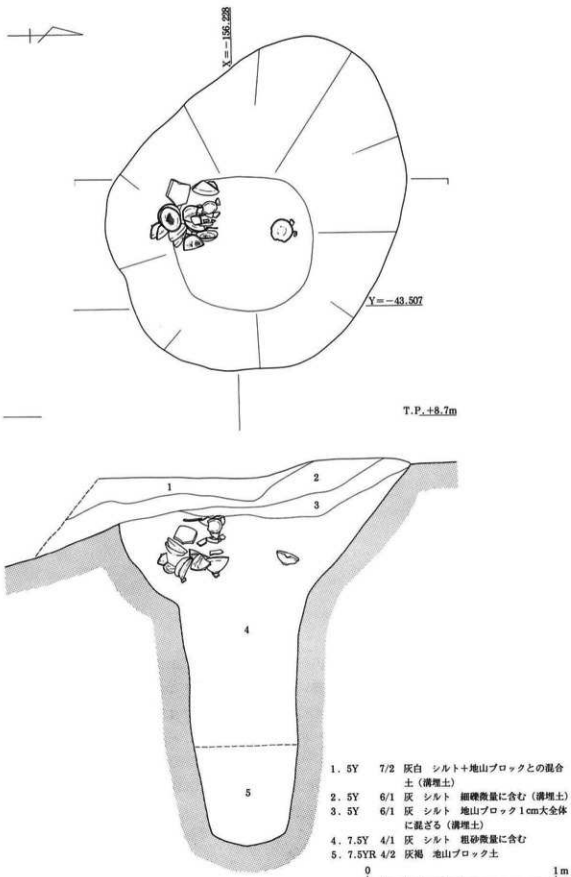


図89　（その2）170井戸　平・断・立面図（1/20）

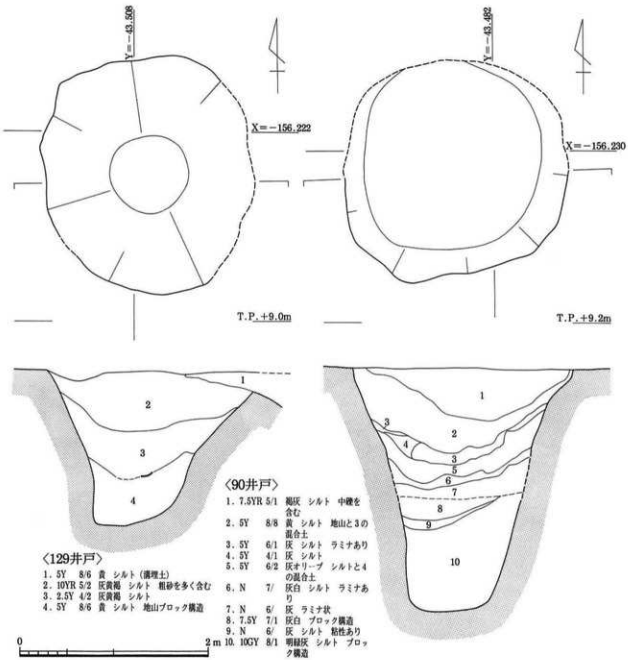


図90　（その2）129・90井戸　平・断面図（1/40）

129井戸（図90、写真図版38）

129は120溝の西肩で検出された円形の井戸である。直径1.25m、深さ1.64m。切り合い関係は129井戸→120溝で120溝が新しい。直径1.50m、深さ1.64m。埋土は、下層が地山ブロック土、中層～上層は砂礫を含んだシルトである。土師器小皿、瓦器小皿、瓦器椀、複弁蓮華文軒丸瓦、白磁碗が出土した。

90井戸（図90）

90は22溝の南肩で検出した円形の井戸である。直径1.20m、深さ1.28m。埋土は、下層は地山ブロック土でブロック構造が明瞭である。中層はラミナが観察でき止水堆積層と考える灰～灰白色シルトと灰オリーブ色シルトブロック土の互層である。上層は褐灰色シルトと地山のブロック土で、ブロック構造が明瞭である。木製品は中層に主に所属する。土師器小皿、瓦器椀が出土した。

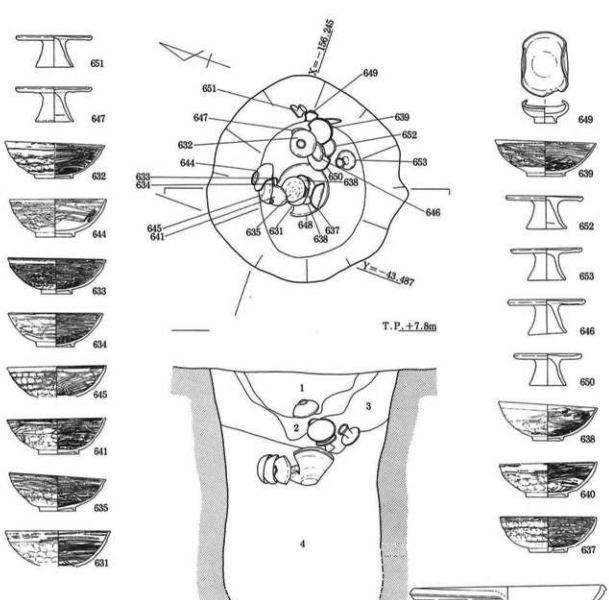


図91 （その2）128井戸 平・断・立面図 (1/20)

128井戸（図91、写真図版37）

128は区画溝の南側正面、11落ちの東掘形で検出した円形の井戸である。上部は11落ちが削平する。直径1.05m、深さ1.70mである。

埋土は下層～中層が地山系ブロック土で、ブロックの単位が明瞭である。上層は地山ブロックを一部に含む粘性の強い灰～黒色シルトである。土器の一括資料は地山系ブロック土の上層に所属しており、その箇所の土層は黒色シルトの割合が多く、井戸埋土上層の資料として把握する。底部は地山砂礫層までの掘り込みを行っている。

土器の一括資料は、井戸の中央に据えられた東播系こね鉢を中心として出土する。東播系こね鉢を容

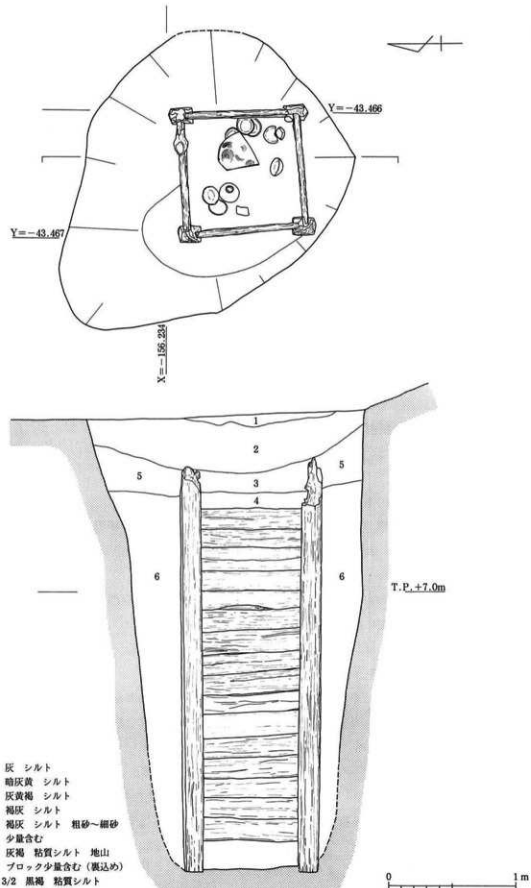


図92　（その2）147井戸　平・断・立面図（1/30）

器として、こね鉢の中の瓦器椀は上向きに、こね鉢の外の瓦器椀はこね鉢の口縁に接して横向きに置く。脚台付き土師器皿と2個体の瓦器椀はこね鉢の東側やや上位から出土した。その中には底部を東向きにした耳坏を含む。こね鉢の中にあった瓦器椀から樹種が松である削木が出土した。また、土器一括資料を囲繞する土層は、有機質・植物繊維を多く含む。

これに加えて、初期須恵器体部片が出土した。11落ち東方上面では古墳時代12土坑を検出し、また、北側では124黒褐色シルトの検出したこと、11落ちからも古墳時代遺物がまとまって出土したことから、これより以南に古墳時代遺構面を連続的に捉えていくことが可能かと考える。

147井戸（図92、写真図版37）

147井戸は調査区の中央部、区画溝の南東隅の場所で検出した。上屋構造は143溝の掘削のため不明。井側を持つ構造である。長軸1.28m、短軸1.57m、深さ3.57mである。平面形は北東にのびる円形の形状と考える。ただし、井戸裏込め掘削時は、平面はほぼ円形を示しており、真円であった可能性も否定できない。断面は直立しており、井側を納めるための最小限の掘削であった。

井戸掘形は、井戸中位で隅柱から約0.3mの距離を保っており、計画的に掘削して井側を据えたといえよう。区画溝の南東隅にあり、溝施工時に位置的な規制機能がこの場所にあった可能性が高い。ただし、143溝埋土は147井戸埋土と切り合い関係があり、147井戸が埋まった後、143溝の掘削が行われる。

井側は座標方位に沿って設定する。隅柱を四隅に配し、対面する面に枘を穿ち長方形の枠板を落とし込む。隅柱は稜をもった断面五角形で、緩やかに外反し、先端を下方向にして据える。自重に耐えれず、隅柱は地山砂礫に陥没していた。北西隅柱の下端部には、隅柱に先端を尖らした材を支持材として添わせる。

井側の基本埋土は粘性のある黒褐色シルトである。微細に観察すれば、ラミナ状の細かな単位を持つシルト層である。上層は隅柱先端の腐食を境として、灰～暗灰黄色砂礫混シルトで埋まる。143溝埋土上層に相当すると考える。裏込め土は地山ブロック土を少量含む灰褐色シルトである。ブロックの構造にはならない。

井側は南北1.08m×東西1.02mの正方形に材を組む。井側内の残存部までの直方体の体積は、約2.3㎥である。下部東側の枠板に接して長方形の板材5枚を縦に配しており、枠板が必ずしも長方形ではなく長辺の上下に反りのある材が存在することから水漏れ等を防ぐ機能があったと考える。なお、出土した木製品はすべて井側内埋土から出土した。

調査時に図化した井側内の土器は、T.P.+7.7mで瓦器椀、土師器皿、T.P.+7.1m～T.P.+7.2mで瓦器椀、土師器皿、須恵器大甕体部片、T.P.+7.0mで土師器皿である。その他の土器、木製品は、T.P.+7.0m未満の断ち割り時に出土したものである。

147井戸の南西に近接する井戸は楕円形で長径1.80m、短径1.15m、深さ1.62mである。断面の畦設定が不適切であったため147井戸との切り合いは不明。埋土は粘性をもった黒褐色シルトである。

既述の遺物を含め、土師器小皿・大皿・耳坏、土師質羽釜、黒色土器A類、瓦器小皿、瓦器椀、白磁碗、砥石、用途不明の石が出土した。木製品には刀子、木簡、下駄、木栓、容器未成品、曲物、建築部材、加工木、不明木製品がある。また、竹及び竹の根も数点出土した。

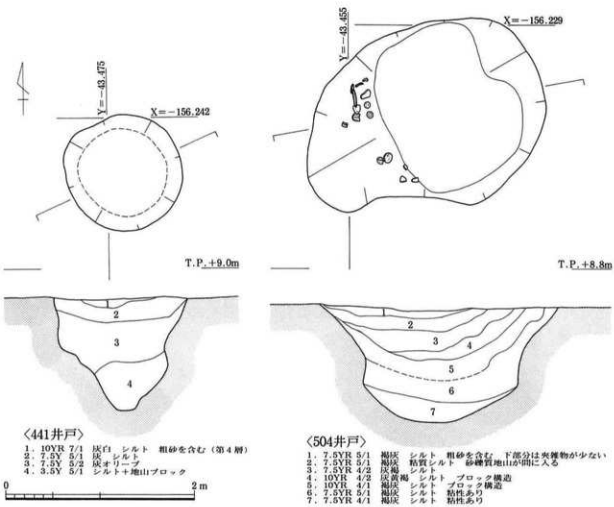


図93　（その2）441・504井戸　平・断面図 (1/40)

441井戸（図93）

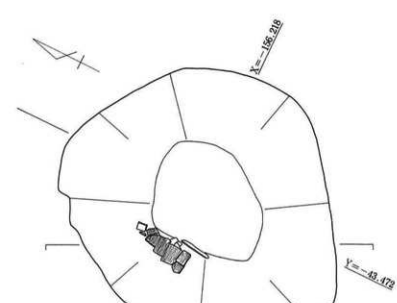
441は127溝の北側で検出した円形の素掘り井戸である。遺構の南側部分は大和川の堤防の下にあり、完掘を行っていない。直径1.22mを測り、深さ1.20mまでが調査対象である。

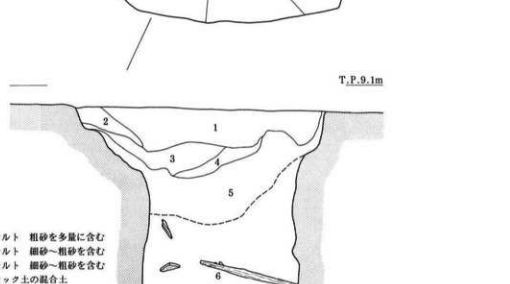
埋土は中層は地山ブロック土が混じる灰色シルトブロック土であった。上層は灰色粗砂混シルトである。土師器小皿、瓦器小皿が出土した。

504井戸（図93）

504は調査区東半、488溝の東側に接して検出した不整形な井戸である。平面形は中央のくびれがなければ、楕円形ともいえる。断面の形状はU字形を基本とし、上方で広がる。特に南西部には緩やかに拡張し、段をなした掘形直上に土師器皿、瓦器椀、土師質羽釜、平瓦が出土した。504井戸には近接して1458・1483井戸がある。

法量は、長軸2.97m、短軸1.96m、深さ2.72mである。埋土は、下層はラミナがあり粘性のある褐灰色シルトで、止水堆積層と考える。中層は褐灰～灰黄褐色シルトで地山ブロック土との混合土で、ブロックの単位が明瞭である。上層は褐灰色砂礫混シルトである。第5層と類似する。また、井戸底部では、埋土が砂礫層を地山とする外側にもぐり込む状態が観察できる場所もあった。土師器小皿、土師質羽釜、東播系甕、瓦器小皿、瓦器椀、瓦質甕、複弁蓮華文軒丸瓦が出土した。





1．2.5Y 6/1　黄灰　シルト　粗砂を多量に含む
2．5YR 5/1　褐灰　シルト　細砂～粗砂を含む
3．5YR 6/2　灰褐　シルト　細砂～粗砂を含む
　地山ブロック土の混合土
4．5YR 6/2　灰褐　シルト　細砂～粗砂を含む
　3より地山ブロック少ない
5．5YR 6/2　灰褐　4と同じ　地山ブロックの
　割合4より多い
6．5G　2/1　緑黒　シルト　粘性あり　細礫～
　中礫を多く含む　湧水性
7．10G　2/1　緑黒　シルト　粘性あり　細礫少
　量含む　湧水性

図94　（その2）466井戸　平・断面図 (1/40)

466井戸（図94）

466は調査区の中央、143溝の西側で検出したやや不整形な円形の井戸である。位置的には465井戸と214井戸の間で検出した。法量は直径2.72～3.23m、深さ2.74m。

埋土は、下層～中層は粘性の強い緑黒色砂礫混シルトで、止水堆積層と考える。微視的にみれば土粒構成は水平堆積を指向しており、ラミナ状にシルトが観察できる箇所がある。緑黒色砂礫混シルトは井戸底から1.9mの層厚があった。上層下位は、灰褐色シルトと地山のブロック土で、ブロックの各単位が明瞭である。上層上位は、黄灰色砂礫混シルトである。

木製品の出土は緑黒色砂礫混シルトからであった。土師器小皿、土師質羽釜、東播系甕、瓦器椀が出土した。14世紀前半の井戸と考える。

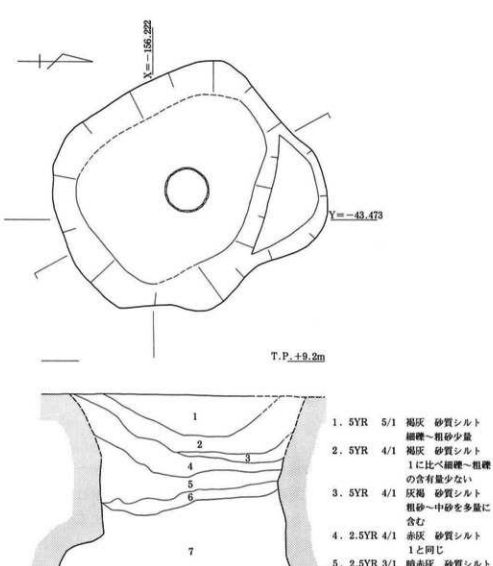


図95　（その2）214井戸　平・断・立面図 (1/40)

また、出土した資料には12世紀中ごろの瓦器椀が出土しており、周辺のピットの密集状態から466井戸に近在する同時期の遺構が推測できる。

214井戸（図95）

214は調査区中央、143溝西側で検出した不整形な円形の井戸である。上部南側に段を有する。調査開始時に設定した中央側溝に遺構の東部がかかっており、本遺構の存在はその時確認した。法量は、長軸2.68m、短軸1.44m、深さ3.40mである。本体に桶側を使用する。断面の形状は桶側を設定した地山が砂礫層であるため、掘形は外側に外反するところがある。基本的には上半で開くU字状に掘ったと考える。

埋土は、下層〜中層は粘性のある灰〜黒褐色シルトで、止水堆積層である。一部還元して青灰色にな

る。微視的にみると、ラミナ状に堆積する箇所がある。上層は灰褐～褐灰色粗砂混シルトを主体とし、上部に地山ブロック土1㎝大を多く含む。木製品の出土は大半は下層の黒褐色シルトである。埋土の掘削は2回に分けて行った。

井戸枠は上部が削平されており、不明。下位で井筒状の桶側を確認した。桶側は、直径0.47mで短辺をやや円形に作りなした板材21枚を、円形に並べて使用する。桶側自体は地山直上で、側面の一部を地山に接した状態で検出した。板材は内外面を幅1.5～3.0㎝の幅で長辺に対して平行に削りを施して表面を整える。短辺の内湾は原材加工と、内面の削り込みを年輪に沿って行った作業の結果である。形状は厳密には長方形を示さず、短辺の長さを参考にすれば台形であり、桶側は截頭円錐形を指向して工作したと考える。板材と板材は上部と下部に桜皮を編んで緊結し、板材長辺中央などをさらに結わえて補完する。上部と下部の緊結の痕跡が特に明瞭であり、この箇所で特に強度を込めて作業したことがわかる。先端は地面に支持しやすいように尖らして加工する。

板材の加工法はすべてに通有の方法を取る。先端の尖鋭加工には個体差があり、桶側設置時に調整を行った可能性がある。転用材として桶側に使用した痕跡はない。なお、桶側裏込め土として、地山土層が還元化して青灰色のブロックを少量含む箇所もあるが、桶側を支持した土層は断面で確認できなかった。下層の黒褐色シルトが桶側内と桶側外の土層である。土師器小皿、東播系こね鉢、瓦器椀、石鍋、瓦質火舎、輪羽口、建築部材が出土した。14世紀中頃の井戸と考える。

819井戸（図96、写真図版38）

819は調査区の中央、458溝の東側で検出した井戸である。遺構上部の北西側は攪乱にかかるが、井戸本体構造は遺存していた。遺構平面を主として検出した場所は、攪乱により一段下がった場所であり、掘形は東側第6面の一部に確認した褐灰色砂礫混シルトの範囲にまで広がる可能性がある。ただし、井戸埋土が連続して把握できないため確証できない。この褐色砂礫混シルトは井戸最上層の埋土であり第5層に類似する。

平面形は不整形を呈する。ただし、復元的に平面形を検討した場合、掘形は円であった可能性もある。長軸2.00m、短軸1.55m、深さ1.50mを測る。埋土は、井側内埋土は粘性のある褐灰～灰褐色シルトで、止水堆積層である。井側裏込め土は灰褐色シルトと地山のブロック土で、ブロック構造が顕著である。上層は褐灰色粗砂混シルトで、これを除去することにより井側が腐食してできた灰色シルトが方形に検出できる。褐灰色砂礫混シルト上面では、井側は検出しておらず、井側上部構造は削平を受けたものと考える。井側腐食シルトは土圧による変形を受けながらも下層で検出した井側木質部と連続する。本体を構成した枠板には5㎜程度の厚みのものが含まれることから、地中での痩せを考慮したとして元来薄かった可能性が高い。木質腐食シルト内での木質の遺存はなかった。

井側は隅柱を四隅に配し、平面形は方形である。井戸底の地山直上に設置する。一辺0.72～0.80mを測る。隅柱側面に長方形の枘を穿ち横桟を渡す。隅柱の枘は横桟が合致しないように上下にずらして穿つ。横桟の外側には、枠板を縦に配す。枠板の幅は個体差があり、横桟に対し前後に互い違いにして幅を調節する部分があった。井側は全体に下部ほど遺存度はよい。枠板・隅柱には井戸転用前の手斧痕と穿孔のある個体があり、片端に作り出しをもつ個体もあった。井戸転用時の加工痕は隅柱の枘と下端部の切り欠き、枠板幅の調整の工程が明瞭であった。転用前の使用に関しては建築部材、もしくは、組物としての用途を考える。横桟に関しては腐食が著しく、表面の加工痕は遺存していないものの、断面は

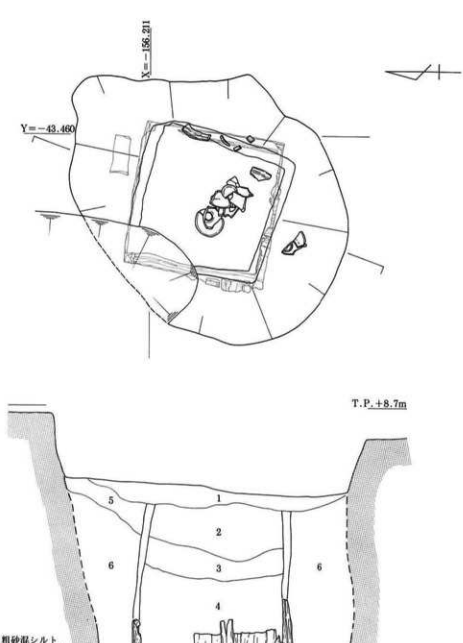


図96　（その2）819井戸　平・断・立面図 (1/20)

方形の形状を復元できる可能性があり、出土した井側材は井戸専用材ではなく、別用途の木製品を転用して使用したと考える。井側としては147井戸に次いで本調査区内では2例目であり、147井戸枠板と隅柱に観察できた手斧痕と同じく、転用前の調整は丁寧である。147井戸の枠板と比較すれば、819井戸の方が表面の調整は荒い。

褐灰色砂礫混シルトを除去した段階で、枠板が腐食したと考える灰色シルトと同一の高さで土師器小皿、土師質羽釜、瓦器小皿、瓦器椀、青磁碗、丸・平瓦、砥石が出土した。

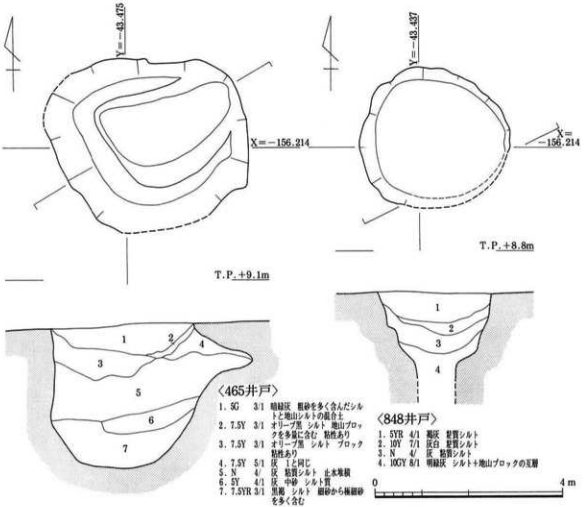


図97 （その２）465・848井戸 平・断面図 (1/80)

465井戸（図97）

465は調査区中央、143溝西側で検出した隅丸方形状の井戸である。214・466井戸の北側に位置する。調査開始時に設定した中央側溝断面で認識した。465井戸には井戸中心部を取り巻いて西側に段を設ける。法量は、長軸2.05m、短軸1.80m、深さ3.00m。断面形状は基本的にU字形で、地山が円礫を主体とした地山砂礫層一部で掘形が外側に広がる。下層～中層は粘性の強い灰色シルトで止水堆積層。層厚は約1.28mである。上層は暗緑灰色シルトと地山ブロック土で、ブロック構造である。木製品は下層～中層にかけて出土した。土師器小皿・大皿、瓦器小皿、瓦器椀、瓦質羽釜が出土した。

848井戸（図97）

848は調査区の東半、南側を堤防に接した状態で検出した円形の井戸である。大和川堤防に遺構の大半はあり、完掘は行っていない。法量は、直径約3.0m、深さ1.8mまで掘削を行った。調査開始時、南側溝断面の観察によって認識した遺構である。中層は粘性の強い褐灰色粘質シルトで、止水堆積層と考える。ラミナが明瞭である。中層下部では、地山シルトブロックと明緑灰色シルトの互層。木製品はすべてこの土層から出土した。上層は、南側溝で得た知見と整合させると、黒褐色砂礫混シルトで埋まる。上層下部には一部地山ブロック土の入る部分がある。土師器小皿・大皿、瓦器椀、白磁碗、曲物が出土した。

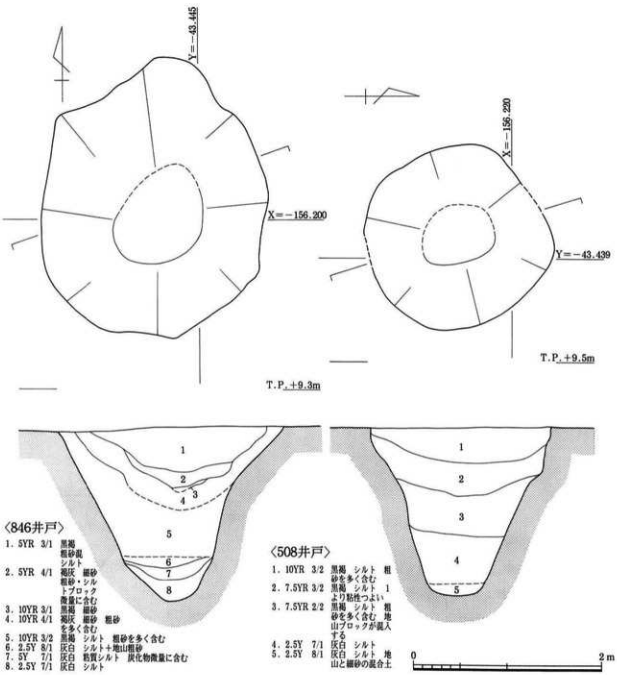


図98　（その2）846・508井戸　平・断面図 (1/40)

846井戸（図98）

846は調査区の東半、北寄りで検出したやや不整形な円形の井戸である。法量は長軸2.95m、短軸2.40m、深さ1.85mである。埋土は、下層は粘性のある灰～灰褐色シルトで、止水堆積層。層厚は1.25mである。上層は黒褐～褐灰色粗砂混シルトを基本とする。土師器小皿・大皿、黒色土器A類皿、黒色土器A類椀、黒色土器B類椀、瓦器椀が出土した。11世紀後半～12世紀前半である。

508井戸（図98）

508は調査区東半、848井戸の北西部で検出した円形の素掘り井戸である。直径1.92m、深さ1.78mである。埋土は、下層～中層は灰白～黒褐色シルトと地山のブロック土を基本とする。上層は黒褐色粗砂混シルトである。土師器大皿、土師質羽釜、瓦器小皿、瓦器椀が出土した。13世紀前半の井戸と考える。

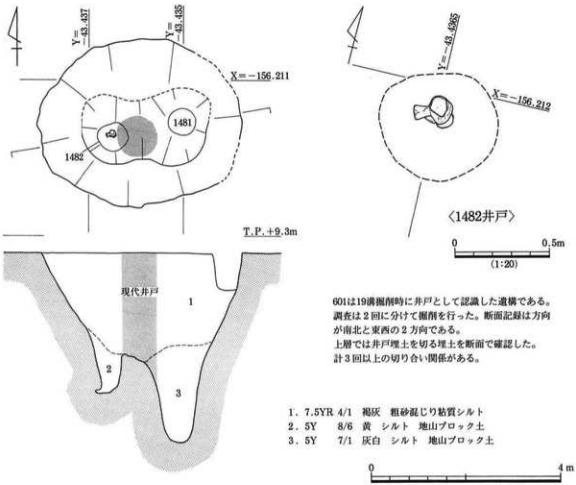


図99 （その2）601（1481・1482）井戸 平・断面図 (1/80)

601井戸（図99、写真図版38）

601は調査区東半、520溝の西側で検出した楕円形の井戸である。19溝を掘削した段階で確認した遺構である。7建物のちょうど中心部にあたる。

法量は長軸4.34m、短軸3.47m、深さは1481が2.98m、1482が3.83mである。601井戸は最低3回以上の切り合いがあった。もっとも新しいのは現代の井戸である。当初、調査は南北に断面を設定し、掘削を行った。しかし、最終的な断ち割りの方向に制約があったため、2回目の断ち割りは東西に行った。その結果、古墳時代の井戸と中世の井戸を東西で認識し、それぞれ1481・1482と呼称した。601井戸下層に対応するのは、1482である。なお、記述は調査時の番号のまま、1482で記述する。現代の井戸というわかりやすい状況を除けば、一つの井戸であるという認識を前提にした発掘調査の手順の誤認であった。

埋土は下層は1481・1482ともに地山ブロック土である。中層は粘性のある褐灰色シルトで止水堆積層、上層は褐灰色シルトである。中層～上層にかけて粘性の強い土層で埋まる。遺構検出面からT.P.＋8.95mまで、井戸埋土を切る土層があり、平面的には確認できなかったが土坑が切り合っていた可能性がある。601井戸からは土師質羽釜、東播系こね鉢、瓦器小皿、瓦器椀、瓦質羽釜、常滑甕、丸・平瓦、板状木製品が出土した。瓦には巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦と鬼瓦が含まれる。601井戸下層部分である1481から土師器小皿を出土した。これと切り合う1482ではT.P.＋6.20mで須恵器長頸壺、その下に接した状態で土師器甕底部が出土した。

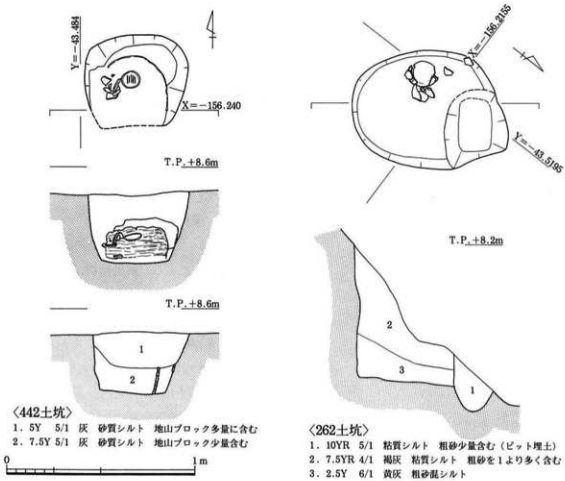


図100　（その2）442土坑　平・断・立面図、262土坑　平・断面図 (1/20)

この他に井戸は2基検出した。1483は調査区東半、504井戸の南西に0.8mの場所で検出した円形の井戸である。直径0.7m、深さ1.8mである。埋土は止水堆積層と考える灰色シルト（N 6/）である。土師器小皿・大皿、瓦器小皿、瓦器椀が出土した。13世紀後半～14世紀初頭の井戸。1458井戸は504井戸の0.6m離れて検出した円形の井戸である。直径は1.3m、堤防に接しており完掘していない。埋土はオリーブ黒色シルト（5 Y3/1）で細礫を多く含む。土師質羽釜、瓦器椀が出土した。

土坑

土坑は（その1）で調査区の東端で調査した2基の土坑が西限にあたる。東限は522溝の東側2 m離れて検出した940土坑、521溝の西側1.5m離れて検出した794・814土坑と考える。ピット・土坑は既述のとおり規模が大きく柱穴の要素がみられない遺構を土坑としており、定義は必ずしも厳密ではない。

442土坑（図100、写真図版38）

442は調査区西半、127溝の北肩で検出した円形の土坑である。直径0.54m、深さ0.38mである。埋土は、地山ブロックを多量に含んだ灰色シルトである。底部では地山直上で砂礫1～2 ㎝大を検出した。土坑内に、曲物を設置する。曲物は南半分は不明であるが、直径0.54m、幅0.38mである。この曲物の外側でもほぼ掘形に接して、円形の木質を検出しており、曲物は二重構造であったと考える。曲物内からは刀子と考える鉄製品、完形品の土師器小皿、瓦器小皿、瓦器椀底部破片が出土した。

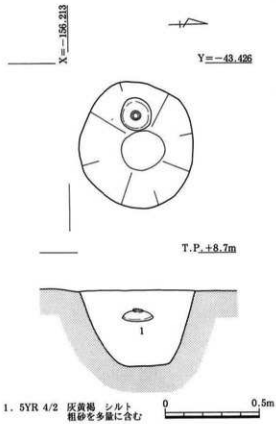


図101 （その２）940土坑 平・断・立面図 (1/20)

262土坑（図100）

262は調査区の北側、大和川沿いにある攪乱の肩で検出した南北に長い楕円形の土坑である。北側にはピットがあり、262土坑より新しい。南北0.78m、東西0.62m、深さ0.75mを測る。断面の形状は方形を示す。埋土は粗砂を含んだシルトを基本とする。遺構検出面で土師器皿が上向きに、埋土の中位では瓦器椀が出土した。12世紀後半から13世紀前半と考える。

940土坑（図101、写真図版38）

940は調査区東半、522溝から東に2.0m離れた場所で検出した円形の土坑である。検出当初、方形の平面形で認識したが、削り込み等により精査した結果、平面形は円形で認識している。周辺は方形プランのピットが集中する場所にあたるが、940土坑は方形プランが必ずしも中世以前と短絡できない事例の一つである。直径0.62m、深さ0.45mである。埋土は灰黄褐色シルト１層である。掘形の西よりで、口縁を下向きにして瓦器椀の完形個体が出土した。

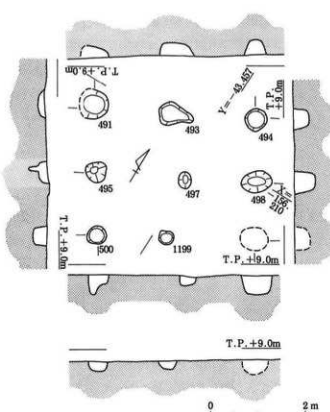


図102 （その２）１建物 平・断面図 (1/80)

１建物（図102）

１建物は458溝の東側1.3m離れて検出した２間×２間の掘立柱建物を復元した。西隅柱建物の規模は、梁行き2.66m、桁行3.40mを測る。南東側隅柱は、858土坑埋土上面にあたり、掘り下げ等の精査を行ったが検出できなかった。上屋構造は不明。柱穴は柱痕跡が不明瞭である。柱痕跡に相当と考える部分が沈下する柱穴が１基あった。この場合も、柱痕跡は上に立ち上がらず、掘形埋土内での区別はできなかった。柱穴の深さの平均は0.28mである。深さは、0.1m以上～0.2m未満が３基、0.2m以上～0.3m未満が２基、0.3m以上～0.4m未満が１基、0.4m以上～0.5m未満が２基である。方位はW−30°−Nで、西側に角度を振る。柱穴から土師器小皿、土師質羽釜、瓦器椀が出土した。

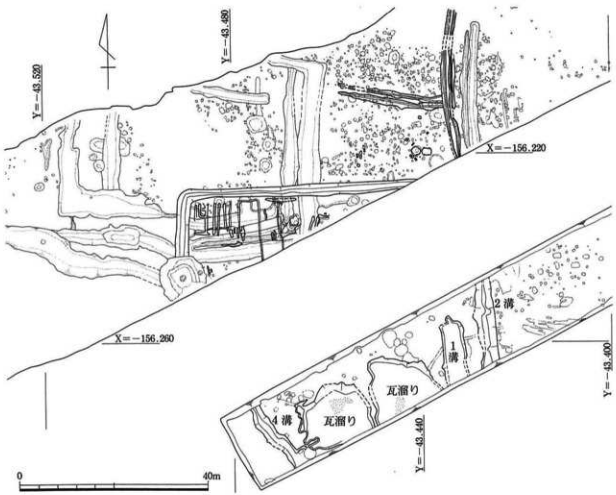


図103　1995年調査区（大阪府教育委員会）と（その2）平面図 (1/800)

瓦及び大阪府教育委員会1995年調査の関連（図103・104）

1995年に大阪府教育委員会による調査[61]（以下1995年調査）が（その1・2）の調査区と堤防を隔てた南側で行われた。調査区は東西方向に設定され、瓦溜り・溝・井戸・土坑・ピットが検出された。古墳～中世の遺物が多量に出土しており、遺構・遺物ともに（その2）と連続して把握できる範囲である。ここでは両者の調査区で検出した遺構を主題として事実報告を行う。1995年調査は概要を西口氏、本報告を地村氏がまとめられており、記述はこの2書を基本とする。観音堂の字名の遺存範囲は南北50m、東西約110mで、1995年調査・（その1・2）の調査区はその北側にあたる。

第4面で検出した22溝は東西方向から南北に直角に屈曲する溝である。22溝は上限を15世紀とし、下限を17世紀初頭と考え、溝機能の積極的な評価を15～16世紀に位置づけている。南北方向は11落ちと切り合いをもつ。また、東西方向は東側にこの溝の延長部が見られないことから南北方向に屈曲すると考えれば、（その2）-22溝は1995年調査-2溝と連続する溝かもしれない。ただし、この復元案の問題は1995年調査-4溝は13世紀末～14世紀初頭と位置づけられておられることである。この場合、区画溝もしくは（その2）-65・127溝との連続性を考慮しなければならず、（その2）-488溝のように区画を拡張する現象になる。方形区画溝としての平面は（その2）における区画設置・配列の規格の中で連続する現象と把握することでまた違った意味を持つことになろう。また、1995年調査区の南で4溝は東へ屈曲しており、4溝の東西方向に関しては今後、該当箇所の調査によって溝の連続性は確認できる。なお、2溝・11落ちと連続する遺構については1995年調査で確定していない。

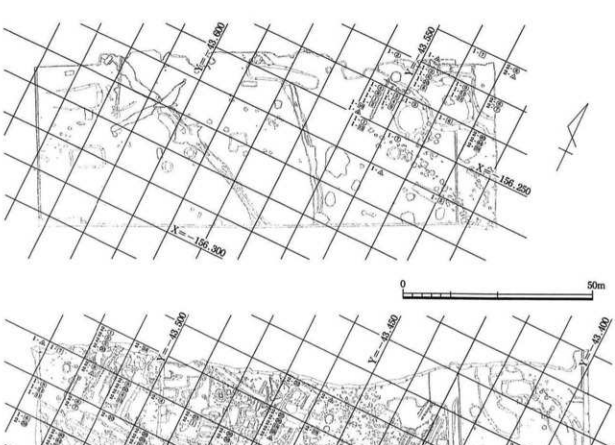


図104　（その１・２）軒瓦・道具瓦の分布図 (1/1000)

1995年調査の瓦溜り２基は１・２溝と４溝の間で検出された。瓦溜り１は円形を指向するかに見受けられる浅い土坑で、土坑底面から0.2～0.3m浮いた状態で軒瓦・五輪塔を始めとする中世遺物が多量に出土した。瓦溜り２は北側の突出部を除けば平面形は瓦溜り１とほぼ同形で、遺物の出土状況も同じである。調査を担当した西口氏は瓦が大量に出土した遺構として１・２・４溝、４・６井戸を指摘されている。この瓦溜りの下限は西口氏は出土した瓦器により「鎌倉末期をそう下らないもの」とされ、地村氏は鎌倉時代末～室町時代初頭（14世紀中葉）とされる。出土遺物の組成は66・458溝とほぼ同じである。地村氏の記述に従えば区画溝廃絶と瓦溜り埋没の完成はほぼ同時期である。この場合、瓦類は周辺の土地利用システムの変換に伴なって処分された可能性が高い。

観音堂廃寺に関係する1995年調査・（その１・２）では、出土した遺構は、溝・井戸・ピット・瓦溜り・包含層である。1995年調査で出土した軒瓦は計111点である。西口氏によって軒丸瓦３類・軒平瓦４類、地村氏により軒丸瓦３類・軒平瓦４類・丸瓦２類・平瓦４類に分類されている。軒丸瓦の巴文の細分が西口氏と地村氏の分類の違いのポイントとなる。地村氏は軒瓦の年代を12世紀後半～14世紀前半までとされ、14世紀中葉とされる瓦溜りよりやや早い段階に観音堂廃寺の下限を考えられている。ただし、区画溝の下限が14世紀中葉で、65・127溝の下限が15世紀であり、22溝の瓦出土量を重視すれば観音堂廃寺廃絶はその時期設定に残された課題も多い。

瓦の分布は（その2）では区画溝・65・127溝・22溝のラインを中心として分布する。（その1）では2溝のラインを中心とする。2溝での軒瓦・瓦の分布は、2溝が（その2）－区画溝・65・127溝・22溝と切り合い関係を持つことと（その1）内での瓦の分布が東に偏することを根拠として、（その2）及びその北部地域からの混入と考える。1995年調査では1・2・4溝、4・6井戸を中心とするようで、1995年調査・（その1・2）を含めた100m方形の範囲に瓦の分布の頂点はある。なお、（その1・2）では軒瓦の胎土分析を行っており、（その1・2）で採取した粘土成分とは異なるものの分析資料の胎土成分は近似値を示しており同一胎土を用いて生産された可能性の高いことが判明した。今後、同笵とする軒瓦との比較と、近在が推測されている瓦窯の実在が検討課題となる。

1995年調査・（その1・2）から出土した瓦の出土遺構の上・下限は同地での瓦の移動・使用形態を示すと考える。（その2）で検出した129井戸を重視して13世紀前半～13世紀中葉、下限は（その2）－22溝及び95年調査1・2・4溝・4井戸等を根拠として17世紀初頭までとする。その後、（その1）2溝・土坑及び（その2）2溝・11落ちが掘削されることにより、若干の移動があったと考える。また、（その1・2）出土の瓦は被熱瓦の量が多く、66溝出土の礎石上面にある柱被熱痕跡から、火事災害があったと考える。火事災害は、単数か複数回という回数と規模、また、その時期について焼亡の痕跡と考える瓦及び土器においてその定点を決めるに至っていない。

観音堂廃寺の軒瓦は創建－補修－火事災害－補修・（再建）－廃棄再利用の道程を辿った可能性が高い。

建物

建物の復元は既述の通り、7棟である。2棟は調査後構造的に自立しえないと判断した平行四辺形の掘立柱建物であった。報告を行うのは、方形の柱穴プランだった2・7・3・4建物である。その他、柵列あるいは掘立柱建物を構成したと考えるピットを復元した。柵列ではなく掘立柱建物とした場合の展開に使用できるピットは特定できなかった。ピットを柱穴もしくは土坑として属性判断できたのは、すべてではなく限定される。

2建物（図105）

2建物は458溝の東側5m離れて検出した3間×3間の掘立柱建物である。3建物の西側柱列に接する。梁行3.98m、桁行4.36mである。柱痕跡等は断面での検討を行ったが、不明である。底部に根石を据える柱穴が一基あった。建物の方位はW－20°－Nで、西に角度を振る。485・484溝と同方位である。柱穴の形状は方形を示す。柱穴の平均の深さは、0.16mである。深さは、0.1m未満が2基、0.1m以上～0.2m未満が6基、0.2m以上～0.3m未満が3基、0.3m以上が1基である。3建物と切り合う柱穴があったが、切り合い関係は明らかにできなかった。823ピットは2・3建物のいずれを構成する柱穴か不明であり、両者の復元に使用した。土師器、須恵器細片が出土した。

7建物（図108）

7建物は521溝の西に2.5m離れて検出した2間×3間の掘立柱建物である。7建物内には601井戸があり、西側柱列は柱穴を一基欠く。梁行4.42m、桁行4.58mである。柱痕跡等を断面では確認していない。823ピットは既述のとおり2・3建物のいずれを構成する柱穴か不明であり、両者の復元に使用した。建物梁行の方位はW－8°－Nで、西に角度を振る。7建物と898・878溝と同方位である。柱穴平

面の形状は、方形を示す。柱穴の平均の深さは0.25mである。深さは、0.1m以上～0.2m未満が1基、0.2m以上～0.3m未満が6基、0.4m以上が2基である。概ね規格を揃えて柱穴を設定したといえよう。

3建物（図107）

3建物は2建物の側柱列に接して検出した2間×2間の掘立柱建物である。梁行3.50m、桁行3.24mである。北東部隅柱は、778井戸埋土上面での検出はできなかった。切り合い関係のためではなく、埋土内での区別が不明瞭なためである。7建物と898・878溝と同方位である。柱穴平面形は方形を示す。2建物との切り合い関係は不明である。建物方位はW－20°－Nで、西側に角度を振る。柱穴の平均の深さは0.20mである。深さは、0.1m以上～0.2m未満が3基、0.2m以上～0.3m未満が3基、0.3m以上が1基である。この建物内でも柱穴を検出しており、3建物に関連して機能した可能性がある。

4建物（図106）

4建物は調査区東半の北寄りで確認した2間×3間の掘立柱建物である。梁行4.04m、桁行5.24mである。建物の方位は座標方位とほぼ同方位である。柱掘形の方向により掘立柱建物として復元した。

今回検出した柱掘形では、東半東部の一部と同じく、規模が大きい。柱痕跡が明瞭である柱穴は3基あり、柱痕の直径は約0.26mと太い。抜取りの痕跡は確認していない。南側柱穴はすべて切り合い関係があり、平面と断面の所見により南側が新しい。柱穴平面の形状は、方形を示す。柱穴の平均の深さは0.20mである。深さは、0.1m以上～0.2m未満が5基、0.2m以上～0.3m未満が1基、0.3m以上が1基である。東側柱列の柱穴2基を検出しておらず、掘立柱建物の構造として、自立性の要素に乏しいが、復元案として報告した。柱穴からは土師器、須恵器細片が出土した。方形プランの柱穴は四辺の方向に規則性があり、西側で検出した柱穴のように柵列・掘立柱建物としてグルーピングができると考える。

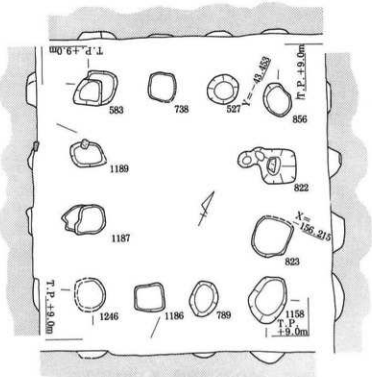


図105　（その２）２建物　平・断面図 (1/80)

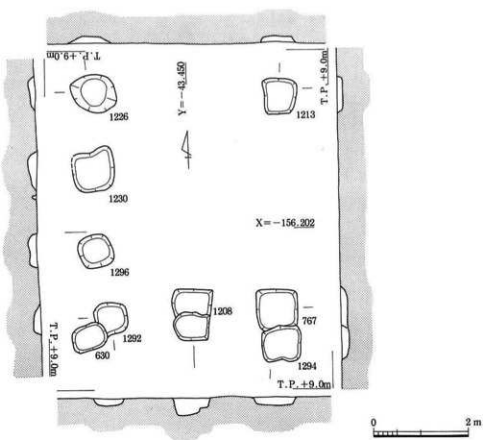


図106　（その２）４建物　平・断面図 (1/80)

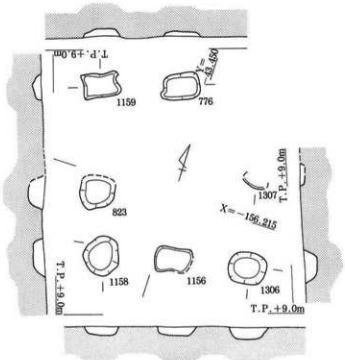


図107　（その２）３建物　平・断面図 (1/80)

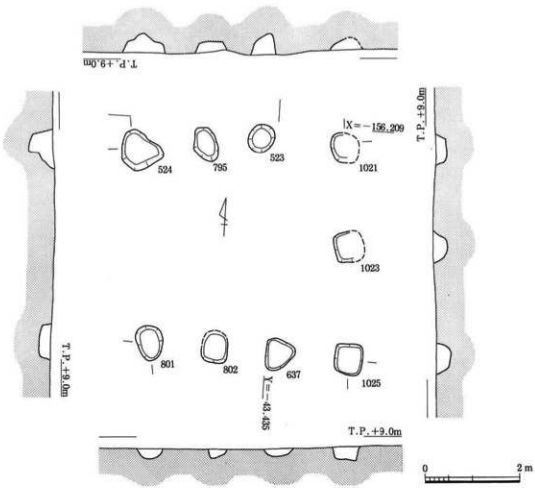


図108　（その２）７建物　平・断面図 (1/80)

古墳時代

遺構には井戸・土坑・ピットがある。土坑とした遺構の中で、34・1290土坑は井戸の可能性がある。古墳時代井戸はほとんどが青灰色極細砂～細砂層まで掘り下げを行っていた。中世井戸は褐灰色粗砂～極粗砂まで掘削を行っており、層順としては青灰色極細砂～細砂はその下の土層となる。出土遺物は土師器・須恵器・木製品・石製品があった。埋土の傾向として黒褐色粘質シルトを主体の遺構が多い。古墳時代遺物を主体に出土する土層の範囲に124・549・614黒褐色シルトがある。ただし、中世遺物が混じっており、時期判断は主観的である。古墳時代の遺物のみを出土したピットが東半には分布しており、掘立柱建物存在の蓋然性が高いが、竪穴住居として認定できる遺構は確認していない。

460井戸（図109、写真図版41）

460は調査区の中央、458溝の東側で検出した不整形な井戸である。遺構検出面は攪乱により削平された場所にあたる。長軸3.74m、短軸3.28m、深さ1.55mである。埋土は、下層は粘性のある灰黄褐～黒褐シルトで、止水堆積層である。上層は褐灰色粗砂混シルトである。上層中位で地山ブロックを多く含む部分がある。出土した須恵器坏身・坏蓋などの遺物はT.P.+7.90m以下を中心に、下層から出土した。木製品は土器類出土レベルよりやや低く、T.P.+7.63mで出土した曲物底板がレベル的には一番高い。以下、木製品の出土は底面から0.35mを中心に多くなる傾向にある。出土土器の内、須恵器坏身・坏蓋は内面上向きで出土したものが多い。土器集中部は井戸の中央部にあたり、地山直上では板状の木製品が出土した。出土した資料は埋納行為に伴うものか。ほかに、土師器ミニチュア鉢、高坏、甕、上記した須恵器坏身・坏蓋、有蓋高坏、高坏、鼈、提瓶、壺、甕、器台が出土した。木製品は桶底板、斎串、板材（板状木製品）、不明木製品が出土した。かように、須恵器坏蓋・坏身を出土した井戸祭祀は本遺跡内においては類例がない。

778井戸（図110、写真図版40）

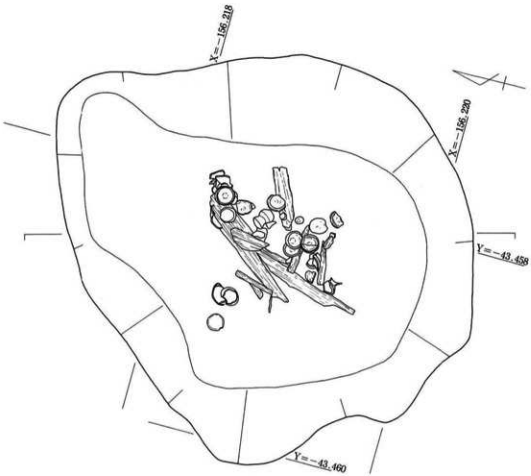
778は調査区東半の中央、851土坑と585・858土坑の間で検出した南西に段を有する円形の井戸である。第6面検出時、茶褐色シルトの範囲の一部として認識していたが、第6層掘削により平面的な輪郭を確認した。長軸3.0m、短軸2.3m、深さ2.8mである。埋土は、下層は灰～緑灰色シルトと地山のブロック土でブロックの単位が明瞭である。中層は粘性の強い黒褐色シルトである。上層は暗灰黄～黒褐色砂礫混シルトで、砂礫の混入が顕著である。出土した須恵器短頸壺、須恵器甕、土師質蛸壺2点は下層に所属する。須恵器横瓶は井戸底に接して横向きに出土した。平面図にない蛸壺一点は井戸北側の掘形が井戸底で外反した箇所、地山直上から出土している。このほか、土師器甕などを出土した。

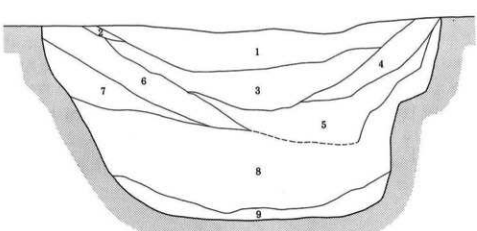
427井戸（図111、写真図版39）

427は拡張区、傾斜変換線上で確認した不整形な井戸である。北西部は攪乱されている。平面形は検出面で不整形であったが、0.2m掘削した段階で円形に収斂しており、一帯が削平の著しい場所にあるため平面精査時、不整形の認識を得たかもしれず、本来円形の可能性がある。

法量は、長軸2.30m、短軸2.05m、深さ2.62mである。調査は北西部の攪乱のため中層の二重口縁壺までと、下層部分を3回に分けて調査を行った。

埋土は、最下層は地山ブロック土である。土師器直口壺はここから出土した。この直口壺の頸部には

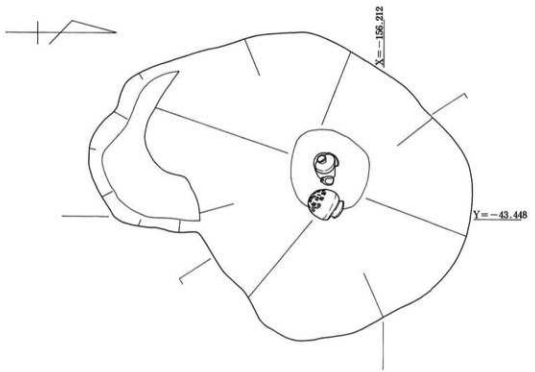




1．2.5Y　3/1　暗赤灰　粗砂混じりシルト
2．7.5YR 4/1　褐灰　シルト
3．2.5Y　4/1　黄灰　シルト
4．10YR　3/1　黒褐　粘質シルト
5．10YR　4/1　褐灰　粗砂混じりシルト
6．10YR　3/2　黒褐　シルト
7．7.5YR 3/1　黒褐　シルト
8．10YR　4/2　灰黄褐　シルト　粘性あり
9．8と地山粗砂の混合　ラミナ状構造

0　2m

図109　（その２）460井戸　平・断面図 (1/30)



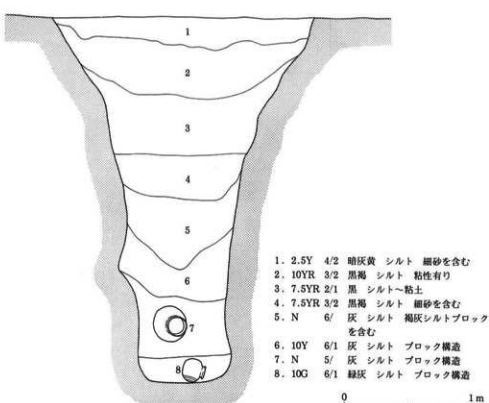
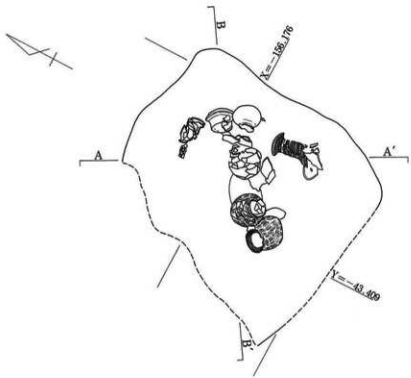


図110　（その2）778井戸　平・断・立面図 (1/30)



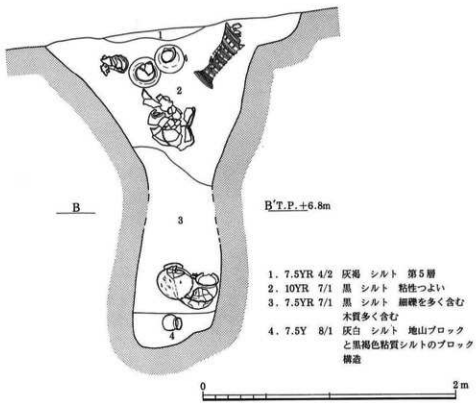
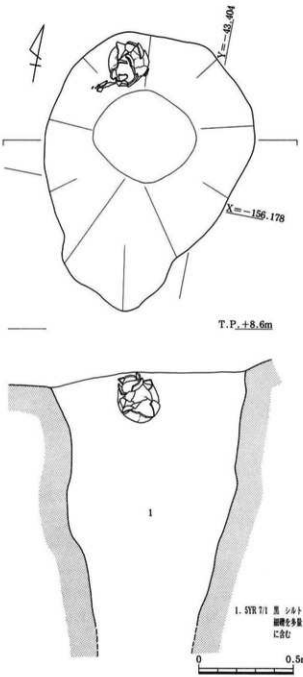


図111 （その2）427井戸 平・断・立面図 (1/30)

繊維質の付着がある。下層～中層は粘性の強い黒色シルトで、砂礫の混入度によって細分は可能であるが、土粒・土質は基本的に同じである。上層は粘性の強い黒色シルトで、中層と類似するが、砂礫の混入が漸移的に増加し、粘性は弱くなる。土師器甕はこの土層の下位に所属する。土師器甕は必ずしも完形ではないが5個体以上が重なった状態で出土した。土師器二重口縁壺は、この土層の中位に所属する。この土師器二重口縁壺は口縁部を上向きにし、上位の二重口縁壺体部がこれを覆う。土師器二重口縁壺、須恵器樽形瓶、須恵器壺、須恵器筒形器台はこの土層の上位から出土した。樽形瓶は破片になって出土したが、出土時接合関係はほぼ保った状態であった。二重口縁壺は口縁を北東部に向ける。須恵器甕は口縁部を南西に向け横向きにした状態で出土した。筒形器台は受け部を北・下方向にむけた状態で出土した。脚部の破片は接合関係を保っていた。井戸埋土最上部には緩傾斜に堆積する灰褐色シルトが観察できる。土圧による割れがみられるもののほぼ完形に近い個体が多い。下層～中層にかけては土師器甕・壺・高坏細片が多く、上層は先に述べた須恵器が大半を占める。上記した以外に、土師器高坏・小型丸底壺・甕、須恵器甕・竹管文を施した脚付有蓋鉢が出土した。土層の中位から弥生時代後期の口縁部を欠いた壺も出土した。



426井戸（図112）

426は拡張区、傾斜変換線上、427井戸の南東側　図112　（その2）426井戸　平・断・立面図 (1/20)

4mの地点で検出した西側に南側が膨んだ円形の井戸である。0.4m掘った段階で、掘形は完全に円形となる。埋土粘性の強い黒色シルトであり、細礫～中礫を含む。夾雑物は混じらない、粘性のあるシルト1層を埋土と考えた。

法量は、長軸1.45m、短軸1.12m、深さ1.40m。井戸南寄り、T.P.+8.2mで完形の土師器甕が出土した。ほぼ遺構検出面直下で出土したと言い換えることが可能である。土師器甕は、口縁部は上向き、やや北方向を向く。個体は破片になっているが、接合関係を保った状態である。そのほか、土師器高坏・短頸壺が出土した。最上層で出土した土師器甕は釣瓶等の目的で使用したのではなく、井戸祭祀の様式の一つであったものか。

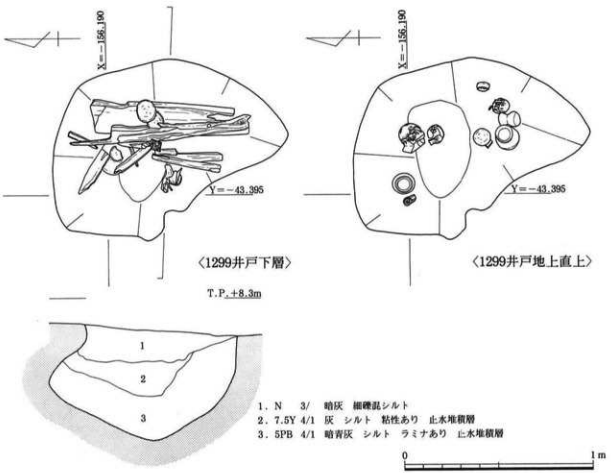


図113 （その２）1299井戸 平・断面図 (1/20)

1299井戸（図113、写真図版41）

1299井戸は拡張区、34土坑から北西に6.50m離れた場所で検出した東西に長い不整形な井戸である。長軸1.92m、短軸1.40m、深さ0.96m。1299井戸は地山砂礫層に掘り込み、断面はU字を基本とし外反する部分がある。埋土は粘性の強い灰～暗青灰色シルトで、止水堆積層と考える。上層と下層の掘り分けを行った。上層では板材を南北方向に配置し、板材一枚の直上には須恵器坏蓋・坏身がやや蓋をずらした状態で出土した。これにやや離れて土師器直口壺があった。須恵器坏蓋・坏身が載る板材は北側に焼痕があり、この上にもう一枚板材と木質の腐食が顕著な木皮を置く。下層では土師器直口壺・甕、須恵器坏身が出土した。口縁部を上向きに置く個体が２個体あり、その他の個体は横向きの状態である。出土土器と木製品の配列に規則性があり、埋納した可能性が高いと考える。出土遺物は既述の遺物を含めて、土師器高坏・直口壺・甕、須恵器蓋・坏・提瓶・短頸壺・直口壺・甕が出土した。木製品は板状木製品の下、主に下層下位から出土し、この中には刀状木製品、鏃形木製品、鍬柄、棒状木製品が含まれる。これ以外に、棒状木製品加工前の段階の節を切截した棒があり、木製品素材と考えるか、製品としてみるか検討課題であるが、皮付き・表面未調整であり、木皮のみの出土もあったことから前者の可能性が高いと考える。これらの木製品の内、刀形・鏃形木製品は他遺跡で出土した事例とは違い立体感がなく、形状のみで刀形・鏃形とするには検討を要する。また、大和川今池調査会が調査した第１地区の１井戸からも刀形・鏃形木製品は出土し[71]、出土遺物の構成比も本事例とほぼ同じである。出土状況についても同様であり、本遺跡内で行われた井戸祭祀の典型的な一事例といえよう。

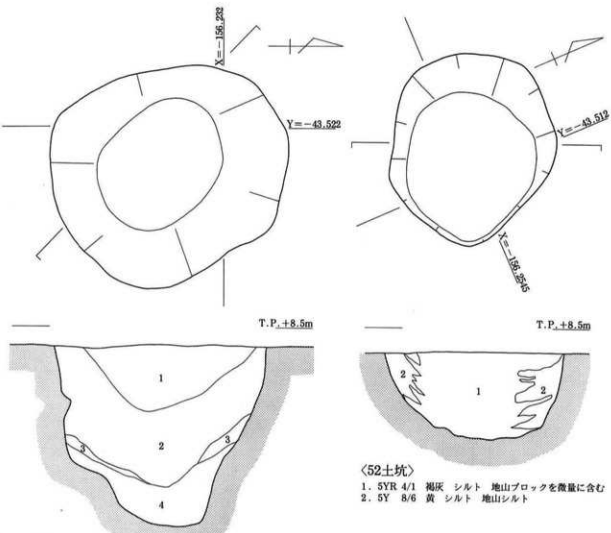


図114　（その2）37・52土坑　平・断面図 (1/20)

37土坑（図114）

37は調査区の南西部で検出したやや不整形な円形の土坑。検出面は踏み込みと削平が顕著な場所である。長軸1.26m、短軸1.10m、深さ0.97m。下層～上層は地山と黒褐色シルトのブロック土。この地山ブロックは中心部にはなく、掘形に接して上方向に延びる。出土遺物は土師器甕・須恵器坏がある。

52土坑（図114）

52は66溝の西側で検出した円形の土坑である。直径0.97m、深さ0.46mである。埋土は褐灰色シルトと地山シルト。平面形は基本的に円形と考えるが、土坑の周囲に根状の斑点が観察でき、遺構の輪郭は不明瞭である。これは、根状の立ち上がりが遺構検出面と接点を作るためである。断面の形状は木根を想起させる形状を示す。この褐灰色シルトの外側にある、地山を埋土とする土坑の立ち上がりは、この地山埋土が黄色粘質シルトである地山と土色・土質が微妙に異なることを根拠に分層した。土師器体部細片が出土した。出土した遺物は踏み込みに所属した可能性が高く、本遺構の埋土から確実に出土した遺物はない。人為ではない生痕の可能性もある。

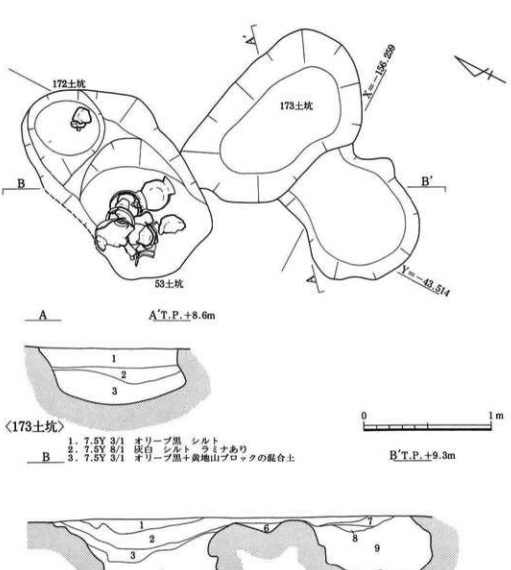


図115 （その２）53・172・173土坑 平・断面図 (1/30)

53・172・173土坑（図115、写真図版40）

53・172・173は（その１・２）調査区との境で検出した土坑である。２年度に跨がって調査を行った遺構である。遺構検出時の最終堆積した埋土が同じであり、平面的な切り合い関係は確認していない。53土坑は東西に長い楕円形である。長軸1.08m、短軸0.95m、深さ0.88mである。折り返しの口縁をもつ平底の壺は、甕３個体の上に東向き下方に口縁部を向けて出土した。比較的残りの良い、甕２個体はいずれも東方向、横向きに出土した。甕体部上半が欠損するのは、掘削時に外れた部分であり、原形ではない。これ以外の甕は破片化して出土した。172は53土坑の北側で検出した円形の土坑である。直径0.59m、深さ0.50mである。掘形が外反する部分がある。土坑底で甕底部が出土した。173は53土坑の東側で検出した東西に長い楕円形の土坑である。長軸1.55m、短軸0.87m、深さ0.46mである。172・

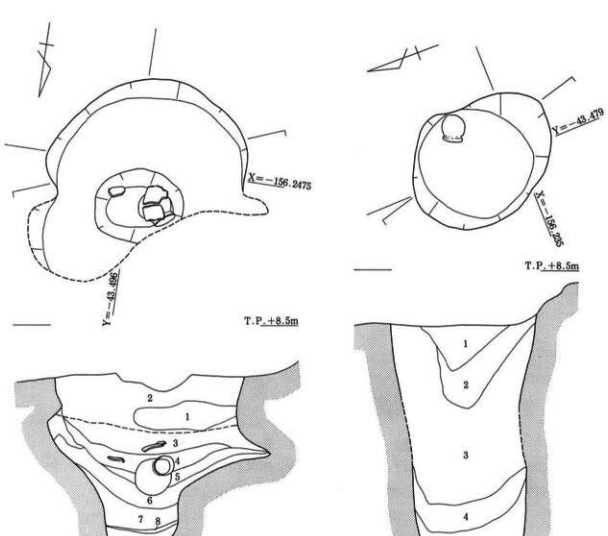


図116　（その2）70・197土坑　平・断面図 (1/20)

173土坑からは土師器甕が出土した。埋土の層順は各土坑に基本的な差異はない。埋土は、下層～中層は黒褐～明褐灰色シルトと地山のブロック土である。上層は、明褐灰色シルトで層厚0.05～0.10mある。この土層が各土坑の上層に堆積する。基本的には一層であり、この土層の中で切り合い関係は認めない。土坑のベースとなる地山は粘土質の黄色シルトである。

70土坑（図116）

70は近世井戸の南肩で検出した不整形な土坑である。土坑として認識し調査を行ったが、土坑底は砂礫層に達しており井戸であった可能性がある。平面形は上部が攪乱部にあたるため不整形な輪郭で遺構検出したが、遺構掘削中位では円形の平面形を呈しており、本来は円形か。遺存度の高い部分での直径は1.05mを測り、深さは0.96mである。埋土は下層は地山ブロック土である。中層は粘性に強い暗青灰～灰色シルトで、地山ブロックがラミナ状に観察できる部分がある。上層は灰白色シルトブロック1cm

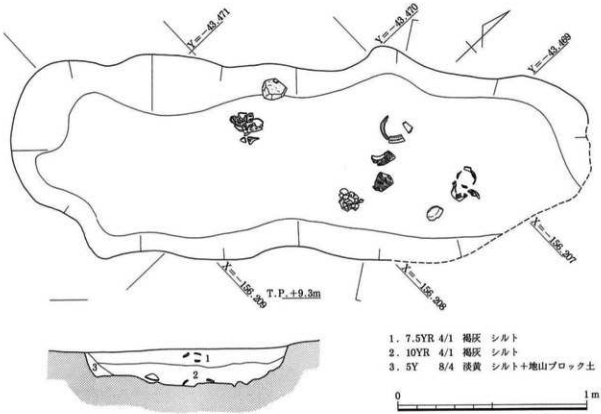


図117 （その２）486土坑 平・断面図 (1/20)

大を含んだ灰白～黒褐色シルトである。土師器甕は中層に所属し、口縁を北方向やや上向きに出土した。出土遺物は既述のものを含め、土師器甕・高坏、須恵器高坏が出土した。

197土坑（図116、写真図版40）

197は調査区の西半、92溝肩で検出した南北に長い楕円形の土坑である。この土坑は、本遺跡内の古墳時代井戸の湧水層と認識する青灰色シルト～極細砂層まで掘り込んでおり、井戸であった可能性もある。長軸0.85m、短軸0.63m、検出面からの深さは1.25mである。断面図１と２の埋土は、中世のピット、３以下は古墳時代に所属する。埋土はブロック土を基本とする。中世ピットは褐灰色砂礫混シルトである。197土坑の底の地山直上では、口縁を南西方向横向きにした状態で土師器平底壺が出土した。上層のピットから完形の瓦器椀が出土した。下層からは土師器高坏・平底甕が出土した。

486土坑（図117）

486は調査区の東半、143溝の東肩に接して検出した北西から南東に長い曲線的な楕円形の土坑である。遺構検出時、北西部と南東部に分かれる２つの遺構と考えたが、遺構掘削後の所見により一つの遺構と判断した。長軸残存長2.30m、短軸0.76m、深さ0.30mである。埋土は褐灰色シルトを基本とし、一部に後世の遺構と切り合い関係を示す土層がある。土師器短頸壺・甕、須恵器坏が土坑底の地山直上から出土した。破片化していたが、個体毎のまとまりをもち、接合関係を保った状態であり、土坑埋没後土圧により破片化したと考える。この状況から土器資料は人為的に埋めた可能性が高い。このほか、土師器鉢・甑・製塩土器、須恵器坏・樽形瓶が出土した。また、混入資料として10点未満の９世紀の遺物が入っており、ピットと切り合っていた可能性が高い。

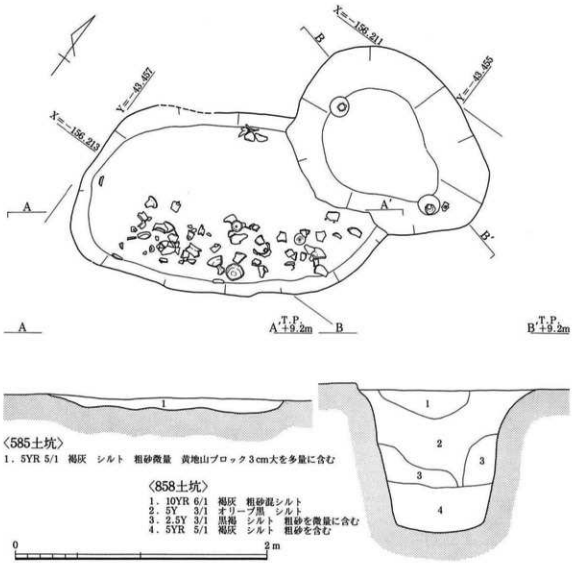


図118　（その2）585・858土坑　平・断面図 (1/30)

585・858土坑（図118、写真図版39）

585・858は調査区中央で検出した楕円形の土坑である。周辺は茶褐色砂礫混シルトの層厚が特に厚かった箇所であり遺構検出時輪郭は不明瞭であったため、面の削り込みを行って両者の関係を明確にした。切り合い関係は、585土坑→858土坑で858土坑が585土坑より新しい。858土坑は、遺構検出時、井戸と考えた土層であるが、掘削の結果、粘土層で井戸底が終わっており、粘土層までで完結した土坑である。858は東西に長い楕円形の土坑である。法量は、長軸1.70m、短軸1.33m、深さ1.20m。埋土は、下層は褐灰色シルトで止水堆積層。壺の土層から欠損した口縁部を上に向けた土師器短頸壺が出土した。中層は黒褐色シルトで、この土層から口縁を欠損した須恵器短頸壺が出土した。下層の短頸壺と同じく上向きである。585土坑と接合関係のある土器がある。このほか土師器甕、須恵器塊・無蓋高坏・器台が出土した。585土坑は楕円形の土坑である。先述のとおり、858土坑に切られており、北東部の一部を失するものの、原形は楕円形であったと考える。585土坑は長軸残存長2.50m、短軸1.43m、深さ0.11m。埋土は褐灰色シルトと地山のブロック土である。底面はやや凹凸をなして緩やかに立ち上がる。土器はこの土層から出土した。土坑底に接して土師器の出土が目立つ。土師器甕口縁部・体部、高坏脚部・坏部、須恵器無蓋高坏などが出土した。

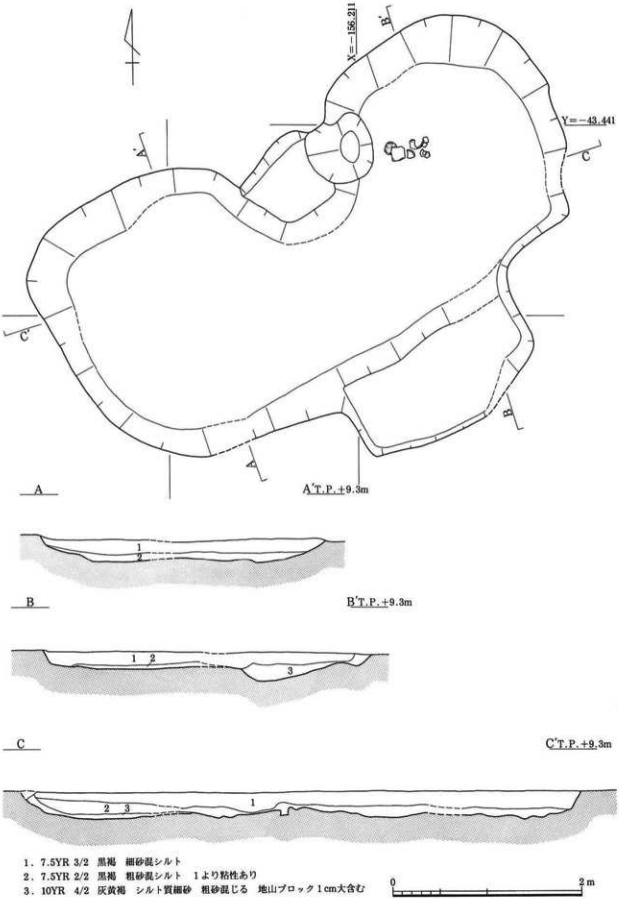


図119 （その2）851土坑 平・断面図 (1/40)

851土坑（図119、写真図版40）

851は調査区東半のほぼ中央、778井戸の1.98m東で検出した不整形な土坑である。遺構検出時、南北2つの遺構の切り合いと判断した。精査を行った結果、連続する一つの遺構と判断できた。また、851土坑内では埋土上面と地山直上で中世ピット〔851（内）ピットと表記〕を確認した。

法量は長軸6.0m、北側短軸3.0m、南側短軸4.0m、深さ0.3mを測る。南東側に段を持つことを特徴とする。埋土は黒褐色細砂～粗砂混シルトを基本とする。土坑底の地山は平らではなく、緩やかな凹凸をなして立ち上がる。土師器鉢・高坏・甕、須恵器蓋・坏・無蓋高坏・甕が出土した。出土土器の所属は下層ブロック土である。本遺跡内で検出された土坑として比較的大きく、形状的には不整形であるものの掘り込みのラインは安定する。遺物の出土状況・内容から祭祀性には乏しい。この土坑の北側では土坑2基、不整形土坑1基（その下面でピットを検出した）を確認しており、中世遺構の密集とほぼ重なることが指摘できる。

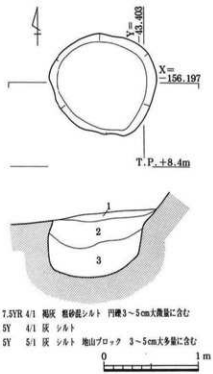


図120　（その2）1291土坑　平・断面図（1/40）

1290土坑（図121、写真図版40）

1290は拡張区、427井戸から南西に2.80m離れた場所で検出した楕円形の土坑である。北側は攪乱に接する。長軸1.87m・短軸1.43m、深さ0.43mである。埋土は、基本的に灰色シルトで、上半ほど砂礫の含有量が多い。この砂礫含有量を目安に分層を行ったが、実際の層境は不明瞭である。出土した遺物はこの土層の下半に所属する。土器は土坑底部の地山が一部下がった箇所に集中する。この土坑からは、土師器高坏・短頸壺、須恵器有蓋高坏が出土した。破片化した個体もあるが、接合関係を保っており、埋没してから損壊したと考える。片岩はこれら土器から西側に0.2m離れて、北西から南東に向いた状態で出土した。この片岩には加工・使用痕跡がない。既述した遺物を含め、土師器鉢・埦・高坏・須恵器有蓋高坏蓋・埦把手が出土した。出土状況からこれらの遺物を埋納した可能性が高いと考える。

689土坑

689は拡張区、北よりの地山直上で検出したやや不整形な円形の土坑である。直径0.9m、深さ0.24mである。埋土は黒褐色砂礫混シルトを基本とする。この土坑からは、土師器甕が出土した。

690土坑

690は689土坑から南東に1.0m離れて検出した不整形な土坑である。長軸1.4m、短軸1.3mで、埋土は689土坑と同じである。この土坑からは土師器小型丸底壺、土師器甕を出土した。

この周辺で検出した土坑・ピットは、埋土がほとんど遺存しないものもあったが、遺構検出時の埋土はすべて共通しており、時期は同じ段階に掘削された可能性が高い。

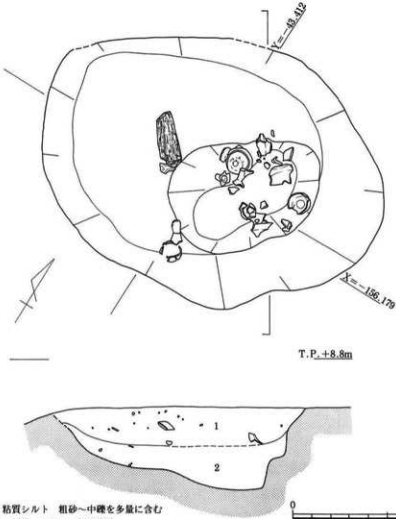


図121 （その２）1290土坑 平・断面図 (1/20)

1291土坑（図120）

1291は、拡張区、緩傾斜で検出した円形の土坑である。426井戸の北に位置する。地山砂礫層を掘り込んだ遺構であり、埋土と平・断面の形状から井戸となる可能性がある。緩傾斜を中心に検出した井戸と掘削深度・埋土の類似が根拠であるが、ここでは井戸の可能性を指摘するに止め、土坑として記述する。法量は直径1.13m、深さ0.71mである。埋土は、下層は灰色シルトと地山のブロック土、上層は褐灰色粗砂混シルトである。断面はU字形を示す。須恵器坏・甕が出土した。

34土坑（図122、写真図版40）

34は拡張区、傾斜変換線上の南側で検出したやや不整な楕円形の土坑である。1299井戸から南東に6.5m離れる。南側溝を設定した場所にあたり、断面観察の際に遺構を認知した。

1299井戸は長軸1.92m、短軸1.40m、深さ0.96mであり、その法量は34土坑と等しく、地山の掘り込みを砂礫層まで行う点など共通点が多く井戸の可能性が高い。ただし、緩傾斜の堆積土層である黒褐色シルトと34土坑埋土が類似する点と湧水層の定義が不明瞭であった点から、1299井戸の調査前まで土坑と考えていたため、呼称を改めなかった。しかし、傾斜変換線に井戸が集中する事実から、井戸の蓋然性は高いと考える。法量は、長軸2.32m、短軸1.84m、深さ0.86mである。断面はU字形を基本とする。

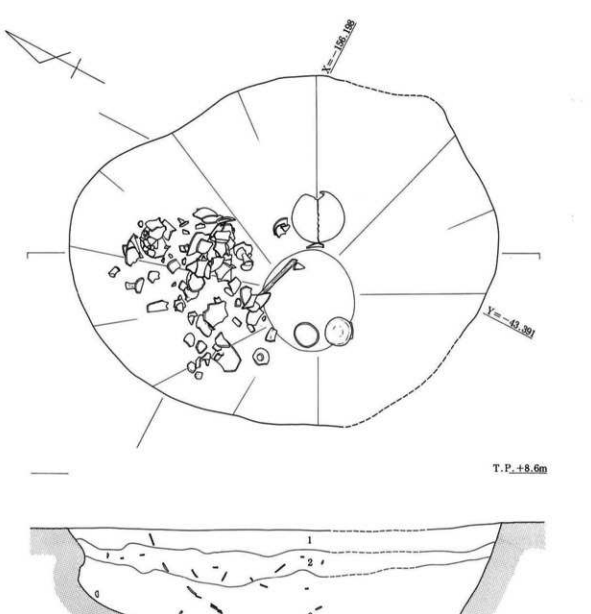


図122　（その2）34土坑　平・断面図 (1/20)

埋土は、砂礫を多く含む黒褐色シルトを基本とする。分層は灰色シルトの分量と砂礫含有量を目安として行い、上下の層境は不明瞭である。埋土全体で、土師器・須恵器破片を多量に含み、下位ほど量は多い。出土した土器・木製品は、下層下位からの出土が相対的に多い。破片化した個体は接合関係を保っており、埋没時には完形であった可能性の高い須恵器甕も含まれる。また、下位から出土した土師器・須恵器は地山直上に接した状態であった。土師器鉢・高坏・短頸壺・甕、須恵器坏・高坏・甕が出土した。また、木製品には琴とこの琴と同一個体と考える個体が2個体、用途不明の加工製品が出土した。

その他に、検出した土坑は以下の通りである。東半を中心とした範囲に特に集中することもなく、調

査区全体で検出した。

12土坑

12は調査区の西半、127溝の南側の堤防に接した場所で検出した土坑である。西側は11落ちの肩部にあたる。南側溝を掘削した段階で認識した土坑である。東西1.4m、深さ0.4mである。埋土は、黒褐色シルトを基本とする。長頸鏃は南壁断面の埋土中位から出土した。この鉄製品以外に、土師器甕・須恵器器台などが出土した。

609土坑

609は調査区東半、458溝東側4mで検出した直径1.6m、深さ0.2mの土坑である。埋土は黒褐色シルトを基本とし、一部に地山ブロック土が混入する。出土遺物には土師器高坏がある。

631土坑

631は609土坑の北側0.7mで検出した土坑である。この土坑は、楕円形で、長軸2.6m、短軸2.2m、深さ0.19mである。出土遺物には土師器・須恵器がある

640土坑

640は調査区東半、19溝西肩に接して検出した不整形な土坑である。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.15mである。

1039土坑

1039は調査区東半、北側の攪乱に接して検出した円形の土坑である。直径0.9m、深さ0.52mである。埋土は黒褐色シルトである。土師器鼓形器台、甕が出土した。

ピット

古墳時代の遺物が特徴的なピットは216・517・587・614・671・876・1003・1056・1220・1474である。遺物の評価は、現場調査での埋土記録と出土遺物の照合による主観的な選択に依るところが大きい。古墳と中世遺物に関していずれの時期を積極的に評価するかによって検討の焦点は変わることになる。

出土遺物

第1・2・5層、第3面精査時出土遺物（図123、写真図版48・55・74・75・77・79・80・83・85・86）

第1層出土遺物では瓦器小皿(175)、古墳時代須恵器甕(176)を図化している。

第2層出土遺物では石製鍋Ⅲ類－a(177)、唐草文軒平瓦B5型式(178)を図化している。この他、外内面をナデ調整した製塩土器(写真図版79－1451)が出土している。

第3面精査時出土遺物では中世土師器小皿(179)を図化している。

第5層出土遺物では土師器小皿(180)、瓦器椀Ⅳ－3～4期(184)、瓦器高台付小皿(181)、瓦器椀Ⅱ－1～2期(182・183)、古墳時代土師器(185・186)、古墳時代須恵器(187～192・194)、砥石(195)、滑石

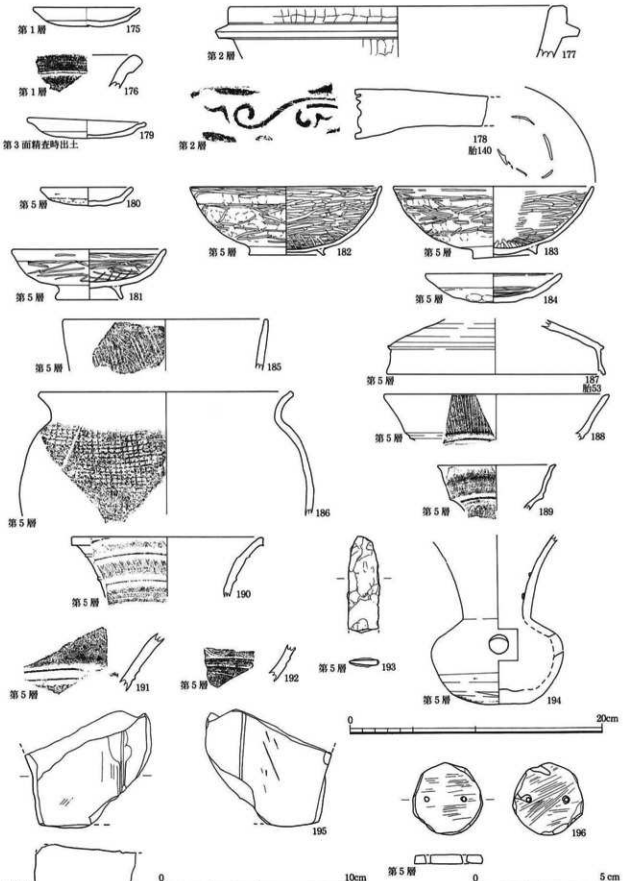


図123　（その２）第１・２・５層、第３面精査時　出土遺物

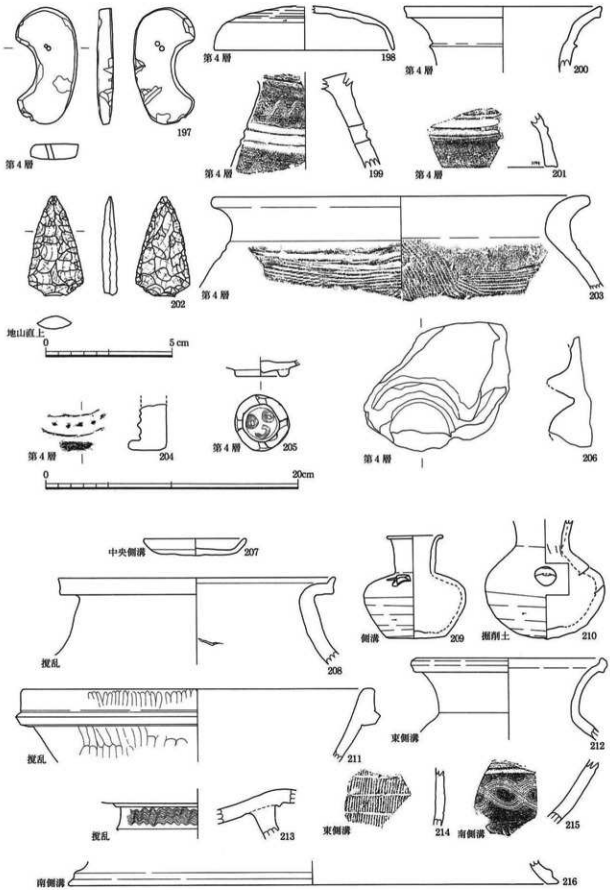


図124　（その２）第４層・地山直上・側溝・攪乱・掘削土　出土遺物

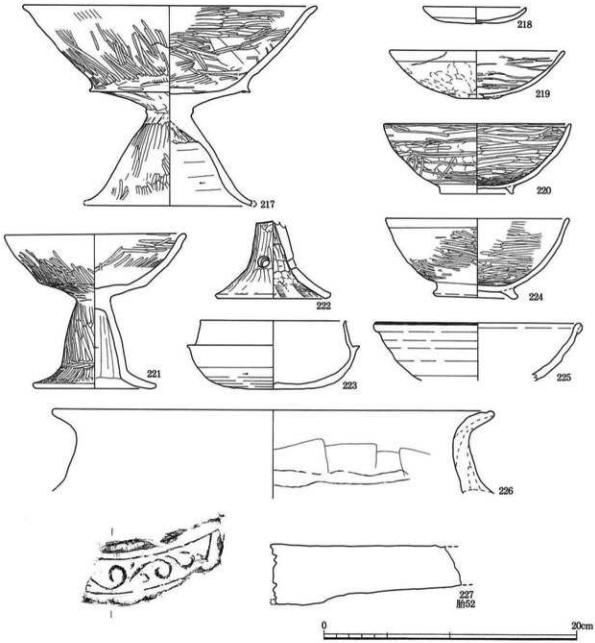


図125　（その2）1粘土取り穴　出土遺物

製双孔円板(196)、鉄製刀子？(193)を図化している。この他、写真図版77掲載の初期須恵器甕(1444)、甕口縁部又は脚台(1442)もある。183(写真図版55)は瓦器椀内面に残る高台の重ね焼き痕である。写真図版80－1454は外面格子タタキの甕体部内側に内面青海波文・外面縄席文タタキの体部破片が溶着したものである。

古墳時代の土師器では鉢(185)、韓式系の甕(186)があり、須恵器では蓋(187)、甕(188・189・194)、壺(190)、壺?(191)、器台(192)がみられる。蓋(187)、甕(189)、器台(192)は初期須恵器と思われる。写真図版80－1455は甕頸部内面に蓋を下にして坏の組合わさったものが溶着したものである。写真図版80－1457は須恵器Ⅱ－3～4段階の坏に蓋あるいは坏が溶着したものである。

この他、5.5×6.0㎝、高さ3㎝の帯状に粘土を貼り付けた胎土中に微粒金雲母を含む把手(写真図版74－1424)、竈破片(写真図版75－1432・1433)、土錘(写真図版80－1460～1463)も出土している。

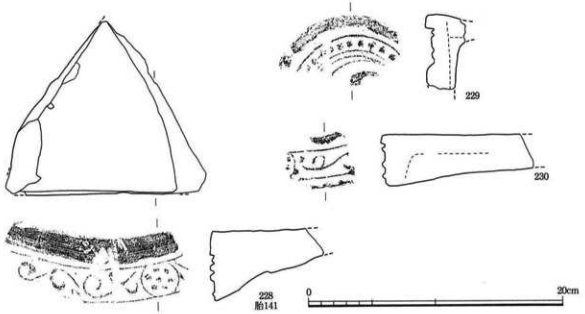


図126　（その２）11落ち　出土遺物

図127　（その２）２溝　出土遺物

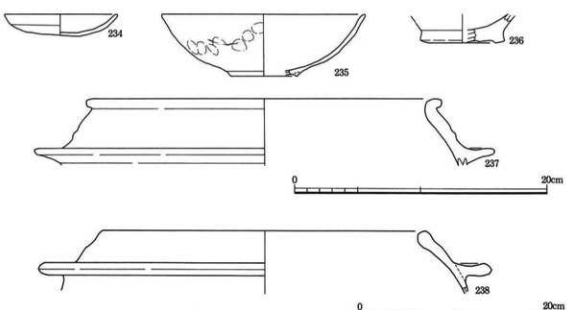


図128　（その２）151溝　出土遺物

第４層、地山直上、側溝、攪乱、掘削土出土遺物（図124、写真図版53・74・77・80・84・85）

第４層では滑石製勾玉(197)、古墳時代須恵器蓋(198)、須恵器壺(200)、須恵器器台脚部？(201)、須恵器器台(199)、瓦質甕(203)、中世巴文？軒丸瓦(204)、鬼瓦(206)、高台内に３つ丸の墨書をした時期不明の白磁碗(205)を図化している。古墳時代の遺物は須恵器編年でⅠ～Ⅱ型式にあたる。中世遺物は

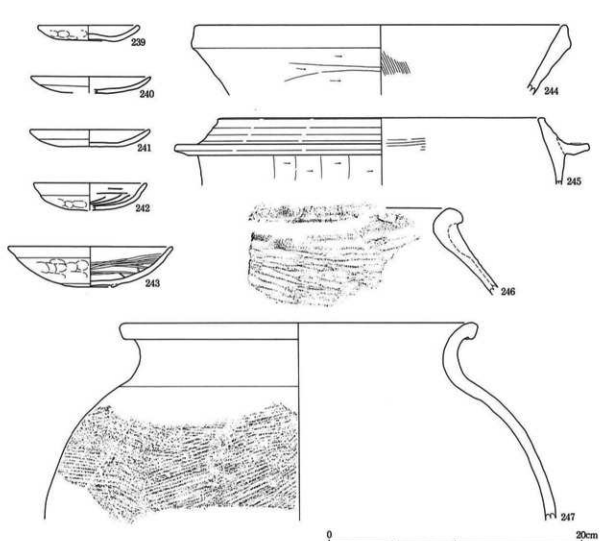


図129　（その2）22溝　出土遺物

瓦質甕から14世紀代のものか。この他、土錘（写真図版80－1458）や、外面格子タタキの韓式系土師器破片（写真図版74－1420）、土師器把手（写真図版74－1423）、竈破片（写真図版75－1430・1431）、甕の体部が2重に溶着して外内面に灰を被り、焼き台に転用されたと思われるもの（写真図版80－1456）が出土している。

地山直上からはサヌカイトの尖頭器（202）が1点出土している。時期は縄文時代草創期にあたる。

攪乱その他出土遺物には古墳時代須恵器甑（210）、須恵器甕（212）、須恵器器台（213・216）、飛鳥奈良時代か不明の須恵器小型長頸壺（209）、常滑甕6a型式（208）、中世土師器小皿（207）、滑石製石鍋（211）がある。古墳時代の初期須恵器には組紐文の器台（215）、縄席文破片（214）がみられる。このほか蓋または坏にII－4～5段階の坏が溶着したもの（写真図版80－1453）がある。第6面からは上面に1条の沈線を施した挿入式土師器把手（写真図版74－1426）、初期須恵器の甑口縁部破片（写真図版77－1441）が出土しており、甑外面は釉が塗布されたものか黒い。

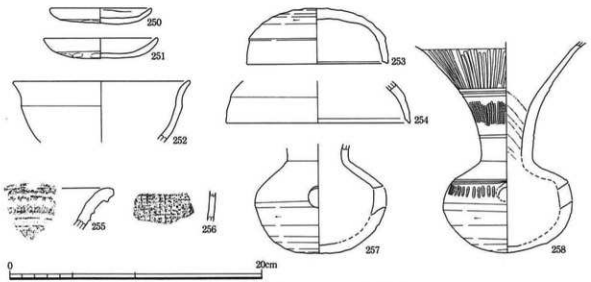


図130　（その２）519ピット　出土遺物

第３面　１粘土取り穴出土遺物（図125、写真図版80･83）

近世粘土取り穴からは古墳時代から近世の遺物が出土しており、このうち古墳時代と中世の遺物を主に図化している。古墳時代の遺物では庄内から布留の時期の土師器高坏(217･221･222)、須恵器Ⅰ－３～４段階の坏(223)などがある。写真図版80－1452はⅠ－３～４段階の蓋に蓋か坏が溶着したものである。古代末の遺物では黒色土器Ａ類椀(224)がある。中世遺物では土師器小皿(218)と、Ⅱ－１～２期(220)およびⅢ－３～Ⅳ－１期(219)の瓦器椀、唐草文軒平瓦Ｂ２型式(227)１点である。また、第３面の11落ち出土破片と接合した12世紀後半の常滑甕(226)がみられる。近世遺物では志野碗(225)がある。

第４面　11落ち出土遺物（図126、写真図版78･82･83）

初期須恵器の壺または甕(写真図版78－1445)、巴文軒丸瓦Ｃ４型式(229)、唐草文軒平瓦Ｂ１型式(230)・Ｂ２型式(228)が出土している。

第４面　２溝出土遺物（図127、写真図版87）

13～14世紀代かと思われる土師器小皿(233)、16世紀代の土師質擂鉢かと思われるもの(232)、瓦質火舎(231)を図化している。その他この遺構からは、16世紀代の備前甕や美濃鉄釉、17世紀前半の志野坏、16世紀末～17世紀初頭の唐津皿や碗、18世紀の波佐見窯系碗、スサ入りの焼土塊(写真図版87－1465)などが出土している。

第４面　151溝出土遺物（図128、写真図版49･74）

中世遺物が出土しており、土師器小皿(234)、瓦器椀Ⅲ－１～２期(235)、中国白磁碗Ⅳ－２類(236)、土師質羽釜河内Ｂ１ｄ型(237)・Ｂ１ｅ型(238)を図化している。時期は13～14世紀代のものか。

この他、土師器の把手(写真図版74－1422)が出土しており、時期は古墳時代のものか。

第５面　22溝出土遺物（図129、写真図版51･75･82）

弥生時代後期の台形土器かと思われるもの(248)から、古墳時代と思われる土師器竈破片(写真図版75

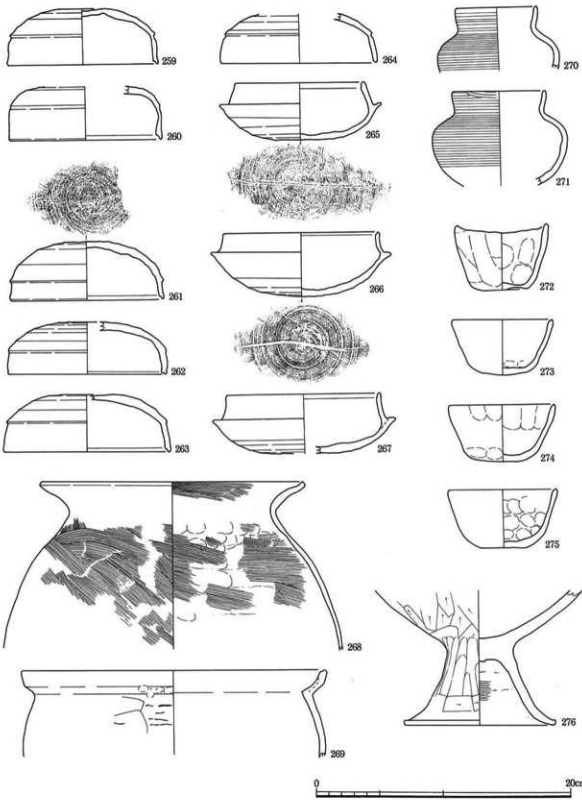


図131　（その2）549黒褐色シルト　出土遺物

−1436)、中世の土師器小皿(239〜241)、瓦器小皿(242)、瓦器椀(243)、瓦質擂鉢(244)、瓦質羽釜(245)、瓦質甕(246、247)、B1型式の唐草文軒平瓦(249)などが出土している。これらの時期は13世紀の後半から15世紀頃に該当する。

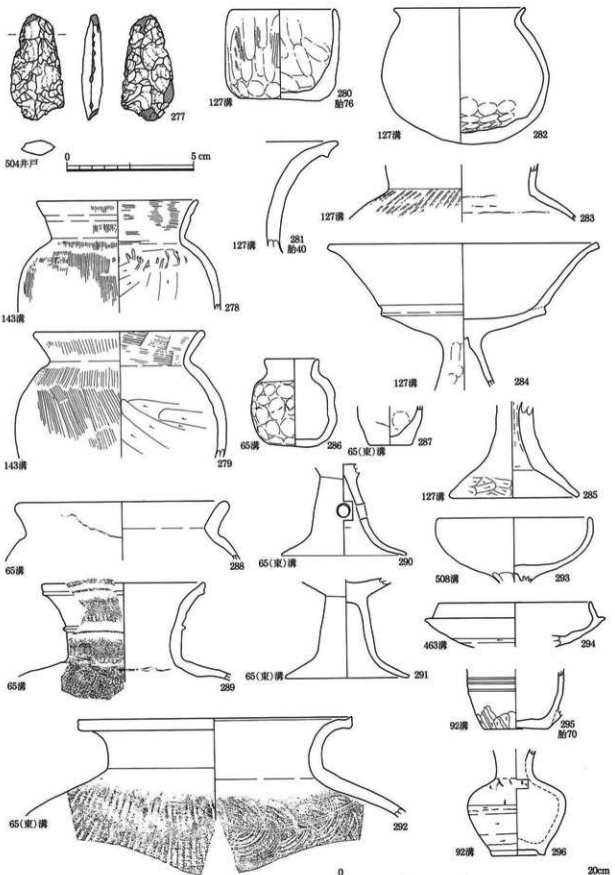


図132　（その２）65・65（東）・92・127・143・463溝、504・508井戸　出土遺物

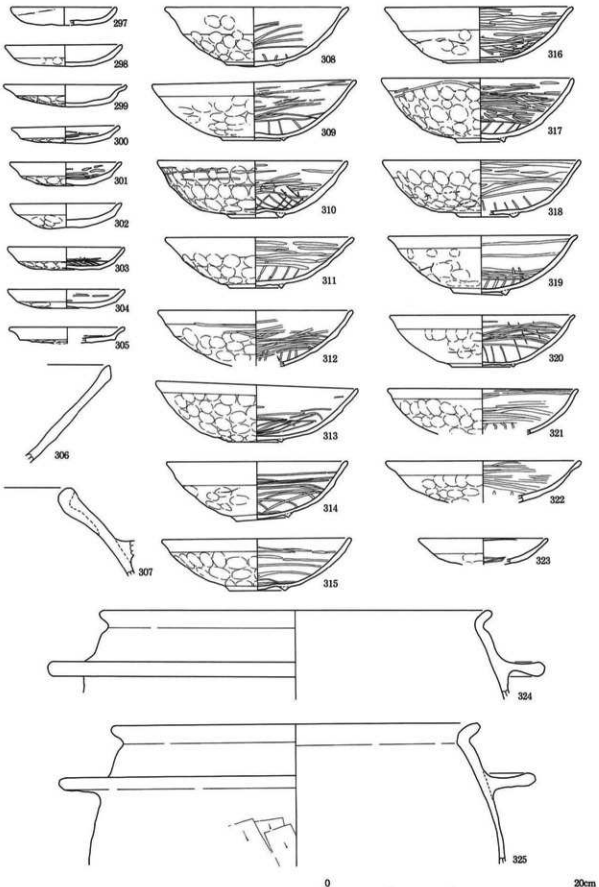


図133　（その2）65（東）溝　出土遺物（1）

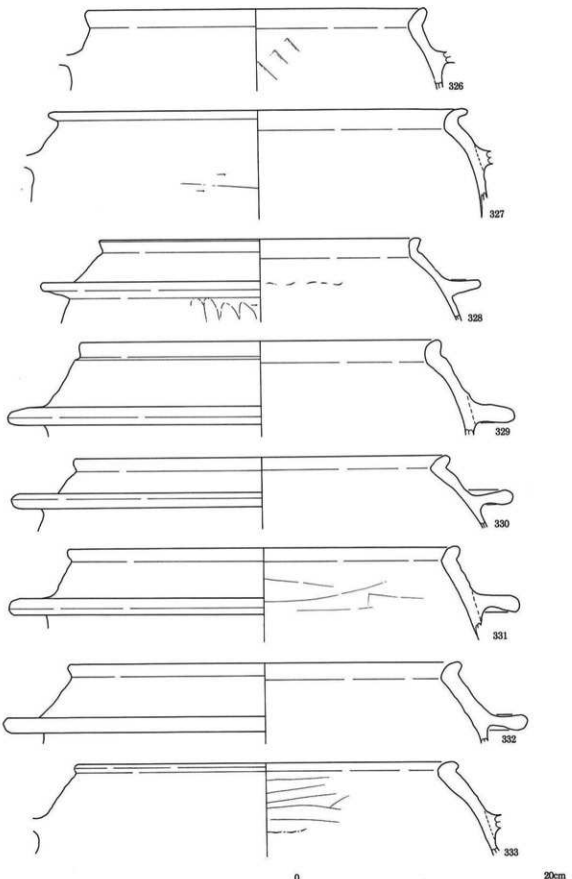


図134　（その２）65（東）溝　出土遺物（２）

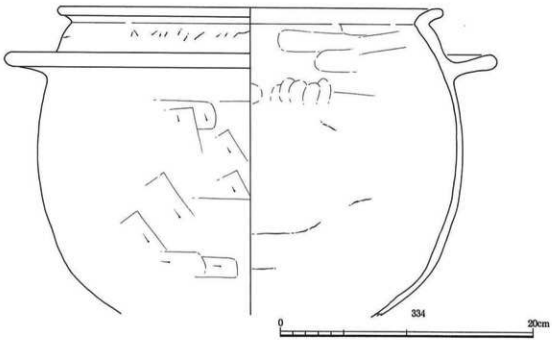


図135　（その2）65（東）溝　出土遺物（3）

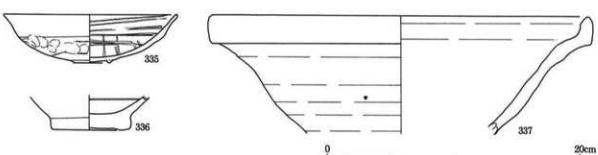


図136　（その2）120溝　出土遺物

第6面　519ピット出土遺物（図130、写真図版48・78）

中世および古墳時代の遺物を図化している。中世では12～13世紀代のものと思われる土師器小皿(250・251)がある。古墳時代の遺物では、韓式系土器と思われる土師器甕体部破片(256)、土師器鉢(252)、須恵器では蓋(253・254)、甕(257・258)、器台口縁部破片(255)を図化している。時期は須恵器坏および甕の編年でⅡ－2～4段階のものと思われる。

第6面　549黒褐色シルト出土遺物（図131、写真図版48）

土師器ミニチュア鉢(272～275)、高坏(276)、甕(268)、須恵器坏(265～267)、蓋(259～264)、短頸壺(270・271)を図化している。時期は須恵器の編年からⅠ－4～5段階のものが中心か。須恵器坏底部外面に同一種類のヘラ記号が3点観察された。

269は中世遺物の瓦質鍋破片である。

第6面　65・65(東)・92・127・143・463溝、504・508井戸出土遺物（図132、写真図版42・48・74～78・80・85・87）

504井戸からは縄文草創期の尖頭器(277)が1点出土している。先端部、基部および側縁の一部は欠損

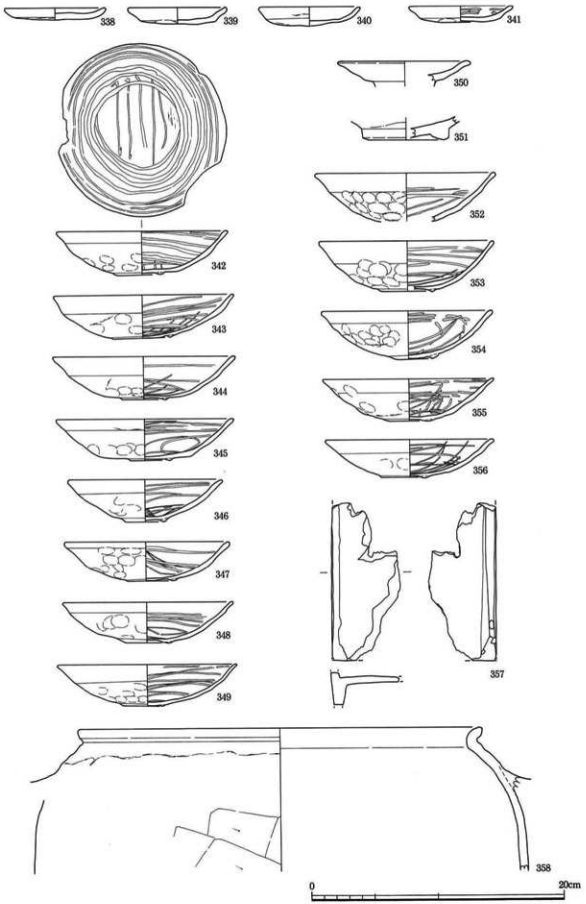


図137　（その２）123溝　出土遺物

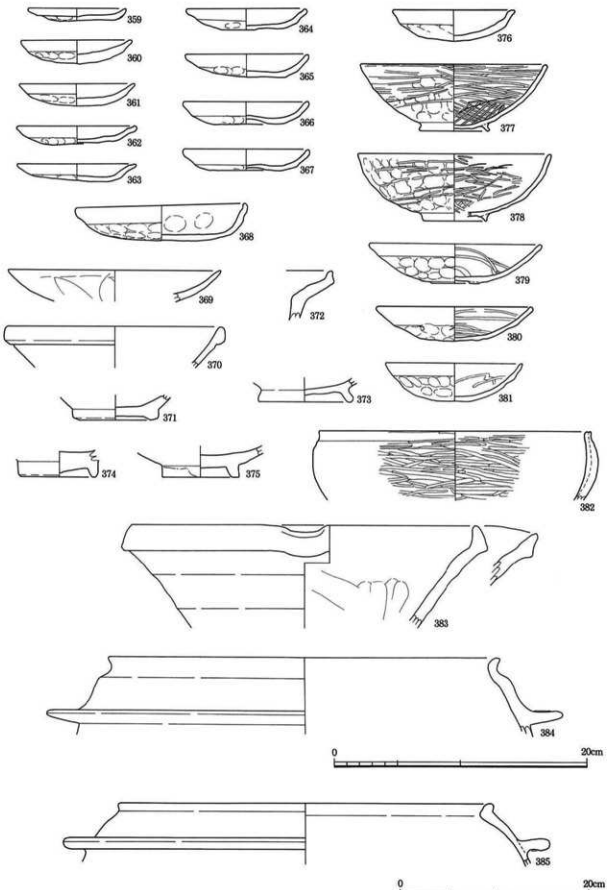


図138　（その2）66溝　出土遺物

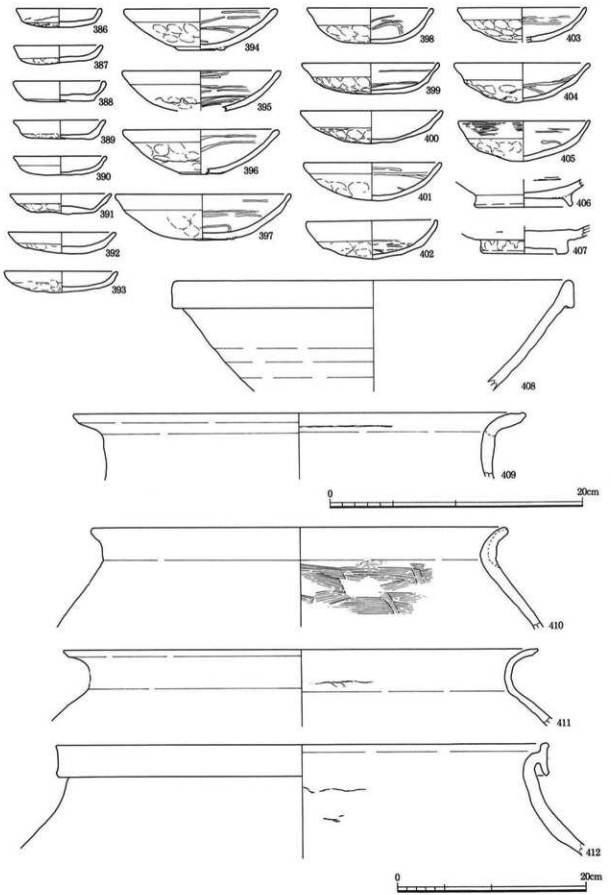


図139　（その２）92溝　出土遺物

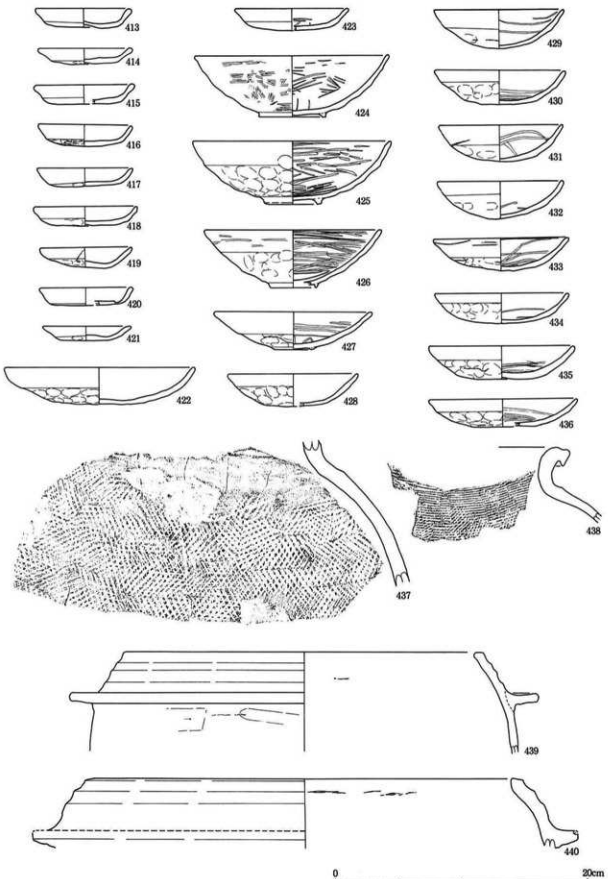


図140　（その2）143溝　出土遺物（1）

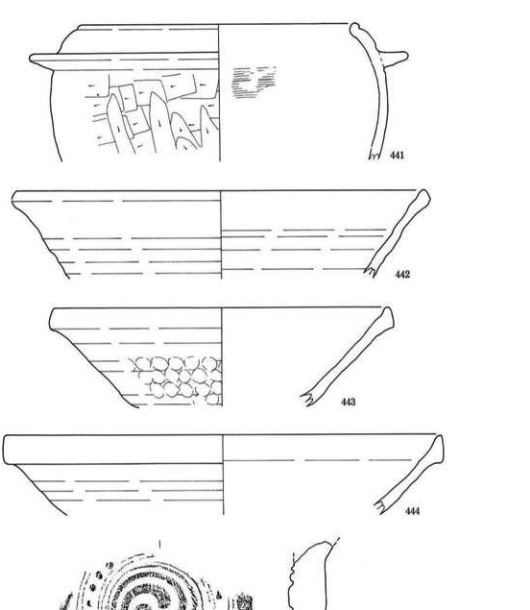


図141　（その２）143溝　出土遺物（２）

している。図124－202の尖頭器と比較して厚手で剝離調整がやや雑である。

143溝からは古墳時代土師器甕(278・279)が出土している。時期は６世紀代のものか。

127溝出土遺物には土師器鉢？(280)、甕(282)、高坏(284・285)、壺か不明の頸部(283)、須恵器甕(281)、固く焼き締まった焼土塊(写真図版87－1467)がある。時期は初期須恵器の出現期のものか。

65溝からは古墳時代土師器、須恵器が出土している。土師器ではミニチュア壺(286)、甕(288)、須恵器では壺(289)がみられる。288は胎土が粗く、一見土師質羽釜に類似して砂粒を多く含む。

65(東)溝からは古墳時代土師器のミニチュア壺？(287)、高坏(290・291)、須恵器甕(292)が出土して

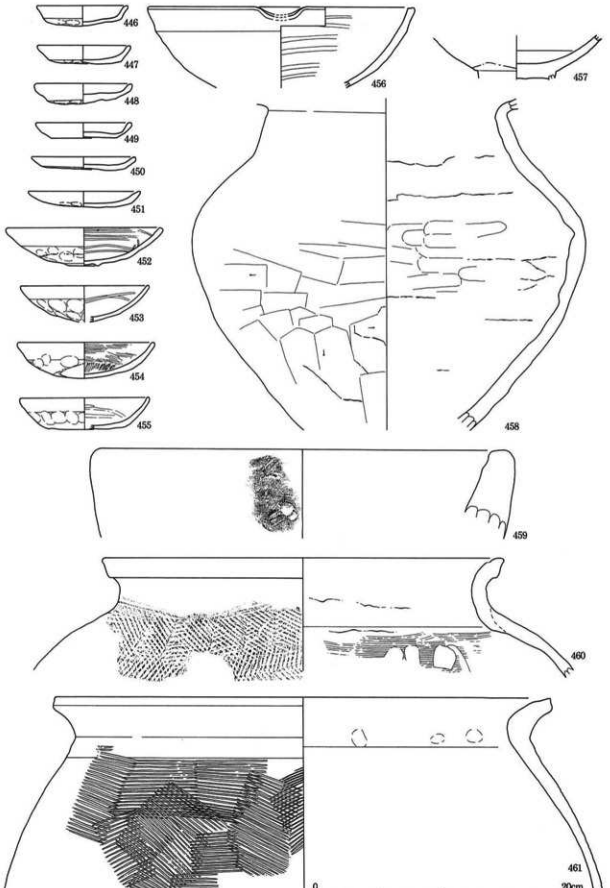


図142　（その2）458溝　出土遺物（1）

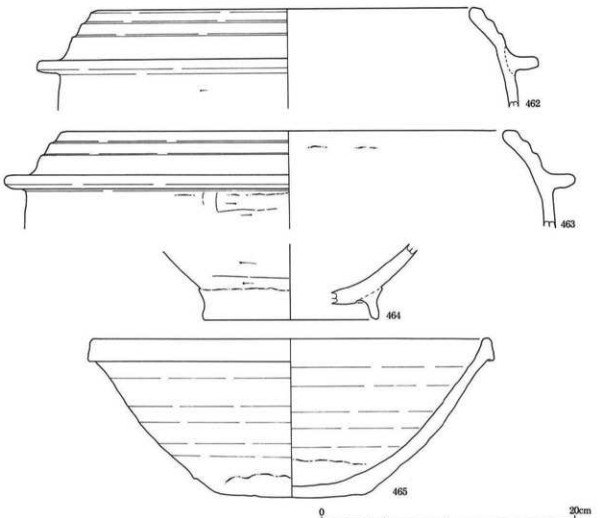


図143　（その２）458溝　出土遺物（２）

いる。292の外面は粗い擬格子タタキ、内面はナデであるが、青海波の当て具痕が少し残る。

65溝および65(東)溝出土の古墳時代遺物の時期は須恵器編年でⅠ－２～３段階の頃か。また、土錘(写真図版80－1459)や、須恵器把手(写真図版74－1427)、土師器の挿入式把手(写真図版74－1428)、竈破片(写真図版75－1434)も出土している。

508井戸からは布留式の新しい段階の土師器高坏(293)が出土している。

463溝からは須恵器Ⅱ－４～５段階の坏(294)が出土している。

92溝からは初期須恵器の把手付埦(295)と、釉をかけたものか表面が黒みを帯びる甕か不明のもの(写真図版77－1443)、土師器把手(写真図版74－1425)、土師器竈左側脚部分(写真図版75－1437)、平安時代の小型長頸壺(296)が出土している。296の肩部にはヘラ記号か不明の線条が認められる。

第６面　65(東)溝出土遺物（図133～135、写真図版42･55）

中世遺物が出土している。図化したのは土師器小皿(297～299)、瓦器小皿(300～305)、瓦器椀(308～323)、須恵器こね鉢(306)、土師質羽釜(307･324～334)である。瓦器椀はⅣ－３期かと思われる１点(323)を除き、Ⅱ－３～Ⅲ－３期の時期におさまる。須恵器こね鉢は口縁端部が拡張されていない形態である。土師質羽釜は河内Ｂ１ｃ型と思われるもの(324～326･334)、河内Ｂ１ｄ型(328～332)、Ｂ１ｅ